

千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ

— 旧上総・安房国地域 —

平成8年3月

千葉県教育委員会

序 文

千葉県は、鎌倉幕府成立に大きく貢献した千葉氏、南関東で小田原北条氏と覇を競った里見氏など、著名な豪族・領主が活躍した舞台であり、彼ら豪族たちによって築かれた城館跡が、現在も県内各所に多数残されています。

一方で、東京に隣接するという地理的条件から、近年、急速に各種の開発が進み、県内各地に残された城館跡は、この急速な開発の波の前に失われる危険性が、ますます高くなっています。

これらの中・近世城館跡は、県内各地を治めた豪族・領主の居城や居館であり、それぞれの地域の政治状況や民衆生活を復元する上で欠くことのできない資料でもあります。そのため、城館跡の現況の把握は、各方面から強く要望されてきたところであります。

そこで、県教育委員会では、「県内埋蔵文化基礎資料調査」の第4期事業として、城館跡の正確な数と分布状況の把握を目的に、平成2年度から5年度までの4年間にわたり県内城館跡の分布調査を実施してまいりました。その結果、最終的に1,048ヶ所にのぼる城館跡を確認し、範囲や現況を記録することができました。その成果の一部は、平成6年度に『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』として刊行することができ、大変好評を得ております。

本書は、その第2冊目として、旧上総・安房国地域の調査成果をとりまとめたものであり、平成2年度以来つづけてきた調査の最終成果となります。埋蔵文化財保護のための基礎資料としてだけでなく、学術資料としても広く活用していただければ幸いです。

最後に、調査を進めるに当たっては、文化庁・各市町村教育委員会をはじめとして、実務を担当していただいた各調査指導委員・調査委員の方々に大変な御協力をいただきました。心からお礼申し上げます。

平成8年3月22日

千葉県教育庁生涯学習部

文化課長 鈴木 道之助

凡 例

1. 本報告書は、千葉県教育委員会が国庫補助を得て、平成2年度から平成5年度にかけて実施した千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査の内、旧上総・安房国地域の結果をまとめたものである。
2. 調査は、千葉県教育委員会が主体となり、委嘱した調査指導委員、調査委員の他、各市町村教育委員会等の協力を得て実施したものである。
3. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号 平8開複, 第107号)
4. 地図の掲載順序は、千葉県の北から東へとし、地図前に番号を付した。
5. 中近世城館跡の番号は、各市町村ごとに1からの通し番号とし、通し番号の下に「千葉県埋蔵文化財分布地図」の番号を付した。また、城館跡一覧中の市町村名のわきには、自治省の定めた市町村コード番号をつけ各城館跡をコード化できるようにした。
6. 城館跡の呼称は、原則として小字名による旧来からの呼称とした。
7. 城館跡のうち、すでに大半が消滅してその範囲が明かでないもの、また伝承のみで、現在明瞭な遺構が明かでないものについては、城館跡の中央部分と思われる個所に○印を付し、部分的に消滅している箇所は破線で表現した。なお、資・史料にあらわれる城館跡でその位置が全く不明なものについては、地図等に表現していない。
8. 原稿の執筆は、Ⅰ～Ⅲは、調査指導委員及び調査委員が分担して行い、それ以外は、県文化課職員が行った。また、分布地図、城館跡の概念図等についても特に記載のないものは、原則として、調査指導委員及び調査委員が作成した。
9. 本調査報告書の編集は、千葉県教育庁生涯学習部文化課で行った。

調査指導委員，調査委員一覧

調査指導委員

平成2年度～平成7年度

市村高男（平成3年度を除く），伊禮正雄，小野正敏，高橋三千男，松下邦夫

調査委員

平成2年度

秋庭行雄，池田 誠，石田守一，井上哲朗，小高春雄，海保孝則，木内達彦，椎名幸一，柴田龍司，千田嘉博，
外山信司，中井正代，藤崎宏道，三島正之，八巻孝夫

平成3年度

青木 司，秋庭行雄，飯島伸一，飯塚博和，池田 誠，石田守一，井上哲朗，小高春雄，海保孝則，木内達彦，
椎名幸一，柴田龍司，滝川恒昭，外山信司，遠山成一，中山文人，中井正代，藤崎宏道，三島正之，八巻孝夫，
吉田博之，渡辺健二

平成4年度

池田 誠，井上哲朗，小高春雄，海保孝則，木内達彦，椎名幸一，柴田龍司，滝川恒昭，高梨俊夫，田所 真，
田中清美，津田芳男，外山信司，遠山成一，中山文人，中井正代，藤崎宏道，松本 勝，三島正之，八巻孝夫，
矢野淳一，吉田博之

平成5年度

池田 誠，石田守一，井上哲朗，大谷弘幸，小高春雄，木内達彦，笹生 衡，椎名幸一，柴田龍司，滝川恒昭，
高梨俊夫，田所 真，田中清美，外山信司，遠山成一，中山文人，中井正代，松本 勝，三島正之，八巻孝夫，
矢野淳一，吉田博之

平成6年度

池田 誠，石田守一，井上哲朗，小高春雄，木内達彦，椎名幸一，柴田龍司，滝川恒昭，外山信司，遠山成一，
中山文人，中井正代，三島正之，八巻孝夫，吉田博之

平成7年度

池田 誠，井上哲朗，小高春雄，木内達彦，椎名幸一，柴田龍司，滝川恒昭，田所 真，田中清美，外山信司，
遠山成一，中山文人，中井正代，松本 勝，三島正之，八巻孝夫，矢野淳一

目次

序文

凡例

調査指導委員、調査委員一覧

Ⅰ 千葉県所在の中近世城館跡の概観

- 1 房総における中世城館跡の地域的、年代的分布とその特質……………1
- 2 出土陶磁よりみた千葉の城館……………10

Ⅱ 調査成果

- 1 城館跡分布地図……………17
- 2 城館跡一覧……………96
- 3 史料・研究文献一覧……………132

Ⅲ 旧上総・安房国地域の主な城館跡の概要

芝山町岩山城跡……………	157
芝山町飯櫃城跡……………	158
芝山町大台城跡……………	159
芝山町田内城跡……………	160
芝山町山中北・南城跡……………	162
山武町木原城跡……………	164
横芝町坂田城跡……………	165
松尾町山空城跡……………	167
成東町津辺城跡……………	168
成東町成東城跡……………	169
東金市東金城跡……………	170
東金市田間城跡……………	172
大網白里町小西城跡……………	173
大網白里町大網城跡……………	174
大網白里町清名幸谷城跡……………	175
市原市大成城跡……………	176
市原市権津城跡・正坊山城跡……………	177
市原市分目要害城跡……………	179
市原市松尾城跡……………	181
市原市池和田城跡……………	183
市原市雀ヶ崎城跡……………	185
市原市平蔵城跡……………	186
市原市古沢城跡……………	188
市原市大羽根城跡……………	189
市原市真ヶ谷城跡……………	190

袖ヶ浦市高谷館跡群……………	191
袖ヶ浦市高谷堀之内城跡……………	192
木更津市真武殿城跡……………	193
木更津市中尾城跡……………	194
木更津市蓮子城跡……………	195
木更津市天神台城跡……………	197
木更津市真里谷城跡……………	198
木更津市栗吉城跡……………	200
君津市三直城跡……………	202
君津市秋元城跡……………	203
君津市久留里城跡……………	204
君津市千木城跡……………	206
君津市岩室城跡……………	207
富津市飯野跡屋跡……………	208
富津市佐貫城跡……………	210
富津市峰上城跡……………	212
富津市又神山城跡……………	213
富津市釜淵城跡……………	214
富津市金谷城跡……………	216
長南町岩川道跡（岩川館跡）……………	218
長南町長南城跡……………	219
茂原市本納城跡……………	221
茂原市真名城跡……………	222
睦沢町跡見城跡……………	224
一宮町一宮城跡……………	225
夷隅町権現城跡……………	226
夷隅町万喜城跡……………	227
夷隅町大野城跡……………	229
御町船ヶ城跡……………	230
御町中流城跡……………	232
大多喜町大多喜城跡……………	233
大原町日在城跡……………	236
大原町城谷城跡（阻山城跡）……………	237
大原町金山城跡……………	237
大原町市施殿台城跡……………	237
御宿町最明寺裏城跡……………	241
勝浦市門津城跡……………	242
勝浦市横村氏邸跡……………	243
勝浦市古尾城跡……………	244
勝浦市勝浦城跡……………	245
鴨川市山之城跡・藤四郎台館跡……………	246

鯉南町下ノ坊館跡	247
富山町富山城跡	248
富浦町宮本城跡	249
富浦町岡本城跡	251
丸山町石堂城跡	253
館山市稲村城跡	254
館山市館山城跡	256
館山市山本館跡	257
千倉町宇田城跡	258
旧下総国地域城館跡概念区補遺	259

I 千葉県所在の中近世城館跡の概観

1 房総における中世城館跡の地域的時代的分布とその特質

市村 高男

はじめに

千葉県域に残存する中近世城館跡は、これまで約600か所と報告されていたが、平成2年度から3年間にわたって実施された分布調査の結果、400か所以上を加えてその数1048か所に達することが明らかとなった。この数値は、関東各都県のそれと比べてみると、群馬県が1038か所、栃木県が410か所、埼玉県が679か所、東京都が約170か所、神奈川県が約400か所、茨城県が約600か所、と報告されているので、都県域の広さや分布調査の精粗差を考慮したとしても、千葉県は関東で最多級の城館跡残存地域である、ということができよう。

ここでは、千葉県域に残る中世城館跡を中心としつつも、茨城県に属する旧下総国北西部に残る中世城館跡をも適宜加えることによって、まず、中世房総における城館跡の分布状況を鳥瞰し、ついで政治・社会の動向・推移との関わりの中で城館跡の変遷を概観しつつ、房総の中世城館跡の特質の一端を探ってみることにする。

1 房総の中世城館跡の分布状況

千葉県域に残る中世城館跡1048か所のうち、約半数を占める515か所は旧下総国地区に存在する。これに茨城県域に属する旧下総国北西部地区の城館跡約50か所（精査が進めばさらに増加する可能性が高い）を加えてみるならば、房総地方の中でも旧下総地区が旧上総地区・安房地区に比べていかに多くの城館跡を残していたかをはつきりとうかがうことができよう（以下、旧国名については下総・上総・安房とみの記す）。

この顕著な偏差は、鎌倉幕府の成立以降、下総に千葉氏の一族が広く繁衍したのに対して、上総・安房では上総氏や上総千葉氏の没落以降、地域に根差した領主の成長が、鎌倉幕府・鎌倉府との繋がりを有する外来勢力の進出によって圧迫されたこと、また、その外来勢力もしばしば盛衰を繰り返して必ずしも地域に定着しない場合が多かったこと、などの政治的要因の一つの理由を求めることができるであろう。しかし、それとともに重視しなければならない点は、下総と上総・安房との間に存在する地形的・地理的条件の大きな相違である。

周知のように、下総では至るところに標高20～30mの洪積台地（下総台地と呼ばれる）が発達し、その台地上と台地間の谷（沖積地）には耕地化可能地が多く広がっていた。また、下総と常陸との国境周辺には現在の霞ヶ浦・北浦・印旛沼・手賀沼などの湖沼群を合わせた広大な内海が存在し（東部は現在の利根川の流路に合致する）、その周辺は漁業や水運に関わりを持つ領主や民衆の活動が早くから開始されていたのであった。下総の城館跡は、この内海やそこから派生した諸河川の周辺に多く分布しているが、この現象は、当該地域における城館の築城主体がこの内海を強く意識していたことをはつきりと物語っている。そして、そこに存在する城館跡は、その多くが下総台地の先端部を巧みに利用して築城されており、台地の下から臨めば、城郭本体部を段丘面や腰曲輪で囲めた山城としての様相を見せながらも、台地上に登れば、自然の平坦地を活用し生活・居住空間を十分に確保した平城と評価できる一面を見せていた。酒々井町の本佐倉城跡や佐倉市の臼井城跡、松戸市の小金城跡、佐原市の矢作（大崎）城跡、小見川町の森山城跡などは、その代表的な事例といえよう。

これに対して、上総・安房では、その中央部に150～300mの房総丘陵と呼ばれる山地帯が広がっているため、各地に中小の盆地が分散するという地形を基本としており、しかも海岸部でも山裾まで海岸線が迫っているために、広い平野部に乏しいという地形条件を有していた。そのため上総・安房の城館跡は、必然的に丘陵の尾根を利用して築城されるものが多くなるが、その結果、下総の城館跡に比較して中心部の平坦面がどうしても狭くならざるを得ず、防

御と生活・居住空間の確保のために尾根の斜面に多数の腰曲輪を造り出すという技法を多用することになったのである。もとより、領域支配の拠点となる城館跡の場合であれば、尾根上でも大々的な造成事業を実施して平坦面を確保したり、尾根下の谷・沖積地を外郭に取り込んで居館や家臣団居館を配置することも行われていた。そうした事例として、常津市の佐貫城跡・峰上城跡、長南町の長南城跡、夷岡町の万木（万喜）城跡、大多喜町の小田喜（大多喜）城跡などをあげることができよう。

上のような地形条件を持つがゆえに、上総・安房は農業生産の面で下総に比べて明らかに劣勢に立っていたといわざるを得ない。しかし、東西南の三方を海に囲まれた地域性に注目するならば、そことは異なった側面が自ずと浮かび上がってくる。たとえば、東京湾に面した内房地域では、市原市の惟津城跡、富津市の造海（百首）城跡・金谷城跡、富山町の勝山城跡、富津市の岡本城跡など海に向かって城館跡が多数存在し、また、太平洋に面した外房地域でも、大原町の鶴賀城跡、勝浦市の勝浦城跡・吉宇城跡・興津城跡など海を意欲した城館跡が多く確認されているが、このように、上総・安房の城館跡分布の顕著な特徴は、海岸部に主要な城館跡がひしめき合っている点であり、この地域の城館の築城主体が農業よりも海での生産・生活・支配を基本としていた様子をはっきりとかがうことができる。

しかし、その一方で、上総・安房においても長南町の長南城跡、木更津市の真里谷城跡、津市市の久留里城跡、大多喜町の小田喜（大多喜）、夷岡町の万木（万喜）城跡、富津市の佐貫城跡・峰上城跡、館山市の稲村城跡など、海岸部というよりもむしろ海から離れた山地帯に築城された主要な城館跡も存在する。これらの城館跡は、麓老川・小瀬川・一宮川・夷岡川などの河川交通を意欲するが、東京湾岸と太平洋岸を結ぶ陸上交通の要地に位置しているものが大半であり、そこに存在することによって、領域支配の拠点として十分に機能し得たのであった。さらに注目されることは、たとえば長南城跡と三途台の長福寺寺（関東屈指の天台宗寺院）との関係に象徴されるように、そこは城館の築城に先立って宗教文化の地域的中心地となっていた場合が多く、すでに一定の都市的發展を遂げていたところまもなくはなかったのである。下総でも拠点的地域性については類似の現象が認められるので、地域的中心となる場所の持つ意味を改めて検討してみる必要がありそうである。

II 房総の中世城館跡の時代的変遷

つぎに、房総の中世城館跡の性格や分布の概相を、(a)平安後期～鎌倉期、(b)南北朝期、(c)転換期としての15世紀、(d)戦国期、(e)豊臣期以降、というように時代を追って概観しよう。

(a)平安後期～鎌倉期 10～11世紀（とりわけ10世紀）は、律令制社会の衰亡の中から中世社会が成立していく転換期であった。この時期、房総に関わる大きな事件として、10世紀半ばに平将門の乱。つづいて11世紀前半には平忠常の乱が引き起こされるが、前者は坂東平氏・武蔵平氏・阿保平氏・阿保平氏などや秀衡流藤原氏が東国に集結する基礎を築き、また、後者は阿保平氏に一時降参を強いたものの、清和源氏と主従関係を形成するとともに、来るべき時代への自信と期待を生みだし、上総氏・千葉氏が成立する呼び水となったのであった。とりわけ平忠常は房総に存在基盤を置いていただけに、中世房総武士団の祖とも呼べる存在であるが、その本拠については、内海に面した下総北東部に館を構えていたらしいこと以外、その詳細はまだ解明されていない。

12世紀半、忠常の子孫の上総公常と千葉公常は、房総に逃れ来た源頼朝を助けて鎌倉幕府成立に大きな役割を果たした。とりわけ公常は、房総最大の勢力者として頼朝軍の大きな支えとなったが、間もなくその自立的な動きに不安を抱いた頼朝によって暗殺され、その遺領の多くは常胤に与えられた。常胤は、頼朝の信頼のもとに下総守護職となり、子弟を下総各地に配置して六崎氏や相馬・武石・大須賀・国分・東氏らの庶子を生み出す一方、孫の常秀として上総氏の継承者となり、房総最大の勢力として大きく目立ったのであった。しかし、常秀の嫡子秀胤は、13世紀半ばの宝治合戦で三浦氏に味方して没落し、その遺領の多くに相模・武蔵方面の外来勢力が配置され、幕府の影響が直接及ぶようになったため、千葉氏の勢力は上総から大きく後退していったのである。

この間、千葉氏が千葉館に居住していたこと、頼朝に敵対した千田親政が次浦館を使っていたこと、秀胤が本拠の大御館（睦沢町）で滅ばされたことが、鎌倉時代の史料によって確認されるが、支那（千葉）城の部分的発掘から、千葉館がこの城跡とは別の場所（千葉市街地のどこか）にあった可能性が高まっており、戦国期の遺構を正しく次浦城跡・大御館跡としても、親政の次浦館や秀胤の大御館に直接に繋がるという保証はない。また、千葉氏一族の六崎・相馬・武石・大須賀・国分・東氏や、上総・安房に入った二階堂・三浦・和田・足利氏ら外来勢力の一族や代官の館跡、上総氏一族の生き残りたちの本拠、安房の旧族安西・安東・丸氏の本拠についても、まだ伝承の域を踏まず解明の余地がある。その点で、長南町の岩川遺跡（館跡）と館南町の下ノ坊遺跡の発見は大いに注目されよう。この二つの遺跡は、発掘によって沖積地の中から初めてその存在が確認されたもので、出土遺物から前者は13世紀末～15世紀後半、後者は12世紀後半～15世紀前半の館跡であることが明らかにされている。千葉県では平安末～鎌倉時代に通り得る館跡の事例として極めて重要な意味を持つ。今後は、史料の上で見られる城館と現存遺構との発掘を踏まえた掘り合わせ作業、平安末～鎌倉時代築城の伝承を持つ城館跡の確認調査を意欲的に進めることが、当該期における房総の城館跡については社会の歴史を解明する上で重要な課題となるであろう。同時に沖積地に埋もれた城館跡の発見も益々大きな意味を持つようになった。

(b)南北朝期 南北朝期は城館跡の歴史の上で一つの画期をなす。それは、南北朝の動乱の中で日常生活・支配拠点としての居館とは別に、合戦という非常日の事態に備えて城郭・要害・櫓などと呼ばれる軍事施設が多数形成されてきたことからである。もとよりこの軍事施設は、朝鮮式山城・神城式山城・堀城・水城などの特徴的な形状で、すでに古代でも国家レベルで築造されていたが、全国各地の様々な武士たちが相次いで城郭の築城主体となったこの時期が持つ意味は、やはり古代の軍事施設築造隆盛期とは明らかに性格を異にしているといわなければならない。

この時期の房総は、千葉貞胤が南朝方に属したのに対し、これと競合する千葉（千田）胤直が足利方に属して対立したため、一族が二分して争う状態となったが、間もなく貞胤が足利方に降参して所領を安堵され、胤直が転換期の中で客死するにおよび、下総での内乱はしだいに収束に向かった。上総では、鎌倉幕府の滅亡後、佐々木得房ら外来勢力の入りと後退の後、鎌倉体制の成立とともに大懸上杉氏が進出し、その守護圏として定着する。安房では丸・安西・安東氏らが所領の確保に成功するが、鎌倉府の直轄領が設定されればかりか、親鎌倉府派の結城氏が守護として配置されている。こうして南北朝期の房総は、下総守護の千葉氏に対し、上総・安房では大懸上杉氏や結城氏（のち山内上杉氏に交替）が守護となり、しばらくこの両方を鎌倉府に引き付ける役割を果たすことになったのである。

この間、動乱の最中に千葉氏の拠る千葉城（千葉館）が史料に登場するが、これが支那（千葉）城を指すという確証はなく、鎌倉期以来の千葉館に櫓を揚げたなどの防衛を施した居館そのものであった可能性も否定することはできない。しかし、その一方で、千田荘内に土櫓城・島城・並木城など純軍事施設としての城郭が築造されていたことが確認されるので、房総でも居館の武装化と純軍事施設としての城郭の築造という二つの方向から、城館の成長が進展していた様子をうかがうことができる。しかし、いまのところ千葉県域では、明確に南北朝期までの成立を遡らせることができる城郭跡は確認されていないし、下総・上総・安房の各守護の守護所の所在地さえ確定されていないというのが現状である。その点で、南北朝期における房総の城館跡の実像は、鎌倉期と同じくなお未解明部分が多く、今後少なくとも課題を残しているといえることができる。

(c)転換期としての15世紀 15世紀になると、東国は大きな政治的転換期を迎える。それは、①前半期の上杉・北条の乱。②半ば近く永享の乱とその後段と位置付けられる結城合戦。③後半期の享徳の乱。この各相次ぐ動乱の展開から容易に察されるであろう。まず①の結果、上総守護の大懸上杉氏が滅亡し、これに味方した千葉氏の勢力を削減され、下総に対する影響力を低下させたのに対し、大懸上杉氏のライバルであった山内上杉氏が安房・上総を合わせて守護となり、これまでもまして房総に対する鎌倉府の影響を押し及ぼして行くようになった。②の後、上総国伊佐に侵入した野野氏は、この山内上杉氏との関係によるといわれているが、これは房総に対する鎌倉府の

支配強化の一端を示すものといえよう。つぎの②の結果、公方足利氏氏の敗死と結城氏親公方勢力の没落により、14世紀後半以来固められた東國の政治体制は一旦崩壊を余儀なくされ、混沌の中で東國支配の中心に立った山内上杉氏に対する反発を急進に生み出していた。それは特氏遠親成氏（古河公方）や結城氏の復帰のもとに一段と増幅され、これを呼び起こしたのが、この過程で千葉氏は庶子の馬加氏が古河、原氏と結んで山内上杉氏に属する戦場と抗争し、下総に成功すると本佐倉城（酒々井町）に本拠を移して下総支配の再編に乗り出していく。一方、上総では古河公方に属した武田・土岐・酒井氏らが入れ、また、安房でも古河公方に属する里見氏が入部して、それぞれ山内上杉氏に対峙する状況、下総とは対照的に外來勢力がこの両国を藩衛するほどの動きを見せたのであった。

こうした状況の中、房総では15世紀半ば～後半にかけて、本佐倉城のほか間宮・小弓・白井・馬加・飯沼・東金・長南・真里谷・笹子・稲村の諸城を初めとする主要城館が相次いで登場する。しかもそれらの多くは、戦國に對峙した一時的なものではなく、恒常的に維持・管理される居城としての性格を有していた。それは、南北朝期に登場する純軍事施設としての城郭・要害・橋などとは大きく異なるものであり、築城主体が一定の領域支配の実現を意図するようになっている、はじめて生み出された現象であるといつてよい。もとより領域支配を展開する地域権力の成立が、それより若干遅れるとしても、この時期に鎌倉～室町期の支配とは異なる動きが開始されていたことは注目すべきであろう。

しかし、15世紀の転換はそれだけに止まらない深みを持っていた。近年の発掘成果は、15世紀になるとこれまでで存続していた集落が消滅し、かわって戦國期に繋がる新しい集落が誕生するという現象を明らかにした。城館についても類似の現象が指摘されている。たとえば、前述の岩川遺跡（館跡）と下ノ坊遺跡は、いずれも15世紀後半までにはその機能を停止させており、かわって15世紀の半ば～後半に居住性を持った城館跡の存在が相次いで確認されているのである。一般にこの大きな転換は、鎌倉府体制の崩壊から説明されることが多いが、集落レベルでの大きな断絶・変動が並行して確認される以上、たんに政治変動の面のみから捉えるのは適切ではなからう。周知のように、15世紀は日本列島が不景気に見舞われた時代であり、これが自然環境や生産条件に大きな変化をもたらした可能性は十分にあるので、こうした視点を安易に自然環境決定論として排除することなく、改めて集落の変動の意味を考えてみる必要がありそうである（15世紀の転換は日本列島レベル、さらにはアジアレベルで見ていく必要がある）。

(d) 戦國期 房総の戦國期は、その政治動向によって、16世紀半ばの天文末期を境に前後二つの時期に大別することができる。その前半期の動向は、古河公方の一族小弓公方足利義明、下総の原氏、上総の武田氏、安房の里見氏らの動向によって特徴付けられる。

まず、下総の原氏の動向から見ると、原氏は享徳の乱の過程で馬加氏を擁立し、千葉氏一族の円城寺氏や大須賀・園分・東氏らと対立・抗争しつつ台頭した存在であり、小弓城・岩富城など下総各地に一族が存在したが、武田氏が足利義明を擁立すると、下総・上総の国界に位置する小弓城は、一時、義明・武田方に率領される戦場の居城となった。小弓城によった義明は、小弓公方と呼ばれて古河公方と対立し、古河派に属する原氏らと小弓・岩富両城を舞台にしばしば激戦を展開した。天文7年（1538）、国府台合戦で小弓公方義明が戦死すると、原氏は小弓・岩富両城を確保しつつ、本佐倉城の奥にある白井城に注目し、16世紀半ば頃にその城主であった白井氏を退けて入城し、ここを本拠と定めた。こうして下総は、本佐倉城の千葉氏、それと一体的な関係を結ぶ白井城の原氏とを核とする統治体制が形成されたのであった。そして、その軍事指揮下には、松子・助崎両城の大須賀氏、矢作（大崎）城の園分氏、鶴木（熊木）城の鶴木氏、奉公衆出身で布川城（茨城県利根町）に拠る豊島氏、千葉氏の家臣から成長した小金城の高城氏、同じく上総田向・坂田・大台城の井田氏ら、自立した領域支配を行う一族や領主たちが従っていたので、結城城の結城氏や間宮城の熊田氏の支配に属する下総北西部を除く下総のほぼ全域が、千葉・原氏体制によって統治されるようになったのである。

一方、小弓公方義明は、上総武田氏に擁立されていたために、武田氏の動向と深い関わりを持っていた。武田氏は、上総入部後、真里谷城に拠る真里谷家と長南城に拠る長南家との二家に分かれ、とりわけ西上総に進出した真里谷家

は、反義明派の古河公方高基やこれに味方する千葉・原氏と激しく対立した。そして、間もなく真里谷家は家督相続問題から内紛を引き起こし、義明の仲介でひたすら内紛の終結を実現させるが、国府台合戦における義明の戦死とともに急進に没落の一途を辿っていた。その間、真里谷城・真里谷新城のほかに西上総の惟津城・峰上城・造海城などが合戦の舞台として登場するが、真里谷家の本拠真里谷城は、城主の没落とともにその機能を著しく後退させ、他の城々も急進に進出を計る小田原北条氏や安房の里見氏の支城へと性格を変化させていくことになった。

これに対して長南城の武田氏は、主として東上総方面へ勢力を延ばし、万木（万壽）城の土岐氏や小田喜（大寺喜）城の正氏らと隣合しつつも、戦国を生きて延びていくことになった。長南武田氏の主要な城館は、居城長南城のほかには池田城・勝見城などの名が知られているが、これらは土岐氏の万木（万壽）城・駒賀城・へむか城（現在の比定城館跡不明）や、正木氏系列に属する一宮城などと微妙な位置関係を見せ、東上総における武田・土岐・正木氏の錯綜した支配領域の在り方の一端をうかがわせている。

この時期の里見氏は、16世紀初頭までには安房の平定を実現し、東京湾を渡って三浦半島へ侵攻したほか、西上総へ進出しようとするまでの動きを見せはじめていた。しかし、天文2～3年、里見氏でも内紛が引き起こされ、その中から傍系の義興が正木氏と結んで里見氏当主の座を獲得し、稲村城を本拠として上総への本格的な進出を試みるようになる。そして、国府台合戦による小弓公方義明の戦死、それに伴う真里谷武田氏の没落を機に、里見義興は一挙に西上総へ進出すると、佐貫城に嫡子義弘を配属し、造海城・小糸城などの主要城郭とともに、当該地域の統治に当たれることになったが、その頃東上総の南部では、小田喜・小糸城・城・勝浦城に拠る正木氏と、里見氏から自立化を遂げようとする動きを見えていた。このように16世紀半ば近くの里見氏の支配領域は、安房の当主義興、西上総の嫡子義弘、東上総南部の正木氏の3者によって分断統治される状況にあった。それは確かに権力の分散化と呼び得る現象であるが、その一方で、それぞれの地域性の相違に規定されて現れた現象でもあるという側面を有していたのである。

16世紀半ばを過ぎると、房総の政治情勢は大きく変化を遂げる。この段階の基本的な政治的対抗の図式は、越後の上杉謙信と結んで上総中部から下総へ進出しようとする里見氏と、これに対して下総の千葉・原氏に対する影響力を強めながら、北と西から房総への進出を計る小田原城の北条氏、という二つの政治勢力に整理することができる。

まず、下総の千葉・原氏と北条氏との関係から概観する。千葉氏は、16世紀半ば以降、当主の若年での死去、家臣による被害などの事象が相次ぐ間にその支配権を大きく後退させ、北条氏の下総進出に弾みをつけることとなった。一方、白井城の原氏は、下総国内の生実・岩富・手賀・印西城や上総の小西城などを合せて持つ、千葉氏に並び立つほどの存在に成長するが、千葉氏家臣に出自を持つ家筋は否定し得ず、自立性を強めつつもそれと一体的な行動を取り続けるを得なかった。ただ、北条氏の影響力が強まると、千葉・原氏体制の下にあった小金城の高城氏、松子・助崎城の大須賀氏、矢作（大崎）城の園分氏、布川城の豊島氏、上総の坂田・大台城の井田氏らが、しだいに千葉・原氏体制から切り離され、北条氏の指示によって行動するようになる。そして、16世紀末近くになると、北条氏政の子重直が千葉氏の名跡を継承したため、本佐倉城を中心とする支配領域は、北条氏分國の一部としてしっかりと組み込まれていたのである。これに伴い北条氏の上総進出と里見氏への攻勢が一段と強化されたのであった。

これに対して里見氏は、古河公方足利氏・藤氏や上杉謙信と結んで北条氏に対峙するが、永禄7年（1564）の第二次国府台合戦での敗北を契機として劣性になり、その直後に起こった正木時忠の反乱や土気城に拠る酒井氏の北条氏屈服などの事象によって一層窮地に追い込まれたのであった。しかし、永禄10年、里見氏は上杉謙信の支援のもとに上総三船山の合戦で北条氏を撃破すると、一挙に攻勢に転じて上総から下総にまで進出を試みるようになる。里見氏はここは最盛期をむかえたのである。この時期、里見氏は上総北部にいくつかの新城を取り立て、下総へ進出する際の拠点としたのであった。

しかし、元亀・天正初頭（1570年前後）には北条氏に対する上杉氏の劣性が明らかとなり、天正2年を最後に謙信の関東出兵が途絶えると、ふたたび北条氏の攻勢が開始されるようになり、里見氏は下総はもとより上総北部から

も急進に後進を余儀なくされたのであった。そして、天正5年、北条氏嫡位のもとに里見・北条同盟が結ばれ、里見氏はかろうじて上総南部を確保することに成功したのであった。それから間もない天正8年、里見氏では義弘の跡目相続をめぐる内紛が引き起こされ、ひとまず安房岡本城の義頼が勝利を取って当主の座を奪得するが、その翌年には、反対派と結んだ小田喜(大多喜)城の正木氏の反乱が引き起こされ、里見氏の分国は大いに動揺した。しかし義頼は、間もなくこの正木氏の乱を平定すると、実子正木氏の養子として送り込んで東上総の小田喜(大多喜)城を中心に興津城・吉字城などを管轄させ、小田喜の統治を委ねたのである。この一進の内紛と反乱は、義弘の時に採られた安房・西上総・東上総南部の分割統治体制の矛盾の表出であって、この三地域の地域性の相違が里見氏の一元的支配を拒み続けていた様子がかがえう。里見氏が豊臣政権の天下統一の波に飲み込まれたのは、それから間もない天正18年(1590)のことであるが、その時の領地や支配下の城館は、天正8～9年の内紛と反乱克復直後とほとんど大きな変化は見られなかった。

房総の戦国期の政治動向の概要は、以上のように整理することができる。この間、千葉・原氏や西酒井氏、武田氏や土岐氏、そして里見・正木氏らによって多くの城館が相次いで築城または再興されており、現存する城館跡の大半がこの時期のものであるといっても決して過言ではないであろう。そして、それらの城館は、築城主体の目的によって領域支配の拠点となるものから水陸の交通路を掌握・監視するもの、漁や漁場などを掌握・監視するもの、村人たちの避難所となるもの、そして陣城・付城・寄居のようにな純軍事的なもので、多様な性格と機能を持つものから構成されていたが、日本の城館史上、これほどまでに城館が多様に発展した時代はおそらく他にないのではなかろうか。それだけの時代は、城館に多様な期待が寄せられていたのである。

(e) 豊臣期以降 天正18年、豊臣秀吉による小田原北条氏の討伐を境に、房総の戦国争乱は収束をむかえ、勢力地図の大規模な書き替えが行われた。まず、北条方の千葉・原氏を中心とする下総の領主たちは北条氏と金満をともにし、本佐倉城・臼井城を中心とした本佐倉・白井領のもとで、布川豊島氏の布川領、高城氏の金満、国分氏の矢作領、本佐倉城の大須賀領以下、すべての領地を没収されて没落し、東海から関東へ入部した徳川氏の家臣たちがその遺領へつぎつぎと配置されたのであった。下総西北部でも北条氏管轄下の関宿城・古河城や築田氏が拠る水海城、相馬氏の相馬城を中心とした領地が没収された。下野・常陸との境界付近で早く秀吉に属した結城氏のみが生き延びていた。

一方、上総・安房では、里見氏が小田原陣中の秀吉のもとへ参陣し、本国の安房の確保には成功するが、小田原への出陣の過程で独自の行動をとったため、秀吉によって佐貫城以下、小田喜(大多喜)城・海城・金谷城・小糸城・久留里城・勝浦城・興津城・一宮城・吉字城を含む上総南部の領地のすべてを没収される結果となった。また、上総中北部では、土氣・東金城の西酒井氏、長南城を中心に池和田城・勝見城を押さえた長南武田氏、万木(万喜)城を中心に鶴賀城・へびうか城を押さえた万木土岐氏がすべての領地を没収されたのであった。

このように房総三か国では、最北部の結城氏と最南端部の里見氏が豊臣政権下で大名として存続することを許され、それ以外のすべての領主たちが北条氏とともに滅び去ったのである。そして、その遺領には、第1表のように多数の徳川氏の部将たちが入部してきたのである。その主な顔ぶれをみると(1万石以上)、下総では、三浦義次が1万石で本佐倉城へ、酒井宗家が3万石で臼井城へ、武田信吉が3万石で小金城へ、島岡元忠が4万石で矢作城へそれぞれ入城したのを始め、小見川城・多古城・岩富城・山崎城・蘆戸城にも一万石程度の徳川家臣たちが入部したのであった。このうち小金城に入った武田信吉は、間もなく1万石を増増されて本佐倉城へ移っている。また、下総北部では、小笠原秀政が3万石で古河城に、松平康元が2万石で関宿城へ、菅沼正政が1万石で守谷城へ入っている。

このように、下総では4万石を最高とした多数の徳川部将が入部してきたが、上総ではこれとかならず異なった状況を見せていた。すなわち、この国では、本多忠勝の万木(万喜)城10万石(のち小田喜城へ移る)と石川康通の鳴戸城2万石、内藤家長の佐貫城2万石、松平忠政の久留里城3万石が確認されるのみで、ほかには1万石以上の有力部将の入部を確認することができず、事実上、本多忠勝が一国統治の中心的な役割を担っていたと考えてよさそうである。

この上総と下総との対照的な徳川家臣団の配置形態は、両国の歴史と地域性の相違に規定されつつ現れた現象であったということができよう。

それとともに注目されることは、徳川氏の部将たちの入部した城々が、いずれも戦国末期に地域支配の拠点となっていたところである、という事実であろう。もとよりこの他にも、下総の小弓・生実城や上総の真里谷城など重要な城郭が存在したが、それらは戦国後～末期の諸勢力の再編に伴ってその地位を低下させ、再び支配拠点として重視されることはなかったのである。しかも、徳川氏は戦国末期の勢力配置に対応した城郭分布を踏襲する一方で、両総の領域支配の再編を指向しつつ、新たな城郭の位置付けを試みていたのであり、それが各地の各部府配置にも現れたのであった。とりわけ上総では、上総北部の佐貫城に内藤家長、東上総南部の勝浦城に松平忠政、東上総北部の鳴戸城に石川康通を配置したほかは、本多忠勝に万木土岐氏・小田喜正木氏・長南武田氏の支配領域を管轄させる体制をとるなど、かなり明確な領域再編とそれに対応した城郭の再編・整理を実施したのであった。下総では、千葉・原氏系列の多数の領主たちの城々がひしめき合っていたため、明確な再編・統合はすぐには現れなかったが、千葉氏の本拠であった本佐倉城には間もなく三浦義次にかえて武田信吉を配置し、下総の中心とする意思を示しつつ拠点地を押し進め、その成果を持って隣接した鹿島城へ移転し、佐倉藩の藩部佐倉を形成していったのである。その意味で、近世の佐倉城とその城下町佐倉には、下総の中心であった千葉氏の居城本佐倉城とその城下町の伝統が確実に受け継がれていくのである。中世下総第一の権威千葉氏の居城本佐倉城が、近世下総の中心佐倉藩の本佐倉城へと転身していく流れを見ると、そこにはやはり城郭が備え持つ格というものが示されているといわざるを得ない。

おわりに

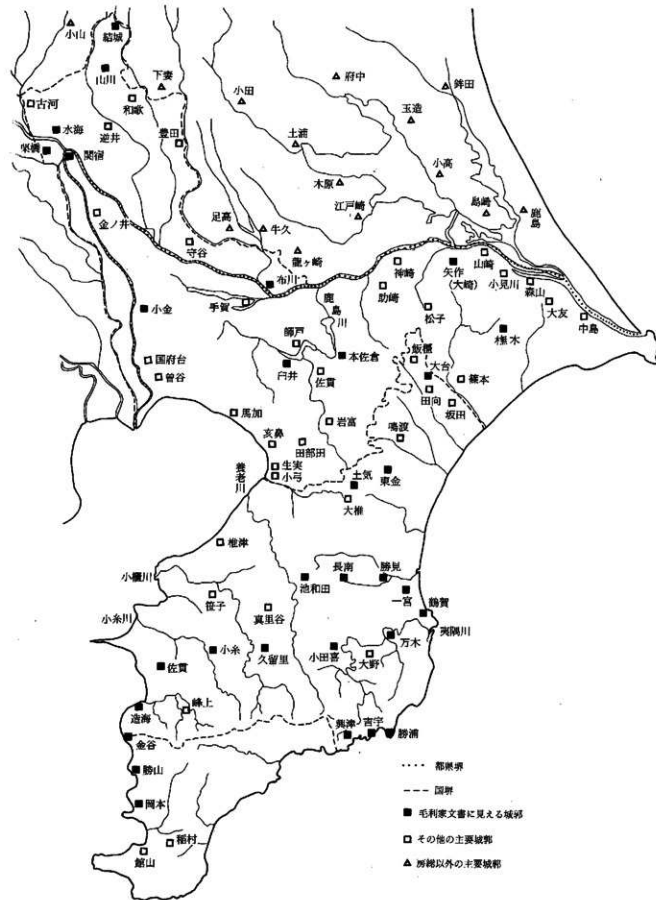
以上、本稿では、房総における中世城館跡の地域的分布の概要と、政治上から見た勢力分布と城館跡の対応関係、およびそこから読み取れる房総の地域性や城館跡の特質の一端などについて鳥瞰的な考察を試みた。もとより十分なものではないが、本報告書と前年度の報告書を紐解く際の手引きとなれば幸いである。

最後に一つ付言しておきたいことがある。それは次のようなことである。この二冊の報告書の刊行によって房総の中世城館跡研究が大きく進展することは十分予想されるが、これまで適宜言及してきたように、文献から確認される城館と現存する遺構との間にはなお大きなズレがあり、そこに内在する諸問題の解決には多くの日時を要することが予想される。その際、学術発掘を中心とした現存遺構の調査が、それらの問題解決の限りない可能性を秘めていることは言うまでもないところであろう。しかし、現在の社会は、数百年にわたって残ってきたこれらの遺跡に対し、開発という名の遺跡破壊行為をもとめれば容認しがちであるなど、いさかき過激な運命を強いているように思われる。周知のように、こうした開発の激増は、1970年代の高度経済成長期を契機として引き起こされた現象であるが、この時期は、10世紀と15世紀の大きな社会変動に匹敵する現代社会の大転換期に当たっているといわれている。しかも、15世紀の社会変動が城館の本格的登場の画期であったとすれば、19世紀後期の明治維新による城館の廃絶という小画期を挟んで、現在は城館跡の遺構消滅期でも呼び得る大転換期になりつつあるのが実状である。この大転換期に際し、城館跡という貴重な歴史史料をどの様に保存・活用し、マイナスイメージの遺構消滅期をプラスイメージの有効活用期に変えていくかは、これからの文化財行政の在り方に掛かっているといっても過言ではないであろう。この報告書刊行が、有効活用期を招き寄せる一助となることを心から願うしだいである。

第1表 戦国末期房総の勢力分布

城名	関東八州諸城表書1	関東八州諸城表書2	北条氏人数表書	幕府表	城主の系別	豊臣期の在城者
結木の城(下総・結城城)	結城晴友 (結城晴朝)	結城晴友 (結城晴朝)	結城氏	結城氏	結城氏	新井康成10.1
山川の城(阿・山川城)	山川晴高・朝高	山川晴高・朝高	山川氏	山川氏	山川氏	山川晴高・朝高
(阿・古河城)	北条隆興守(氏園)	北条隆興守(氏園)	北条隆興守(氏園)	4500騎 の内	北条氏 (古河公方)	小笠原秀政3.0
水見城(阿・水海城)	同	同	同	同	同	松平康元2.0
関谷(阿・関谷城)	同	同	同	同	同	菅清定政1.0
栗園(阿・栗園城)	同	同	同	同	同	三浦義隆1.0、のち武田信吉4.0
(阿・守谷城)	同	同	同	同	同	西井家次3.0
さくら(阿・本佐倉城)	千葉勘助(千葉重胤)	千葉勘助(千葉重胤)	千葉介(重胤)	3000騎	(千葉氏)	武田信吉3.0
臼井城(阿・臼井城)	原大次郎	原大次郎	原大次郎	2500騎	同	島原元忠4.0
こかわ井城(阿・小金城)	高木(高城胤則)	高木(高城胤則)	高木(高城胤則)	700騎	同	松平家忠1.0
ふ川之城(阿・布川城)	十嶋(豊島三河守)	十嶋(豊島三河守)	十嶋(豊島三河守)	150騎	同	俵科正光1.0
わう大ノ城(阿・大台城)	板野刑部大夫	板野刑部大夫	板野刑部大夫	150騎	同	北条氏勝1.0
かよらき城(阿・蔵木城)	蔵木駿河守	蔵木駿河守	蔵木駿河守	300騎	同	岡部兵衛1.2
矢はきの城(阿・矢作城)	小窪(園分)五郎	小窪(園分)五郎	小窪(園分)五郎	500騎	同	水増義直1.0
(阿・小見川城)	同	同	同	同	同	同
(阿・多古城)	同	同	同	同	同	同
(阿・岩富城)	同	同	同	同	同	同
(阿・山崎城)	同	同	同	同	同	同
(阿・蘆戸城)	同	同	同	同	同	同
とつかの城(上総・東金城)	坂井右衛門尉 (源井政良)	坂井左衛門尉 (源井政良)	坂井左衛門尉 (源井政良)	150騎	(源井氏)	同
とつかの城(阿・土気城)	同	同	同	同	同	同
(阿・鳴渡城)	同	同	同	同	同	同
長南之城(阿・長南城)	其南前部大夫 (武田豊信)	竹田兵部大輔 (武田豊信)	竹田兵部大輔 (武田豊信)	1500騎	(武田氏)	石川康通2.0
池和田之城(阿・池和田)	同	同	同	同	同	同
かつみの城(阿・勢見城)	同	同	同	同	同	同
まん木ノ城(阿・万木城)	十岐少弼	とき(土岐)大膳 とき大膳	とき(土岐)少弼	1000騎	(土岐氏)	本多忠勝10.0、のち小田書城
へびうかの城(阿・不明)	同	同	同	同	同	同
鶴賀ノ城(阿・鶴賀城)	同	同	同	同	同	同
小田畠(阿・大多喜城)	さつみの義隆 (里見義隆)	高橋大膳城主也 真崎石見守当時代也 加藤大膳左衛門 左馬頭源氏里見義安 (里見義隆)	里見氏	3000騎	里見氏	内藤家長2.0
さぬき城(阿・佐貫城)	同	同	同	同	同	里見義隆9.2
岡本之城(安房・岡本城)	同	同	同	同	同	同
(安房・龍山城)	同	同	同	同	同	同
から山之城(阿・勝山城)	同	同	同	同	同	同
つくりよみの城(上総・造海城)	同	同	同	同	同	同
小いの城(阿・小糸城)	同	同	同	同	同	同
くるりの城(阿・久留里城)	同	同	同	同	同	同
かつらの城(阿・勝浦城)	同	同	同	同	同	同
おつ木の城(阿・葛津城)	同	同	同	同	同	同
しようの城(阿・青戸城)	同	同	同	同	同	同
宮ノ城(阿・一宮城)	同	同	同	同	同	同
かなや(阿・金谷城)	同	同	同	同	同	同

- 1) 本表は、『毛利家文書』所収の3点の文書を出典として作成した。
- 2) 本表では、茨城無城に属する旧下総国の城郭についても数えている。
- 3) 天正10～慶長5年に在城者がいながら、上記の文書に記載の見えない城郭については、括弧内にその城郭名と国名のみを記した。
- 4) 騎馬数は、関東八州諸城表書2と北条氏人数表書の両者に見える場合、妥当性の高いものを記した。ただし、この数字は戦国末期に豊臣方からそのように評価されていたことを示すものである。
- 5) 「豊臣期の在城者」の欄に見える人名のつぎの数字は石高(万石)を示す。



第1図 中世房総の主要城郭の分布

2 出土陶磁よりみた千葉の城館

小野 正敏

はじめに

平成2年度から実施された千葉県中近世城館跡群分布調査によれば、房総における中世の城館は、全体で約1000遺跡確認された。このうち発掘例は約20といわれる。しかし、その多くは、発掘面積が小さく全体像が不明であり、当然遺物の出土も少ない。陶磁器の出土頻度の小さいことが、この地域の特徴を示すと推定されるにしても、その結果、具体像を描くことを困難にしていた。しかし近年、光町篠本城のように城館全体を発掘するような規模の大きい調査例も増えてきた。それらは多様な個別の城館の実像を明らかにしつつあり、また、一方で「小櫃川流域の中世遺跡」のように地域像をまとめる優れた成果もだされている。房総の中世をより豊かに語るために、この分布調査の報告書とともに、それらの調査成果の刊行が期待される。

ここでは、限られた発掘資料の中から、麴町下町の坊館、富津市金谷城、長南町岩川館、一宮町一宮城、芝山町田向城、光町篠本城、木更津市真里谷城、木更津市笹子城、大多喜町大多喜城、四街道市港の尻館、酒々井町本佐倉城、佐倉市白井城、印西市小林城などの資料をつかい、房総の城館出土の陶磁器を概観し、今後の検討課題を考えたい。

1 出土陶磁器からみた時間的な問題

城館を陶磁器の年代から大まかにまとめると、3つのグループにまとめられよう。第一のグループは、13世紀初から14世紀中葉の陶磁器をもつもので、いずれも小規模な館または屋敷と推定されている下の坊館、岩川館、君津市外箕輪遺跡、茂原市神田山遺跡や篠本城や小林城の先行する墓地資料などがあげられる。供膳具ではかわらけとともに貿易陶磁の青磁碗、貯蔵、調理具では常滑焼の鉢をもち、煮炊具には少量だが伊勢型鍋が伴うことが多い。貿易陶磁では青磁碗I-2、4や希に同安窯系青磁をもち、瀬美焼の甕を伴う前期と青磁碗I-5類、皿類や白磁Ⅸ類皿を伴う後期とに分かれるようであり、遺跡数や陶磁器の消費量が増えるのは後期からである。また、神田山遺跡の例のように、より古く12世紀へのほろ白磁Ⅳ類、Ⅴ類などをまれに持つ場合もある。こうした古い時期の陶磁器を出土する遺跡が、国府に近い市原や木更津周辺、鹿嶋、香取周辺といった明確な求心点をもつ地域だけではなく、内陸でも神田山遺跡のように街道の峠越え地点に位置する遺跡で確認されていることを注意したい。これは市または宿といわれる街道に立地する山谷遺跡でもこのグループの前期の陶磁器から確認されることと通じよう。

第二のグループは、14世紀後半から15世紀後半、主として15世紀前半から後葉の陶磁器を主体にする城館である。篠本城、笹子城、小林城、田向城、南屋敷、池の尻館、岩川館の後半など、房総全域にこの時期の城館が多く、この時期から台地の上に城が出現することが特徴であり、むしろ城館の多くがこの時期一陶磁器からいえば15世紀前半に一気に出現した可能性が高いといえる。これは斎藤1991や柴田1991が指摘する15世紀中葉を面期として臨時の城郭から日常的な本拠としての城郭へ変化したことを裏付けているが、その年代は、陶磁器組成の変化などからももう少し早いと考えられる。また、それが台地の上の城郭ばかりではなく、南屋敷や池の尻館のような館についても同現象であることが注意される。

陶磁器組成は、小野1985で1期の組成とした15世紀初から中葉までのセットを主とする。つまり、供膳具は貿易陶磁青磁碗で粗い蓮文をもつB2類（上田分類）や雷文荷輪C類、へらによる蓮文文様B3類、端取口碗D2類、白磁D群（森田分類）と、瀬戸窯の灰胎土罐、緑釉皿や腰折皿、天目茶碗などの密窯期のものである。調理具には灰胎の三足釜と銅皿、常滑焼の鉢、鬼板塗りの楕鉢があり、地域によっては在産の楕鉢が加わる。煮炊具には東海系の銚子と在産の内耳鍋があり、地域によっては在産の湯鉢が加わる。貯蔵具は常滑焼である。房総の在産の瓦質製品が15世紀のどの段階から、生産されるかについては、明確ではないが、組成からみて、15世紀第2四半期と

推定される。

この第二のグループの終末をみると、笹子城や篠本城、田向城のように、もっとも新しい陶磁器に瀬戸美濃の大窯製品やII期の貿易陶磁の染付碗皿、緑釉蓮文青磁碗B4などが加わる遺跡があるが、大窯第1段階の楕鉢を除けばその構成比は非常に低い。つまり、第二のグループの城館は、15世紀後半にほとんどが機能の喪失か、その後使用された場合でも、陶磁器をほとんど残さない=生活機能の希薄な空間に変質したことが知られる。例えば篠本城では、I様の分類で55点中、2点のみが大窯第1段階のものである。他は密窯終末期のものである。また、笹子城では、下層では緑釉皿、中層では腰折皿が主体で、篠本城よりも盛期の終末が少しだけ新しい方へずれていることがわかる。したがって篠本城にはない染付碗皿を一定量もって、楕鉢も密窯製品より大窯第1段階の製品の方が多い傾向を示す。しかし、次の大窯第2段階の楕鉢は数パーセントの構成比のみとなる。

また、逆にこの第二のグループの城の資料には、12から14世紀の陶磁器が存在する例がある。例えば、篠本城や小林城の場合は、それらが基地に伴う陶磁器と考えられている。つまり、城に先行して基地が営まれており、この段階では基地だけが台地上や斜面部にあったことになる。城は、基城を一部破壊し、一部を踏襲して作られている。この集地を営んだ人々の日常生活空間としての館や屋敷は台地のうえにはなく、台地裾や谷内にあったと推定されている。篠本城では城の東北側の集落がある谷の「新斎光寺」の山号「殿谷」が、この地域に古く居館があったことを暗示している。城の北側、集落から基地につながる場所には寺院に由来することが多い「大門」の地名がある（伊藤一男1995）。既に多くの研究者により指摘されているように、この時期に大きく生活空間の変更にあったと考えられる。同様に、陶磁器ではないが、田向城や堀込城などから発掘された板碑や石塔の紀年銘にも、14世紀後半から15世紀初めのものが確認されており、同じ時間的経緯を暗示している。ただし現集落に関わる部分は調査されておらず、城が成立した以降、どのようになっていたかは不明である。

第三のグループは、15世紀末から16世紀後半の陶磁器を主体とする城館で、一宮城、大多喜城、真里谷城、本佐倉城、白井城、堀込城などの発掘例がある。この時期の陶磁器組成は、II期、III期（小野1985）に相当する。供膳具は染付碗皿、白磁皿の貿易陶磁を主体に瀬戸美濃焼の灰胎皿で構成される。また、調理具は瀬戸美濃焼の塗り鉄の楕鉢と地域により在産の土師質又は瓦質の楕鉢がある。煮炊具は内耳鍋である。

また、ここに例示した遺跡のうち、資料の少ない一宮城と大多喜城は不明ながら、いずれも密窯末の楕鉢を含んでいるが、15世紀前半の陶磁器は非常に少ないという特徴をもつ。そして、その終末は真里谷城を除けば16世紀後半まで続く。したがって、第二のグループの城が使われなくなったり、または機能が変化して陶磁器を残さなくなった15世紀後半から末にかけて、逆にこれらの城が主体になっただけである。つまり、15世紀の前半から中葉にかけての多くの城が大量の陶磁器を残す=生活機能の豊かな空間であった状況から一転して、ここにあるような少数の城のみが陶磁器を残す状況に変化したことになる。そして、ここにあげた発掘例の多くが、国策あるいは士に準じるクラスの城であることから、単なる城の生活機能の強弱の変化ではなく、城自体の統廃合を含んだ国レベルのネットワーク中における城の機能分化、役割変化の結果が示されていると考えられる。これは、柴田1993の在地館主層を統合する広域領主権力という、個々の城郭は取扱選択をうけ、軍事的に重要性の高い城郭が選択され、防御性を強化されていた。そのため集落との一体化が希薄になった、という指摘や、井上1995の「戦国期の派然としたイメージである、本城一支城体制は天正18年（1590）まで常に存在した」という指摘が、二人の文献中から村の城館の前提と16世紀中葉という年代観を保留すれば、現状では説得力のあるものといえる。ただし、今後の発掘の進展によっては、堀込城や金谷城の例のようによりランクの落ちる多様な城が増加することも予想される。そのために、著名な大規模な城だけが調査発掘されるのではなく、中少の名もない城館の発掘が必要とされる。

2 陶磁器の組成と分布から

グラフを参照しながら組成の特徴をみてみよう。まず、第二のグループに関連する15世紀前半の陶磁器組成からみ

る。もっとも発掘面積と資料数の多い篠本城のグラフからは、瓦質土器に分類した内耳鍋の多さが目立つ。ここでは指鉢が瀬戸焼であり、これに加えると調理具と煮炊き具で5割以上になる。これは、池の尻館でも共通し、かわちけ以外の土師質土器と瓦質土器は内耳鍋と指鉢であり、篠本城よりその比率が高い。逆に小林城ではかわちけの比率が高いことが目立ち、その分、内耳鍋と指鉢が篠本城・池の尻館に比べ半分以下になっている。このような調理・煮炊き具の多さが遺跡の性格を二分しており、概して、前者の方が陶磁器全体の消費量も多い。これが生活機能の痕跡が高いことを示す指標になるだろう。岩川館に特徴的なのは常滑焼の比率が高いことである。これは、次の16世紀を主としたグラフでも一宮城は相対的に常滑焼が高く、流通に関係するこの地域の特徴といえるかもしれない。

15世紀前半の組成で注意されるのは、中国陶磁と瀬戸焼の関係で、いずれも瀬戸焼が数倍か、等倍を占める。石川県普正寺遺跡、福島県南古館にもみるようにこの時期のみに全国に共通する逆転の状況であり、15世紀後半から16世紀のグラフでは、中国陶磁が瀬戸美濃焼の数倍の組成比になるのが普通である。これは、14世紀後半からの明の海禁政策により流通が減少した中国陶磁のシェアを瀬戸美濃の製品が埋めたものと理解される。この問題は、瀬戸製品の番給が敏感に反映される東国に顕著に見られると考えられ、特に房総ではこの時期の調査例が増加しており、より具体的に考えると考えられる。

房総内の地域性について、いくつかの製品をターゲットにみってみる。まず内耳鍋と在地産指鉢についてみる。関東各地の在地産の内耳鍋や指鉢については浅野1988が詳しくまとめており、およそ一宮あるいは二宮程度を単位とする地域相が示されている。房総では、内耳鍋と指鉢はその胎土の類似と共存関係からみて一宮に生産され、流通したものと推定される。その分布図は、現状では下総及び上総の市原、木更津周辺と北端の芝山町の田向域に確認されている。真里谷城、一宮城、大多喜城では確認されず、また、安房でも確認されない。内耳鍋は、大きくは共通して浅野が常陸型とした腰の丸い平底器形をとるが、口縁や胴部のカーブに数群がみられ、また、焼成が灰色の還元色を呈する特徴のある群がまとまるなど、小地域がみられようである。

また、特徴ある分布をみせるのは、伊勢型鍋と甕釜である。前者は文字どおり伊勢周辺の製品と推定され、14世紀中頃まで、後者は詳細は不明ながら東海産の製品と推定され、伊勢型鍋の後を埋めるように15世紀中葉まで認められるが、この後地もとの内耳鍋が流通するようになってしまうようである。現状では、池の尻館、堀込城など四街道市を最も内陸に、両者とも東京湾側に多い傾向があり、伊勢湾の流通と関係が深い様子がみられる。そうした中で、先の太平洋側と東京湾側を結ぶルートに位置する神田山遺跡では伊勢型鍋と甕釜が出土しており、その意味がうかがわれ興味深い。今後、発掘遺跡が増加する中で、常滑製品の量的な分布とこれらとの関係をみることで遺物からの流通の実態を検討することが可能になると期待される。これは前篇で指摘した浜名湖の北、細江町に窯跡がある戦国期後半から瀬戸のコピー商品を生産した初山焼や、金谷町寺戸呂焼製品の分布も同様である。その製品は、小田原城、八王子城、騎西城など、相模、武蔵の城で大量に消費が確認され、後北条の動きとも関連して房総でもその流通の実態が意味をもってこう。時期的には、16世紀の城が対象となるので、先の第3のグループの城、特に本佐倉城、臼井城などでの調査が期待される。さらに、まだ関東での明確な報告例がないようであるが、より古く香取の末期より瀬戸のコピーを生産していた金谷町三ツ沢窯の製品の流通なども問題になるだろう。

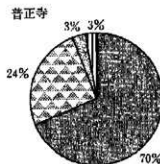
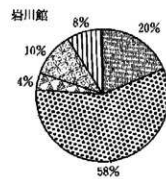
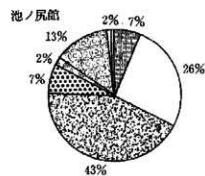
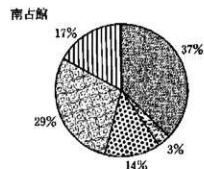
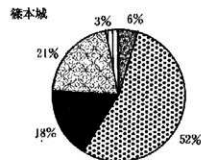
近年、城館の全体像が発掘されるようになり、曲輪館の空間特性を陶磁器の組成から分析することが可能になってきた。本佐倉城では、各曲輪にトレンチが入れられ、その陶磁器組成を曲輪の名称や遺構との比較をつづじてその空間機能を推定している(木内・印文セ1995)。この調査は保存整備のための確認調査であり、遺構が発掘が行われていないため遺物の総数が少ないなど制約があり、結論は今後の本調査を待たねばならないが、曲輪毎の空間の使い方の違いを反映しているかと思われる興味深い指摘がなされている。

構造的には求心性の無い一宮の城。村の城と評価されている篠本城においてもこうした遺物組成と曲輪、遺構等の関係を検討することにより、遺構からの空間の評価と使用された生活用具のあり方からの空間評価を総合することで、より正確な城の機能が解明されるものと期待される。

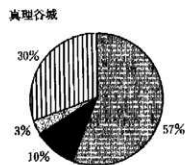
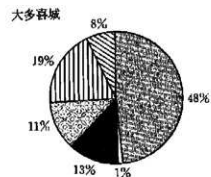
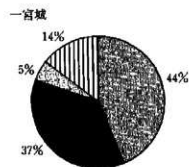
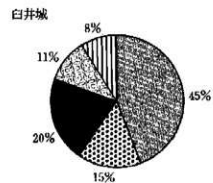
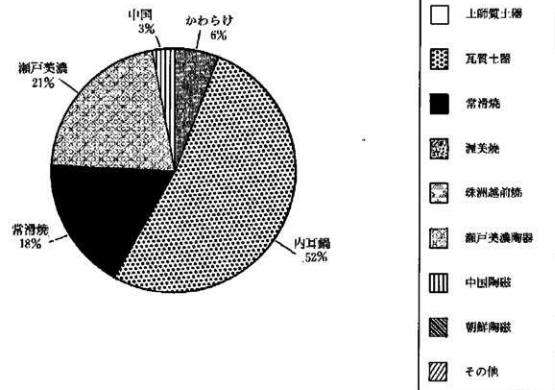
これまでに、16世紀を中心とした千葉県の城館出土の陶磁器に関して列島内の比較を通じて概観したことがあり(小野1991)。また、その後、佐生1991が千葉県の中世陶磁器の様相を詳細にまとめている。ここではそれら重複するテーマをさけるよう努力した。それらも参照されたい。

参考文献

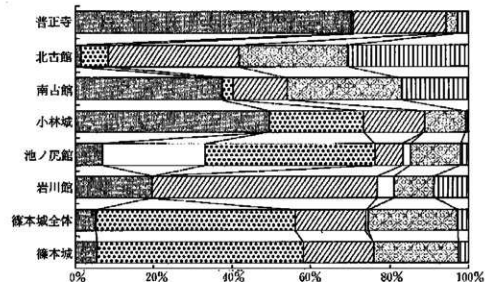
- 「千葉県教育委員会1974「上総国大多喜城本丸跡発掘調査報告書」
- 山武考古学研究所1984「一宮城跡域之内遺跡」
- 本更津市教育委員会1984「真里谷城跡」
- 中野道雄・渡辺正臣1986「下総国四街道地域の遺跡調査報告書」
- 浅野博樹1988「関東における中世在地産土器について」埼玉県歴史文化財調査事業調査研究紀要4号
- 「千葉県文化財センター1989「岩川館外東輪遺跡・八幡神社古墳群発掘調査報告書」
- 「千葉県文化財センター1990「下ノ坊遺跡B地点発掘調査報告書」
- 長生郡市文化財センター1990「桂遺跡群発掘調査報告書」
- 印旛郡市文化財センター1991「和良比遺跡発掘調査報告書3」
- 前掲知義1991「金谷城跡の調査」千葉史学18号
- 印田芳男1991「岩川遺跡(龍崎)」千葉史学18号
- 小野正敏1991「房総の城館出土の中世陶磁器の概観」千葉史学18号
- 佐生 寛1991「房総の中世土器様相について」史記23号
- 柴田敏司1991「中世城館の概観」中世の城と考古学
- 片岡一樹1991「本奥の奥」中世の城と考古学
- 佐生寛・柴田敏司1993「小瀬川流域における中世遺跡の調査」研究連絡誌37号
- 千葉県文化財センター1994「歴史時代(2)」房総考古学ライブラリー8
- 山武郡市文化財センター1994「田向城跡」山武郡市文化財センター発掘調査報告書21
- 千葉県文化財センター1994「外賀輪遺跡発掘調査報告書」
- 「千葉県文化財センター1994「小林城跡」
- 印旛郡市文化財センター1995「本佐倉城跡発掘調査報告書」
- 東総文化財センター1995「よみがえる篠本城跡」
- 井上哲朗1995「房総における中世城館の跡域から房城」千葉県文化財センター研究紀要16
- 小野正敏1985「出土陶磁よりみた十五、十六世紀における両郡の窯業」MUSEUM416



第2図 篠本城出土の陶磁器組成



第3図 15世紀を中心にした比較1

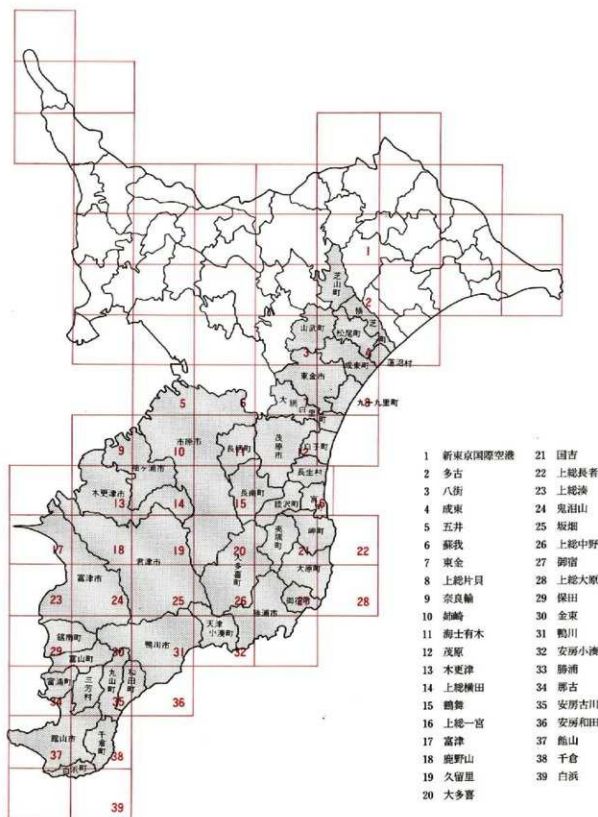


II 調査成果

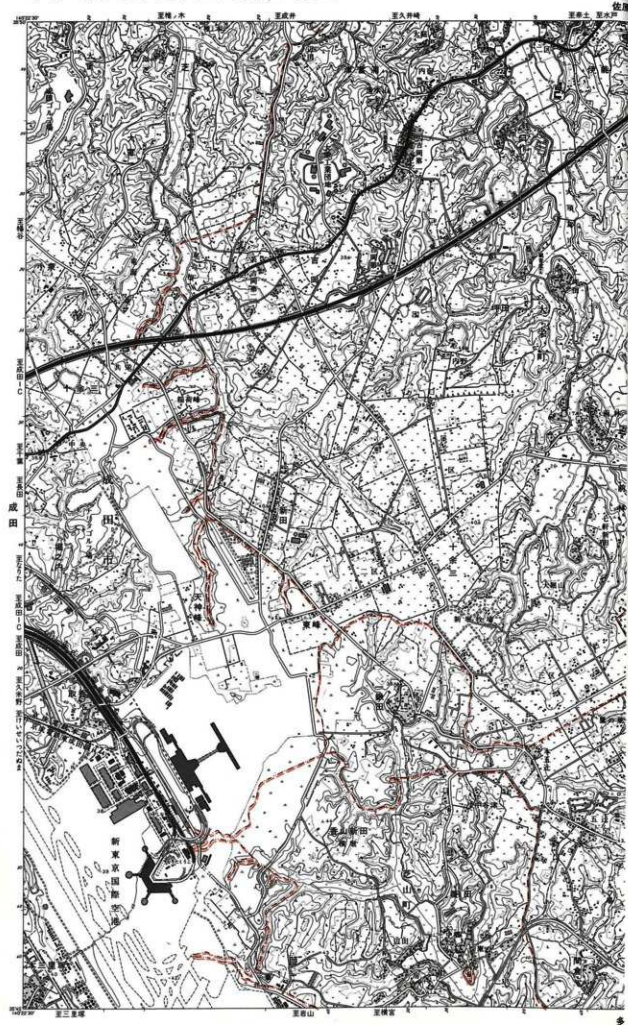
旧上総・安房国地域城館跡市町村別所在数一覧

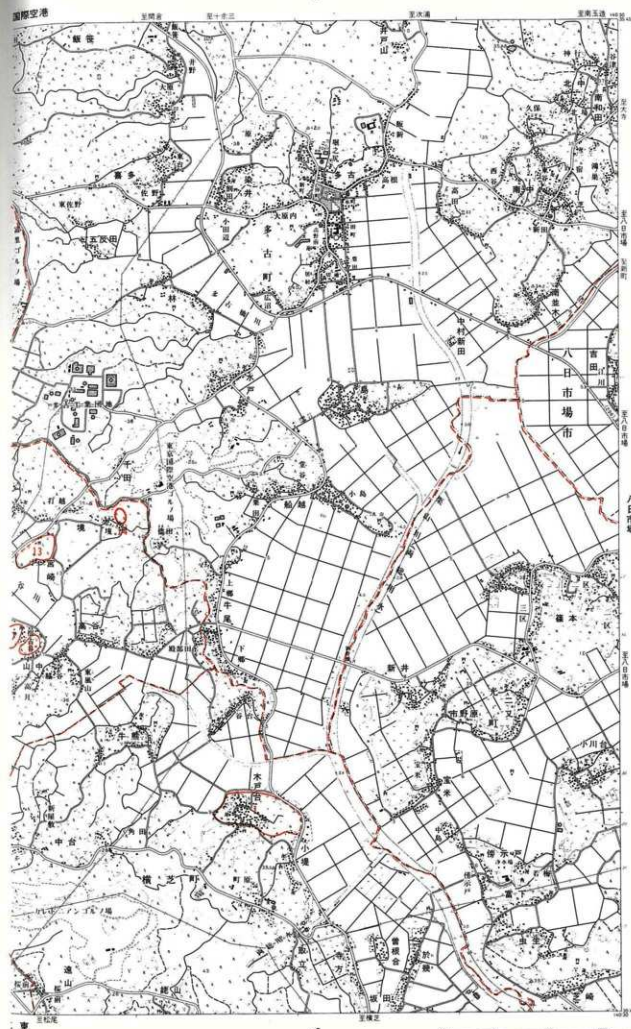
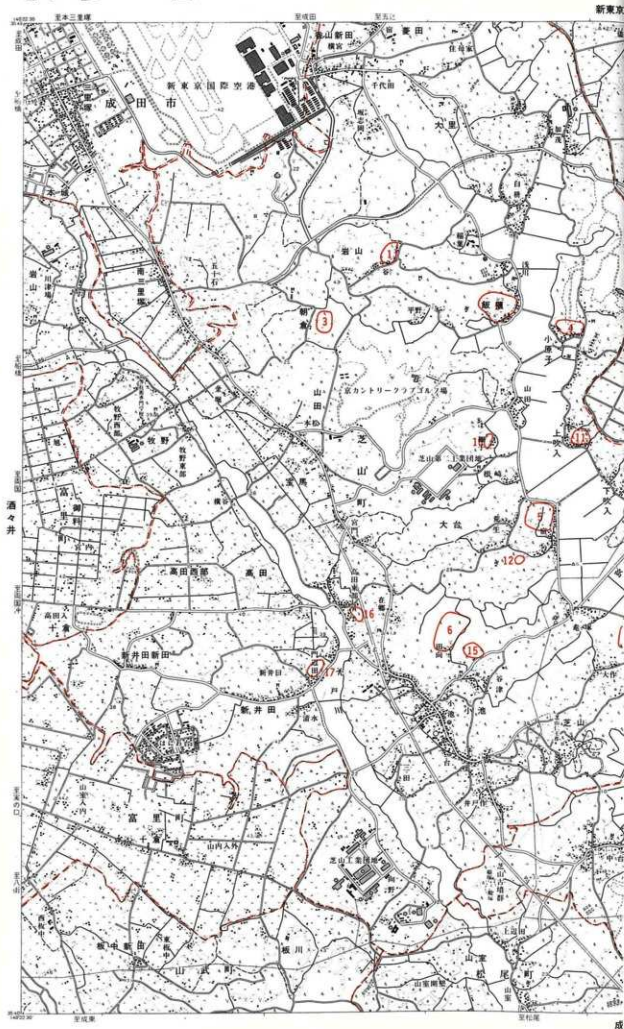
市 町 村	中 世 (城・館・砦)	近 世 (城・陣屋・居敷)	合 計	市 町 村	中 世 (城・館・砦)	近 世 (城・陣屋・居敷)	合 計
芝 山 町	17		17	富 津 市	23	11	34
山 武 町	10		10	夷 隅 町	7	1	8
横 芝 町	5		5	岬 町	12		12
松 尾 町	13	1	14	大 多 喜 町	8	2	10
成 東 町	10		10	大 原 町	15		15
東 金 市	18	1	19	御 宿 町	4	1	5
大網白里町	14	1	15	勝 浦 市	7		7
九十九里町	4		4	天 津 小 湊 町	4		4
市 原 市	102	11	113	鴨 川 市	14	4	18
長 柄 町	6		6	鋸 南 町	8	2	10
茂 原 市	11		11	富 山 町	9	1	10
白 子 町	1		1	富 津 町	6	1	7
長 生 村	2		2	三 芳 村	4	1	5
長 南 町	24		24	丸 山 町	4		4
陸 沢 町	4		4	和 田 町	3		3
一 宮 町	2	2	4	館 山 市	18	8	26
袖ヶ浦市	14		14	千 倉 町	3	1	4
木 更 津 市	11	2	13	白 浜 町	1	1	2
君 津 市	33	9	42	合 計	451	61	512

* 中世と近世とに大別したが、中世から近世にかけての城館跡は両者に重複して数えているため、合計の遺跡数とは一致しない。

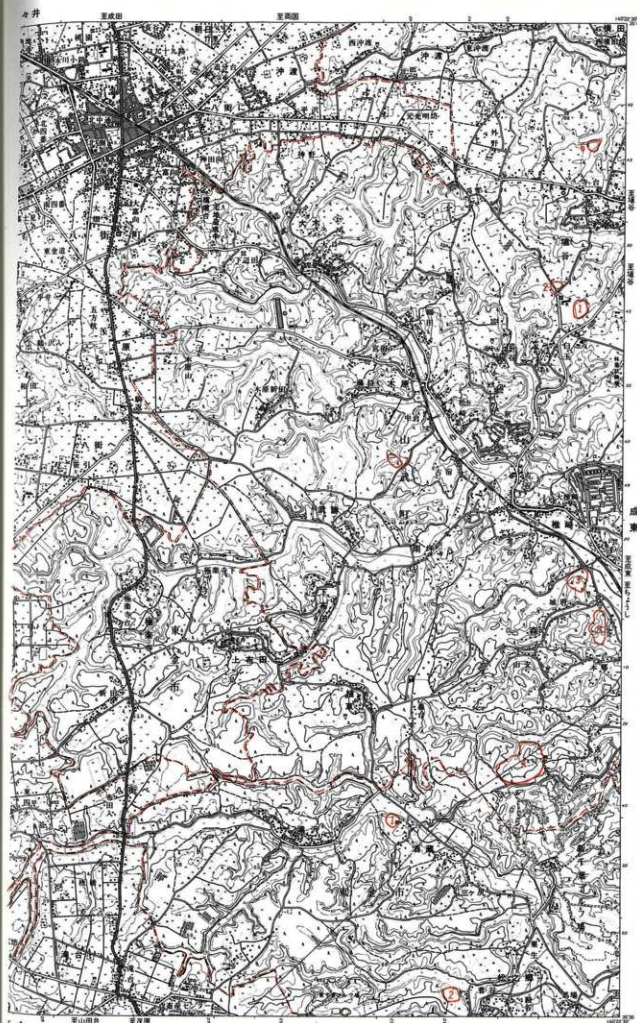
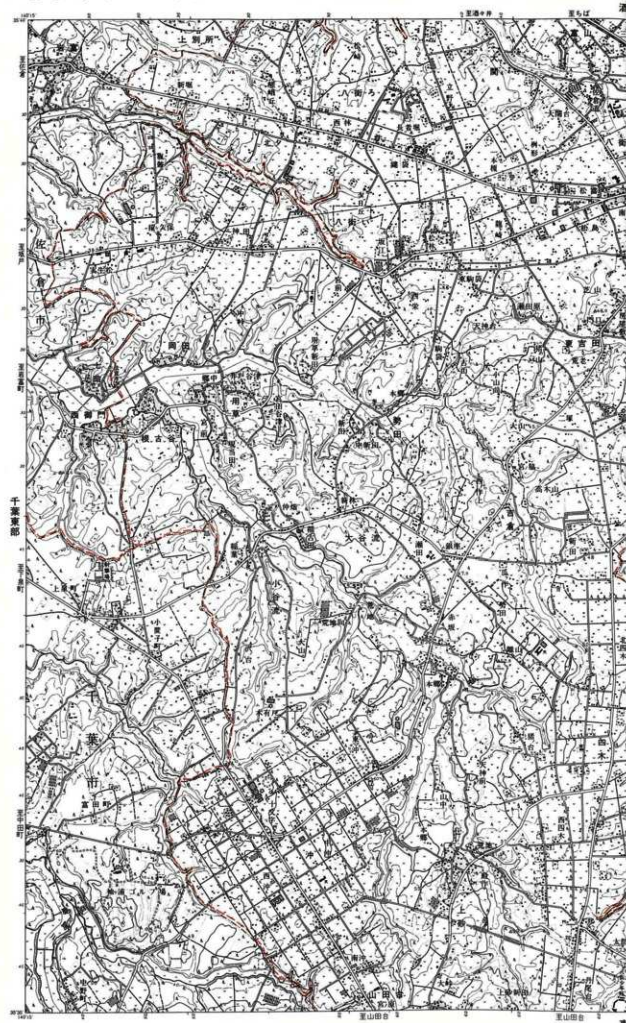


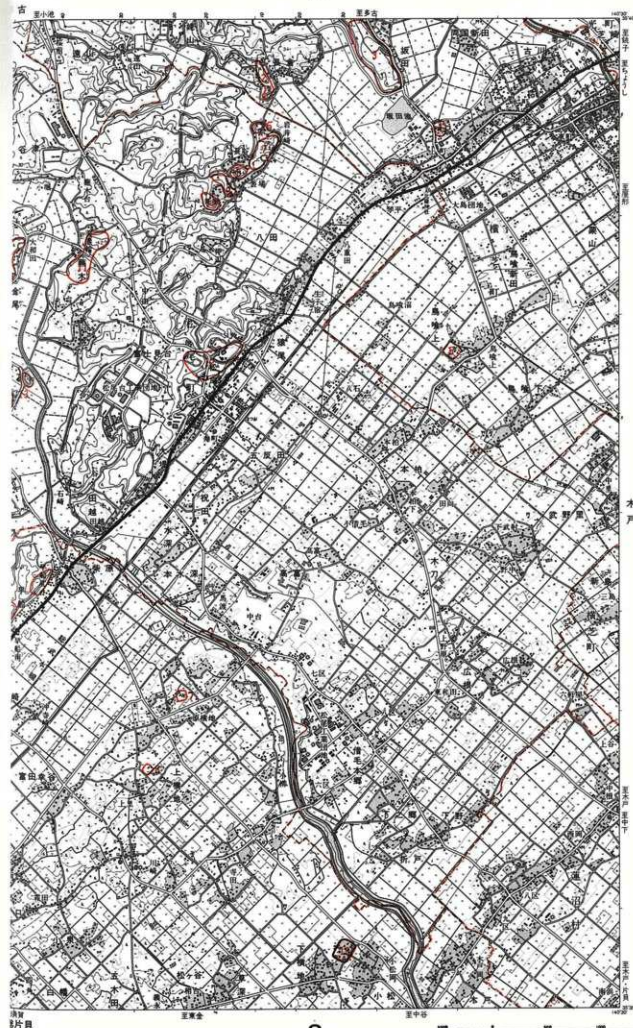
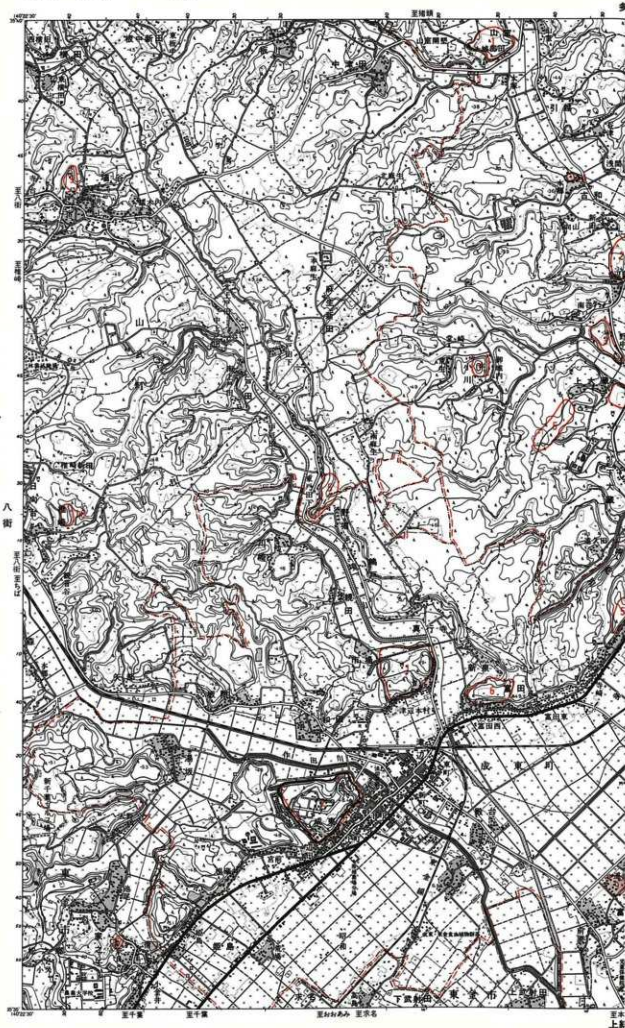
1. 新東京国際空港



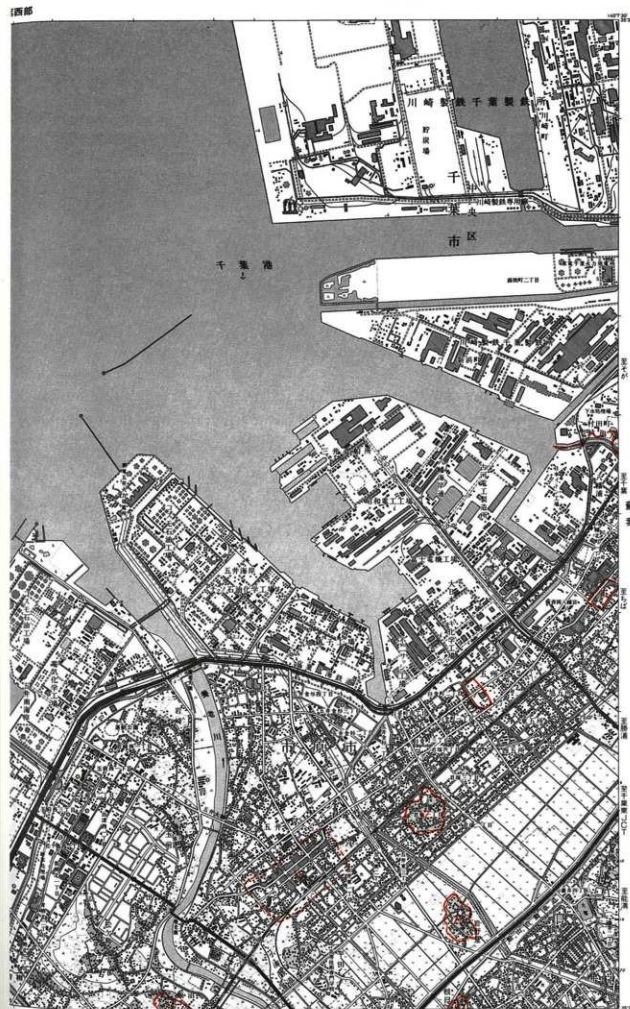
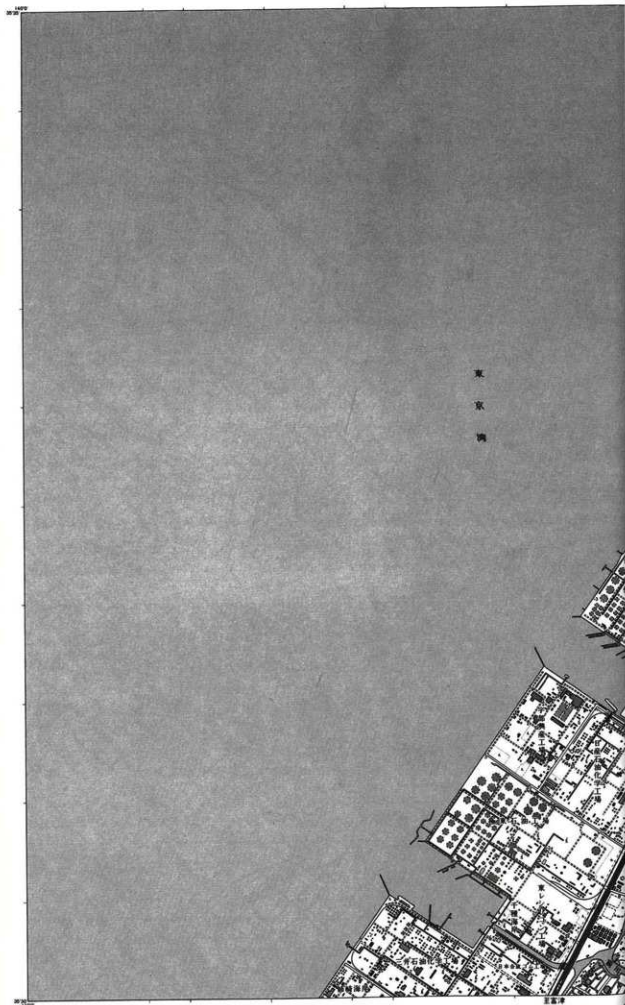


3. 八 街





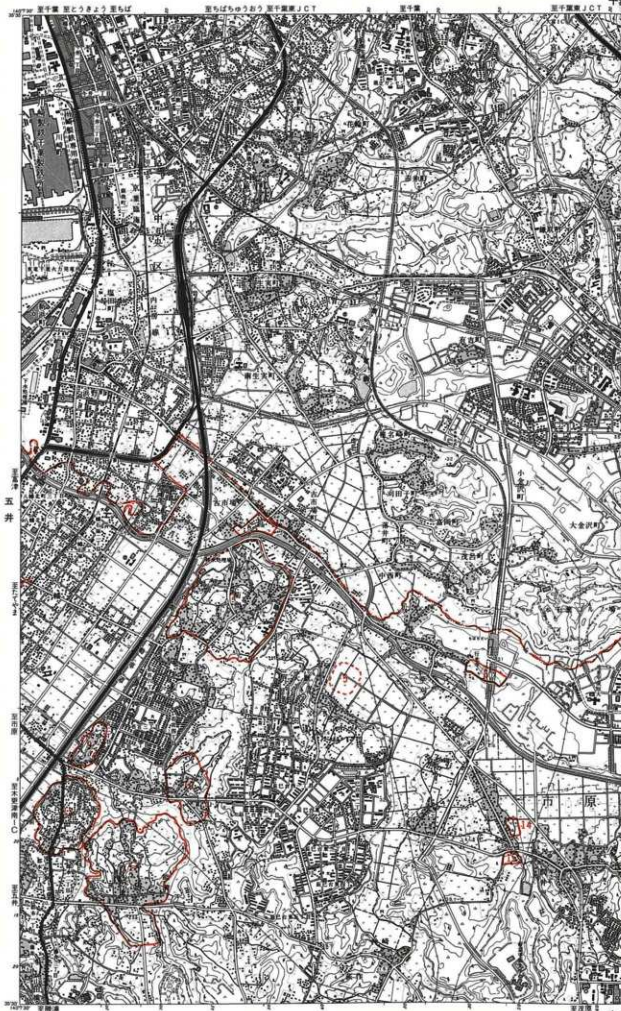
5. 五 井



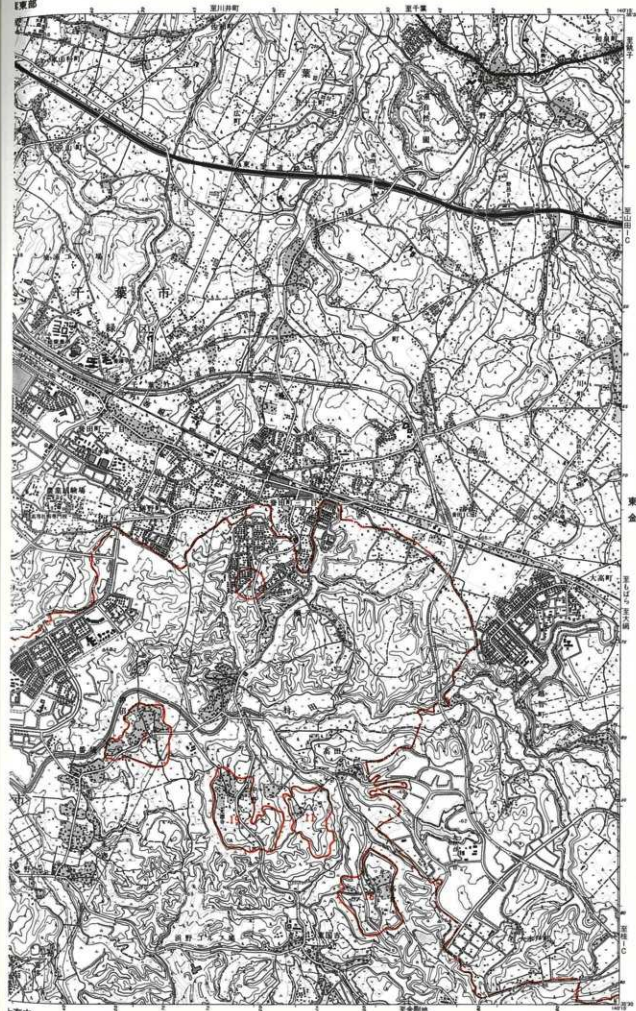
6

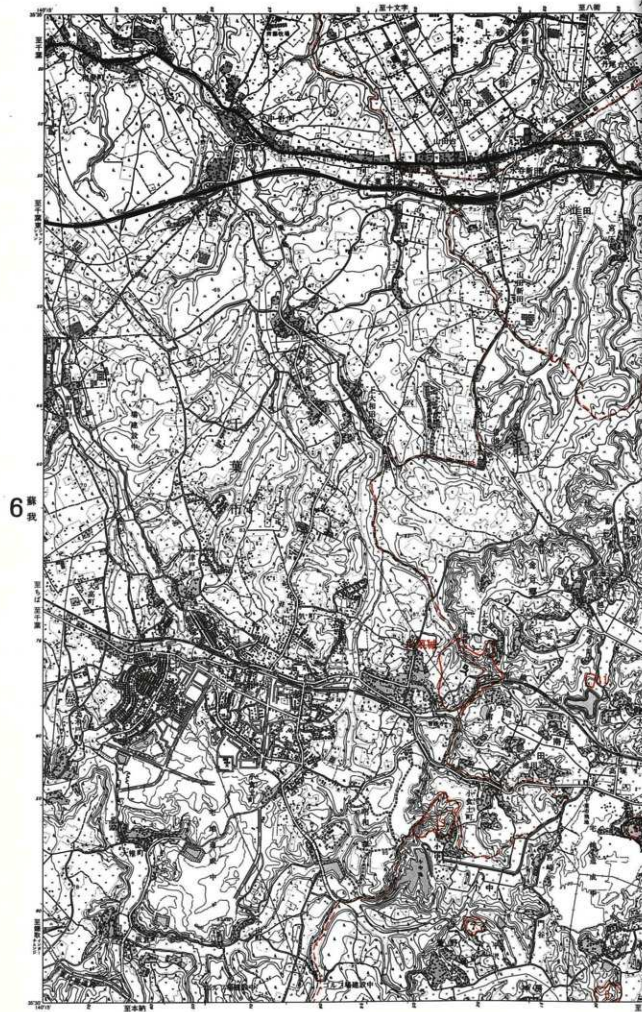
6. 蘇 我

5

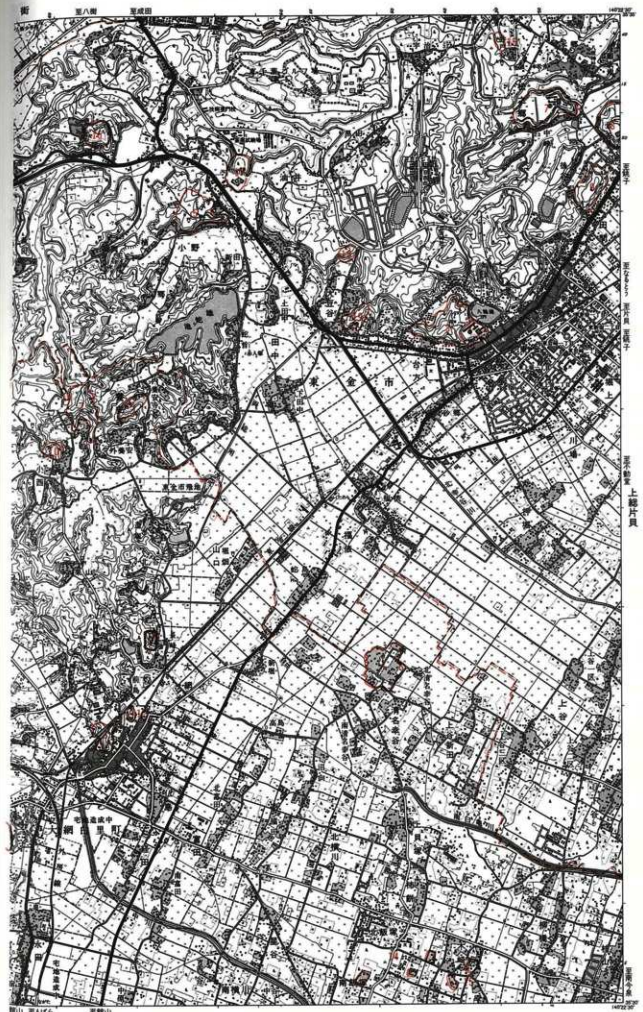


7

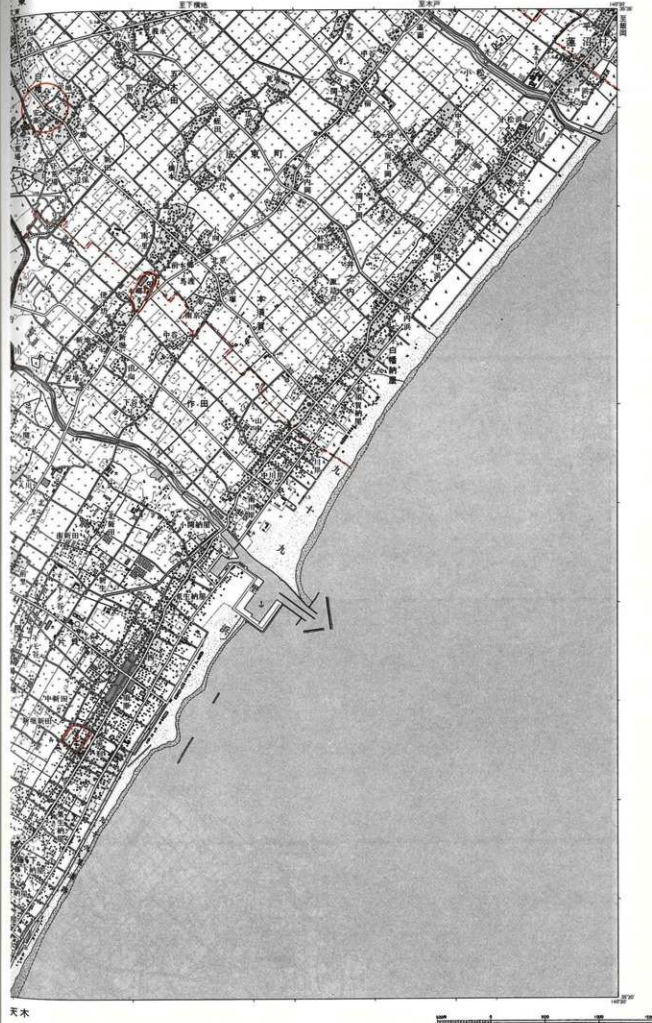
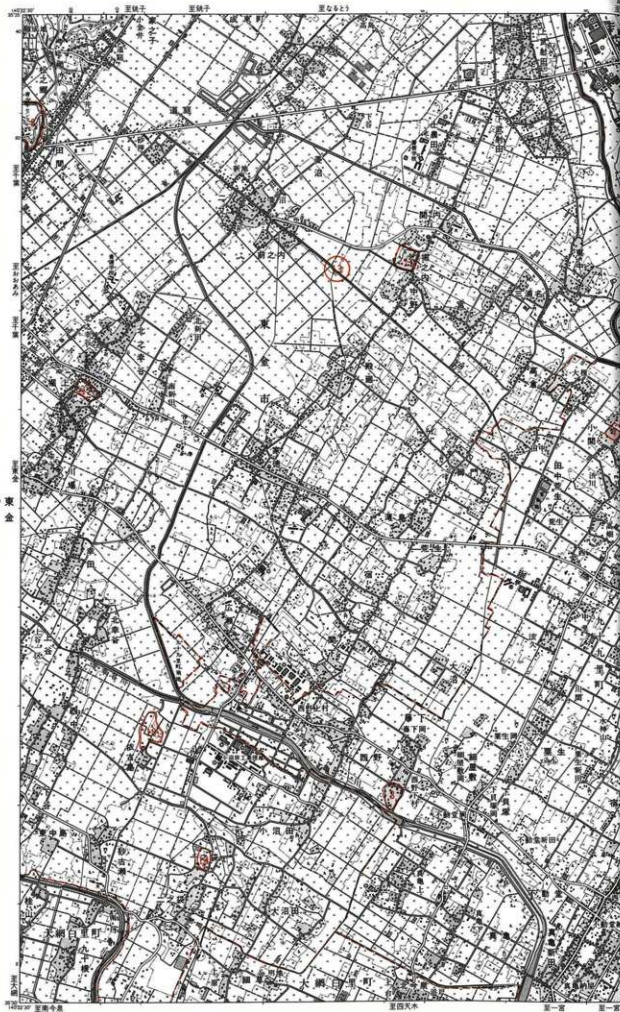




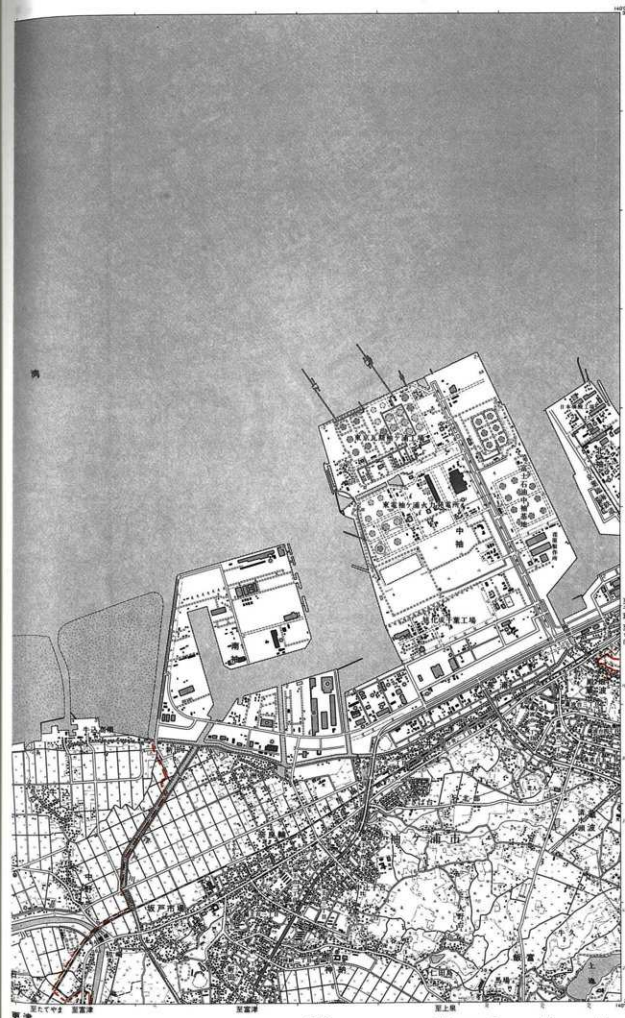
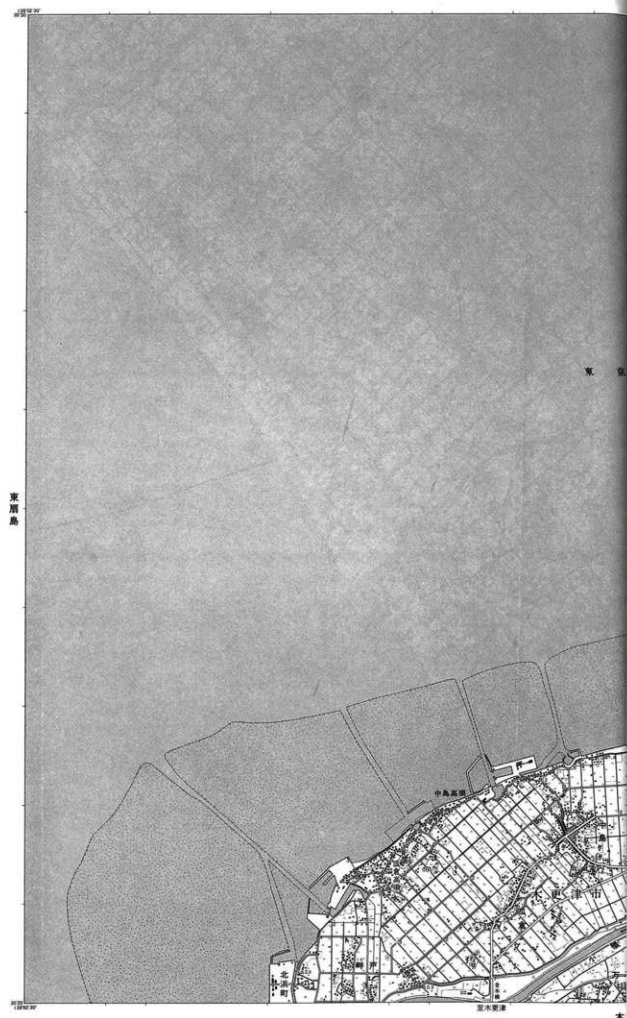
6

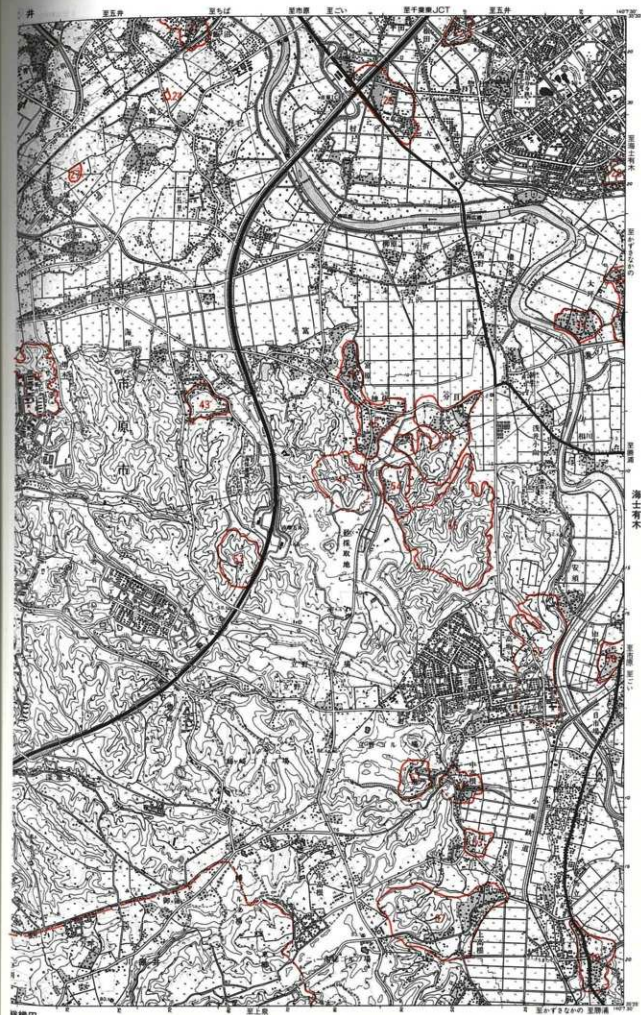
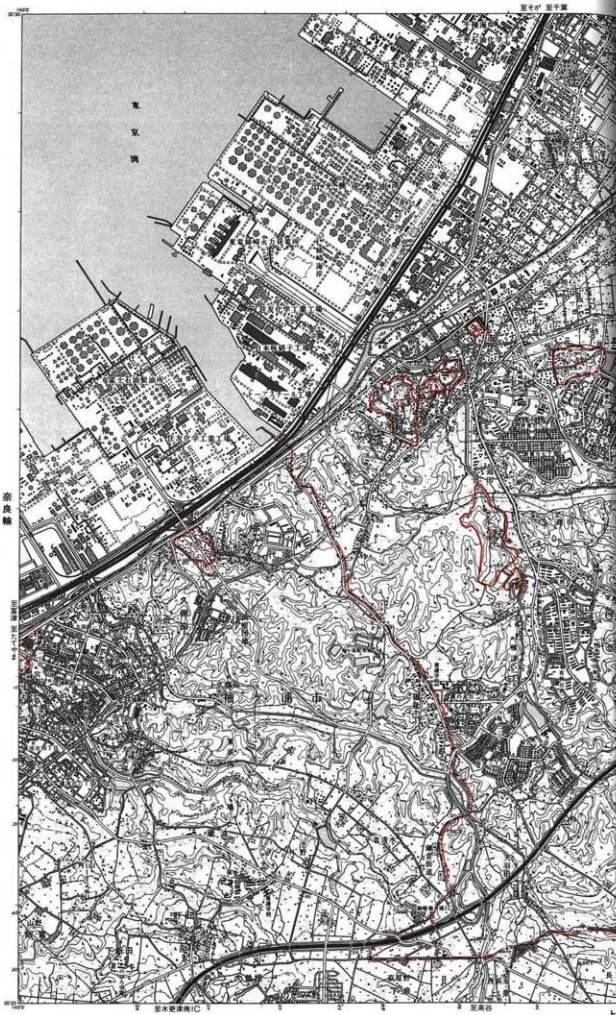


8

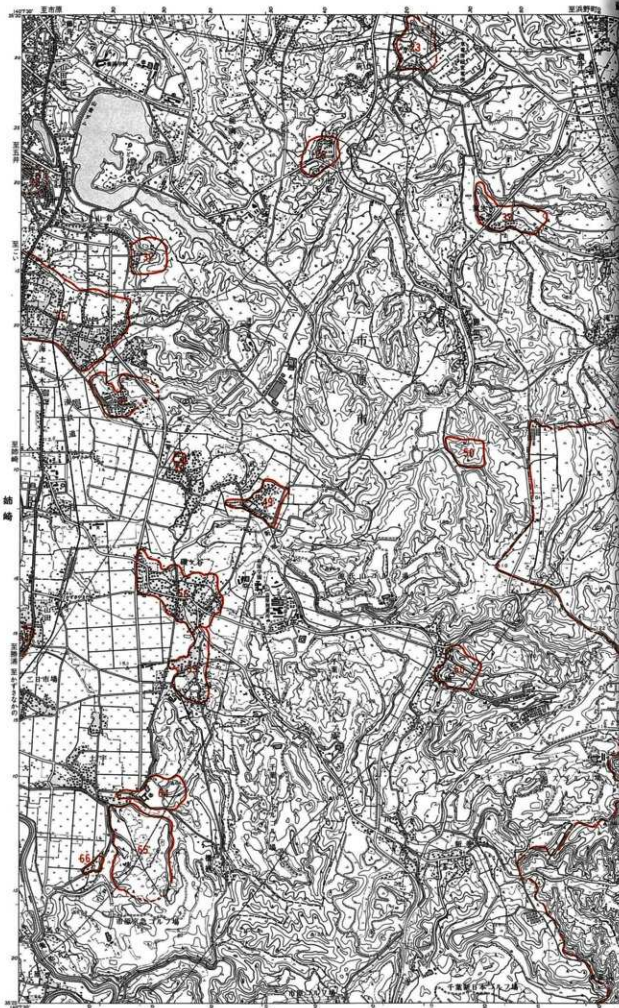


9. 奈良輪

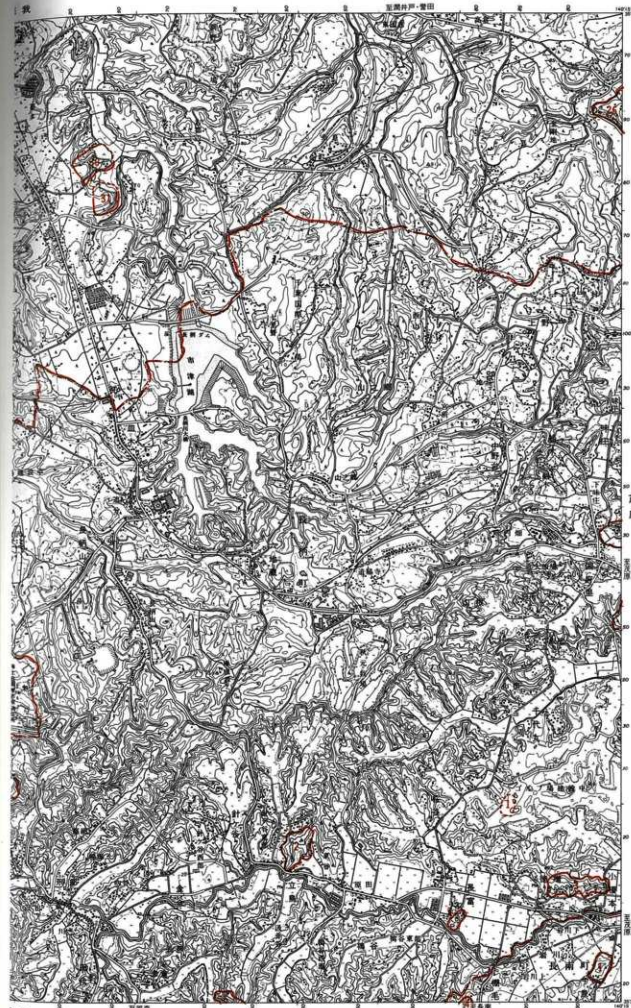


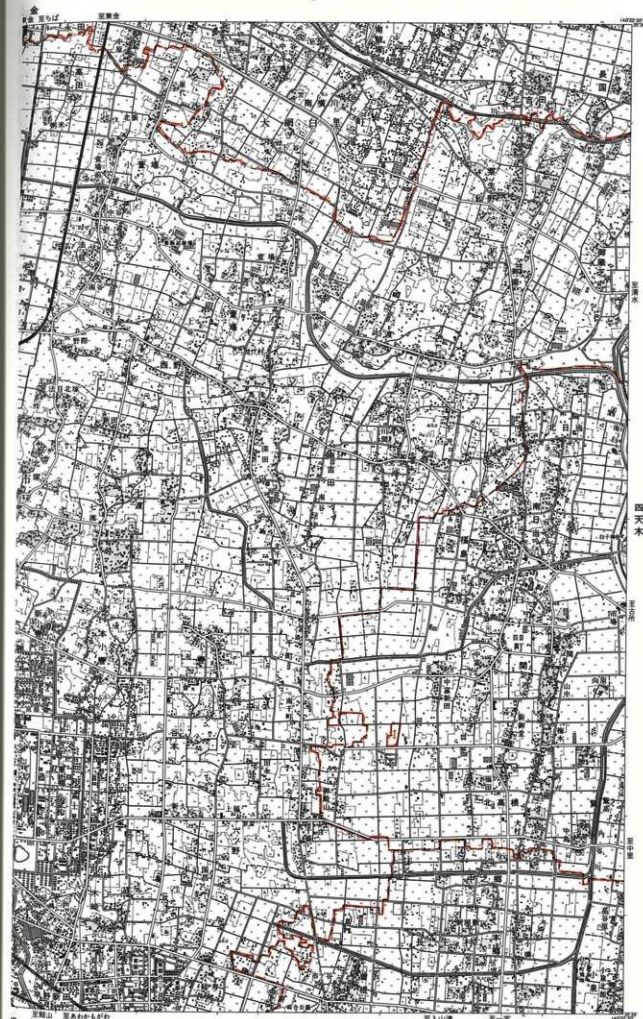
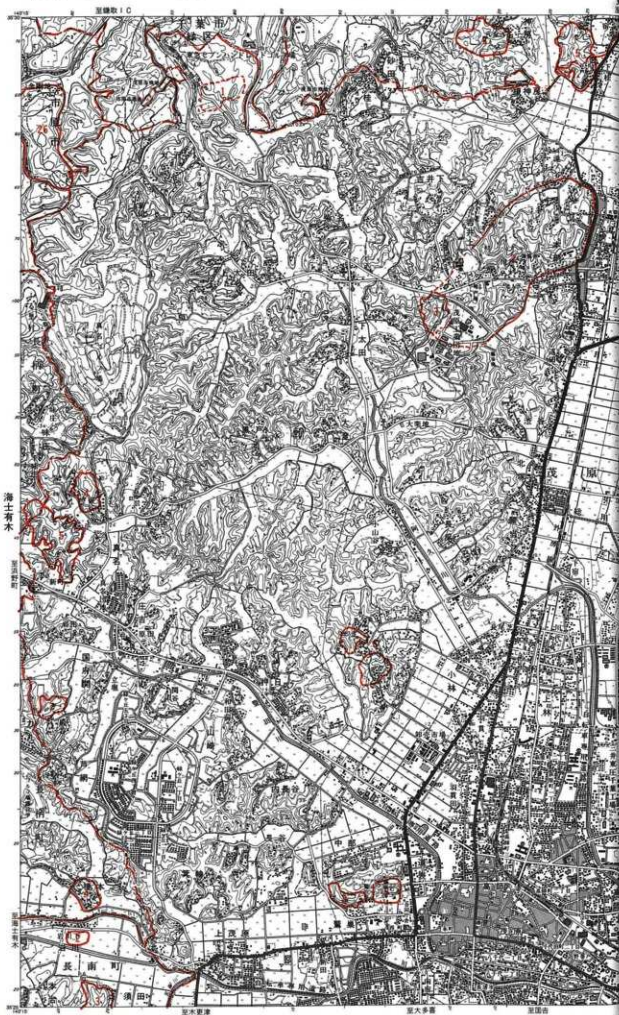


10

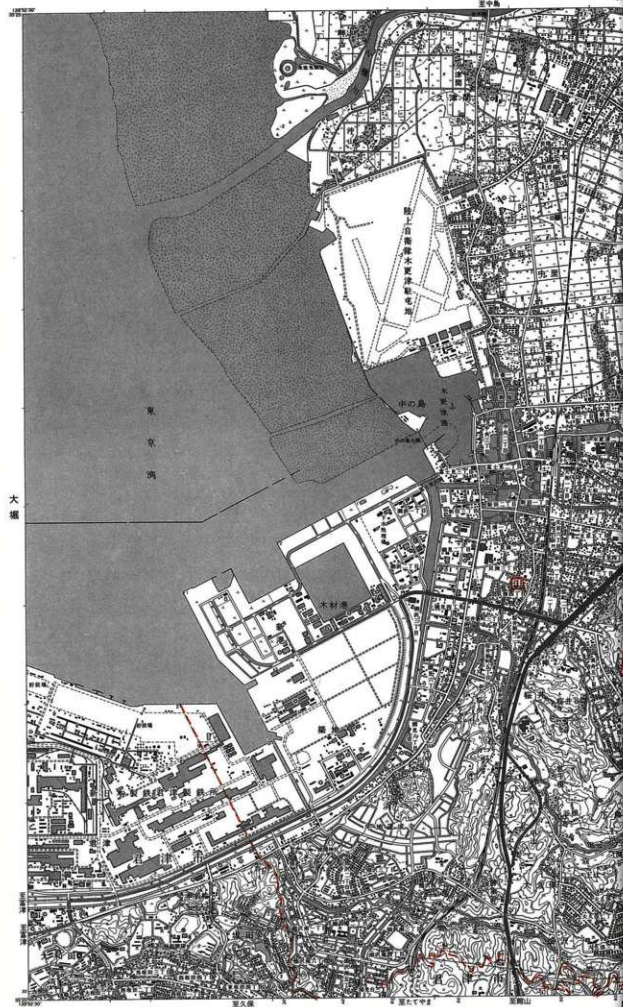


12





13. 木更津



9

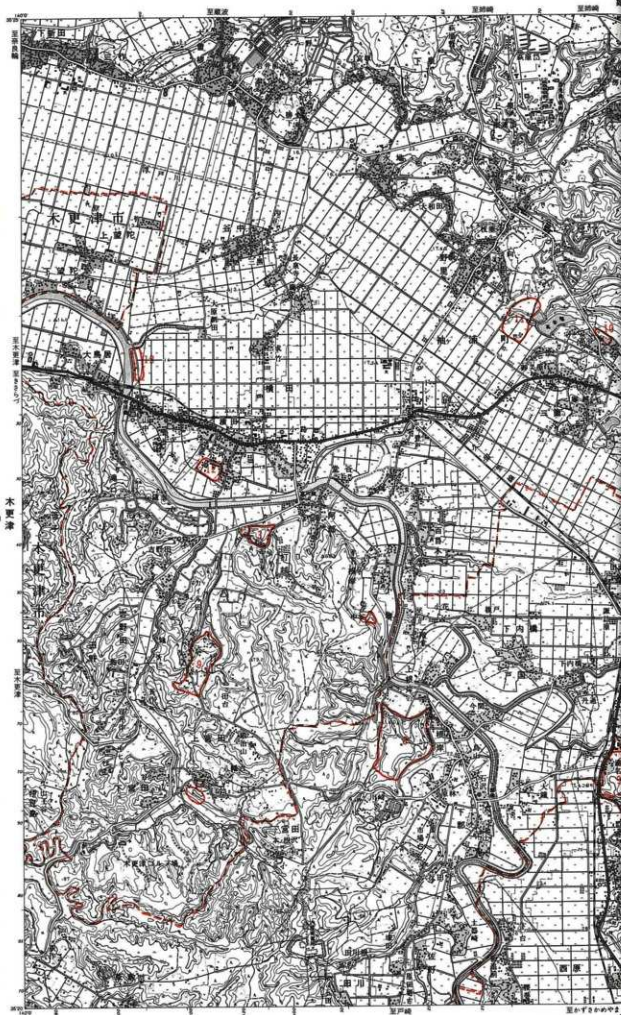


14

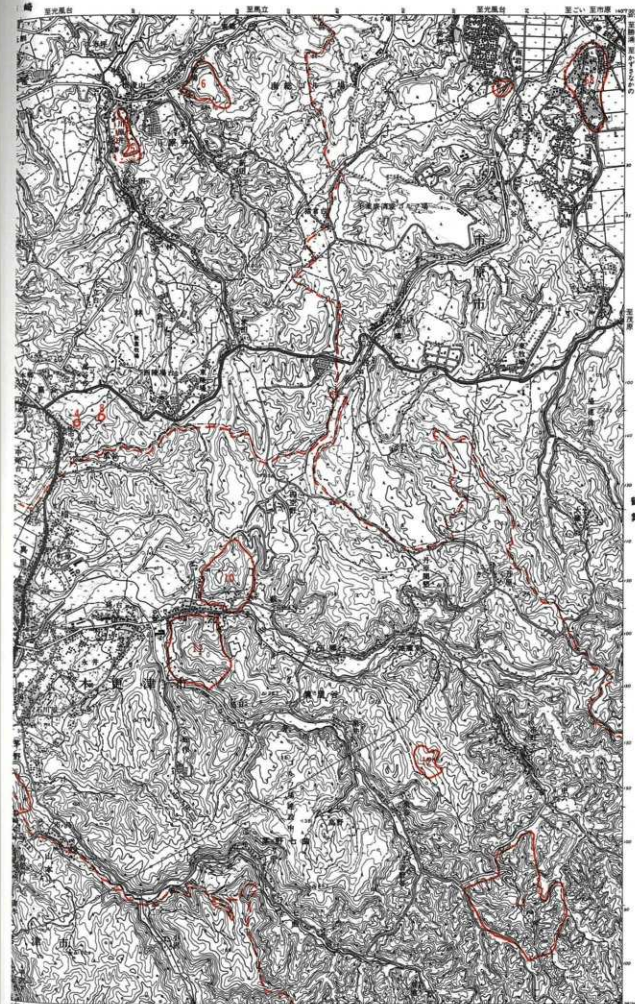
18

14. 上総横田

13



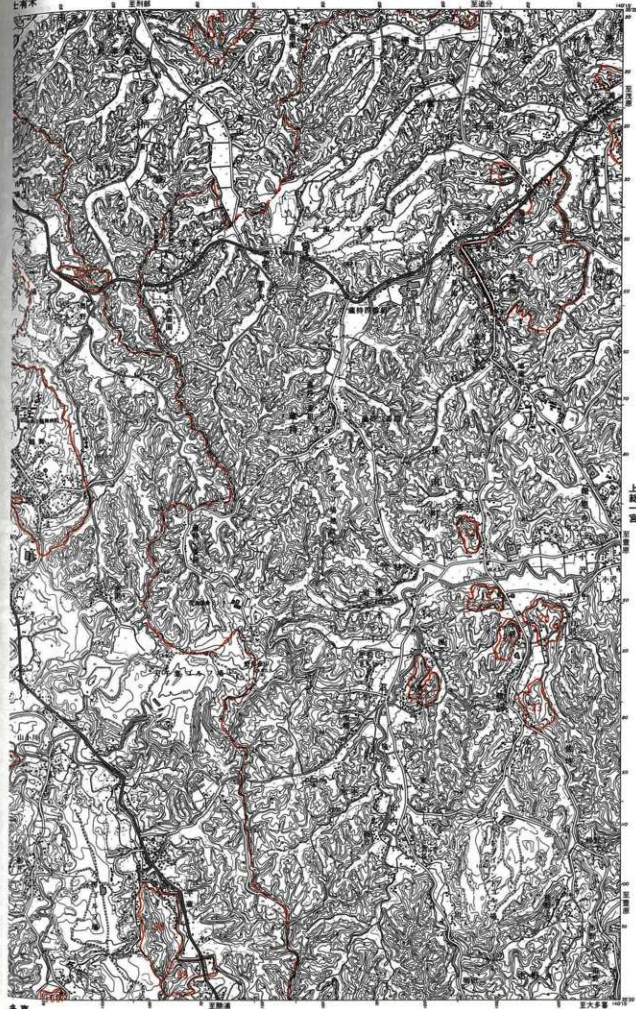
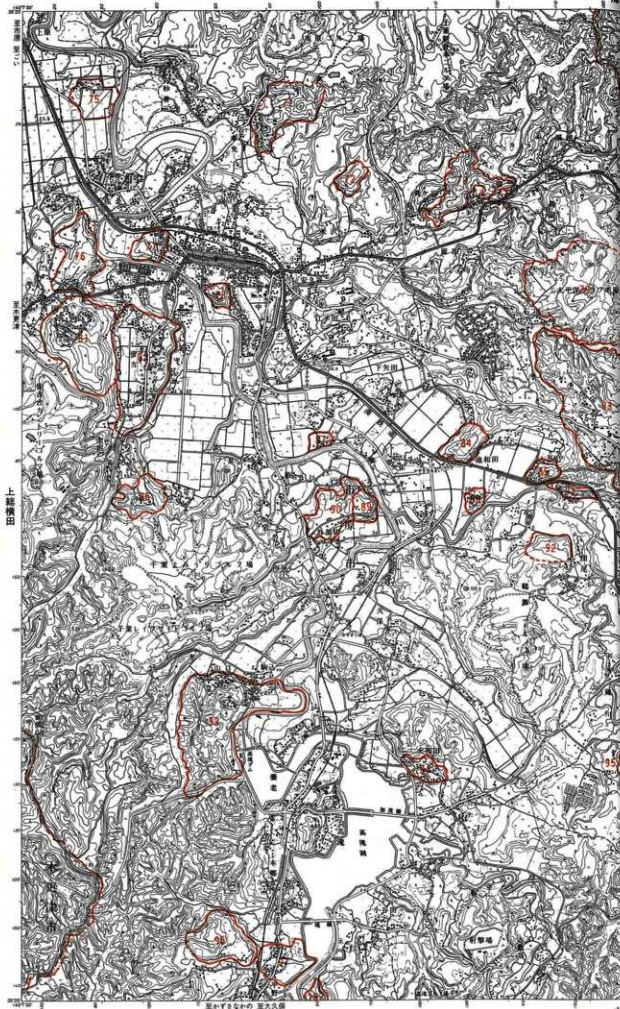
10



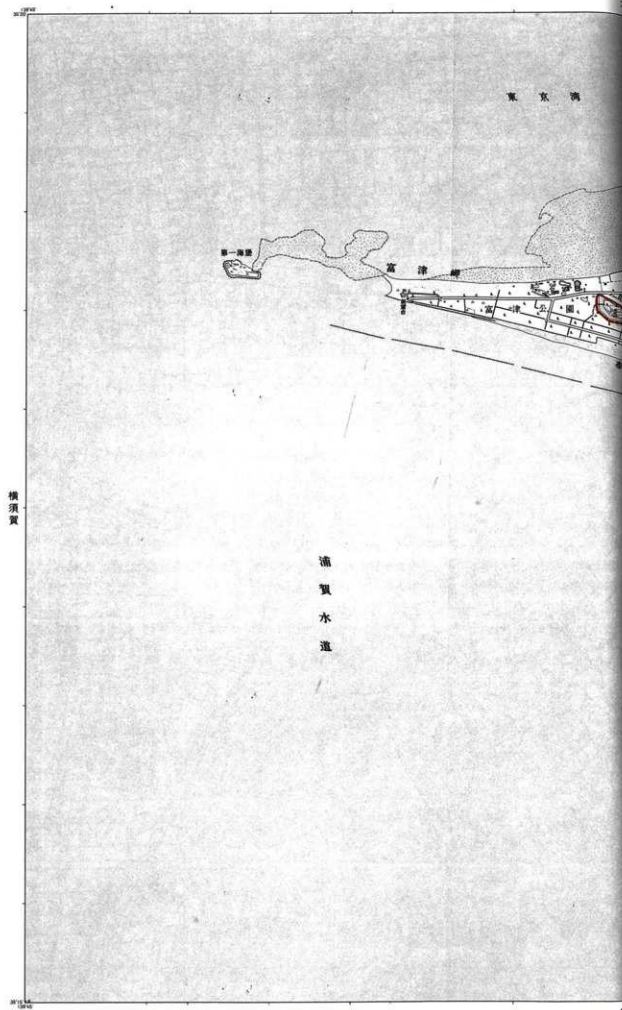
15

19

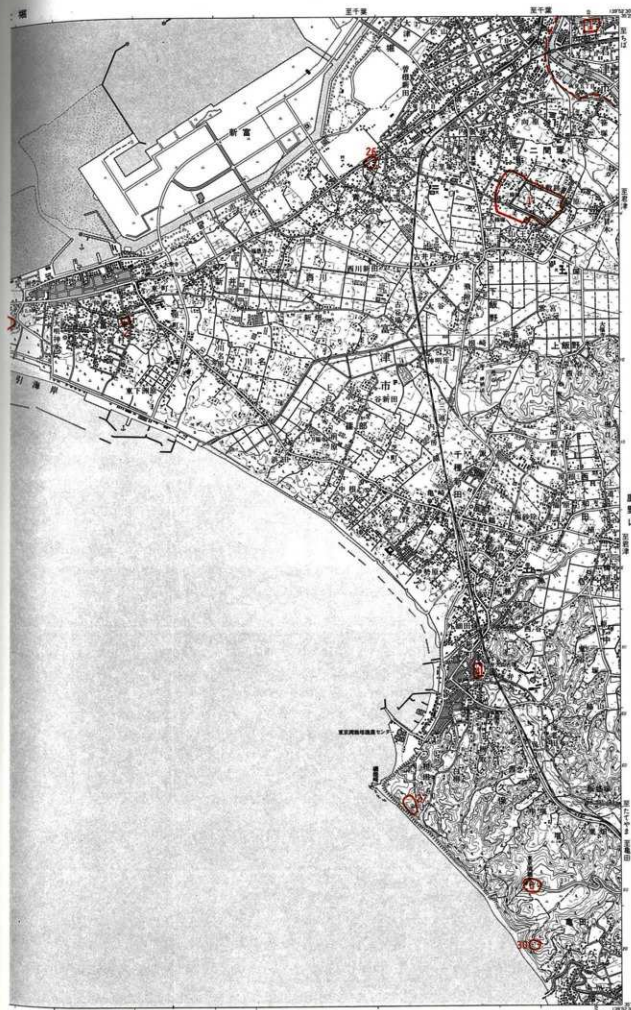




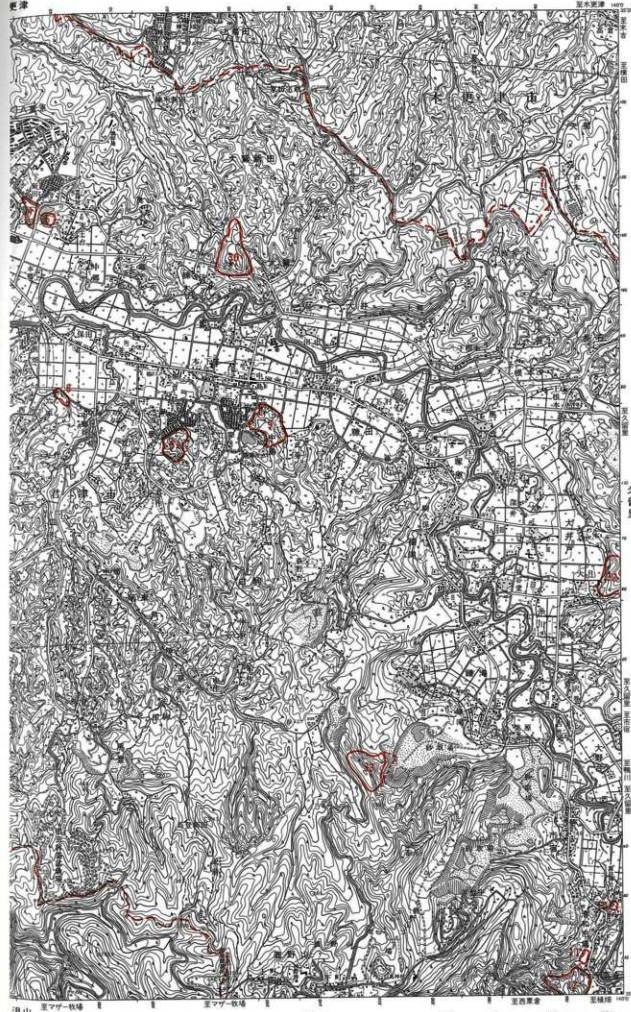
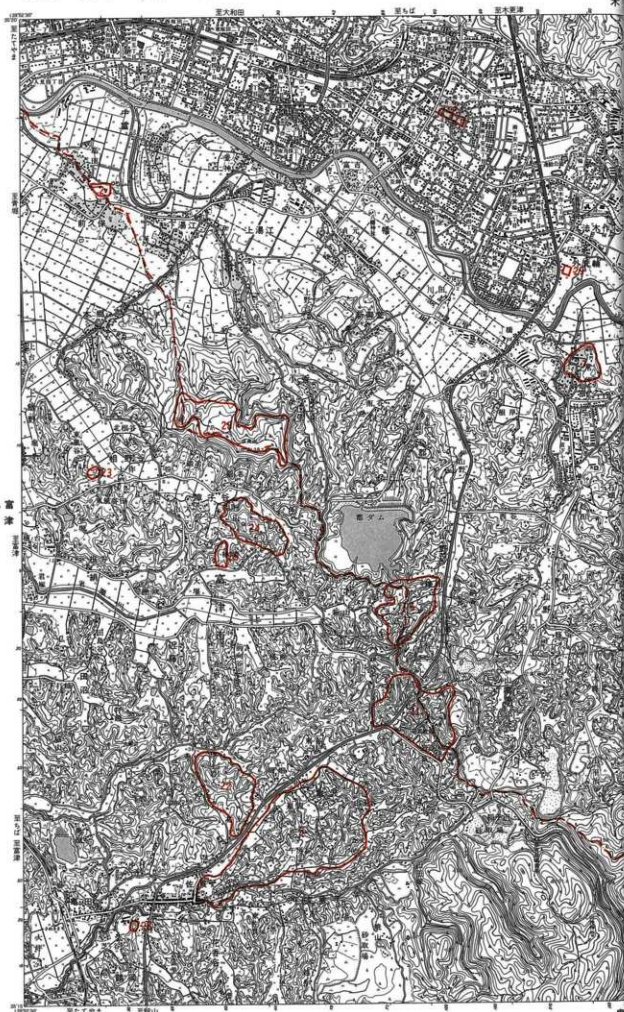
17. 富 津

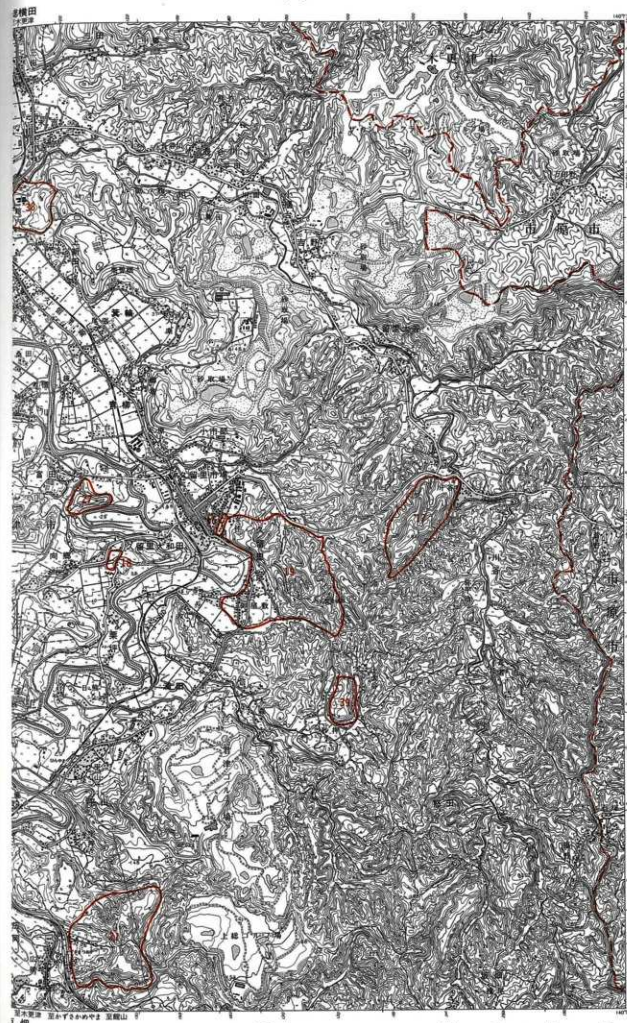
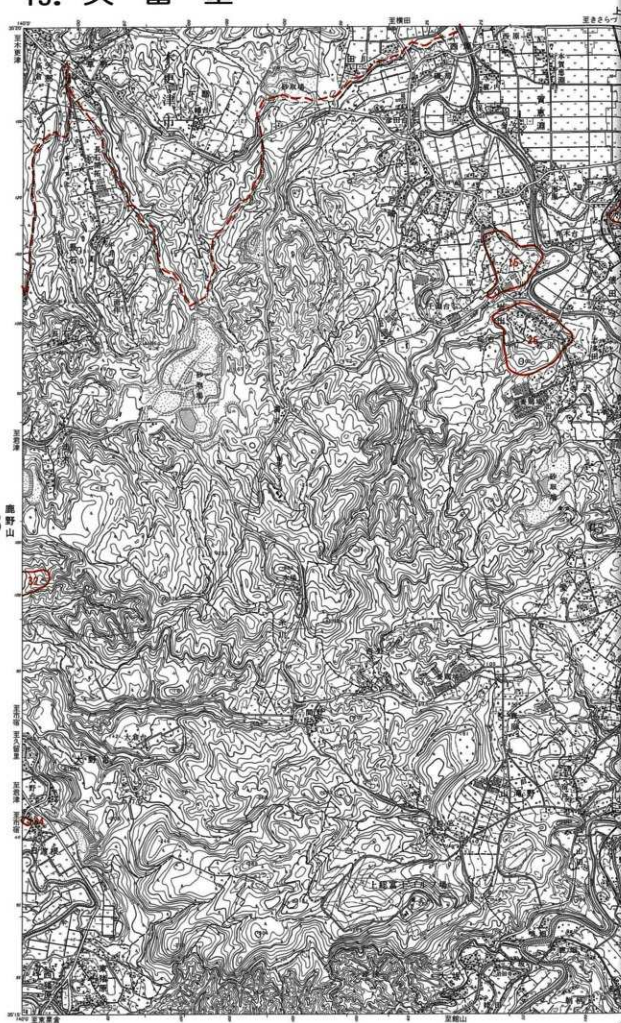


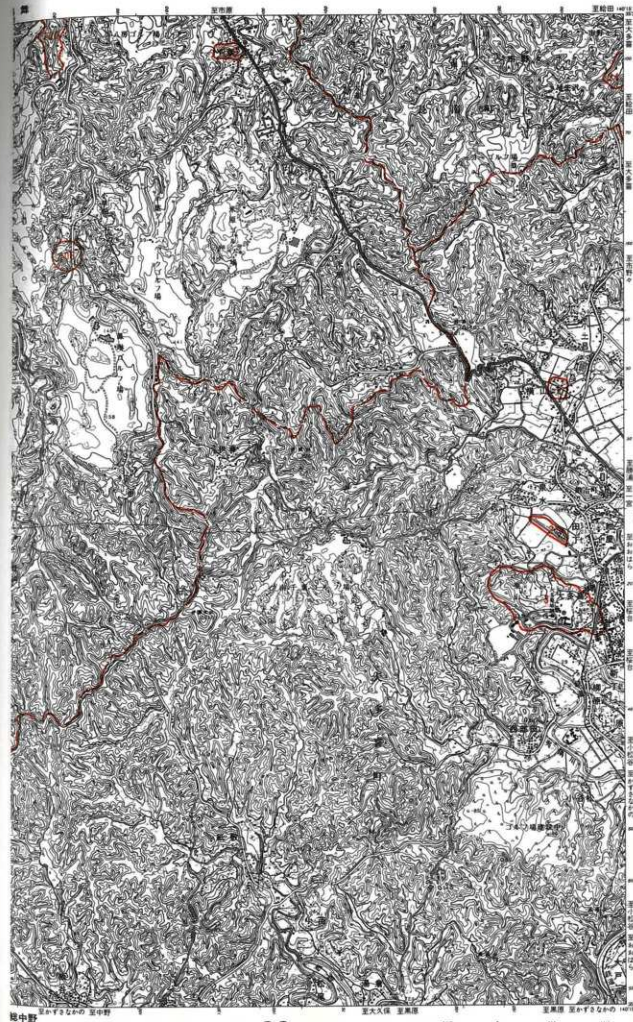
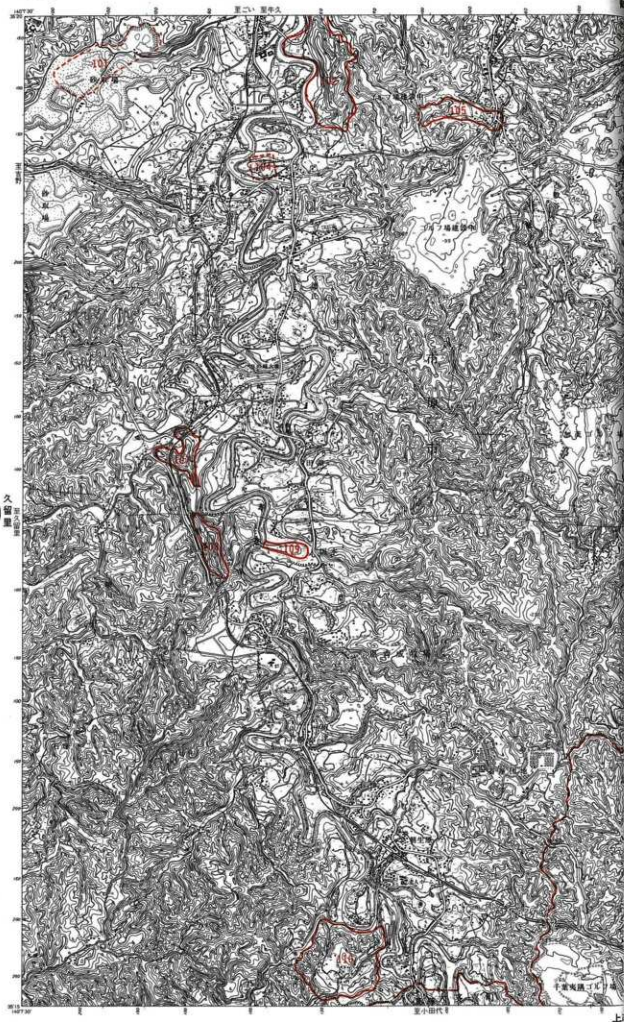
横須賀

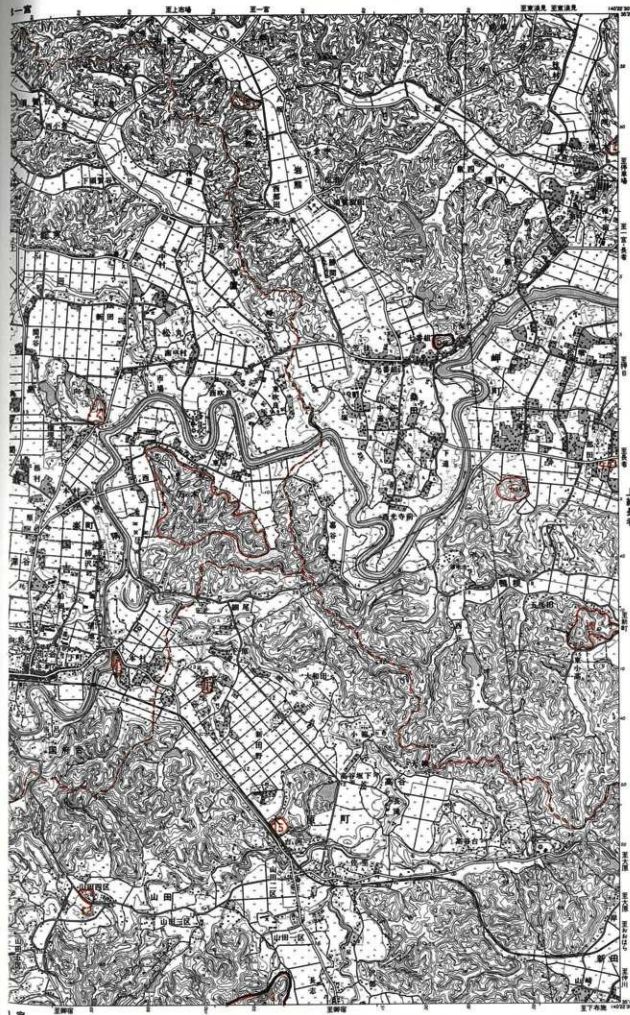


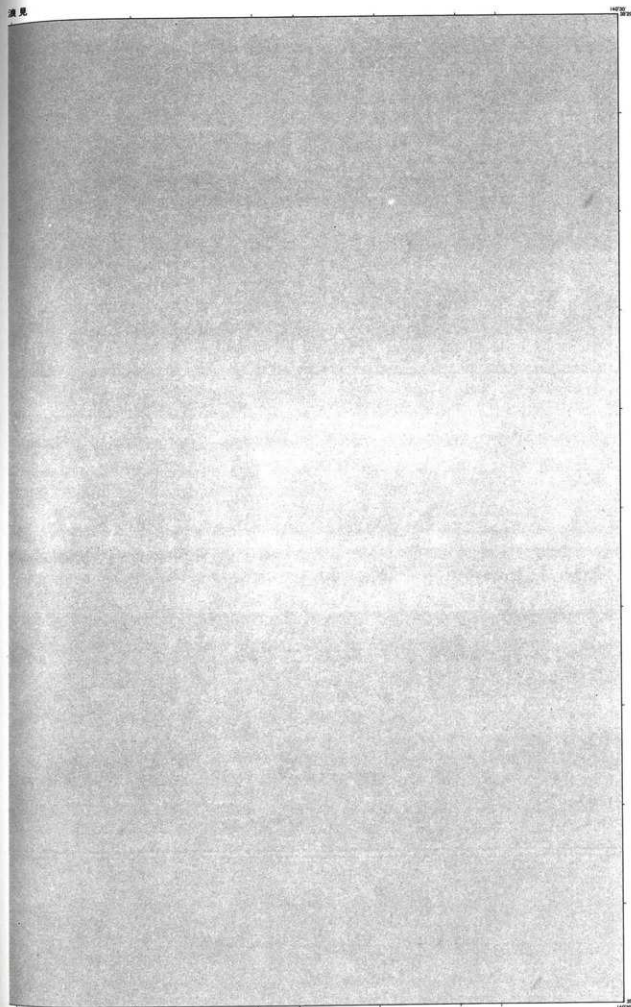
18

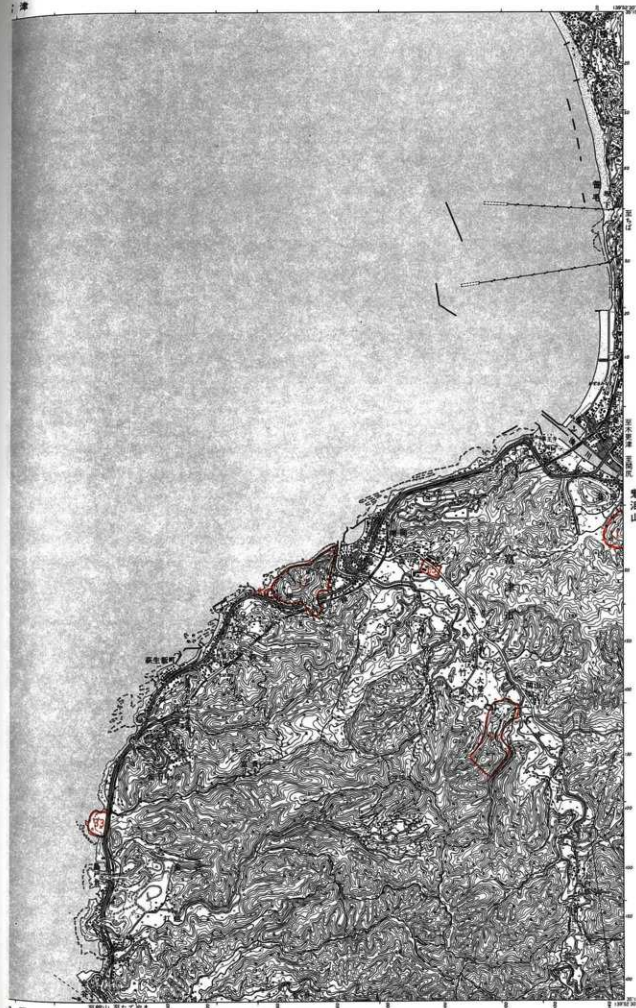
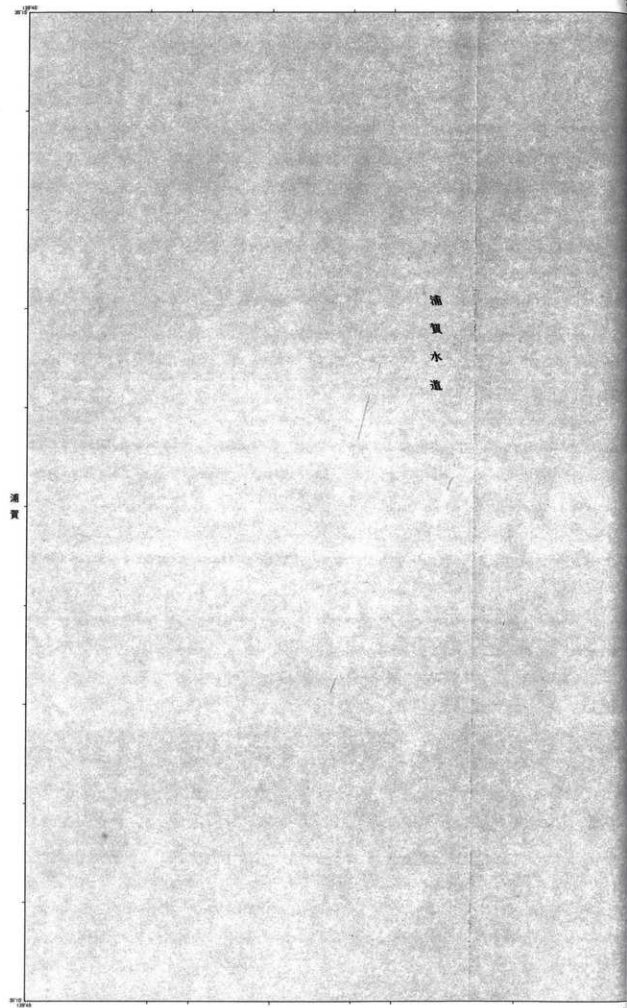






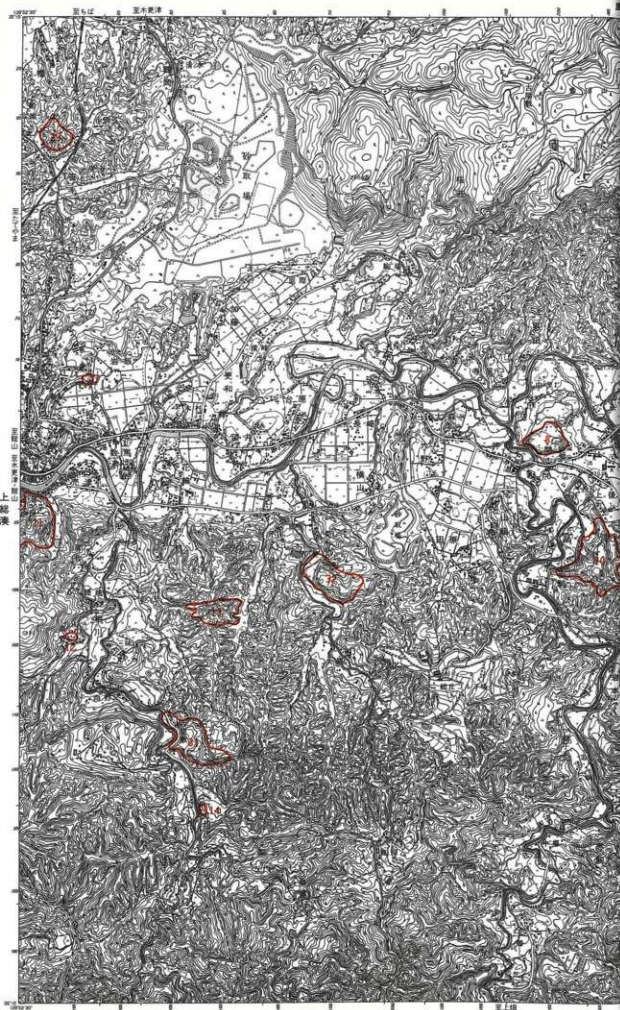




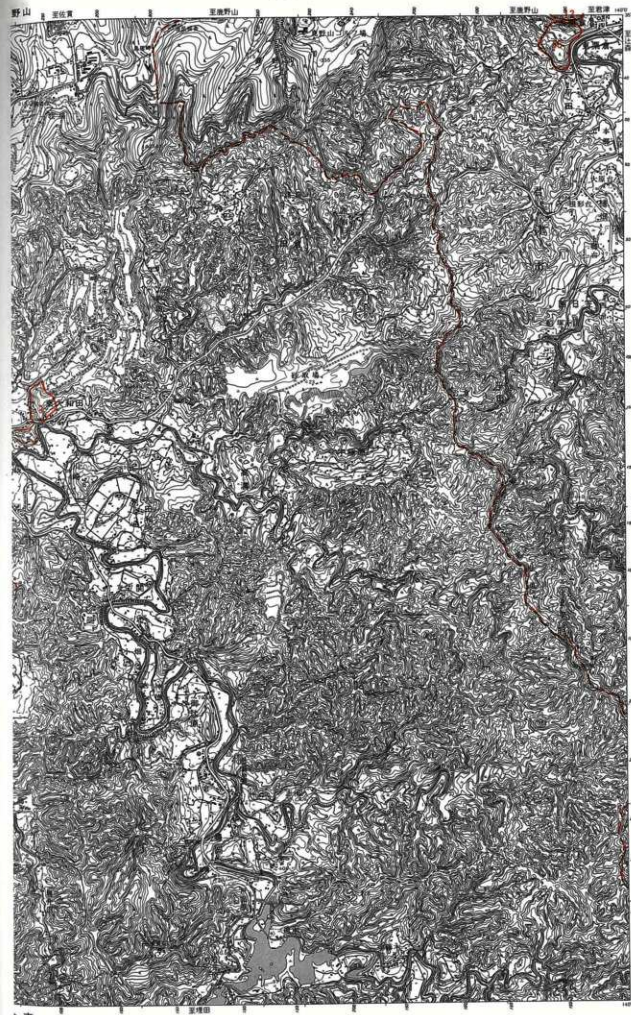


24. 鬼 洄 山

23

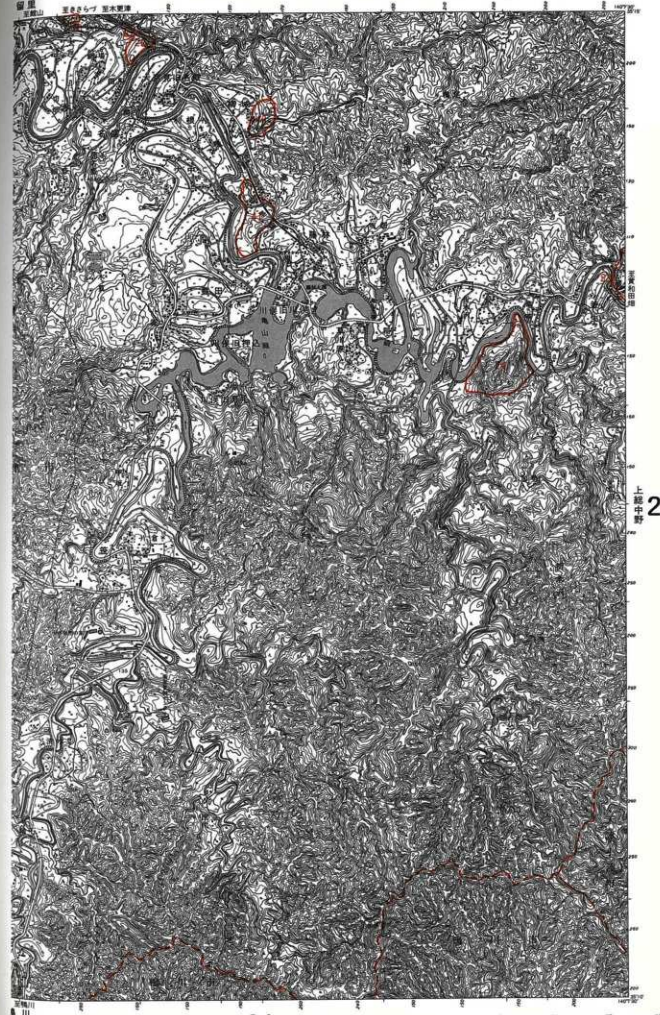
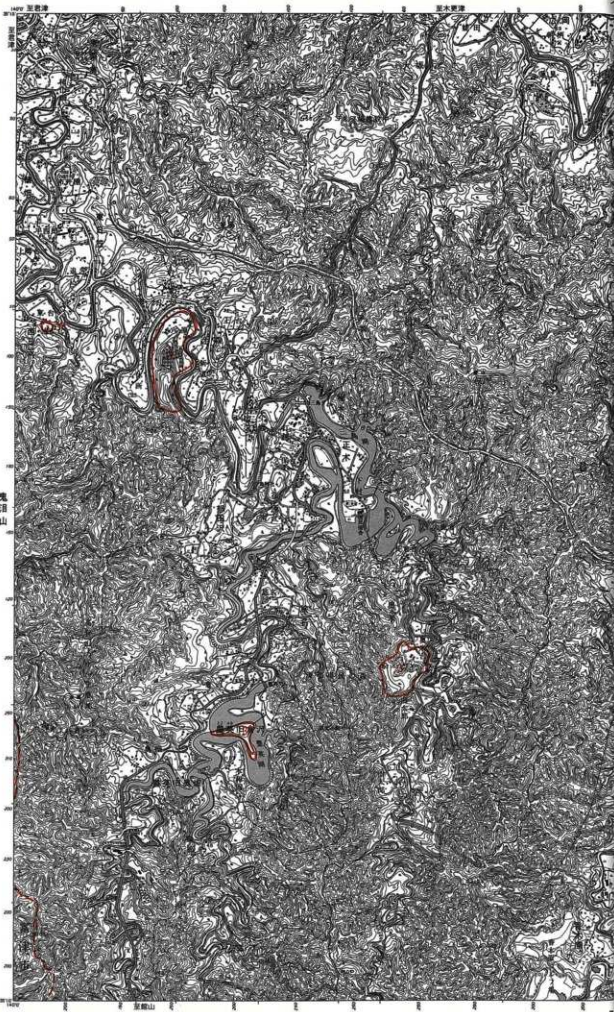


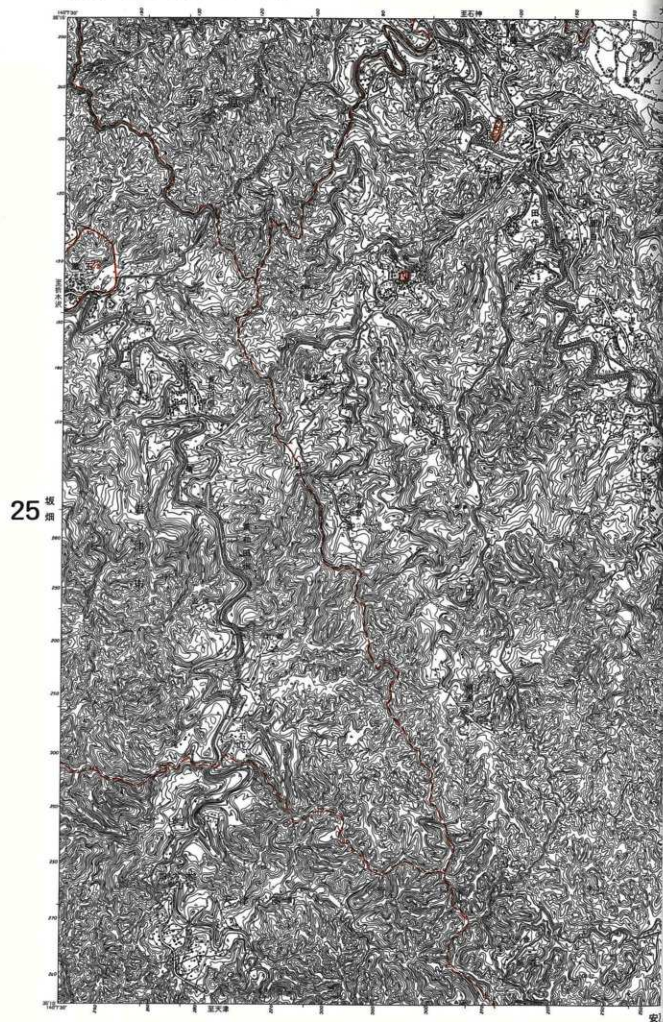
18



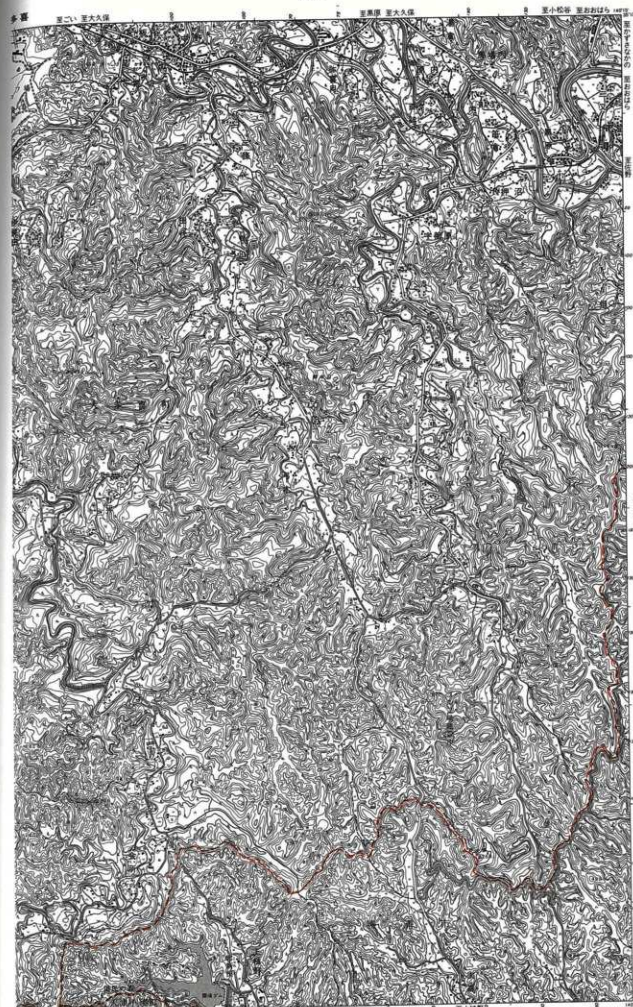
25

30

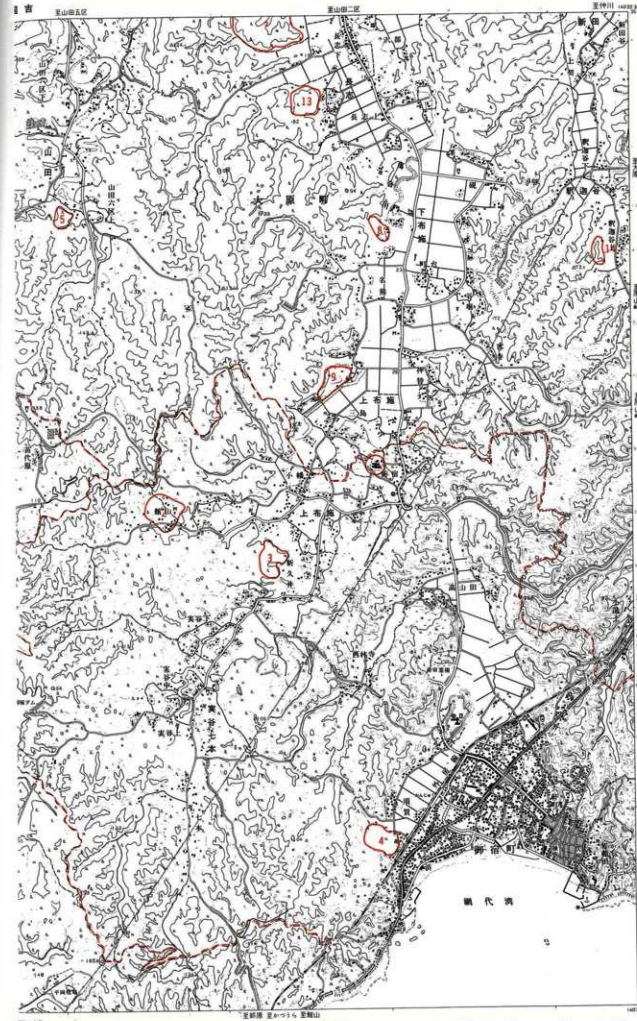
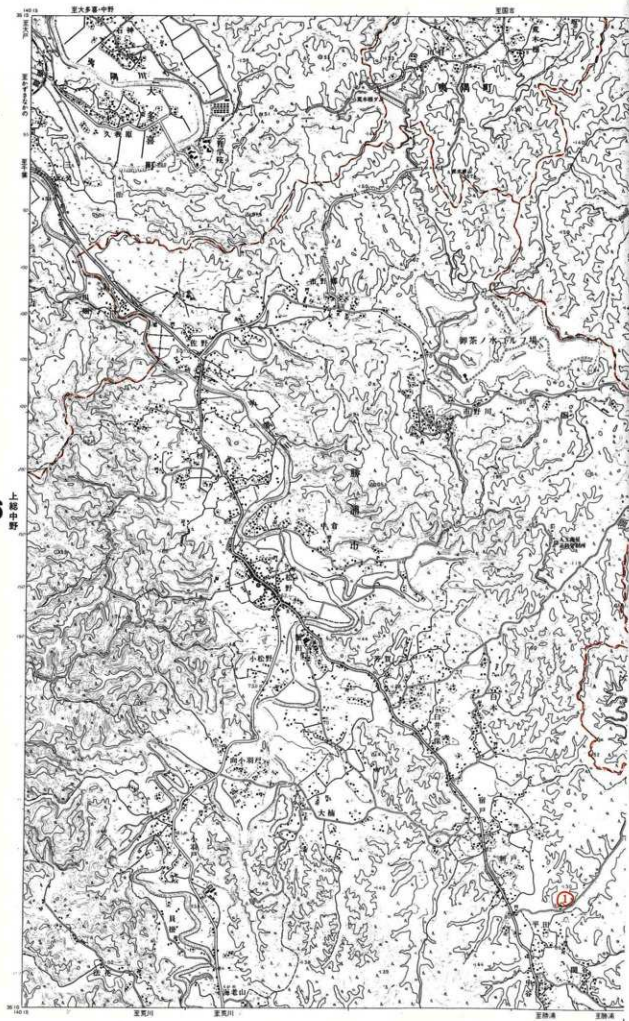


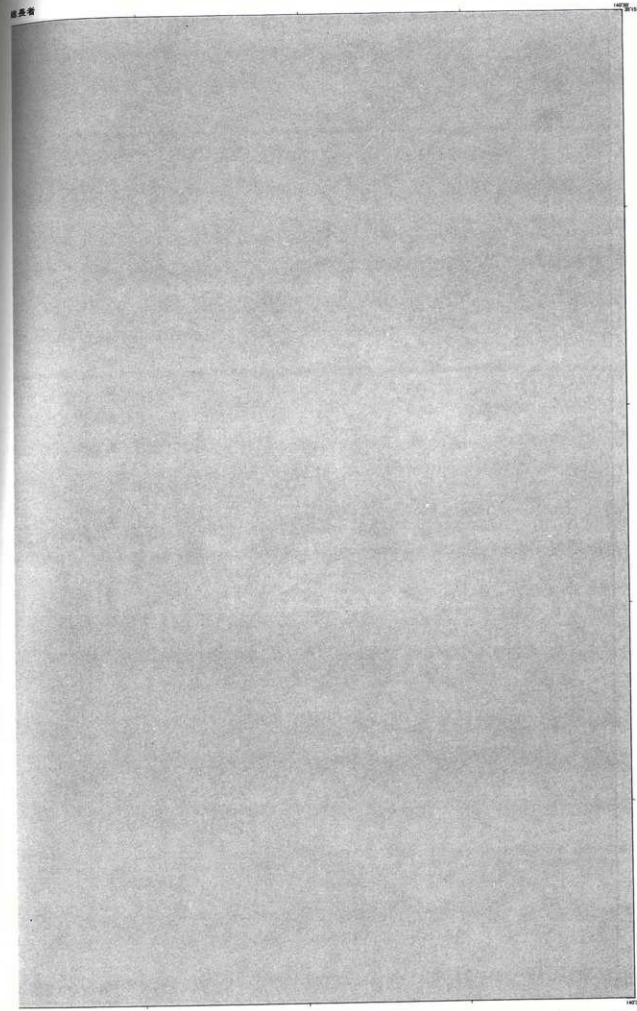
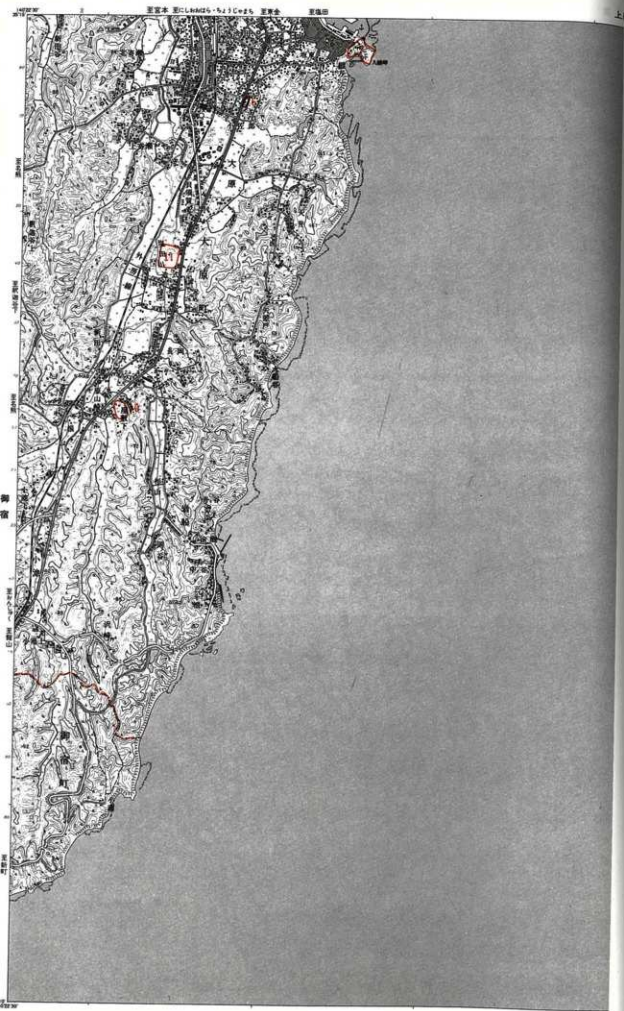


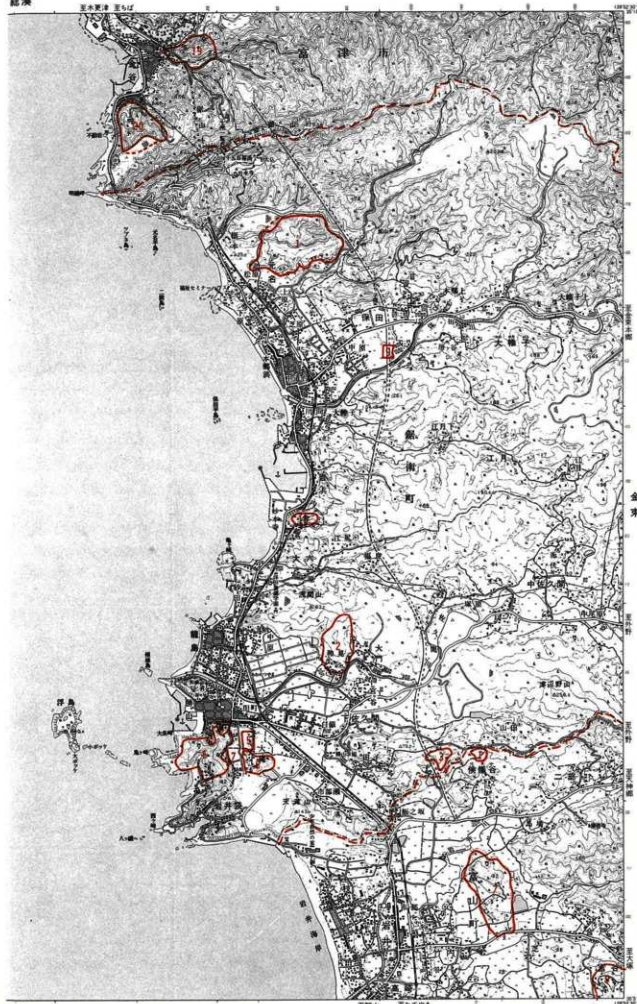
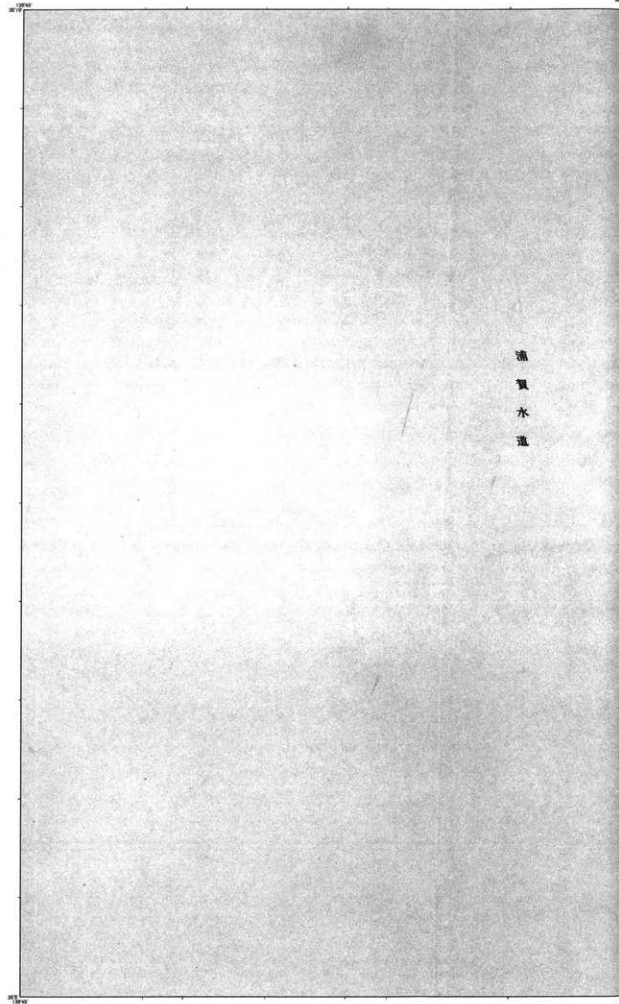
25

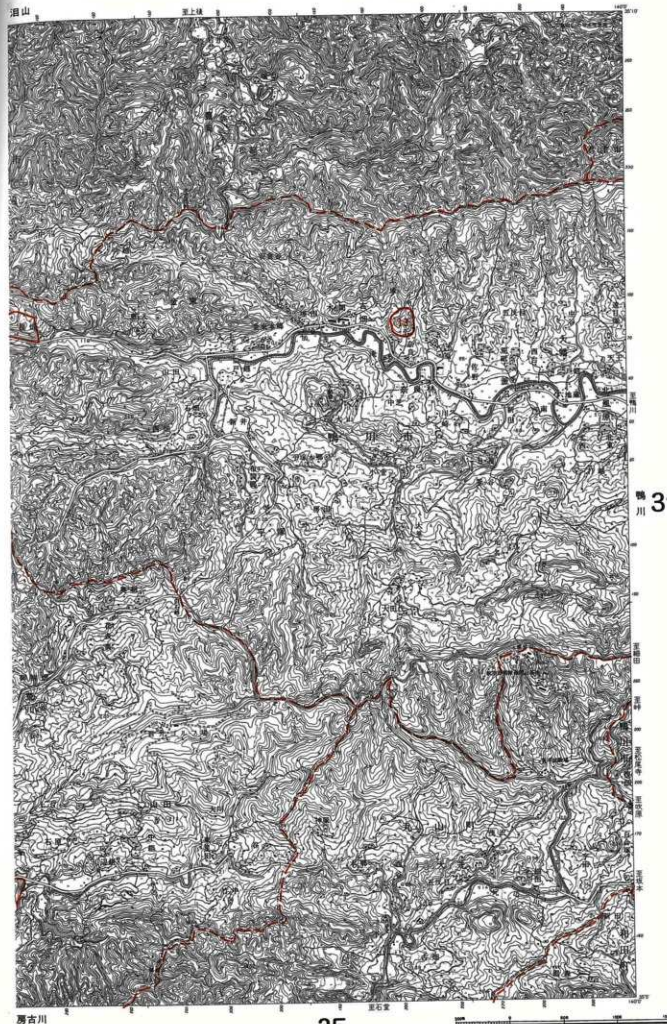
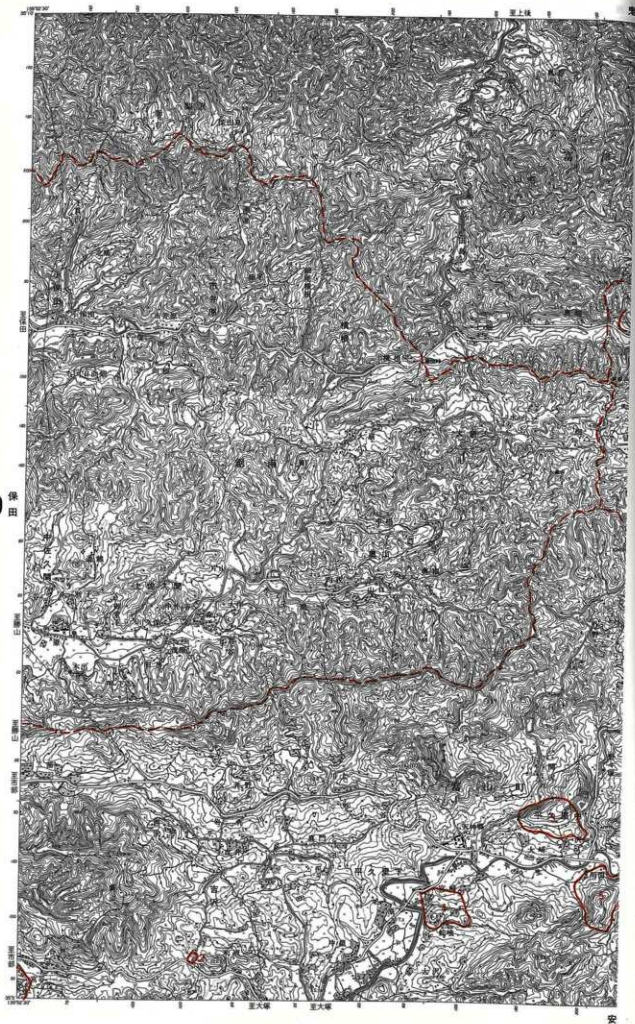


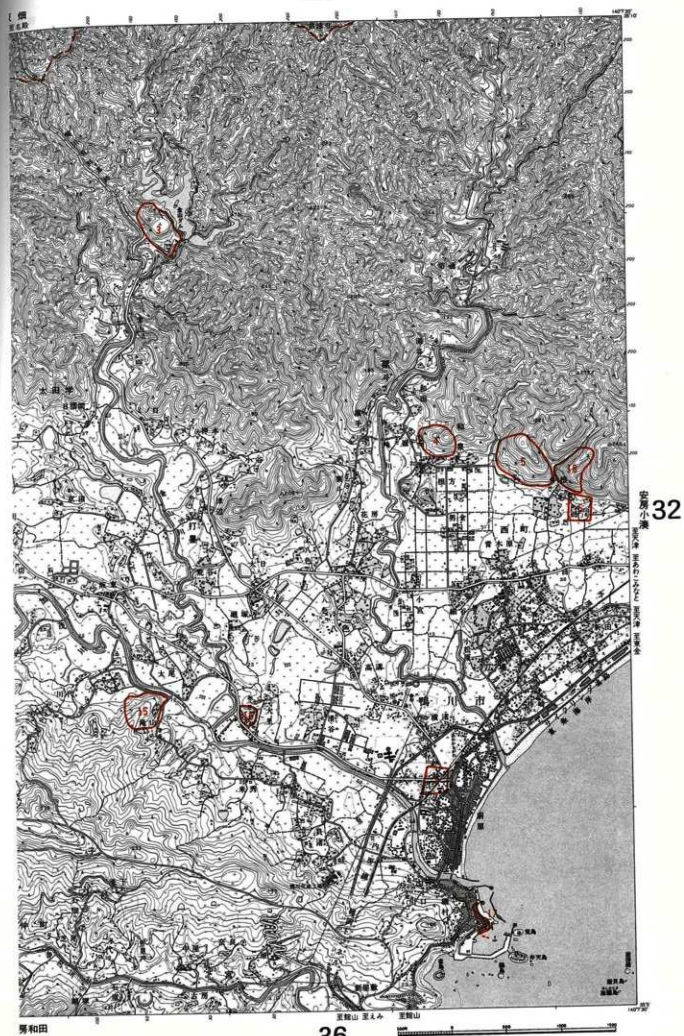
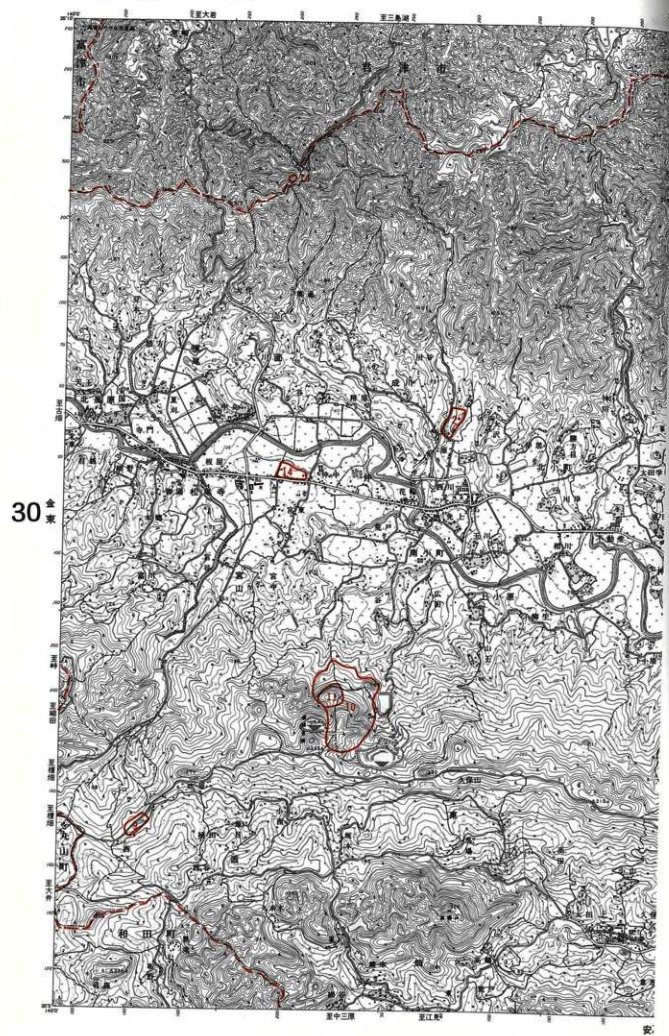
27





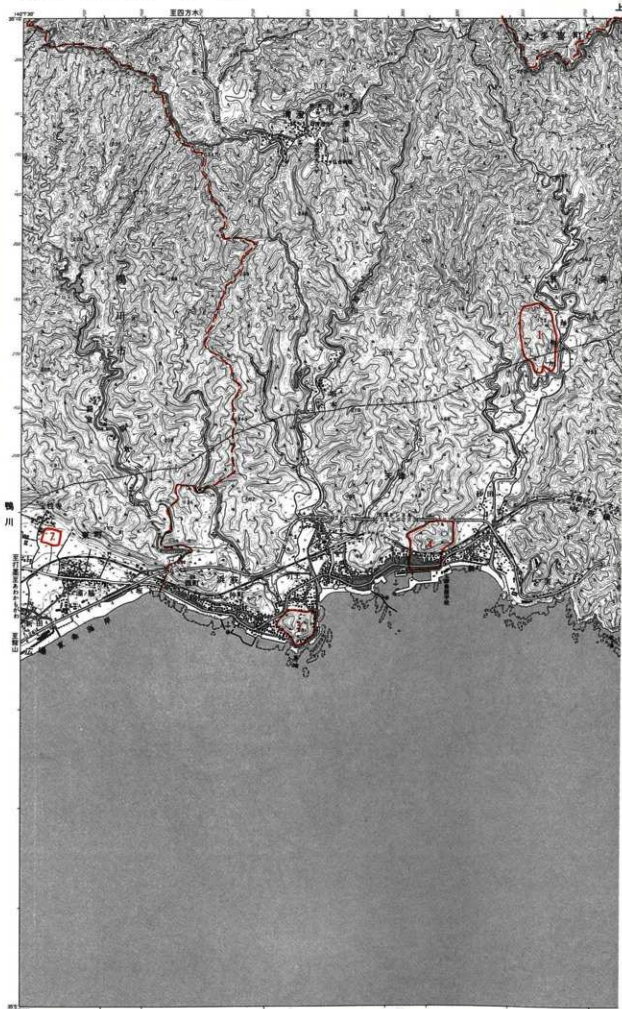






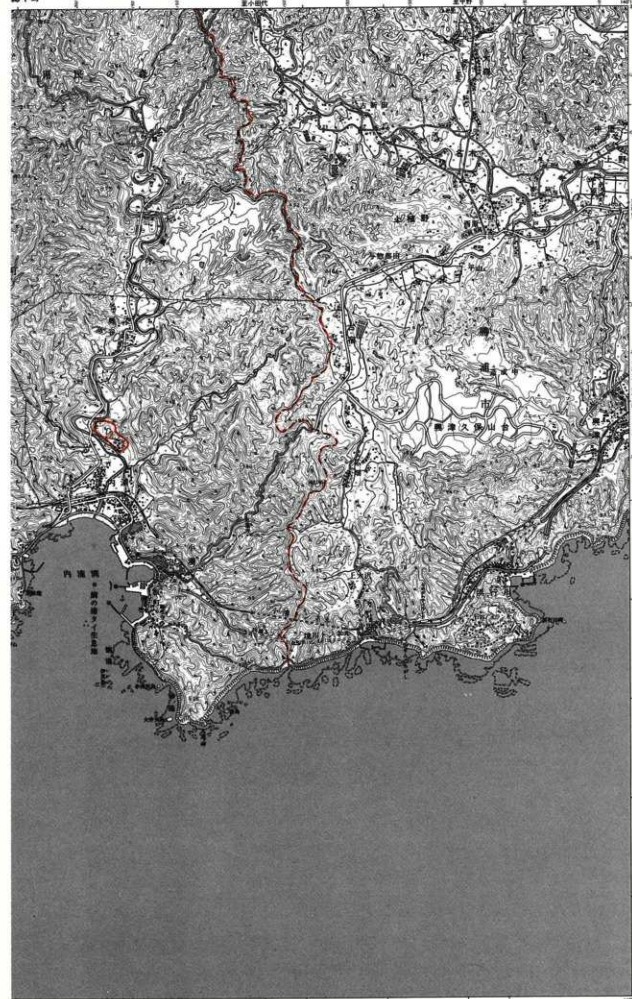
32. 安房小湊

31



26

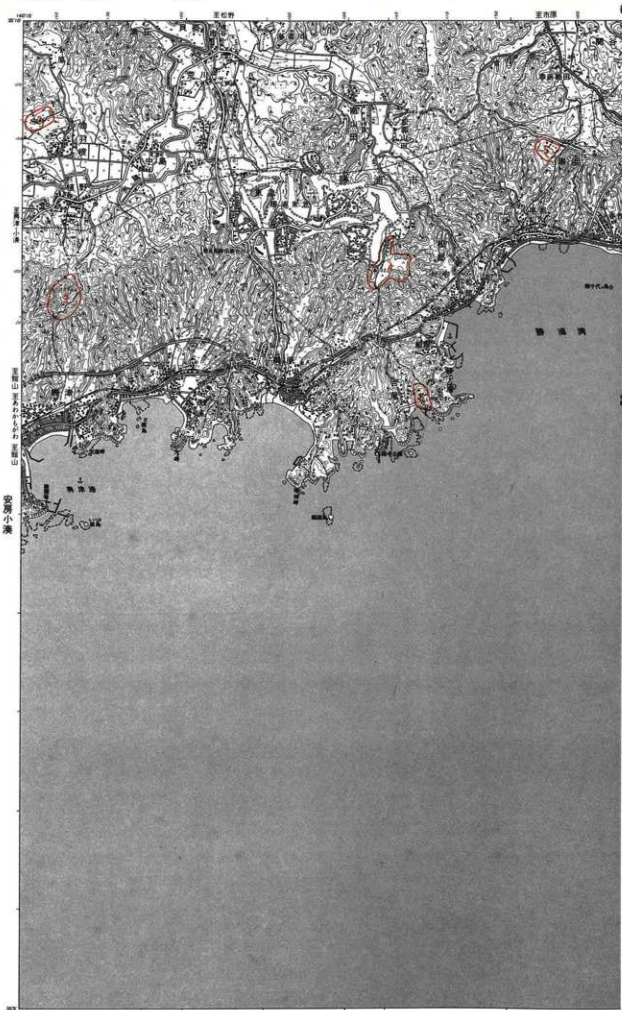
野中



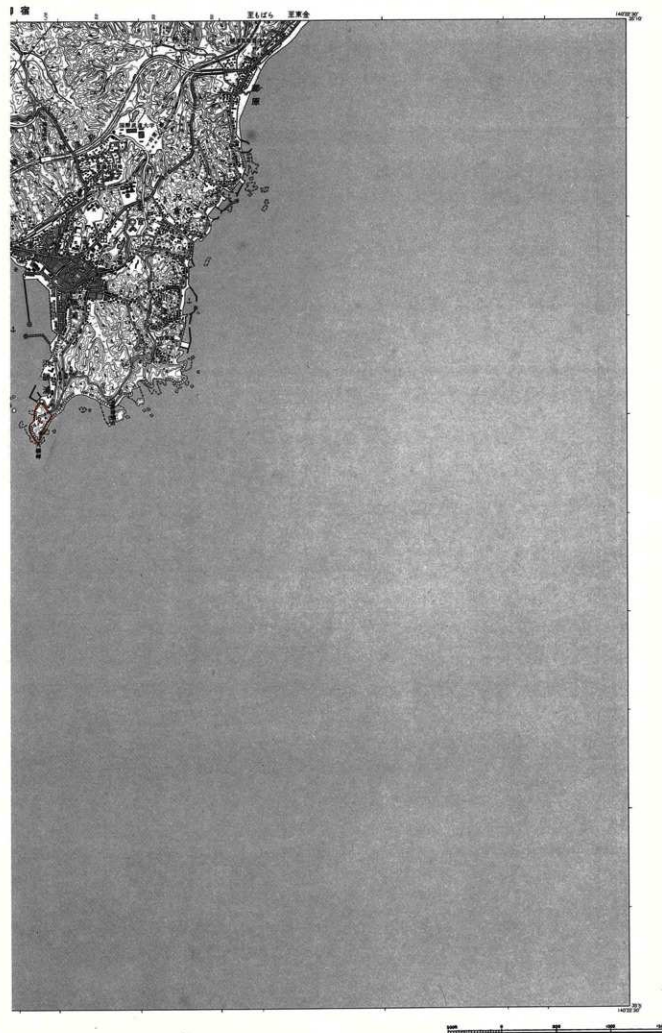
33

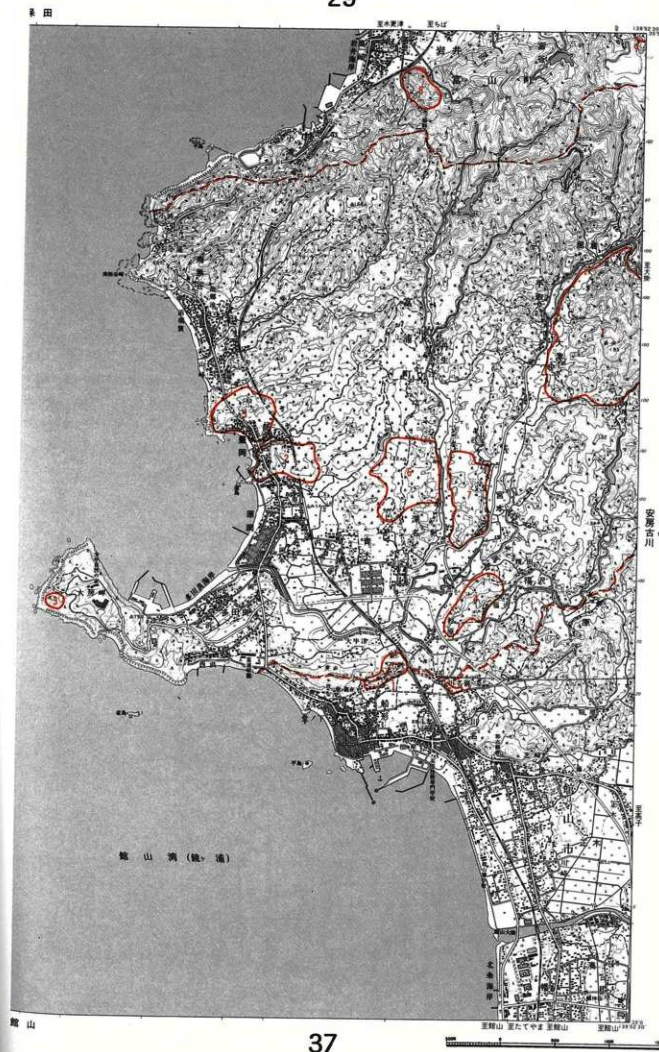
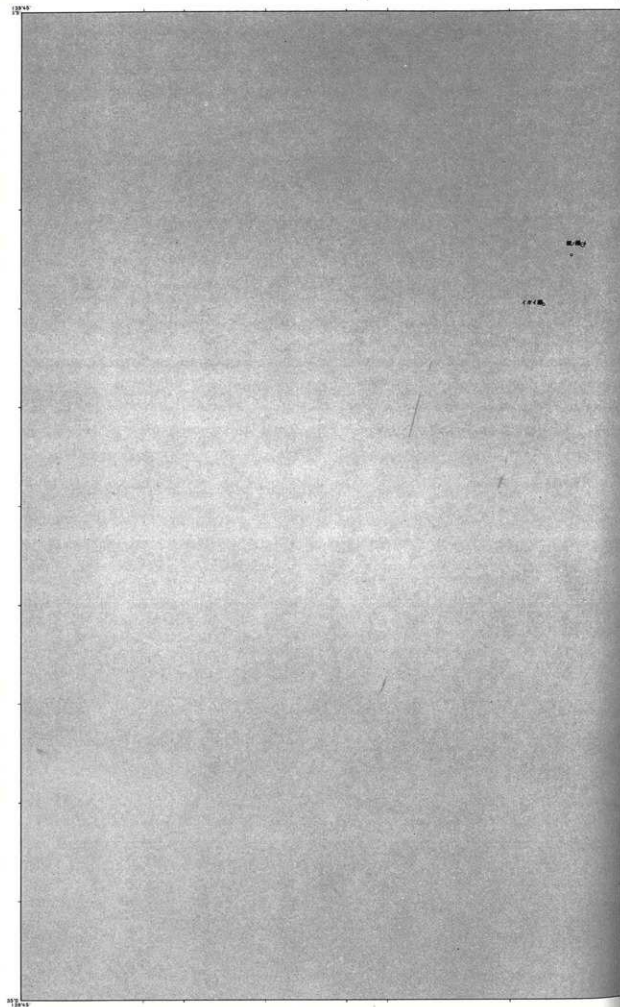
33. 勝 浦

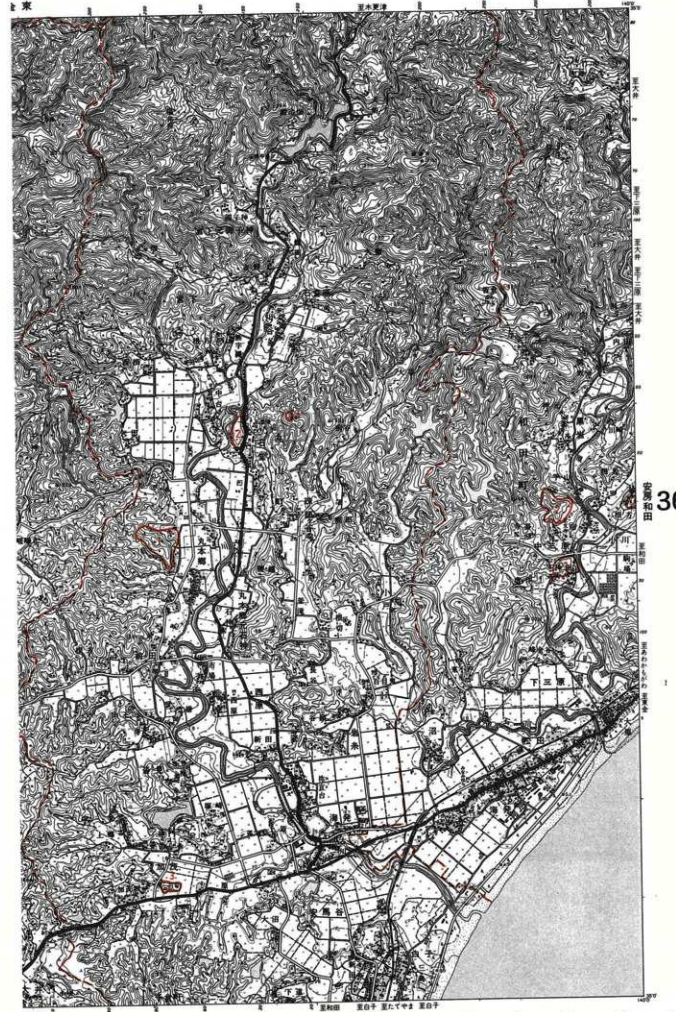
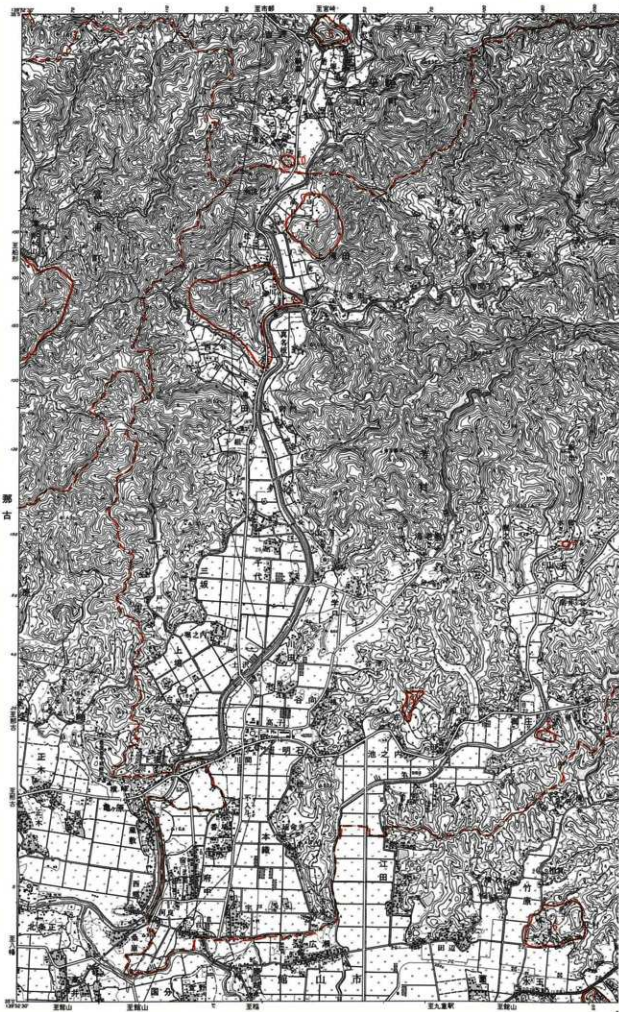
32



27

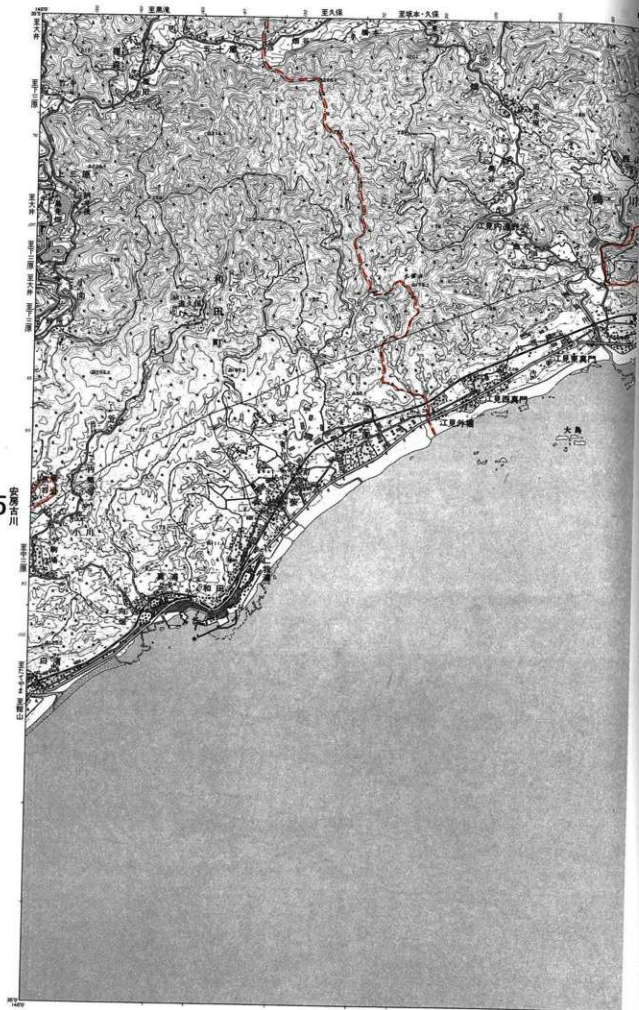




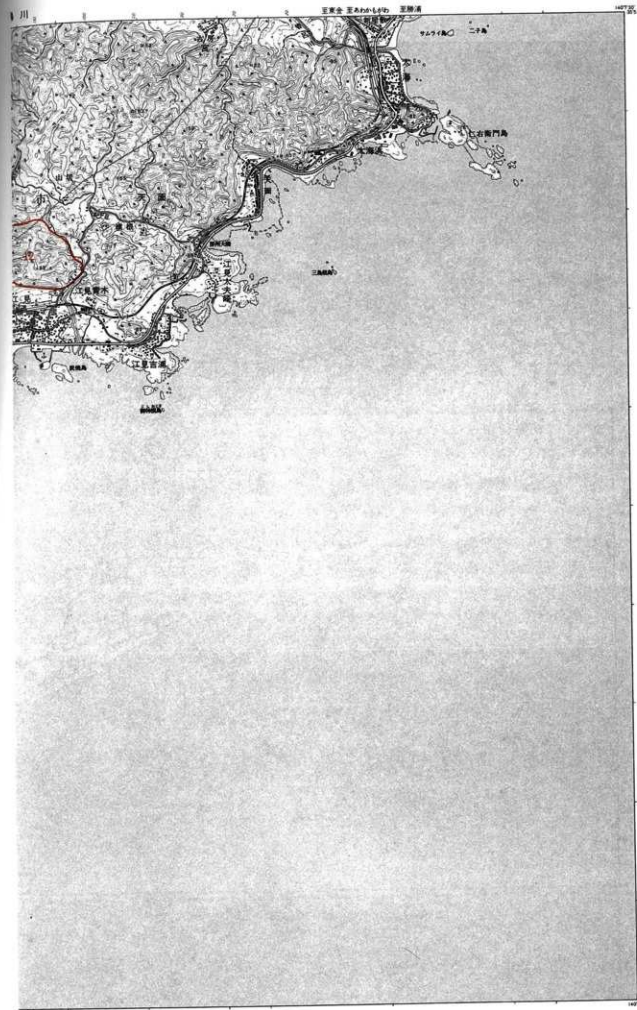


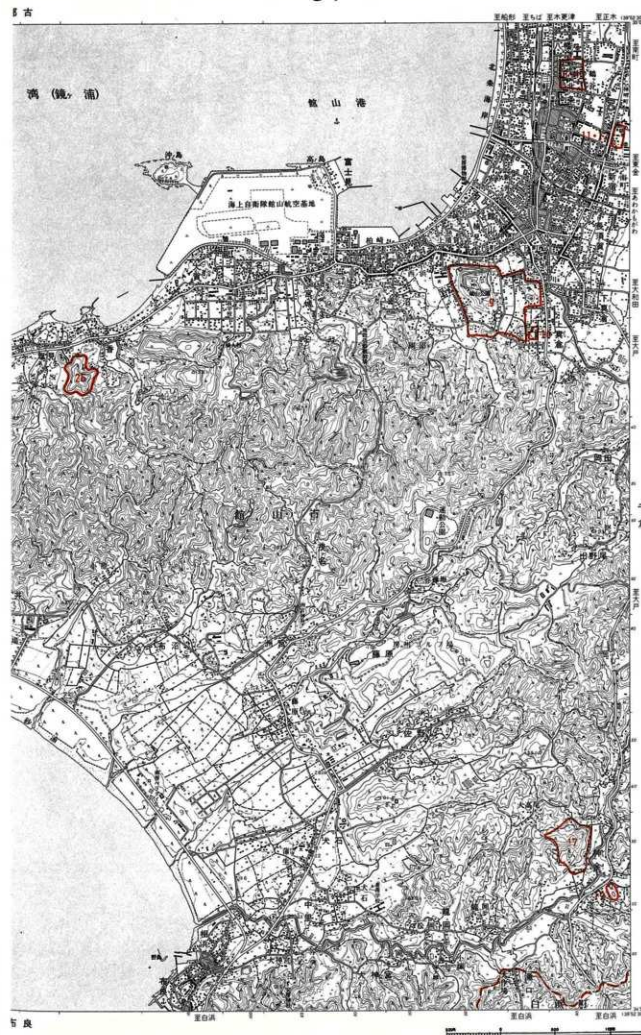
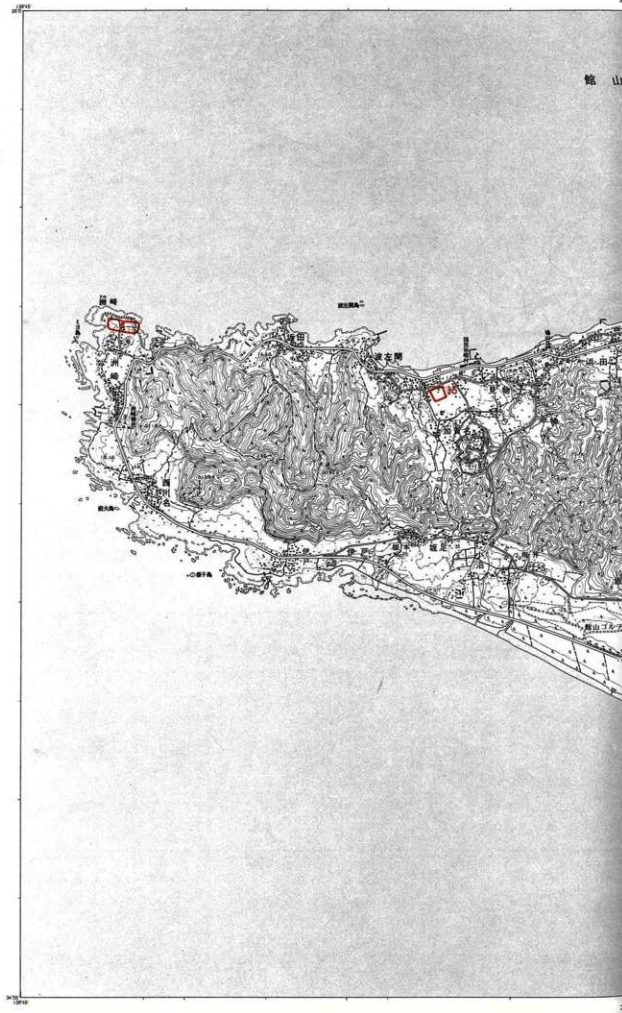
36. 安房和田

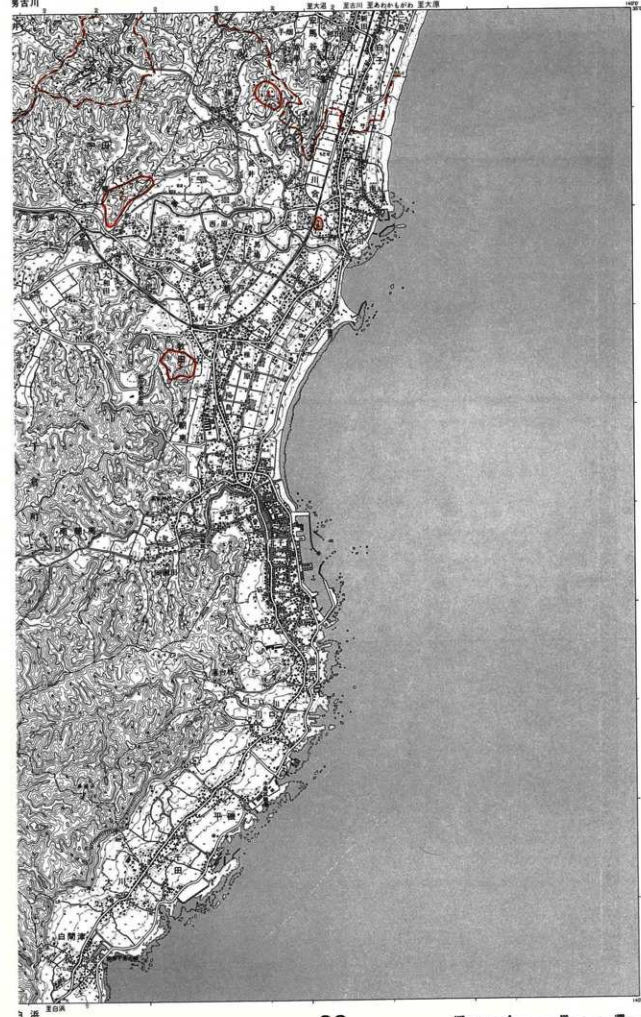
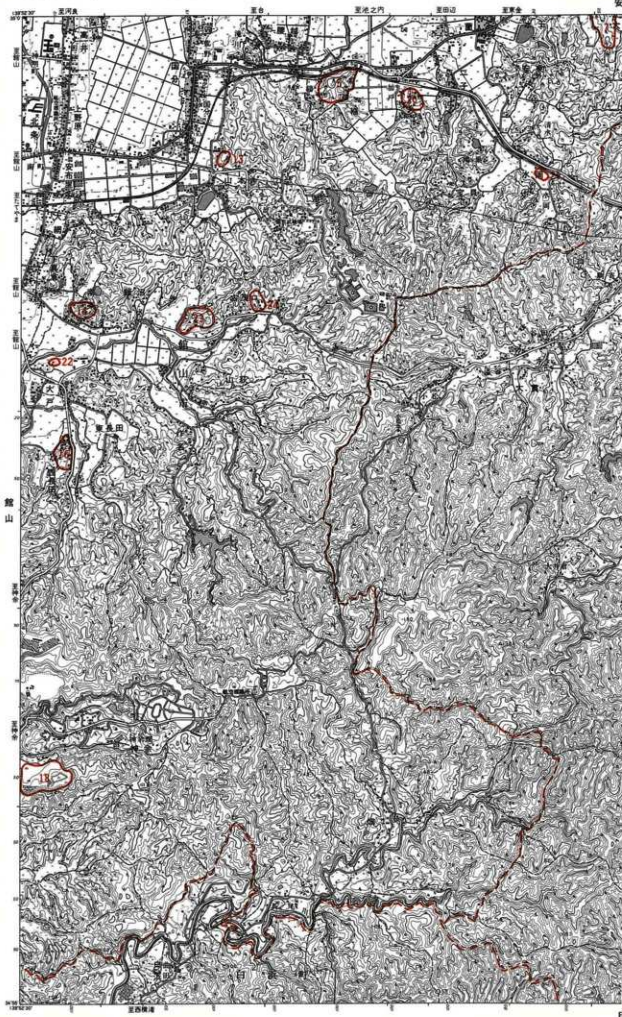
35



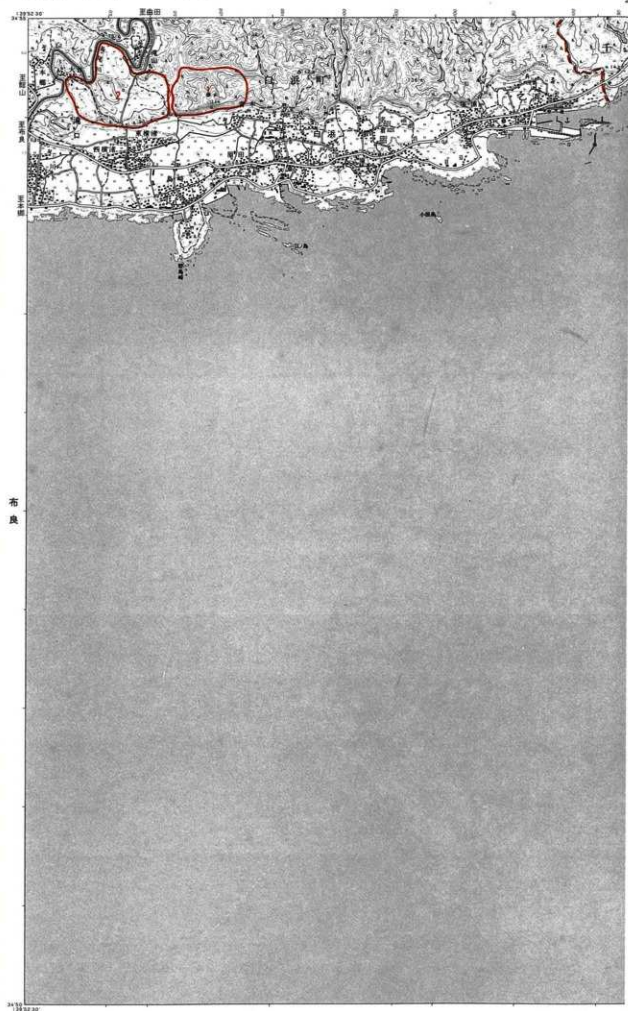
31



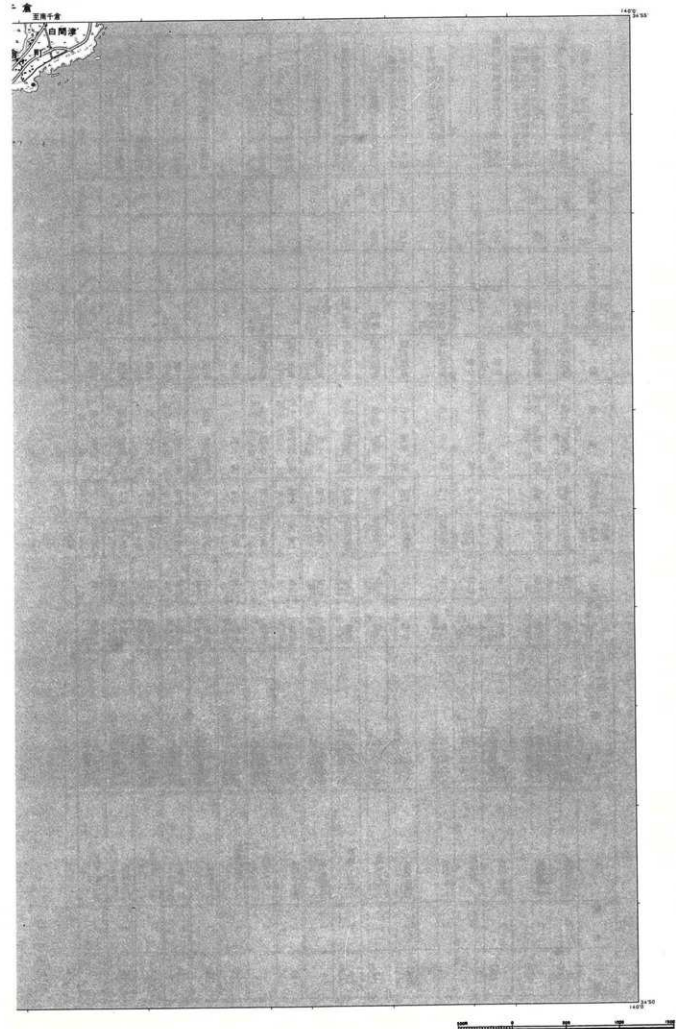




39. 白 浜



38



2 城館跡一覽表
芝山町 (409)

[illegible]

山武町 (405)

番 号	地 区 名	名 称	所 在 地 (上记・下记)	立 地 地 区 (上记・下记)	配 置 地 区 (上记・下记)	通 路 状 况	建 筑 材 料	時 代	建築者名	史料頁	研究之数量	備 考
1 (179)	3	明治宮跡遺跡	明治宮跡遺跡154地 明治宮跡遺跡付	台東 43・3	中学校	133×110 直線	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	戦国時代	小島(白) 鹿島山	143	143	S市跡部(赤松)の東部遺跡 方角遺 143・3(179)遺
2 (21)	3	見谷宮跡	見谷宮跡154地 見谷宮跡付	台東 43・3	山林	100×100 3/4	神	中世				
3 (212)	3	神跡	神跡宮跡、御内 神跡宮跡付	山林 46・30	200×170 交差	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	戦国	見谷 神跡内	143	143	別荘・鎌倉城 別荘の東部遺跡
4 (215)	4	古内宮跡	古内宮跡154地 武庫跡宮跡付	山林 53・35	470×320 1/2	神	中世					
5 (214)	4	見谷宮跡	見谷宮跡154地 見谷宮跡付	山林 47・30	500×200 3/4	神	中世					
6	3	見谷宮跡	見谷宮跡154地 見谷宮跡付	山林 46・20	130×100 交差	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	戦国時代	見谷 神跡山	143	143	東郷、有谷(交差)野 間鐵道、千早(交差)野 間鐵道
7	4	木部宮跡	木部宮跡154地 武庫跡宮跡付	山林 42・30	150×200 交差	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	戦国	二重、土庫、土庫、土庫 二重、土庫、土庫、土庫	143	164	二重、土庫、土庫、土庫 二重、土庫、土庫、土庫
8	3	神の台跡	神の台跡154地 神の台跡付	山林 45・30	300×140 交差	神	戦国	神の台 神の台	神の台 神の台	143	143	神の台、神の台、神の台 神の台、神の台、神の台
9	4	八幡宮跡	八幡宮跡154地 八幡宮跡付	山林 43・30	300×120 交差	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	野 間 鐵 道 土 庫 野 間 鐵 道 土 庫	戦国時代	神の台 神の台	143	143	神の台、神の台、神の台 神の台、神の台、神の台
10	4	神跡	神跡154地 神跡付	山林 46・30	200×100 交差	神	戦国時代	神跡 神跡	神跡 神跡	143	143	二重、土庫、土庫、土庫 二重、土庫、土庫、土庫

增刊 (408)

[illegible]

番号	地名	名称	所在地	立寄、式場	面積	用途	備註	備考
4		皇太后御廟	皇太后御廟 皇太后御廟	皇太后御廟	150×150 (平方尺)	皇太后御廟	皇太后御廟	皇太后御廟
5		皇太后御廟	皇太后御廟 皇太后御廟	皇太后御廟	150×150 (平方尺)	皇太后御廟	皇太后御廟	皇太后御廟

松尾町 (407)

番号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・現況) (下段・近況)	立 面 (幅×高)	基 礎	配 水	通 路状況	通 路	通 橋	時 代	防 害施設	火 災 異 常	研究文献	備 考
1 (13)	4	山王塚跡	山王塚・山王/白122地 武蔵野山王塚	台地 50×25	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143	167	田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
2 (13-2)	4	宝蔵塚跡	宝蔵塚跡	台地 30×20	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
3 (13)	4	宝蔵塚跡	宝蔵塚跡	台地 30×20	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
4 (41)	4	小川塚跡	小川塚跡	台地 40×35	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
5 (44)	4	天塚跡	天塚跡	台地 30×18	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
6 (46)	4	八田塚跡 I	八田塚跡 I	台地 30×20	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
7 (47)	4	八田塚跡 II	八田塚跡 II	台地 30×25	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
8 (48)	4	八田塚跡 III	八田塚跡 III	台地 40×30	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
9 (49)	4	八田塚跡 IV	八田塚跡 IV	台地 50×20	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
10 (50)	4	八田塚跡 V	八田塚跡 V	台地 30×20	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
11 (51)	4	八田塚跡 VI	八田塚跡 VI	台地 40×30	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
12 (61)	4	八田塚跡 VII	八田塚跡 VII	台地 40×30	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡
13 (73)	4	八田塚跡 VIII	八田塚跡 VIII	台地 50×10	山林	山林	3/4 野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	野・農・農・野 土・土・土	戦国時代	堤防・土 石・土 防壁・土 石・土	143		田舎・山王塚跡 山王塚跡 山王塚跡

[illegible]

成東町 (404)

[illegible]

東金市 (213)

[illegible]

[illegible][illegible]

大網白里町 (402)

[illegible]

[illegible]

九十九里町 (403)

番号	地名	名称	所在	番主(上段・下段) (竹田・山田)	立寄 地番主	原 形	面積 (坪)	形状	時代	地名	史料記載	備考
8	竹田	竹田神社	竹田町大字 山田郡竹田村	砂丘 3・1	砂丘 3・1	砂丘 土	338×156	1/4	中世	土 田 郡 竹 田 村 本 郷 本 郷	田中文庫	土田郡の原形 未定今に土田郡の本郷田あり
8	足形	足形神社	片寄町大字足形 山田郡足形町	砂丘 5 5・5	砂丘 5	砂丘	228×156	1/4	中世後	足形 片寄町		土田郡の原形
8 (11)	土田	土田神社	足形町大字土田 山田郡足形町	砂丘 5 5・5	砂丘 5	砂丘 土	158×168	1/2	中世	土田 足形		土田郡の原形
4	小郷	小郷神社	小郷町大字 山田郡小郷町	砂丘 4・1	砂丘 4・1	砂丘 土	228×156	1/4	中世	七井市 土田		土田郡の原形 未定今に土田郡の土田郷 土田郷の原形あり

市原市 (219)

番号	学名	所在地	地帯 (上段・中段・下段) (7段・8段・9段)	採取地帯	産出状況	産種	時代	産出層名	試料数	備考
6	植物化石	常呂郡 常呂町 常呂川 常呂川 常呂川	上段 (7段・8段・9段)	250×100 50×50 50×50	消滅	植物化石	中世	下層	144	千葉氏の図、地層相違の所ある。

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・中段) (下段・支線)	立 地 標高 20・30	地 況 地 形 地 質 地 代	面 積 (坪・100坪)	容積率 (%)	道 路	段 代	用途地帯 用途	史料及 備考
2 (660)	6	新島津	新島津・新島津 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
3 ()	6	新島津	新島津・新島津 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
4 (660)	5	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
5 ()	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
6 (662-2)	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
7 (660)	5	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
8 (664)	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
9 (660)	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
10 ()	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
11 (667)	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
12 (666)	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
13 (667)	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
14 (663)	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地
15 (663)	6	八幡神社	八幡神社・八幡町 市街地	標高 20・30	平地 水田 地 質 地 代	330×130	1/4	新島津	新島津	新島津	新島津 市街地 新島津 市街地

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段・支所)	立 地 (面積・形状)	現 況 (用途・用途別)	規模 (延床面積・容積率)	建 築 記 載	遺 構	時 代	地 理 名	史料頁	解説頁	備 考
15 (570)	6	五井神社跡	市所部五井村 市所部五井村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	900×500	神社 3/4	中世	五井	144		有馬氏家系(享徳11年7月20日(1540年)に没す)
17 (579)	6	紀伊神社	市所部五井村 市所部五井村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	1100×900	神社 3/4	中世	五井	144		中世前期の可能性がある。
18 (580)	6	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	800×600	神社 3/4	中世	高倉			
19 (581)	6	宇井神社	市所部宇井村 市所部宇井村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	700×550	神社 3/4	中世	宇井			宇井7年一帯の調査中
20 (582)	5	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	900×500	神社 3/4	中世	高倉			
21 (583)	5	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	500×300	神社 1/2	中世	高倉			
22 (584)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	300×200	神社 3/4	中世	高倉			
23 (585)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	550×250	神社 1/2	中世	高倉			
24 (586)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	70×70	神社 3/4	中世	高倉			
25 (587)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	700×400	神社 3/4	中世	高倉	144		141年(享徳11年)に没す
26 (588)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	550×250	神社 1/2	中世	高倉			
27 (589)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	120×170	神社 3/4	中世	高倉			
28 (590)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	340×280	神社 3/4	中世	高倉			
29 (591)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	430×280	神社 1/2	中世	高倉			
30 (592)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	550×250	神社 3/4	中世	高倉	144	176	
31 (593)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	180×150	神社 3/4	中世	高倉			

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段・支所)	立 地 (面積・形状)	現 況 (用途・用途別)	規模 (延床面積・容積率)	建 築 記 載	遺 構	時 代	地 理 名	史料頁	解説頁	備 考
32 (594)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	330×230	神社 3/4	中世	高倉			
33 (595)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	550×250	神社 1/2	中世	高倉	144		
34 (596)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	440×280	神社 1/2	中世	高倉	144		
35 (597)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	300×200	神社 3/4	中世	高倉	144		
36 (598)	11	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	800×400	神社 1/4	中世	高倉	144		
37 (599)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	110×110	神社 1/4	中世	高倉			
38 (600)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	600×400	神社 1/2	中世	高倉	149	177	
39 (601)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	550×250	神社 1/2	中世	高倉			
40 (602)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	250×200	神社 3/4	中世	高倉	145		
41 (603)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	500×300	神社 3/4	中世	高倉			
42 (604)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	450×450	神社 3/4	中世	高倉			
43 (605)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	420×310	神社 3/4	中世	高倉	145		
44 (606)	10	高倉神社	市所部高倉村 市所部高倉村	台地 55・30	神社 2・0	神社 2・0	470×250	神社 3/4	中世	高倉	145		

番 号	地 名	所 在 地	(上段・下段) (行役・田)	定 額 (坪)	地 主	配 分	面積 (畝・分・厘)	建物面積 (坪)	用 途	地 代	地 代 算	備 考
45 (337)	神代城跡	神代市神代町 市南區神代町	市南區 神代町	100 坪	市南區 神代町	市南區 神代町	100 坪	100 坪	市南區 神代町	市南區 神代町	145	
46 (338)	分田城跡	分田市分田町 市南區分田町	市南區 分田町	100 坪	市南區 分田町	市南區 分田町	100 坪	100 坪	市南區 分田町	市南區 分田町	145	平成5年一部買収済
47 ()	引田城跡	引田市引田町 市南區引田町	市南區 引田町	100 坪	市南區 引田町	市南區 引田町	100 坪	100 坪	市南區 引田町	市南區 引田町		
48 ()	新田城跡	新田市新田町 市南區新田町	市南區 新田町	100 坪	市南區 新田町	市南區 新田町	100 坪	100 坪	市南區 新田町	市南區 新田町		
49 ()	上土城跡	上土市上土町 市南區上土町	市南區 上土町	100 坪	市南區 上土町	市南區 上土町	100 坪	100 坪	市南區 上土町	市南區 上土町		「灰土城跡」
50 ()	引田城跡	引田市引田町 市南區引田町	市南區 引田町	100 坪	市南區 引田町	市南區 引田町	100 坪	100 坪	市南區 引田町	市南區 引田町		
51 ()	新田城跡	新田市新田町 市南區新田町	市南區 新田町	100 坪	市南區 新田町	市南區 新田町	100 坪	100 坪	市南區 新田町	市南區 新田町		
52 ()	引田城跡	引田市引田町 市南區引田町	市南區 引田町	100 坪	市南區 引田町	市南區 引田町	100 坪	100 坪	市南區 引田町	市南區 引田町		
53 ()	新田城跡	新田市新田町 市南區新田町	市南區 新田町	100 坪	市南區 新田町	市南區 新田町	100 坪	100 坪	市南區 新田町	市南區 新田町		
54 ()	分田城跡	分田市分田町 市南區分田町	市南區 分田町	100 坪	市南區 分田町	市南區 分田町	100 坪	100 坪	市南區 分田町	市南區 分田町	145	
55 ()	新田城跡	新田市新田町 市南區新田町	市南區 新田町	100 坪	市南區 新田町	市南區 新田町	100 坪	100 坪	市南區 新田町	市南區 新田町		平成元年度一部買収済
56 ()	引田城跡	引田市引田町 市南區引田町	市南區 引田町	100 坪	市南區 引田町	市南區 引田町	100 坪	100 坪	市南區 引田町	市南區 引田町		

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段)	立 止 高	地 况	面 积 (坪・平方 米)	容 积 率 (%)	容 积 率 (%)	地 区 土 质	地 代	地 区 名 称	长 期 租 赁	解 决 方 法	備 考
57 (372)	10	高尾山 高尾山 市高尾山 市高尾山	高尾山 50・55	山林 宅地	1000×500	1/2			新 芝 土 质 山 芝 土 质 代 芝 土 质 代 芝 土 质	中 世	新 芝 土 质 山 芝 土 质 代 芝 土 质 代 芝 土 质	145		明治34年一重高尾山(芝・谷田)
58 ()	10	山田山 山田山 市山田山	山田山 51・53	山林 宅地	600×600	全 域			土 质	中 世	山田山 市山田山			
59 ()	11	山田山 山田山 市山田山	山田山 51・53	山林 宅地	600×330	3/4			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山			
60 (227)	11	山田山 山田山 市山田山	山田山 50・40	山林 宅地	330×310	3/4			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山	145		
61 ()	10	山田山 山田山 市山田山	山田山 50・55	山林 宅地	250×130	1/4			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山			
62 ()	10	山田山 山田山 市山田山	山田山 50・55	山林 宅地	300×350	3/4			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山			
63 ()	10	山田山 山田山 市山田山	山田山 50・55	山林 宅地	250×180	全 域			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山			
64 ()	11	山田山 山田山 市山田山	山田山 50・55	山林 宅地	550×330	1/4			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山			
65 (157)	11	山田山 山田山 市山田山	山田山 50・55	山林 宅地	550×550	1/2			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山	145		
66 ()	11	山田山 山田山 市山田山	山田山 50・55	山林 宅地	200×160	全 域			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山	140		
67 (180)	10	山田山 山田山 市山田山	山田山 50・55	山林 宅地	300×550	3/4			新 芝 土 质	中 世	山田山 市山田山			

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段・近所)	立 地 状 况 (地 区・地 形・地 質)	規 模 (坪・延 坪・延 坪)	建 造 年 次	建 造 材 質	時 代	現 在 地 名	史料記載	解説	備 考
65 (188)	10	長尾神社	市川町大字 市川町大字	山 25・7	3/4	3/4	3/4	中世	山 25・7	145		
66 (189)	14	南無阿弥陀仏	市川町大字 市川町大字	山 70・40	1/4	1/4	1/4	中世	山 70・40	145		
67 (190)	14	西宮神社	市川町大字 市川町大字	山 30・8	全	全	全	中世	山 30・8	145		「徳本神社」
71 (191)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 111・60	3/4	3/4	3/4	中世	山 111・60			「徳本神社」
72 (192)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 90・60	全	全	全	中世	山 90・60			
73 (193)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・60	全	全	全	中世	山 100・60	146	190	
74 (194)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・60	全	全	全	中世	山 100・60	146		徳川氏御守所
75 (195)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・60	全	全	全	中世	山 100・60	146		
76 (196)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・60	全	全	全	中世	山 100・60	146		
77 (197)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・60	全	全	全	中世	山 100・60	146		
78 (198)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・60	全	全	全	中世	山 100・60	146		
79 (199)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・60	全	全	全	中世	山 100・60	146		

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段・近所)	立 地 状 况 (地 区・地 形・地 質)	規 模 (坪・延 坪・延 坪)	建 造 年 次	建 造 材 質	時 代	現 在 地 名	史料記載	解説	備 考
82 (200)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 40・0	全	全	全	中世	山 40・0	145		
83 (201)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・65	3/4	3/4	3/4	中世	山 100・65	145		明治2年(1869)井上直道
84 (202)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 71・30	全	全	全	中世	山 71・30	145		「徳本神社」
85 (203)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 70・20	全	全	全	中世	山 70・20	145		
86 (204)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
87 (205)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
88 (206)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
89 (207)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
90 (208)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
91 (209)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
92 (210)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
93 (211)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
94 (212)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		
95 (213)	15	東山神社	市川町大字 市川町大字	山 100・50	全	全	全	中世	山 100・50	145		

番 号	地 区	名 称	所 在 地	立 寄	規 模	遺 跡 状 況	遺 跡	時 代	出 土 品	備 考
97 (105)	15	北郷神社	平瀬町・月田郷 市南東部	台地 50・100	300×450	全壊	土壇	中世	馬ノ内 土器	
98 (54)	15	東郷神社	平瀬町・東郷村 市南東部	丘陵 120・70	300×300	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
99 (54)	15	平瀬神社	平瀬町・中山 市南東部	丘陵 120・60	320×350	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
100 (52)	15	北郷神社	平瀬町・西郷村 市南東部	丘陵 115・53	340×400	3/4	溝・土壇	中世	土器 土器	
101 (7)	20	本郷神社	本郷町・上本郷 市南東部	丘陵 150・90	150×100	消滅	溝・土壇	中世	土器 土器	
102 (42)	15	大井神社	本郷町・大井郷 市南東部	丘陵 120・45	130×70	3/4	溝・土壇	中世	土器 土器	
103 (7)	20	東郷神社	平瀬町・東郷村 市南東部	丘陵 120・45	250×150	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
104 (84)	20	東郷神社	平瀬町・東郷村 市南東部	丘陵 120・45	160×150	新築	溝・土壇	中世	土器 土器	
105 (7)	20	古瀬神社	古瀬町・古瀬村 市南東部	丘陵 120・70	340×400	3/4	溝・土壇	中世	土器 土器	
106 (7)	20	小瀬神社	小瀬町・小瀬村 市南東部	丘陵 120・70	340×400	3/4	溝・土壇	中世	土器 土器	
107 (7)	20	月田神社	月田町・月田村 市南東部	丘陵 120・40	420×370	3/4	溝・土壇	中世	土器 土器	
108 (7)	20	月田神社	月田町・月田村 市南東部	丘陵 120・40	550×230	3/4	溝・土壇	中世	土器 土器	
109 (11)	20	東郷神社	東郷町・東郷村 市南東部	丘陵 120・40	420×150	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
110 (7)	20	多々神社	多々町・多々村 市南東部	丘陵 140・70	350×220	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	

長野町 (25)

番 号	地 区	名 称	所 在 地	立 寄	規 模	遺 跡 状 況	遺 跡	時 代	出 土 品	備 考
1 (7)	11	長野神社	長野町・長野村 市南東部	台地 62・50	100×70	消滅	土壇	中世	土器 土器	
2 (7)	11	立寄神社	立寄町・立寄村 市南東部	台地 40・20	140×250	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
3 (145)	11	長野神社	長野町・長野村 市南東部	台地 50・40	150×150	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
4 (154)	12	長野神社	長野町・長野村 市南東部	台地 50・35	300×220	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
5 (12-1)	11	長野神社	長野町・長野村 市南東部	台地 40・20	140×80	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
6 (169)	11	立寄神社	立寄町・立寄村 市南東部	台地 50・40	320×230	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	

茂原市 (210)

番 号	地 区	名 称	所 在 地	立 寄	規 模	遺 跡 状 況	遺 跡	時 代	出 土 品	備 考
1 (84)	12	神田山王口・田原郷	神田山王口・田原郷 市南東部	台地 50・50	410×220	消滅	土壇	中世	土器 土器	
2 (80)	12	茂原神社	茂原町・茂原村 市南東部	台地 60・40	1300×800	3/4	溝・土壇	中世	土器 土器	
3 (60)	12	神田山王口	神田山王口・田原郷 市南東部	台地 50・50	360×230	3/4	溝・土壇	中世	土器 土器	
4 (7)	12	茂原神社	茂原町・茂原村 市南東部	台地 50・50	350×130	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	
5 (20)	12	茂原神社	茂原町・茂原村 市南東部	台地 50・50	710×460	全壊	溝・土壇	中世	土器 土器	

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・現況)	立 地 (上段・現況)	現 況 (面積・形状)	建 築 状 況	通 路	時 代	開 港 地 名	史料頁	解説頁	備 考
6 (37)	小幡	小幡神社	小幡	小幡 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
7 ()	黒川	黒川神社	黒川	黒川 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
8 ()	黒川	黒川神社	黒川	黒川 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
9 (40)	黒川	黒川神社	黒川	黒川 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
10 ()	黒川	黒川神社	黒川	黒川 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
11 ()	黒川	黒川神社	黒川	黒川 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人

白子町 (424)

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・現況)	立 地 (上段・現況)	現 況 (面積・形状)	建 築 状 況	通 路	時 代	開 港 地 名	史料頁	解説頁	備 考
1 ()	白子	白子神社	白子	白子 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人

長生村 (423)

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・現況)	立 地 (上段・現況)	現 況 (面積・形状)	建 築 状 況	通 路	時 代	開 港 地 名	史料頁	解説頁	備 考
1 ()	長生	長生神社	長生	長生 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
2 ()	長生	長生神社	長生	長生 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人

長瀬町 (427)

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・現況)	立 地 (上段・現況)	現 況 (面積・形状)	建 築 状 況	通 路	時 代	開 港 地 名	史料頁	解説頁	備 考
1 (6)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・現況)	立 地 (上段・現況)	現 況 (面積・形状)	建 築 状 況	通 路	時 代	開 港 地 名	史料頁	解説頁	備 考
2 ()	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143	218	三上氏の人
3 ()	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
4 ()	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
5 (13)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
6 ()	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
7 (16)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
8 ()	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
9 (18)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
10 (20)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
11 (21)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
12 (22)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
13 (23)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
14 (24)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
15 (25)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
16 (26)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
17 (27)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人
18 (28)	長瀬	長瀬神社	長瀬	長瀬 台地 15・0	山林 260×150	全壊	第 空堀	中世	三上氏	143		三上氏の人

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段)	立 地 (上段・下段)	現 況	面積 (㎡)	建 坪 (㎡)	通 路	時 代	開 通 年 次	史料頁	解説頁	備 考
19	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×210	全地	野 田 線	中世				
20	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×210	全地	野 田 線	中世				
21	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	450×330	全地	野 田 線	中世				
22	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×180	3/4	土 道	中世				
23	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	450×260	全地	野 田 線	中世				
24	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	450×230	全地	野 田 線	中世				
25	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	330×150	全地	野 田 線	中世				

上野郡 (422)

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段)	立 地 (上段・下段)	現 況	面積 (㎡)	建 坪 (㎡)	通 路	時 代	開 通 年 次	史料頁	解説頁	備 考
1	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	530×210	全地	野 田 線	中世				
2	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	480×300	全地	野 田 線	中世				
3	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	280×180	全地	野 田 線	中世				
4	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	750×260	全地	野 田 線	中世				

上野郡 (421)

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段)	立 地 (上段・下段)	現 況	面積 (㎡)	建 坪 (㎡)	通 路	時 代	開 通 年 次	史料頁	解説頁	備 考
1	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	150×130	全地	野 田 線	中世				
2	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×250	3/4	土 道	中世				
3	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×180	全地	野 田 線	中世				
4	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	630×400	全地	野 田 線	中世				

上野郡 (225)

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段)	立 地 (上段・下段)	現 況	面積 (㎡)	建 坪 (㎡)	通 路	時 代	開 通 年 次	史料頁	解説頁	備 考
9	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	450×250	1/4	土 道	中世				
10	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×250	1/4	土 道	中世				
11	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	150×80	1/4	土 道	中世				
12	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	40×50	全地	土 道	中世				
13	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	450×250	1/4	土 道	中世				
14	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	500×400	1/2	土 道	中世				
15	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×170	1/2	土 道	中世				
16	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	50×60	全地	土 道	中世				
17	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×200	1/4	土 道	中世				
18	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×130	3/4	土 道	中世				
19	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	400×200	3/4	土 道	中世				
20	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	250×150	全地	土 道	中世				
21	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	300×100	3/4	土 道	中世				
22	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	170×60	3/4	土 道	中世				

上野郡 (205)

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・下段)	立 地 (上段・下段)	現 況	面積 (㎡)	建 坪 (㎡)	通 路	時 代	開 通 年 次	史料頁	解説頁	備 考
1	上野郡	上野郡	上野郡	上野郡	山林	100×100	1/4	土 道	中世				

[illegible]

君津市 (225)

番 号	座 名	所 在 地	立 立	尺 度	遺 体	通 構	時 代	関連地名	史料頁	解説頁	備 考
1 (1)	大石山祖師	人見山下(八旗1丁附) 角海津人見村	平塚 寺	33×110	1/4	現状では遺構確認できず あり	近世	「遺書」 (銅版)	145		元正18年(1590)、小室重幸以下の 陣没。別荘として建立された墓所 文庫 4.4(195)、孝公陣没の陣 文庫 外堀まで確認(表裏)
2 (21)	山崎山祖師	下洲山(下州) 高崎町下州白旗	平塚 寺	200×150	3/4	曲輪 土堀 水堀	近世	「遺書」 (銅版)	145		

[illegible]

[illegible]

番 号	地 図 名	所 在 地	立 地 (上・中・下流・河口・湖沼・近海)	開 発 種別 (水田・畑・雑草等)	面積 (ha)	造成状況	通 橋	特 徴	時 代	築造地名	設計者	調査者	備 考
40	55 新田川	仙北支庁 新田川村	反田 100・220	山形 田舎	450×220	全築	仙北 土木 局	空堀 跡	戦国	一ノ作			久松の跡が現れ、ここ は國のたもとに近きあり。
41	55 新田川	宮城県 新田川村	反田 110・40	山形 田舎	700×400	3/4	仙北 土木 局	空堀 跡	戦国				東郷の跡が現れ、ここ は國のたもとに近きあり。 東郷の跡が現れ、ここ は國のたもとに近きあり。

富津市 (226)

[illegible]

番 号	国 籍	名 称	所 在 地	立 地 (上段・中段・ 下段・崖下)	規 模 (面積・北距)	遺 址状況	遺 構	時 代	関連地名	史料頁	解説頁	考 考
13 (008)	24	矢野跡	相川寺大塚跡 矢野跡(山内)	丘陵部北段 標高 132・90	山林	320×400	全域	埴輪 土器	中世	矢野跡	146	142 年寄の墓に石室が併存 する
14 (011)	24	山内跡	野矢野跡(山内)	台地 55・10	平地	90×90	全域	埴輪 土器	中世		146	野矢野跡の西側に石室が併存 する
15 (016)	23	竹ノ原野跡	竹ノ原野跡(山内)	平地 12	無水田 平地	100×140	1/2	埴輪では遺構確認で ない	近世		146	竹ノ原野跡の西側に石室が併存 する
16 (019)	23	越ヶ谷跡	竹ノ原野跡(山内)	丘陵部北段 標高 140・110	山林	720×300	全域	埴輪 土器	中世		146	越ヶ谷跡の西側に石室が併存 する
17 (020)	23	高尾山跡	竹ノ原野跡(山内)	丘陵部北段 標高 59・89	山林	700×500	全域	埴輪 土器	中世		146	高尾山跡の西側に石室が併存 する
18 (027)	23	野々山跡	竹ノ原野跡(山内)	丘陵部北段 標高 59・89	山林	700×500	3/4	埴輪では遺構確認で ない	近世		146	野々山跡の西側に石室が併存 する
19 (040)	25	山内跡	矢野跡(山内)	丘陵部北段 標高 82・65	山林	430×250	全域	埴輪 土器	中世		151	山内跡の西側に石室が併存 する
20 (042)	29	高尾山跡	矢野跡(山内)	丘陵部北段 標高 118・100	山林	450×450	1/2	埴輪では遺構確認で ない	中世		146	高尾山跡の西側に石室が併存 する
21 (045)	18	岩屋跡	岩屋跡(山内)	丘陵部北段 標高 112・60	山林	500×700	全域	埴輪 土器	中世		146	岩屋跡の西側に石室が併存 する
22 ()	18	五王跡	五王跡(山内)	丘陵部北段 標高 60	山林	500×650	3/4	埴輪では遺構確認で ない	中世		146	五王跡の西側に石室が併存 する
23 ()	18	山内跡	山内跡(山内)	丘陵部北段 標高 100・70	山林	130×100	附滅	不明	中世		146	山内跡の西側に石室が併存 する
24 ()	18	高尾山跡	高尾山跡(山内)	丘陵部北段 標高 100・70	山林	500×500	全域	埴輪 土器	中世		146	高尾山跡の西側に石室が併存 する
25 ()	18	山内跡	山内跡(山内)	丘陵部北段 標高 100・70	山林	250×150	全域	埴輪 土器	中世		146	山内跡の西側に石室が併存 する
26 ()	17	野々山跡	野々山跡(山内)	丘陵部北段 標高 59・89	山林	100×100	1/4	埴輪では遺構確認で ない	近世		146	野々山跡の西側に石室が併存 する
27 ()	17	七重山跡	七重山跡(山内)	丘陵部北段 標高 59・89	山林	100×100	全域	埴輪 土器	近世		146	七重山跡の西側に石室が併存 する
28 ()	18	高尾山跡	高尾山跡(山内)	丘陵部北段 標高 59・89	山林	200×200	全域	埴輪 土器	中世		146	高尾山跡の西側に石室が併存 する

番号	地名	名称	所在地(市、町、村)	立地(山頂・山麓・山腰)	地質	埋蔵深度	産出状況	産量	時代	用途	採出方法	備考
29	24	石巻市	石巻市	石巻市	山麓	300×200	全域	現状では埋蔵深度で中世	中世	石巻市	石巻市	石巻市
30	17	大田町	大田町	大田町	山麓	100×100	全域	現状では埋蔵深度で近世	近世	大田町	大田町	大田町
31	24	大田町	大田町	大田町	山麓	800×550	全域	現状では埋蔵深度で中世	中世	大田町	大田町	大田町
32	24	大田町	大田町	大田町	山麓	600×550	全域	現状では埋蔵深度で中世	中世	大田町	大田町	大田町
33	23	大田町	大田町	大田町	山麓	200×200	全域	現状では埋蔵深度で近世	近世	大田町	大田町	大田町

麦牌町 (442)

番号	姓 名	名 称	所 在 地	(上段・市街) (下段・近郊)	立 地	面 積	所有状況	建 構	時 代	建築名称	史料所収	備 考
1 (5)	たかみり	たかみり神社・地蔵堂	須賀赤松町赤松	赤松	丘陵・土崖	山林	119×100	全焼	近町	(白紙) たかみり 神社		南相模郡赤松町が「境内」であるが、その境内は赤松町の外である。また、境内にはたかみり神社の地蔵堂がある。
2 (50)	松野	松野神社	松野赤松町赤松	赤松	丘陵・土崖	山林	228×150	3/4	戦国	赤松	144	226
3 (66)	万寿	万寿神社	万寿赤松町赤松	赤松	丘陵・土崖	山林	158×80	3/4	戦国	赤松	148	227
4 (66)	山内	山内神社	山内赤松町赤松	赤松	丘陵・土崖	山林	228×130	3/4	戦国	赤松	144	
5 (7)	文部	文部神社	文部赤松町赤松	赤松	丘陵・土崖	山林	60×200	3/4	戦国	赤松	144	229
6 (7)	文部	文部神社	文部赤松町赤松	赤松	丘陵・土崖	山林	108×150	3/4	戦国	赤松	144	
7 (8)	中村	中村神社	中村赤松町赤松	赤松	丘陵・土崖	山林	120×70	3/4	戦国	赤松		

445

[illegible]

[illegible]

大多喜町 (441)

[illegible][illegible]

大原町 (444)

番	地	名	所在	地(上段・中段) (下段・近田)	立寄	現況	面積 (頃・坪)	通村状況	渠	橋	代	用途	肥料	解防員	備考
1 (4)	21	津洲	新田字家ノ内 長谷川 長谷川白井村	平地 20・1	水田 70	山林	140・140	1/2	郭	木渠	中世	堀之内	144	226	耕地位置により状況不明
2 (6)	21	日笠	長谷川 長谷川白井村	平地 40・50	水田 40	山林	60・250	全域	堀 土渠 堀	土渠 土渠 土渠	戦国時代 戦国時代 戦国時代	堀之内 堀之内 堀之内	144	227	伝承 江戸時代から明治時代 にわたって、小作地と分家地 が確定している。明治時代 以降は、堀内と堀外とに分 けられ、堀内は、堀外 大堀内と名づけられた。堀内 別称 堀内
3 (33)	21 27	湯沼	山田一区下湯沼 美奈川山田村	丘陵地 80・55	水田	山林	700・650	全域	堀 土渠 土渠	堀 土渠 土渠	戦国時代 戦国時代 戦国時代	堀之内 堀之内 堀之内			現況は遺跡不明
4 (58-2)	21	湯之之内	泉点支那之片 美奈川山田村	平地 20・6	水田	山林	200・200	全域	郭	木渠	中世	堀之内	144		山田村平瀬川と湯沼川に わたる
5 (6)	27	江田	山田支那 美奈川山田村	丘陵地 20・10	水田	山林	200・200	全域	郭	土渠	中世	堀之内			山田村平瀬川と湯沼川に わたる
6 (70)	28	水田	湯沼 湯沼小堀	平地 12・1	水田	山林	100・50	1/2	堀 土渠 堀	土渠 土渠 土渠	近世	堀之内			山田村平瀬川と湯沼川に わたる
7 (71)	28	小堀	大堀内 美奈川小堀村	丘陵地 30・30	水田	山林	250・230	1/2	堀 土渠 堀	土渠 土渠 土渠	戦国時代	堀山	144		伝承 江戸時代から明治時代 にわたって、小作地と分家地 が確定している。明治時代 以降は、堀内と堀外とに分 けられ、堀内は、堀外 大堀内と名づけられた。堀内 別称 堀内

[illegible]

御宿町 (443)

[illegible]

鹽浦市 (218)

[illegible]

天津小海町 (472)

番号	姓 名	所 在 地	生 年 (上欄・明治) (下欄・西暦)	現 職	現任状況	現 職	代 表	職 名	紀 録 年 数	備 考
1 (1)	佐村 謙	高橋町高橋村	1877・11・10	山形 市警署	退職	380・383	全職	船橋 藤田白鶴 船匠	中年	船橋 藤田白鶴 船匠
2 (18)	正木 清太郎	内務省	1872・6・2	山形 県警署	3/4	347・200	3/4	船橋 藤田白鶴	中年	船橋 藤田白鶴
3 (2)	藤田 謙	天竺山	1872・7・7	山形 県警署	3/4	383・386	3/4	船橋 藤田白鶴	中年	船橋 藤田白鶴
4 (27)	天竺山 謙	天竺山	1872・10・5	山形 県警署	1/2	300・465	1/2	船橋 藤田白鶴	中年	船橋 藤田白鶴

鹽川市 (223)

番号	種別	名称	所在地	立地 場所(市町村)	面積 (㎡)	建設 状況	建設 時期	代 理店	建設費 (万円)	竣工 状況	備考
30	公園	三好公園	三好市	三好市(三好町)	669,230	完成	昭和55年	三好市建設部	100	完成	三好市三好町三好公園

番号	園名	所在地	工場 (上座・下座) (7分・15分)	型	面積 (約200×200)	資料状況	用途	時代	調査方法	発見者	備考
○	以	足尾銅山(山形)	常盤町大字小倉村 常盤町大字小倉	上座 5分 下座 5分	土壌 土壌	500×200 500×200	全滅	昭和 昭和	掘削・取 巻(山)	146	山形県佐田、北郷にエダあり
○	茂	石巻	常盤町大字小倉村 常盤町大字小倉	上座 5分 下座 5分	土壌 土壌	500×500 500×500	3/4 全滅	昭和 昭和	掘削・取 巻(山)		青森には山形ほどによって不属
○	石	西尾銅山	本郷町大字西尾村 本郷町大字西尾	上座 10分 下座 10分	土壌 土壌	1000×500 1000×500	全滅	昭和 昭和	掘削・取 巻(山)		青森には山形ほどによって不属

富浦町 (461)

[illegible]

三芳村 (464)

海 字 順 号	所 在 地 名	地 名 (上段・下段) (市街・村)	面 積 (畝)	地 主 (個人・團體)	種 類	代 表 者	備 考
1 (2)	宮田川	上流部(宮田川) 上流部(宮田川)	700・300	全 城	水田	全 城	北流一大森に合流あり
2 (3)	宮田川	上流部(宮田川) 上流部(宮田川)	150・80	3/4 水田	水田	152 水田	宮田川に合流あり 中津川に合流あり
3 (32)	宮田川	上流部(宮田川) 上流部(宮田川)	400・300	全 城	水田	147 水田	中津川に合流あり 中津川に合流あり
4 (33)	宮田川	上流部(宮田川) 上流部(宮田川)	120・100	全 城	水田	147 水田	中津川に合流あり 中津川に合流あり

丸山町 (467)

[illegible]

和田町 (468)

[illegible]

館山市 (205)

[illegible]

番 号	地 区	名 称	所 在 地 (上段・現在) (下段・正位)	立 寄 地(上段・正位)	備 考	現 況	現 況 記 載 (備 考)	通 橋	神 代	開 通 地名	史料記載	解説	備 考
2 (2)	34	長尾神社	神奈川縣 早稲田町	台地 17	150×120	全壊	現状では遺構なし	近世	近世	146	現況不明	明治14年(1881)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗	
3 (21)	37	長尾神社	八雲町小倉 安土町	平地 9	300×250	1/4	現状では遺構なし	近世	近世	146	天保14年(1843)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
4 (22)	37	長尾神社	八雲町小倉 安土町	平地 9	300×250	1/4	現状では遺構なし	近世	近世	146	天保14年(1843)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
5 (42)	38	長尾神社	鶴ヶ島市 安土町	丘陵 65・45	460×320	全壊	地蔵・御山神社・安土神社	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
6 (41)	35	例「東山」跡	竹野町中津ヶ台 安土町	丘陵 64・45	440×300	3/4	地蔵・御山神社・土蔵	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
7 (54)	35	大字神社	金井町大字 安土町	丘陵 25	460×230	全壊	地蔵・御山神社・安土神社	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
8 (56)	37	長尾神社	川口町 安土町	平地 11	460×130	全壊	現状では遺構なし	近世	近世	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
9 (63)	37	長尾神社	鶴ヶ島市 安土町	丘陵 65・43	580×750	3/4	地蔵・御山神社・安土神社	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
10 (64)	37	長尾神社	鶴ヶ島市 安土町	平地 20	200×190	1/2	地蔵	近世	近世	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
11 (67)	37	長尾神社	北条市 安土町	平地 7	250×120	1/4	現状では遺構なし	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
12 (68)	37	北条神社	北条市 安土町	平地 3	250×120	1/4	現状では遺構本あり	近世	近世	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
13 (71)	38	長尾神社	川口町 安土町	丘陵 30	130×80	全壊	地蔵・御山神社・安土神社	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
14 (74)	38	長尾神社	鶴ヶ島市 安土町	丘陵 65・46	250×150	全壊	地蔵・御山神社・土蔵	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
15 (101)	37	長尾神社	安土町 安土町	平地 12	150×150	全壊	土蔵	近世	近世	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
16 (131)	38	長尾神社	鶴ヶ島市 安土町	丘陵 65・49	330×180	1/2	地蔵・安土神社	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
17 (144)	37	長尾神社	神奈川市 安土町	丘陵 68	500×430	全壊	地蔵・御山神社	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
18 (147)	38	長尾神社	神奈川市 安土町	大地 11	580×300	全壊	なし	中世	中世	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
19 (172)	37	長尾神社	川口町 安土町	丘陵 22	380×150	全壊	地蔵・御山神社・安土神社	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		
20 ()	38	長尾神社	鶴ヶ島市 安土町	丘陵 20	330×150	1/2	地蔵・御山神社	戦国	戦国	146	56年(1887)、松平源次郎が 安土の地蔵堂を移築して、 境内に保存した。日蓮宗		

[illegible]

千倉町 (466)

番 号	時 考 国	著 者 名	所 在 地	上 (段・現況) (下段・近況)	立 本 (原・複製本)	版 次	紙 張	綴 装 (表紙・裏表紙)	通 橋	時 代	記述地域	史料性質	研究状況	備 考
1 (42)	98	關子丘遺跡台巻 白土孝白呂 朝枝忠信子付		上段・現況 下段・近況	1冊 1冊・50 1冊・50	山形	100×70	全紙	戸井 隆俊	近世	近世・要 書	史料・要 書	258	松平定房の記述 本郷工ノ上遺跡群あり
3 (43)	98	中山城跡 白土孝白呂 朝枝忠信子付		上段・現況 下段・近況	1冊 1冊・50 1冊・50	山形	100×70	全紙	山形 隆俊	中世	中世	史料・要 書	258	上段・近世の古巻 本郷工ノ上遺跡群あり
3 (44)	98	久保山山跡 朝枝忠信子付		上段・現況 下段・近況	1冊 1冊・50 1冊・50	山形	100×70	全紙	山形 隆俊	近世	近世	史料・要 書	258	伝説あり

白浜町 (465)

番号	地図	名称	所在地 (市、区、町、村)	立地 傾向、位置	地 形、地 貌	現況	規模	遺存状況	遺構	時代	現地地名	史蹟 種別	解説頁	備 考
1 (38)		台所跡	白粉谷・白粉村	丘陵 16・110	山林	全壊	700×400	全壊	遺構 土壇・石垣 虎口	戦国	森山 大田	史蹟 16		熊見蔵家の居城
2 (39)		貝塚跡	白粉谷・白粉村	丘陵 約75	山林	全壊	850×770	全壊	遺構 土壇・石垣 井戸	近代	熊山通	史蹟 146		明治、大正時代の 貝塚、文字記号あり (1898)、文字記号あり

文献・史料一覧

文献一覧

研究文献目録については、『千葉城郭研究』1～3号(1989・1992・1994年)に集成された文献目録をもととし、その後の追加も含め、担当者の判断により加除をおこなった。

なお実見の叶わなかった文献に関しては、題名から該当城館を類推した場合がある。(中山文人)

県市町村史

文献番号	発行年	編著者	書名	発行者
1	1878	安川惟礼	上総国誌	
2	1886	内務省地理局	大日本国誌 安房	近藤活版
3	1913	長生郡教育会	長生郡誌 第六章古城址	長生郡教育会
4	1916	山武郡教育会	山武郡誌 第十五旧跡・名所	山武郡教育会
5	1916	市原郡教育会	市原郡誌 第三編沿革及史蹟 第二章旧蹟	市原郡教育会
6	1919	千葉県	稿本千葉県誌 巻下 第三章城址・第四章城址	多田屋書店
7	1923	夷隅郡教育会	夷隅郡誌 第十二章名所旧蹟名邑城址及び磐石・館址	夷隅郡役所
8	1926	安房郡教育会	安房郡誌 第十四章社寺及名所旧蹟	安房郡教育会
9	1927	君津郡教育会	君津郡誌 下巻 第三編名所旧蹟・第二章城址	君津郡教育会
10	1955	本納町	本納町誌 第二章第五節本納城と酒井氏	吉川弘文館
11	1956	大橋栄	豊岡村誌 第二章第六節諸城址と史蹟	豊岡村郷土誌研究会
12	1962	君津町誌編纂委員会	君津町誌 前巻 第二章第三節名所旧蹟	君津町誌編纂委員会
13	1971	館山市史編さん委員会	館山市史 第四章中世の館山	館山市
14	1972	木更津市史編纂委員会	木更津市史 第2編第3章南北朝・室町・安土桃山時代	木更津市
15	1973	長南町史編纂委員会	長南町史 第2章中世	長南町
16	1973	君津町誌編纂委員会	君津町誌 第七章第九節古野室町・安土桃山時代	君津町
17	1973	平川町史編纂委員会	平川町史 第一章第三節参考資料	袖ヶ浦町
18	1974	小糸町史編纂委員会	小糸町史 第一章原始・古代・中世	小糸町
19	1976	伊東一男	横芝町史 特別寄稿篇戦国井田領の形成と展開	横芝町史編纂委員会
20	1976	清和村史編纂委員会	清和村史 第三章第四節の六城砦・墳墓	清和村史編纂委員会
21	1977	長柄町史編纂委員会	長柄町史本編 第二章伝承の城址と家族	長柄町
22	1978	小櫃村誌編纂委員会	小櫃村誌 第九章第二節城址・遺構	君津市
23	1982	富津市史編纂委員会	富津市史 通史第三編第一章富津地方の推移	富津市
24	1982	木更津市史編纂委員会	木更津市史 富津田編第3編第2章真里谷城址と周辺の城郭	木更津市
25	1983	嶺口定志	嶺町史 第三章中世	嶺町
26	1983	柴田龍司	嶺町史 第十二章嶺の中世城郭	嶺町
27	1984	伊東一男	松尾町の歴史 上巻II中世の武士と村落	松尾町
28	1984	三芳村史編纂委員会	三芳村史 第二章中世の三芳村	三芳村

29	1985	牛房茂行	袖ヶ浦町史 通史編第3編第4章中世の城址	袖ヶ浦町
30	1986	小高春雄	大網白里町史 第二章中世大網白里の城館址	大網白里町
31	1986	伊東一男	成東町史 第二章第四節房総の動乱と成東城	成東町
32	1986	伊藤正雄他	市原市史 中巻第二章南北朝・室町時代	市原市
33	1988	伊東一男	山武町史通史編 第二章第四節戦国房総の動乱と土家層	山武町
34	1988	小高春雄	山武町史通史編 第二章第六節山武町の中世城郭	山武町
35	1991	伊東一男他	大多喜町史	大多喜町史編さん委員会
36	1993	加藤晋平	御宿町史	御宿町史編さん委員会
37	1993	富山町	富山町史	富山町史編さん委員会

雑誌・定期刊行物

文献番号	発行年	編著者	論文名	書名	発行者
38	1906		安房城址	風俗画報347	東陽堂
39	1926	島羽正雄	星見氏の古城址	歴史地理53-4	歴史地理学会
40	1934	大野太平	安藤景益館址考	房総郷土研究1-8	千葉県郷土校郷土研究室
41	1935	松川清	環斎屋敷考	房総郷土研究2-3	千葉県郷土校郷土研究室
42	1958	千葉麗胤	房総史料其の二十四 館山城址一六	房総及び房総人 275~280	房総社
43	1958	藤田正興	風雲稲村城	旭光33-3	千葉県旭光会
44	1959	内田栄一	千葉県の城	城郭1-4	日本城郭協会
45	1960	内田栄一	千葉県の城	城郭2-2~4	日本城郭協会
46	1960	古市貞男	本納城落城	房総展望14-6	房総展望社
47	1962	山岡俊明	房総星見氏研究の問題点	房総史学4	千葉県高等学校教育会
48	1964	桜井成廣	海城としての百首	城郭6-2	日本城郭協会
49	1965	渡辺包夫	大多喜城天守絵図と本丸絵図	総南文化4	総南文化研究会
50	1966	落合忠一	池和田城と多田蔵人	南総郷土文化研究会誌	南総郷土文化研究会
51	1967	落合忠一	市原市の城郭跡について	市原地方史研究3	市原地方史研究会
52	1967	平野元三郎	天正以前の人大多喜城下町	千葉文庫1	千葉県文化財保護協会
53	1967	渡辺包夫	大多喜城の変遷	千葉文庫1	千葉県文化財保護協会
54	1967	篠丸頼彦	大多喜城下町の構造と機能	千葉文庫1	千葉県文化財保護協会
55	1967	森澤・川村優	大多喜の調査覚え書	千葉文庫1	千葉県文化財保護協会
56	1967	田村逸郎	要害城縁記	鴨川6・7	鴨川図書館
57	1967	野村みお	鴨川史跡・東家伝と金山城跡	鴨川8	鴨川図書館

58	1968	森輝・川村優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文庫 2	千葉県文化財保護協会	伊南城の落城について	房総の郷土史特集号	千葉県郷土史研究連絡協議会
59	1969	田丸栄二	袖津城跡	市原地方史研究 6 号	市原地方史研究会	古城跡踏査雑記	千葉県の歴史 16 号	千葉県
60	1969	森輝・川村優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文庫 3	千葉県文化財保護協会	中世後期土家層に関する研究序説	房総の郷土史 6 号	千葉県郷土史研究連絡協議会
61	1969	清川一史	城郭・別冊日本中世城郭資料第 1 集	城郭	日本城郭学会研究会	上総権平広常の居城について - 布施城・柳沢城	東総文化 3 号	東総文化連絡協議会
62	1970	森輝・川村優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文庫 4	千葉県文化財保護協会	万木城とその城主	東総文化 3 号	東総文化連絡協議会
63	1970	落合忠一	佐瀬城跡をたずねて	市原地方史研究 7	市原地方史研究会	上総伊北・大野城について	千葉県の歴史 19 号	千葉県
64	1970	落合忠一	佐瀬城跡をたずねて	南総郷土文化研究会会誌 7	南総郷土文化研究会	御園生城址と池和田城址	さざなみ 20 号	地域研究会
65	1970	千葉新聞社	郷土史周辺・久留里城址とその周辺	週刊千葉 279~284	千葉新聞社	水更津市真里谷城址の調査	考古学ジャーナル 179	ニューサイエンス社
66	1970	清川一史・野口英	城郭・別冊日本中世城郭資料第 3 集	城郭	日本城郭学会研究会	発掘された中世城郭について	千葉県文化財センター研究紀要 5	千葉県文化財センター
67	1971	森輝・川村優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文庫 5	千葉県文化財保護協会	酒井東金城主の衆の編成について	房総路 10 号	押尾孔版社
68	1971	小高清	狩野氏光福寺建設と作田明王院の伝承	総南文化 13	総南文化研究会	中村てい	上総市原 5 号	市原文化財研究所
69	1971	千葉新聞社	郷土史周辺 千本城とその周辺	週刊千葉 285・286	千葉新聞社	鈴木浩	千葉県の歴史 26 号	千葉県
70	1971	清川一史	上総真里谷城	城郭史研究 11 号	城郭史研究会	川名登	館山城についての一考察	千葉敬愛短期大学
71	1971	清川一史	房総の中世城郭	千葉県の歴史 2 号	千葉県	佐久間南	千葉文庫 20 号	千葉県文化財保護協会
72	1971	中村恵次	千葉県中世近世遺跡調査	千葉県の歴史 2 号	千葉県	1985	市原市文化財センター	石川城跡
73	1972	森輝・川村優	大多喜藩の調査覚え書	千葉文庫 6	千葉県文化財保護協会	1985	市原市文化財センター	村上天城跡
74	1972	小高清	伊北城と狩野氏	総南文化 14 号	総南文化研究会	1985	市原市文化財センター	真里谷城跡
75	1972	渡辺包夫	大多喜城天守絵図と本丸絵図	総南文化 14 号	総南文化研究会	1985	市原市文化財センター	千本城・大戸城跡
76	1972	篠丸頼彦	上総久留里城址	千葉文庫 6 号	千葉県文化財保護協会	1986	山武郡南部地区文化財センター	小野城跡
77	1972	鈴木浩	まほろしの龜山城 I	西上総文化会報 33 号	西上総文化会	1986	茂原市文化財センター	ふるさとの遺跡(中世) - 神田山第 3 遺跡 -
78	1972	君塚文雄	中近世遺跡調査の中から神余城・金山城址	館山市文化財保護協会会報 5	館山市文化財保護協会	1986	小高清	伊北の狩野氏
79	1972	生稲龍爾	岡本城址	富満の文化 I 号	富満町教育委員会	1986	市原市文化財センター	大羽根城跡
80	1973	渡辺包夫	城下町大多喜の今昔	千葉文庫 7 号	千葉県文化財保護協会	1986	市原市文化財センター	戦国時代末期の城郭から見た権力構造
81	1973	小高清	伊北城と狩野氏(二)発掘調査(1)	総南文化 15 号	総南文化研究会	1987	茂原市文化財センター	神田山第 3 遺跡・本納城外郭跡
82	1974	小高清	伊北の狩野氏(その 1)	千葉文庫 8 号	千葉県文化財保護協会	1987	中世城郭研究創刊号	中世城郭研究創刊号
83	1974	鈴木浩	まほろしの龜山城 II	西上総文化会報 35 号	西上総文化会	1988	達山成一	東金酒井氏の居城 - 東金城について
84	1974	高橋実	金山城について	西上総文化会報 35 号	西上総文化会			
85	1974	伊藤一男	房総における中世の城郭遺跡	房総の郷土史 1 号	千葉県郷土史研究連絡協議会			
86	1975	朝生得一	龜山城の秘話	上総文化 2 号	上総郷土文化研究会			
87	1975	田村実	和田氏終るの地・上総荊城	千葉文庫 9 号	千葉県文化財保護協会			
88	1977	生稲龍爾	宮本城と里見家の内紛	富満の文化 3 号	富満町教育委員会			
89	1977	君塚文雄	城郭の変遷と房州の古城	館山市文化財保護協会会報 10	館山市文化財保護協会			
90	1978	清川一史	山武郡の中世城郭	歴史手帖 52	名著出版			
91	1978	小高清						
92	1978	白井常之						
93	1978	伊藤一男						
94	1979	清水量						
95	1979	川城昭三						
96	1980	橋口定志						
97	1980	府島清						
98	1980	牛房茂行						
99	1980	菊池真太郎						
100	1982	古河力						
101	1983	中村てい						
102	1983	鈴木浩						
103	1983	川名登						
104	1985	佐久間南						
105	1985	市原市文化財センター						
106	1985	市原市文化財センター						
107	1985	平野雄之						
108	1985	光江章						
109	1986	山武郡南部地区文化財センター						
110	1986	茂原市文化財センター						
111	1986	小高清						
112	1986	市原市文化財センター						
113	1986	柴田龍司						
114	1987	茂原市文化財センター						
115	1987	柴田龍司						
116	1988	達山成一						

117	1988	松岡進	戦国期城館遺構の史料 的利用をめぐって	中世城郭研究 2号	中世城郭研究会
118	1988	市原市文化財セン ター	白船城跡	市原市文化財セン ター年報昭和61年度	市原市文化財セン ター
119	1988	君津市文化財セン ター	金谷城跡	君津市文化財セン ター年報 6	君津市文化財セン ター
120	1989	山武郡南部地区文化 財センター	小野城跡	山武郡南部地区文化 財センター年報 4	山武郡南部地区文化 財センター
121	1989	市原市文化財セン ター	白船城跡(2次)	市原市文化財セン ター年報昭和62年度	市原市文化財セン ター
122	1989	君津市文化財セン ター	蔵玉砦跡	君津市文化財セン ター年報 7	君津市文化財セン ター
123	1989	柴田龍司	房総の「戦国期城下集 落」小考	中世城郭研究 3号	中世城郭研究会
124	1989	嶋田浩司	館野陣屋跡出土遺物の 新発見	研究連絡会誌30号	千葉県文化財セン ター
125	1990	八巻孝夫	後北条氏領国の馬出	中世城郭研究 4号	中世城郭研究会
126	1990	高梨俊夫	下ノ坊遺跡	季刊自然と文化30号	観光資源保護財団
127	1990	木更津市教育委員 会	千葉県道跡群確認調査 報告書		木更津市教育委員 会
128	1991	長生市文化財セン ター	戦国時代の大名と城郭 跡ー長南城の調査から	郷土の文化財12号	長生市文化財セン ター
129	1991	君津市文化財セン ター	蔵玉砦跡	君津市文化財セン ター年報 8	君津市文化財セン ター
130	1991	井上哲朗	大野城跡の発掘調査	千葉史学18号	千葉歴史学会
131	1991	津田芳男	岩川遺跡(館跡)	千葉史学18号	千葉歴史学会
132	1991	諸星知義	金谷城跡の調査	千葉史学18号	千葉歴史学会
133	1991	高梨俊夫	下ノ坊遺跡B地点	千葉史学18号	千葉歴史学会
134	1991	小野正敏	房総の城館出土陶磁器 の問題	千葉史学18号	千葉歴史学会
135	1991	柴田龍司	中世城館跡と考古学 ー課題と展望	千葉史学18号	千葉歴史学会
136	1991	笹生衛	房総の中世土器様相に ついて	史館23号	史館同人
137	1991	佐藤博信	房総における天文の内 証の歴史的位置	おだわらー歴史と文 化5号	小田原市
138	1992	柴田龍司	郷跡や郭から出土する 石塔	中世城郭研究 6号	中世城郭研究
139	1992	滝川恒昭	房総里見氏の歴史過程 における「天文の内証」 の位置付け	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
140	1992	小高春雄	城郭史におけるひとつ の画期	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
141	1992	柴田龍司	「曲輪」について	千葉城郭研究 2号	千葉城郭研究会
142	1992	吉野利春	大多喜城(歴史城跡)と その周辺	研究員紀要	千葉県立総南博物館
143	1992	鈴木庄一	近世大多喜城について	研究員紀要	千葉県立総南博物館

144	1992	吉野利春	山中城跡(堀之内館跡) とその周辺	研究員紀要	千葉県立総南博物館
145	1993	山武郡市文化財セン ター	田向城跡	山武郡市文化財セン ター年報 8	山武郡市文化財セン ター
146	1993	柴田龍司	笹子城の概要	研究連絡誌37号	千葉県文化財セン ター
147	1993	柴田龍司	小瀬川流域における中 世遺跡の変遷(中世後 期の様相)	研究連絡誌37号	千葉県文化財セン ター
148	1994	木野和記・櫻井義史	分目要害遺跡	市原市文化財セン ター遺跡発表会要旨	市原市文化財セン ター
149	1994	浜名敏夫	小弓公方の家臣上総惟 津氏	市原市文化財研究18号	市原市教育委員会
150	1994	佐藤博信	二階堂氏と安房国北 郡一特に「二階堂文書」 を通じて	鎌倉74号	鎌倉文化研究所
151	1994	佐藤博信	房総の中世後期にお ける寺院と権力一特に日 我「妙本寺年中行事」 を通じて	日本史研究378	日本史研究会
152	1994	鈴木英吾	私の考古学日記(能満 府中城と市原の城郭に ついて)(上・高梨の城 跡)	市原市文化財セン ター研究紀要II	市原市文化財セン ター
153	1994	滝川恒昭	房総里見氏と江戸湾の 水上交通	千葉史学24号	千葉歴史学会
154	1994	柴田龍司	村落型城郭から都市型 城郭へ	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
155	1994	滝川恒昭	戦国期江戸湾岸にお ける「海城」の存在形態	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
156	1994	遠山成一	阿能国境に分布する城 館跡についてー栗山 川・高谷川水系を中心 に	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
157	1994	小高春雄	真里谷「新地」の城に ついて	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
158	1994	浜名敏夫	上総惟津氏の居城に ついて	千葉城郭研究 3号	千葉城郭研究会
159	1995	柴田龍司	中世城館の構造とその 変遷ー千葉県内の発掘 成果を通じて	千葉県文化財セン ター研究紀要16号	千葉県文化財セン ター

発掘・測量調査報告書

文庫番号	発行年	編 著 者	書 名	発 行 者
160	1960	山岡俊明・上田勇次 郎	館山城の考察	
161	1973	伊藤正雄	惟津城の歴史一本丸と内堀の試掘について	市原市教育委員会
162	1973	大場啓雄・乙益重隆	上総菅生遺跡(昭和47年度第1期調査)	木更津市教育委員会
163	1974	奥田直栄・吉井宏	上総大多喜城本丸趾発掘調査報告書	千葉県教育委員会
164	1976	平岡和夫	高砂城址	松尾町教育委員会

165	1976	伊藤一男	小堤要客城跡調査概報一横芝町文化財総合調査報告書第3集	横芝町教育委員会
166	1976	伊藤一男	小堤要客城跡調査概報一第一郭土塁遺構に関する発掘報告	横芝町教育委員会
167	1976	伊藤一男	小堤要客城跡	横芝町教育委員会
168	1976	大野城趾調査団	大野城趾の測量調査	立教大学考古学研究会
169	1976	篠丸順彦	川原中近世城跡調査概報	袖ヶ浦町教育委員会
170	1977	篠丸順彦	千葉県木更津市晴西台遺跡調査概報	晴西台遺跡埋蔵文化財発掘調査団
171	1977	後藤和民・菊池義次他	松部	千葉県文化財保護協会
172	1978	伊藤正雄・橋口定志	大野城発掘調査概報	大野城緊急発掘調査団
173	1978	小室栄一・川名登	館山城調査概報一第1次	館山城跡調査会
174	1979	小高春雄	袖ヶ浦町川原井樋爪	樋爪遺跡発掘調査団
175	1979	伊藤正雄・小高春雄	上総久留里城	君津市教育委員会
176	1979	伊藤正雄・牛房茂行	木更津市真里谷城趾一遺跡確認調査概報	木更津市教育委員会
177	1979	菊池真太郎・内野美三夫	館山城調査概報一第2次	館山城跡調査会
178	1980	大場智雄・乙益重隆	上総菅生遺跡	中央公論美術出版
179	1980	千葉県教育庁文化課	千葉県記念物実態調査報告書1一飯野陣屋跡	千葉県教育庁文化課
180	1980	菊池真太郎他	館山城調査概報〈第三次〉	館山城跡調査会
181	1981	小室栄一他	千葉県中近世城跡研究調査報告書第1集「佐貫城」〔本佐倉城〕	千葉県教育委員会
182	1981	野中敬他	金谷城跡一ノノ丸発掘調査報告	金谷城跡調査会
183	1982	中山吉秀・天野努	千葉県中近世城跡研究調査報告書第2集「森山城」〔本納城〕	千葉県教育委員会
184	1982	稲山林蔵	飯野陣屋堀口遺跡調査報告	堀口遺跡調査会
185	1983	大和久重平	堀谷周路館跡の研究	大和久重平
186	1983	大和久重平	堀谷周路遺跡	山武町教育委員会
187	1983	平岡和夫	鶴谷久保内遺跡	長町町教育委員会
188	1983	中滝城趾調査団	上総国・中滝城趾1	立教大学考古学研究会
189	1983	加藤正信・柳晃	千葉県中近世城跡研究調査報告書第3集「大友城」〔坂田城〕	千葉県教育委員会
190	1984	大和久重平	一宮城跡城ノ内遺跡発掘調査報告書	一宮町教育委員会
191	1984	藤原均	城ノ内遺跡調査報告書	一宮町城ノ内遺跡調査会
192	1984	鈴木英吾	石川城跡	市原市文化財センター
193	1984	伊藤正雄・牛房茂行他	真里谷城跡	木更津市教育委員会
194	1984	木内達彦	館山城跡鹿島堀発掘調査報告書	館山城跡鹿島堀調査会
195	1984	天野努・柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書第4集「稻村城」〔白井城〕	千葉県教育委員会
196	1985	谷旬	本納城外郭跡	茂原市文化財センター
197	1985	平野雅之	真里谷城跡	君津市文化財センター

198	1985	小沢洋	飯野陣屋跡発掘調査報告書	富津市教育委員会
199	1985	石倉亮治・伊藤智樹	千葉県中近世城跡研究調査報告書第5集「大崎城」〔万喜城〕	千葉県教育委員会
200	1986	石本俊則	千葉県東金市小野城趾	山武郡南部地区文化財センター
201	1986	大多喜町根古屋城趾調査会	千葉県夷隅郡大多喜町 根古屋城跡確認調査報告書	大多喜町根古屋城趾調査会
202	1986	鈴木英吾	大羽根城跡跡一南部外郭の測量調査	市原市教育委員会
203	1986	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書第6集「岡本城」〔佐是城〕	千葉県教育委員会
204	1986	山口直樹	村上城跡	市原市文化財センター
205	1987	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書第7集「飯館城」〔鶴木城〕	千葉県教育委員会
206	1988	鴨田浩司	千葉県中近世城跡研究調査報告書第8集「山崎城」〔飯野陣屋〕	千葉県教育委員会
207	1988	諸星知義・甲斐博幸	金谷城跡	君津郡市文化財センター
208	1987	藤原均	館山城跡第4次調査報告書	第4次館山城跡調査会
209	1989	西山太郎・井上哲朗	千葉県中近世城跡研究調査報告書第9集「東金城」〔城山城〕	千葉県教育委員会
210	1989	諸星知義	蔵玉砦跡	君津郡市文化財センター
211	1989	佐生衛	外真輪遺跡、八幡神社古墳発掘調査報告	千葉県文化財センター
212	1990	佐生衛	千葉県中近世城跡研究調査報告書第10集「惟津城」〔大堀城〕	千葉県教育委員会
213	1990	三浦和樹・津田芳男	岩川・今泉遺跡	長生郡市文化財センター
214	1990	諸星知義	蔵玉砦跡	君津郡市文化財センター
215	1990	高梨俊夫	下ノ坊遺跡B地点発掘調査報告書	千葉県文化財センター
216	1990	箕島正弘	袖ヶ浦町内遺跡発掘調査報告書 久保田城跡・下向山遺跡	袖ヶ浦町教育委員会
217	1991	津田芳男	長南城跡	長生郡市文化財センター
218	1991	忍澤成規	平成2年度市原市内遺跡発掘調査報告	市原市教育委員会
219	1991	井上哲朗	松尾町山室城跡	千葉県文化財センター
220	1991	高梨俊夫	千葉県中近世城跡研究調査報告書第12集「峰上城」	千葉県教育委員会
221	1992	矢野洋一	君津市内遺跡発掘調査報告書 久留里城跡	君津市教育委員会
222	1993	山下亮介	立山城跡	千葉市教育委員会
223	1993	津田芳男	長南城跡確認調査報告書	長南町教育委員会
224	1993	津田芳男他	桂遺跡群発掘調査報告書 神田山第III遺跡	長生郡市文化財センター
225	1993	長生郡市文化財センター	千代丸・カノ横穴墳墓群	長生郡市文化財センター
226	1993	半澤幹雄	千葉県中近世城跡研究調査報告書第13集「鶴ヶ城」〔亀ヶ城〕	千葉県教育委員会
227	1993	諸星知義	飯野陣屋二の丸跡	君津郡市文化財センター
228	1993	小高春雄	千葉県中近世城跡研究調査報告書第14集「土気城」〔池和田城〕	千葉県教育委員会

229	1994	柴田龍司	千葉県中近世城跡研究調査報告書第15集「道海城」	千葉県教育委員会
230	1995	滝川恒昭・遠山成一	葛ヶ崎城跡調査報告書	天津小湊町

単行本

文献番号	発行年	編著者	書名	発行者
231	1908	斎藤夏之助	安房志	多田屋書店
232	1933	大野太平	房総里見氏の研究	宝文堂書店
233	1950	千葉県史料研究会	千葉県史料研究会	千葉県史料研究会
234	1959	清水浦次郎他	東金史話	東金市教育委員会
235	1961	大塚伸	古城をめぐる	人物往来社
236	1962	大塚伸	名城名鑑	人物往来社
237	1963	千葉輝風	館山城趾	日本城郭協会
238	1964	千葉輝風	館山城趾後記	日本城郭協会
239	1967	内田栄一他	日本城郭全集 3	人物往来社
240	1967	川名正義	館山の文化財	館山市文化財保護協会
241	1967	林義雄	笹子城実地調査概況報告	
242	1968	川名登	南総の豪雄・里見義興	人物往来社
243	1969	池田和弘	神奈百年史	館山市神奈小中学校 P T A
	1969	島羽正雄編	日本城郭史論叢	雄山閣
244		鶴田恵吉	庁南城を求めて	
245		渡辺包夫	上総大多喜根古原城	
246		千葉輝風	里見・北条氏の抗争に就いて 附館山城趾	
247	1970	佐久間謙之助	有吉城	
248	1970	林義雄	矢那大坪城趾を探る	
249	1970	林義雄	幻の譜西城	
250	1970	林義雄	有吉城趾探訪中間報告書	
251	1970	林義雄	中尾城跡探訪中間報告書	
252	1973	藤岡謙二郎編	地形図に歴史を読む 5 (里見氏の興亡とその居城)	大明堂
253	1974	林義雄	笹子城探訪の手引	
	1975	地方史研究協議会・大坂史学会	地域概念の変遷	雄山閣
254		伊藤一男	千葉県における中世の城郭遺跡	
255	1976	八角静	高砂城趾 高砂城を含む蕨木城跡について	松尾町教育委員会
256	1976	林義雄	久留里城	上総郷土文化研究会
257	1979	久留里城再建協力会	久留里城跡	久留里城再建委員会
258	1980	館山市立船形小 P T A	船形史考	館山市立船形小 P T A
259	1980	大木衛他	日本城郭大系 6 千葉・神奈川	新人物往来社

260	1981	千野原晴方	房総里見水軍の研究	寄書房
261	1982	千葉吉男	長塚藩史考	館山市文化財保護協会
262	1983	川名登	房総里見一族	新人物往来社
263	1984	西ヶ谷恭弘・甘利一馬	城郭と城下町 2 関東	小学館
264	1986	千葉県教育庁文化課	房総のあけぼのⅢ 古代のむらと中世の城	千葉県教育委員会
265	1987	三島正之他	図説中世城郭事典(一)	新人物往来社
	1988	中世東国史研究会編	中世東国史の研究	東京大学出版会
266		市村高男	中世城郭史研究の一視点	
267	1988	今井博他	わがふるさと長南	長南町教育委員会
268	1990	遠山成一他	千葉県歴史の道調査報告書 9 御成街道附土気往還・東金往還	千葉県教育委員会
269	1991	伊藤一男	房総戦国土豪の終焉	寄書房
270	1991	西ヶ谷恭弘	戦国の城(上) 目に見る築城と戦術の全貌	学習研究社
271	1991	小高春雄	長生の城	小高春雄
	1991	石井達・萩原三雄編	中世の城と考古学	新人物往来社
272		柴田龍司	中世城郭の画期一館と城から館へ	
273	1993	岡田晃司	図録 里見氏の城と歴史	館山市立博物館
274	1994	山阿俊明	館山城とその城下町	中島書店
	1994	千葉県文化財センター	房総考古学ライブラリー 8 歴史時代(2)	千葉県文化財センター
275		井上哲朗	中世の城と館	
276		嶋田浩司	近世から現代へ	
	1995	網野善彦他	中世の風景を読む 2	新人物往来社
277		市村高男	中世東国における宿の風景	
	1995	峠岸純夫他	中世東国の物流と都市	山川出版社
278		柴田龍司	海城からみた流通と交通	
	1995	東総文化財センター	シンポジウムよみがえる藩本城跡	東総文化財センター
279		柴田龍司	考古学からみた中世城郭の構造	

◇下総国補遺

文献番号	発行年	編著者	論文名	書名	発行者
1	1994	柴田龍司	村落型城郭から都市型城郭へ	千葉城郭研究 3 号	千葉城郭研究会
2	1994	外山信司	白井根古屋城と堀古栗飯原氏について	千葉城郭研究 3 号	千葉城郭研究会
3	1994	遠山成一	阿総国境に分布する城館跡についてー栗山川・高谷川水系を中心にー	千葉城郭研究 3 号	千葉城郭研究会
4	1994	清川一史	成田市の中世城郭	千葉城郭研究 3 号	千葉城郭研究会

5	1995	井上哲朗	房総における中世城郭の築城から廃城—印西町小林城の発掘調査から	千葉県文化財センター研究紀要16号	千葉県文化財センター
6	1995	柴田龍司	二つのおゆみ城	千葉いまわかし8号	千葉市教育委員会

発掘・測量調査報告書

文献番号	発行年	編著者	書名	発行者
7	1995	香取都市文化財センター	鵜崎天神台遺跡	香取都市文化財センター
8	1995	木内達彦他	本佐倉城跡	印旛都市文化財センター

単行本

文献番号	発行年	編著者	書名	発行者
	1994	千葉県文化財センター	房総考古学ライブラリー8 歴史時代(2)	千葉県文化財センター
9		井上哲朗	中世の城と館	
10		嶋田浩司	近世から現代へ	
	1995	東総文化財センター	シンポジウムよみがえる篠本城跡	東総文化財センター(シンポジウムレジュメ集)
11		道澤明	篠本城跡の調査成果	
12		伊藤一男	中世篠本郷の武士と村落	
13		小野正敏	篠本城の焼物が語ること	
14		椎名幸一	東総の中世城郭	
15		柴田龍司	考古学からみた中世城館の構造	
16		橋浦芳朗	篠本城跡の仏教遺物	
17		遠山成一	栗山川水系の中世城館跡について	

<補遺> 発掘・測量調査報告書

文献番号	発行年	編著者	書名	発行者
280	1994	山武都市文化財センター	田向城跡	山武都市文化財センター他

東金市

酒蔵城跡	234, 259
城板城跡	234
東金城跡	1, 4, 6, 100, 116, 209, 233, 234, 239, 259, 264, 268, 269, 273, 275
東金御殿跡	4
小野城跡	109, 120, 200, 234
久我城跡	6, 233, 234
田間城跡	234, 239
大関城跡	4, 6, 233, 234, 239

芝山町

岩山城跡	6, 233
飯櫃城跡	4, 6, 61, 90, 115, 123, 205, 233, 239
朝倉城跡	6
上薬城跡	6
大台城跡	4, 6, 61, 90, 233, 239
田向城跡	145, 259, 265, 275, 280
山中北城跡	4, 6, 61, 90, 233, 239, 259

横芝町

小堤要害跡	19, 61, 85, 165, 166, 167, 254, 259
長倉岩跡	19
坂田城跡	4, 6, 19, 61, 156, 189, 239, 254, 259, 264, 265
浜手要害跡	19

松尾町

山室城跡	4, 6, 11, 27, 141, 219, 233, 275
金尾城跡	11, 27, 239
小川館跡	27
大蔵城跡	11, 27, 239
八田岩跡	27
蕪木城跡	11, 164, 239, 255, 259
松尾城跡	61

山武町

壺谷周路遺跡	33, 34, 154, 159, 185, 186, 279
森城跡	34
壺谷城跡	4, 6, 33, 34, 93, 233, 239
木原城跡	34, 269
城の台城跡	34
八幡城跡	34
椎崎城跡	4, 6, 34, 61, 233, 239

成東町

津辺城跡	6, 31, 61, 71, 85, 99, 125, 254, 259, 264, 265
成東城跡	1, 4, 6, 31, 61, 93, 99, 233, 239, 259
早船城跡	31
富田城跡	31
上横路館跡	31
小松館跡	31

大網白里町

小西城跡	4, 6, 30, 61, 234, 239
大網城跡	6, 30, 234, 268
清名幸谷城跡	30
永田城跡	30

茂原市

神田山第II・	110, 114, 224, 271
第II遺跡	
本納城跡	3, 6, 10, 46, 141, 183, 196, 233, 239, 264, 271
新戸城跡	271
真名宿谷城跡	271
真名城跡	264, 271
小林城跡	271
殿谷城跡	271
鷲巣山岩跡	271
藻原寺館跡	271
石神城跡	271
上永吉城跡	271

長柄町

猿谷岩跡	225
立島岩跡	271
榎本城跡	6, 21, 264, 271
高山城跡	21, 271

白子町

城之谷城跡	271
-------	-----

長南町

岩川館跡	131, 159, 213, 269, 271, 272, 275
千手堂城跡	271
千田城跡	271
長南城跡	1, 3, 6, 15, 92, 128, 217, 223, 233, 244, 259, 264, 267, 269, 271, 273, 275

利根里城跡	6, 271	光福寺館跡	68
城ヶ谷(新)跡	271	大多喜町	
横古屋城跡	271	大多喜根古屋城跡	35, 142, 201, 259, 273
下芝原城跡	271	大多喜城跡	1, 6, 7, 35, 47, 52, 53, 54, 55, 58, 60, 62, 67, 73, 75, 80, 99, 134, 143, 163, 233, 239, 259, 263, 264, 269, 273, 275
堀ノ内城跡	271	小田代城跡	6, 7, 35
長生村		堀之内館跡	35, 144
城之内城跡	271	大原町	
金田新火館跡	271	伊南館跡	91
陸沢町		日在城跡	6, 7, 94, 233, 264
跡見城跡	3, 6, 233, 239, 264, 271	山田城跡	6
大御館跡	3, 104, 233, 264, 271	小浜城跡	6, 7, 66, 259, 278
殿部田城跡	271	布施殿台城跡	6, 233
礎城跡	271	金山城跡	6, 7
一言町		堀之内館跡	7
一宮城跡	1, 3, 6, 134, 190, 191, 271, 273	殿古館跡	7, 94
上ノ原城跡	271	御宿町	
高塔城跡	3, 6, 239, 264, 271	最明寺裏城跡	36
勝浦市		市原市	
新戸岩跡	6, 7	菊間館跡	5, 239
興津城跡	6, 7, 233, 260, 265, 273	菊間藩庁跡	5, 233, 239, 259
松部城跡	171	八幡陣屋跡	5, 239, 259
吉尾城跡	6, 7, 260, 278	八幡御所推定地	1, 5, 32, 239, 259
勝浦城跡	1, 6, 7, 233, 242, 259, 260, 262, 263, 264, 269, 273	白船城跡	32, 118, 121, 218, 239, 259
碑町		高田城跡	6, 239, 259
御館城跡	26	市原城跡	259
樺木城跡	26	堀井戸館跡	259
鶴ヶ城跡	3, 6, 25, 26, 226	酒井戸陣屋跡	5, 101, 239
高部城跡	26	五井陣屋跡	1, 5, 239, 259, 263
矢竹城跡	6, 7, 26, 233	能満城跡	152, 259
中滝城跡	26, 188, 275	村上城跡	5, 6, 106
小高城跡	26	大成城跡	32, 259
臼井城跡	6, 7, 26, 233	葉木城跡	259
夷隅町		大坪城跡	239
権現城跡	7	磯木城跡	5, 6, 32, 149, 158, 239, 259
万喜城跡	6, 7, 25, 66, 95, 123, 135, 199, 232, 233, 259, 264, 265, 269, 273, 275, 277	小野山城跡	259
国府台城跡	6	椎津城跡	5, 6, 16, 32, 51, 59, 136, 138, 141, 149, 155, 158, 161, 212, 232, 233, 239, 259, 264, 273
大野城跡	6, 7, 74, 81, 82, 96, 99, 111, 123, 130, 168, 172, 259, 265		

鶴牧陣屋跡	1, 5, 51, 233, 239, 259, 263	天神台城跡	6, 24, 157, 259
海保城跡	5, 6, 239	新栗子館跡	157, 259
宮原御所跡	32, 259	真里谷城跡	9, 16, 66, 70, 98, 107, 134, 136, 137, 157, 176, 193, 197, 233, 239, 259, 264, 265, 269, 270, 273, 275
神代城跡	259	若津市	
分目要害城跡	148	人見陣屋跡	12
万台城跡	259	下湯江陣屋跡	12, 259
高坂城跡	259	子安陣屋跡	259, 263
大桶城跡	259	三直城跡	6, 9, 12, 61, 233, 239, 259
土宇城跡	239, 259	藏屋敷道跡	12, 259
上高根城跡	152, 259	周東城跡	9, 259
南岩崎寄跡	259	市場代首屋敷跡	259
西国吉野跡	259	秋元城跡	1, 6, 9, 16, 18, 20, 239, 259, 273
真ヶ谷城跡	259	倉沢館跡	259
伊丹氏陣屋跡	5, 239, 259	奥畑寄跡	6, 9, 20, 239
佐是城跡	32, 63, 64, 152, 203, 239, 259, 264	戸崎城跡	6, 9, 22, 239, 259
牛久城跡	5, 239, 259	安住陣屋跡	259, 263
石川城跡	105, 192	川谷岩跡	259
鶴舞城跡	5, 239	向藤陣屋跡	259
池和田城跡	5, 6, 16, 32, 50, 97, 228, 233, 239, 242, 259, 262, 273	久留里城跡	1, 6, 9, 13, 16, 22, 65, 76, 99, 102, 175, 221, 233, 239, 242, 256, 257, 259, 262, 263, 264, 269, 273, 276
雀ヶ崎城跡	5, 6, 97, 239, 259	三本松陣屋跡	259
陣馬台寄跡	259	千木城跡	6, 9, 69, 108, 141, 239, 259
平蔵城跡	5, 6, 32, 140, 239, 259	大戸城跡	6, 9, 108, 239, 259
吉沢城跡	5, 239, 259	龜山城跡	9, 77, 83, 86, 239, 259
大羽根城跡	5, 6, 112, 202, 239	荏柄城跡	87, 259
根古屋城跡	259	三船山岩跡	16, 259
琵琶首館跡	5, 32, 239, 259	外菜輪道跡	211
木更津市		栗倉寄跡	6, 9, 20
貝洲陣屋跡	1, 259, 263	富津市	
膳西城跡	6, 9, 170, 239, 249, 259	飯野陣屋跡	1, 61, 124, 179, 184, 198, 206, 227, 259, 263, 264, 276
真武根陣屋跡	127, 259	富津陣屋跡	259
中尾城跡	6, 9, 14, 232, 233, 239, 242, 251, 259, 262	富津台場跡	259
大坪城跡	248, 259	佐貫城跡	6, 9, 23, 61, 181, 233, 259, 263, 269, 273
有吉城跡	6, 9, 16, 232, 239, 247, 250, 259	大坪山砲台跡	259
笹子城跡	6, 9, 14, 146, 147, 154, 232, 233, 239, 241, 242, 253, 259, 262, 273, 275, 279	岩坂砲台跡	259
上根岸館跡	9, 24, 239, 259	常城磐跡	259
山本由那城跡	6, 9, 22, 24, 239, 259		
要害城跡	24, 157, 259		

峰上城跡	23, 66, 141, 220, 232, 239, 259, 266, 273, 277	神余城跡	2, 6, 8, 78, 231, 233, 239, 240, 243, 259
天神山城跡	9, 239, 259, 278	鴨川市	
服部館跡	259	環苜屋敷跡	41
天羽城跡	259	金山城跡	2, 6, 8, 57, 78, 84, 231, 239, 240, 259
鳥海館跡	259	東条氏館跡	6, 8, 231, 239
竹ヶ岡陣屋跡	259	西郷氏館跡	8, 231, 239
君ヶ谷城跡	259	花房藩庁跡	2, 8, 239
造海城跡	1, 6, 9, 23, 48, 155, 229, 232, 233, 239, 242, 259, 260, 262, 270, 278	山之城城跡	2, 6, 8, 231, 239, 242, 259, 262
竹ヶ岡台場跡	259	中台峰城跡	6
金谷城跡	6, 9, 119, 132, 136, 155, 182, 207, 239, 259, 260, 273, 275, 278	鯉南町	
旗本山砦跡	23	勝山砦跡	231, 239
虚空蔵山城跡	23	勝山陣屋跡	2, 8, 231, 239
袖ヶ浦市		勝山城跡	6, 8, 155, 239, 259, 260, 278
蘆波砦跡	6, 9, 29, 61, 233, 239	安西館跡	2
久保田城跡	1, 6, 9, 29, 61, 155, 216, 233, 239	下ノ坊館跡	126, 133, 159, 215, 272, 275
打越砦跡	9, 17, 239	妙本寺砦跡	139, 151, 155
川原井城跡	17, 99, 169, 174	富山町	
大竹砦跡	9, 17, 239	宿要害砦跡	6, 37
小坪館跡	17	城山城跡	37
北口城跡	17	富山城跡	37
飽山市		市部要害山城跡	37
船形城跡	6, 258, 259	高崎要害山城跡	37
船形陣屋跡	2, 8, 231, 239, 258	富浦町	
長尾藩庁跡	2, 231	宮本城跡	2, 6, 8, 13, 88, 231, 232, 239, 242, 259, 262, 273
樺村城跡	2, 6, 8, 13, 39, 43, 66, 139, 195, 231, 232, 233, 239, 242, 252, 259, 262, 265, 273	岡本城跡	2, 6, 8, 13, 66, 79, 123, 154, 155, 231, 232, 239, 242, 259, 260, 262, 264, 265, 273, 275, 278
大井城跡	6, 89, 117, 240, 259	白浜町	
州崎砲台跡	2	白浜城跡	2, 6, 8, 39, 231, 232, 233, 239, 252, 259, 273
館山城跡	2, 6, 8, 13, 38, 39, 42, 47, 99, 103, 155, 160, 173, 177, 180, 194, 208, 231, 232, 233, 237, 238, 239, 242, 246, 252, 259, 260, 262, 263, 264, 270, 273, 274	長尾陣屋跡	239, 263
館山陣屋跡	2, 8, 231, 239	丸山町	
北条城跡	2, 6, 231	丸城跡	2, 6, 239, 259
北条陣屋跡	8, 239	石堂原城跡	2, 6, 259
鳥山城跡	2, 6, 8, 231, 233, 239, 259	和田町	
千田城跡	13, 232, 259	とうろ台城跡	259
山下城跡	6	三原城跡	2, 6, 8, 239, 259
		城山遺跡	6
		天津小湊町	

要害城跡	242, 262	木出城跡	1
葛ヶ崎城跡	2, 6, 8, 230, 231, 239, 259, 260, 278	八街町	
天津城跡	2, 6, 8, 231, 239, 259, 260	根古屋城跡	2
三芳村		佐原市	
滝田城跡	28, 259, 273	鶴崎城跡	7, 9
平松城跡	8, 239, 259	大栄町	
◇下総国浦波		馬洗城跡	1, 15
関宿町		多古町	
関宿城跡	10	上橋城跡	17
松戸市		多古城跡	17
小金城跡	9	志摩城跡	17
千葉市		並木城跡	17
御茶屋側殿跡	10	一鉄田城跡	3
生実城跡	6	銚子市	
小弓城跡	6	中島城跡	9, 14
印西町		八日市場市	
小林城跡	5, 8, 13	吉田城跡	14
成田市		大浦城跡	14
東和田城跡	4	新城跡	14
江弁須城跡	4	田久保城跡	14
寺台城跡	4	久方城跡	14
横谷城跡	4	旭市	
成毛城跡	4	江ヶ崎城跡	14
駒井野城跡	4	光町	
白子城跡	4	寒風城跡	14
羽鳥城跡	4	藤本城跡	11, 12, 13, 14, 15, 16, 17
佐倉市		岩室砦跡	14
佐倉城跡	10	小田部砦跡	14
臼井城跡	1, 13	田中砦跡	14
酒々井町		古城跡	14
本佐倉城跡	1, 8, 15	駒形城跡	14
長勝寺脇館跡	9		
四街道町			
池ノ尻館跡	1, 9, 13, 15		
鹿渡城跡	1, 9		
和良比姫込城跡	1, 9, 15		
福勝寺館跡	1		

	城名	年月日	史料	出典
1	東金 213-3	(天正3)9.14	芳春院周興願状	古1173
2		(天正3)8.28	北条氏政書状写	戦1801
3		年月日未詳	海保長玄書状	戦4108
4		年月日未詳	小田原一手役之書立写	戦4295
5		年月日未詳	北条家人数覚書	神9769
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
8	長南 427-9	(元龜3)2.8	土屋昌統書状写	譜130
		(天正5)9・	北条氏規書状	戦4025
10		天正8・11	日我書状	譜247
11		(天正17)3・10	北条氏政書状写	戦3430
4		年月日未詳	小田原一手役之書立写	戦4295
5		年月日未詳	北条家人数覚書	神9769
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
12	本納 210-2	*(永禄12)・12・28	北条氏康書状写	戦1368
13		(天正3カ)8・16	北条氏康書状	戦1797
1		(天正3)9・14	芳春院周興願状	古1173
14	真名(三上) 210-5		快元僧都記	神道体系
12	一宮 421-2	永禄12・12・28	北条氏康書状写	戦1368
13		(天正3カ)8・16	北条氏繁書状	戦1797
15		(天正3)8・23	北条家朱印状写	戦1799
16		(天正3)8・23	北条家朱印状写	戦1800
17		(天正3)8・28	北条氏政書状写	戦1801
18		(天正3)9・14	芳春院周興願状	神8233
19		天正4・9・13	日学覚書	里見氏の城と歴史
20		天正8・11	日我書状	譜247
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
21	万喜 442-3	永禄8・8・5	金澤頂私記奥書	譜223
22		(天正2)12・24	佐竹賢哲書状	北454
23		(天正2)12・24	佐竹賢哲書状	「上野家文書」
1		(天正3)9・14	芳春院周興願状	古1173
20		天正8・11	日我書状	譜247
24		*(天正11)・4・21	北条氏直書状写	戦2526
25		(天正17)6・22	松田憲秀・直秀連署覚書写	戦3464
5		年月日未詳	北条家人数覚書	神9769
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771

5	勝見 422-1	年月日未詳	北条家人数覚書	神9769
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
6	鶴ヶ城 445-3	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
7	(亀ヶ城)	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
26	小田喜 441-3	(永禄6カ)4・4	正木信茂書状	譜162
20		天正8・11	日我書状	譜247
27		(天正9)10・18	梶原政景書状写	外156
28		(天正9)11・23	太田資正書状写	外157
29		(天正9)11・24	梶原政景書状写	外158
30		(天正9)11・27	佐野為綱・小曾福胤連署書状	古1262
31		(天正11)10・11	酒井政成書状写	戦4129
32		(天正18)5・12	逸見信時書状	外159
33		年未詳10・29	日僅書状	譜203
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
34	興津 218-3	*(天正8)7・19	里見義頼書状	房総里見氏の研究
35		(天正9)2・2	正木憲時書状	商経論集22
36		(天正9)9・3	梶原政景書状写	神8657
37		(天正9)9・	里見義頼判物写	商経論集22
38		(天正9)11・16	里見義頼判物	商経論集22
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
39	勝浦 218-7	*(永禄10カ)6・27	北条氏政書状写	勝浦市史研究1
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
40	吉字 218-6	(天正9)1・3	岡本氏元書状写	甲斐園誌
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
41	惟津 219-38	(永正16)8・26	足利高基感状写	古545
42		*(永正16)9・10	足利高基感状写	古546
43		(永禄3)10・14	北条家朱印状写	戦648
44		(永禄12カ)2・29	千葉胤富書状	神7699
45		*(天正5)2・26	里見義弘書状	戦8364
46		(天正5カ)6・5	北条氏政書状	戦1919
14			快元僧都記	神道体系
45	有木 219-35	*(天正5)2・26	里見義弘書状	神8364
47		年未詳3・12	北条氏政書状写	小田原2194
48	池和田 219-85	*(永禄7)2・8	足利義氏書状	古1051
9		(天正5)9・晦	北条氏規書状	戦4025
5		年月日未詳	北条家人数覚書	神9769
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770

7	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771	74	天正5・12・2	北条氏規感状	史学論集21	
49	平三 219-99	応永25・6	一色左近将監軍忠状	外109	(天正7カ)1・29	足利義氏書状	古1444	
50		応永25・6	一色左近将監軍忠状	外110	(天正8)4・24	里見義頼書状	外263	
51	久保田 229 2	* 年不詳6・2	千葉胤富書状写	神7770	(天正8)7・5	里見義頼書状	戦4489	
52		年不詳12・11	松田憲秀書状	戦3940	* (天正8)11・24	足利家団感状写	古1128	
53	藏波 229-1	年未詳5・8	井手カ時吉・幸田カ昌重書状	戦4076	天正8・11	日我書状	書247	
14	真里谷 206-13		快元僧都記	神道体系	(天正11)10・11	酒井政辰書状写	戦4129	
54	天神台 206-11	天文6・5・24	北条氏綱書状	戦142	(天正12)6・18	太田道普書状写	千葉県の歴史41	
55		天文6・5・24	北条氏綱書状	戦143	年未詳6月	北条家伝馬手形	小田原2145	
14			快元僧都記	神道体系	年月日未詳	某書状写	譜127	
56	久留里 225-19	* (永禄3)5・9	北条氏康書状	戦628	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770	
57		永禄3・10・2	正木時茂書状案写	神7156	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771	
58		(永禄6)閏10・27	上杉輝虎書状案写	神7350	天文2・9・3	峯上之成摩利四天神口	戦金石1	
59		(元龜3カ)7月日	日促書状案	譜85	(天文23)2・27	北条家朱印状	戦459	
60		(元龜3カ)10・4	国吉信春書状	外203	* (天文23)2・27	北条家朱印状	戦460	
20		天正8・11	日我書状	譜247	永禄4・4・3	北条家朱印状写	戦695	
31		(天正11)10・11	酒井政辰書状写	戦4129	(永禄12)	北条氏康書状写	戦1370	
61		(天正16)10・7	北条家朱印状写	戦3377	年月日未詳	某書状写	神7668	
62		年未詳11・21	遠山某書状	戦4168	14	快元僧都記	神道体系	
63		年未詳8・17	里見義頼書状写	房総里見氏の研究	20	日我書状	書247	
6		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770	88	* 天正17・10・13	里見義康朱印状写	外268
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771	6	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
14			快元僧都記	神道体系	89	里見家永正元龜中書札留放書	千大人文研究17	
56	久留里 新地	(永禄3)5・9	北条氏康書状	戦628	14	快元僧都記	神道体系	
64		(永禄3)5・28	北条氏康書状写	戦631	90	北条氏康書状写	戦493	
20	千本 225-21	天忠8・11	日我書状	譜247	91	* 永禄2・12・10	いろは字奥書	譜140
65	龜山 225-23	天正8・12・19	里見義頼判物写	外179	53	年未詳5・8	井手カ時吉・幸田カ昌重書状	戦4076
6	小糸(秋元) 225-12	年月日不詳	関東八州諸城覚書	神9770	92	年月日未詳	日我弟子文名	譜72
7		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771	6	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
66	佐賀 226-5	永禄6・4・27	北条家朱印状	戦811	20	* 天正8・11	日我書状	譜247
67		(永禄6)4・27	北条家印判状	古1070	20	天正8・11	日我書状	譜247
68		(永禄7)10・9	足利義氏書状写	古1058	93	大永3・3・25	日置遺文	千葉城郭研究2
69		(永禄7)11・24	足利義氏感状写	古1062	94	天文2・8・23	北条カ昌感状	史学論集21
70		(永禄7カ)12・25	千葉胤富書状	神7161	95	年月日未詳	日促書状案	譜94
71		(永禄8)2・1	足利義氏感状写	古1050	6	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
72		(永禄9)7・3	芳華院同興書出	古1075	7	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
73		(永禄12)3・17	多賀谷神聯書状	千葉県の歴史41	89	里見家永正元龜中書札留放書	千大人文研究17	
60		* (元龜3カ)10・4	国吉信春書状	外203	96	年未詳8・28	里見義重書状	北557
19		天正4・9・13	日学覚書	里見氏の城と歴史	60	* (元龜3カ)10・4	国吉信春書状	外203
9		(天正5)9・晦	北条氏規書状	戦4025	97	(天正7)11・8	梶原政景書状写	北475

77	(天正8)7・5	里見義頼書状	戦4489
98	(天正9)6・21	梶原政景書状写	千葉県の歴史41
99	年未詳1・24	里見義頼書状	「上野家文書」
100	(天正14)6	梶原政景書状写	外931
101	天正17・10・19	岡本安泰奉納告文	「那古寺文書」
102	(天正19)6	日促書状案	諸95
103	年未詳2・20	里見義頼書状	「上野家文書」
53	年未詳5・8	并手カ時吉・幸田カ昌重書状	戦4076
6	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
7	年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
89		里見家永正元龜中書札留按書	千大文研究17
184	宮本カ 461-1	里見義義書状	房総里見氏の研究
14	滝田 464-2	快元僧都記	神道体系
105	館山 205-9	里見義頼書状	商経論集16
106	年未詳4・19	本間仲国書状	千葉県の歴史30
108	年月日未詳	里見家女房消息	外79
96	白浜 465-1	里見義義書状	北557
109	坂本	足利持氏御教書	外112
7	へびうか	関東八州諸城覚書	神9771

以下「旧下総国地域」補遺

	城 名	年 月 日	史 料	出 典
	土気	(永禄2・18)	酒井胤治書状	神7156
		(天正3)6・22	足利義氏書状	古1204
		(天正3)8・28	北条氏政書状写	戦1801
		(天正3)9・14	芳春院周興副状	古1173
		(天正14)9・4	北条家朱印状	戦2992
		年月日未詳	海保長文書状	戦4108
		*年月日未詳	酒井政辰書状	戦4135
		年月日未詳	小田原一手役之書立写	戦4295
		年月日未詳	北条家人政覚書	神9769
		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9770
		年月日未詳	関東八州諸城覚書	神9771
	大椎	元龜3・2・15	千葉胤富書状写	真壁1
	目吹	永禄5・1・13	篠田晴助感状写	猿378
	矢作		大森和尚語集	
	水浦	9・7	園秀書状	外750

諸=「千葉県史料中世諸家文書」 外=「千葉県史料中世諸家外文書」

戦=「古河市史資料中世編」 神=「神奈川県史料編3古代中世3下」

古=「古河市史資料中世編」 北=「北区史資料編古代中世1」 猿=「猿島町史資料編原始・古代・中世」 千金石=「千葉県史料金石篇1」 真壁=「真壁町史料中世編1」

1. 上記の表は、旧上総・安房両域に属する中世城郭のなかで、その城郭名のみえる史料を一覧化したものである。
2. 一口に城郭名のみえる史料といっても、その記され方は①城郭そのものをさす場合、②城郭が存在する地域・地名をさしているもの、③その城郭に居住しているところから、転じて城主を意味する場合(例・岡本 里見義頼)など多様である。したがって、史料中に城郭名のみえるものでも、それが城郭そのものをさしているのか、またちがった意味をもつものなのか、その判断は難しい。従ってこの場合、本来①の場合のみを対象とした方がより無難ではあろうが、③のような場合でもそれが城郭にまったく無関係の史料ともいい難い。そこでここでは、史料に登場する頻度の高い城郭については、①のケースを優先して、その内容によって取捨選択の作業をおこない、その反対の場合は、③のようなケースでも努めて採録することとした。
3. 検索の作業は、原則として刊本からおこなったが、ままた未刊のものからも採録した。また検索した刊本は多数にのぼり、史料の重複も多数認められたが、本報告書収録に際しては、代表的な刊本の表記や号数で統一した。
4. 近世成立の地誌・軍記類は検索の対象とはしたものの、その結果は省略した。
5. 表中特に重要と思われる史料は*印を付し、その内容を以下に掲載した。
6. 表中左端の番号は、史料の通し番号として便宜付したものである。なお史料に掲載した場合は、この番号をもつて示した。
7. 表中城郭名の右に付した数字は、本報告書で便宜付したその城郭のコード番号である。

(滝川恒昭)

尚、明日未明、

御座不候、番所之番者

□殿、理申候間、可相紹通候、以上

衆度令参候、仍明日五日

館山、爲番手御座不候、

爲共其處候、爲、謹言、

二日四日 義親(花押)

6 關東八州諸城算書 文解

「關東八州城之算」

關東八州城之算

一 小田原(小田原) 小田原

一 田原(田原) 田原

一 相模(相模) 相模

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

右六ヶ所北條氏領守

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

右六ヶ所北條氏領守

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

右六ヶ所北條氏領守

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

右六ヶ所北條氏領守

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 田原(田原) 田原

一 相模(相模) 相模

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

一 河内(河内) 河内

一 城山(城山) 城山

一 水原(水原) 水原

一 小山(小山) 小山

一 二本(二本) 二本

右之九ヶ所 里見左馬頭義安領分、最前より天下、歸定之妻也、安房・上總ニヶ國之生也、

Ⅲ 旧上総・安房国地域の主な城館跡の概要

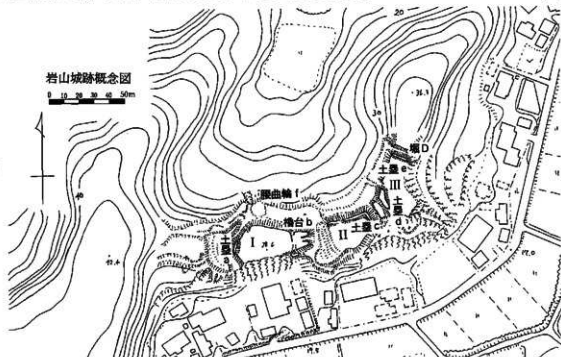
岩山城跡（山武郡芝山町岩山字谷）

立 地 芝山町の南北に流れる高谷川に向かい多数の城が築かれている。本城はその高谷川の支流浅川に開かれた谷の奥まった舌状台地上に築かれている。比高約20mの台地があるが、その先端で築かれておらず、200mの奥のピークを占地している。異例の占地といえよう。

構造の概要 L字型の台地上にある。曲輪は三つあり、曲輪Ⅰ、曲輪Ⅱ、曲輪Ⅲとする。主郭は最も高い曲輪Ⅰと考えられる。西端に土塁のaが櫓台状に突き出ており、堀Aはこの土塁aを包むようにカーブしながら走る。これは横矢を意識したもので、本城内では最も強力な防御となっている。東端は中央に道が開かれ遺構は壊されている。現状から推測すると櫓台があったと考えられる。南面も大きく破壊されている。曲輪Ⅰと曲輪Ⅱの間の堀は、曲輪Ⅱの壁面が崩れているため明瞭ではない。曲輪Ⅱは既述のように西面が壊されているが、東端はL字型の土塁cがよく残る。曲輪Ⅱと曲輪Ⅲの間に堀Cがあるが、幅8mほどの大きなものである。曲輪Ⅲは東面が大きく破壊されているため、本来の広さはわからない。堀Cに面する土塁dと尾根の先端方向に堀Dと土塁eがある。注目すべきは、土塁dで、曲輪Ⅱの土塁cと相対している。高さもほぼ同じなので、このことからすると、曲輪ⅡとⅢは同格の曲輪となってしまう。堀Dの外は台地先端であるが、遺構はない。この外、遺構は曲輪Ⅰの北面に腰曲輪fがある。この腰曲輪は曲輪Ⅲまでつづいている。また堀Aの台地続きは成形が認められず、曲輪とはいえない。以上のように、この城は小さな三つの小曲輪に分割される。この中では、高さからいって曲輪Ⅰが主郭と考えられるが、特に曲輪間の上下関係を表すものはない。むしろ、曲輪Ⅱの破壊された部分に土塁があったとすると、曲輪のそれぞれが独立的な地位を持つと考えられ興味深い。占地そのものが、丘陵の中ほどを占めることといい、曲輪間の上下関係が遺構から明瞭でないこと、虎口がはっきりしないことなど問題点が多い城である。

城の歴史 岩山城は中世文書には一切登場しないが、『総州山室譜伝記』には「岩山棚」として登場し、城主は山室氏の家臣「斎藤助四郎長谷辺の清長」とする。位置からいえば、飯櫃城から、1.2kmほどしかなく、尾根伝いにも連絡できるので、密接な関係を持った城であることは間違いない。ただし、奥まった場所であるため、眺望はきかないので飯櫃城の戦略的防御のために作られたものではなく、小土塁の要害としての城であろう。虎口は明瞭でないこと、曲輪が独立的なことは、やや古い時代をさし示すものといえそうである。

（八巻孝夫）



飯櫃城跡 (山武郡芝山町飯櫃字城ノ内地)

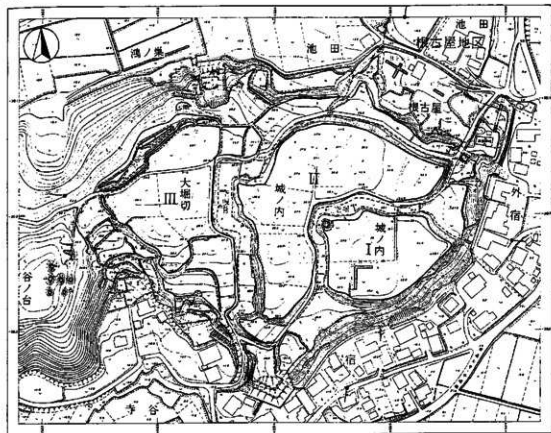
立地 飯櫃城は栗山川に注ぐ高谷川の中流西岸に突き出た標高約37mの台地上に占拠する。周辺水田面との比高差は約300mを測る。西台地基部を除く3方は水田。東側に幅約300mほど高谷川の氾濫原が広がる。

構造の概要 東西に伸びる台地に位置し、城域は東西約320m、南北約240mを計り、台地の先端部から西へⅠ～Ⅲの3か所の郭と東部に根古屋郭を付属させる。

郭は1本の堀切と2本の空堀により分割されている。主郭方向にやや低い梯段直線連郭の域である。

I郭は東端に位置する主郭で北西端に張り出した櫓台を設け星線には「折れ」が確認される。北・西を空堀で区画する。II郭は主郭をL字に囲み存在する最大の郭で西中央に出郭を設け星線には、「折れ」が確認される。西の空堀は上幅で約20～25mを測る。III郭は城正面を窓渡し西を張り出して堀切と土塁。北は「折れ」を持つ2重土塁、南は張り出しと腰郭群で構成される。I・II郭には土塁が確認されないが、存在していた可能性は指摘できよう。

城の歴史 芝山町飯櫃城は天正年間(1573～92)には飯櫃の地名が本七寺過去帳より確認できるが、城にかかるとは史料に乏しい。江戸中期に書かれた『総州山室藩伝記』には山室氏は戦国後期に本城を支配していた井田氏の重臣とされ、天文元年(1532)に築城し天正18年(1590)に滅ぶまで3代の本拠であったとしている。昭和61年に実施された確認調査でも当該期の資料を検出し、城の構造からも戦国末期の様相を示すことから、城主に關する程度の動向は示唆できよう。旧飯櫃村は文祿年間(1592～96)の村高が159石、戸数も20軒程度と生産性は低いことから在地領主の本城とは捉え難い。よって「最終的な城」は領主の領地支配と上級権力の要求により築城された可能性を指摘できよう。(木内達彦)



飯櫃城跡測量図 (『千葉県近代史研究調査報告書第7集』より)

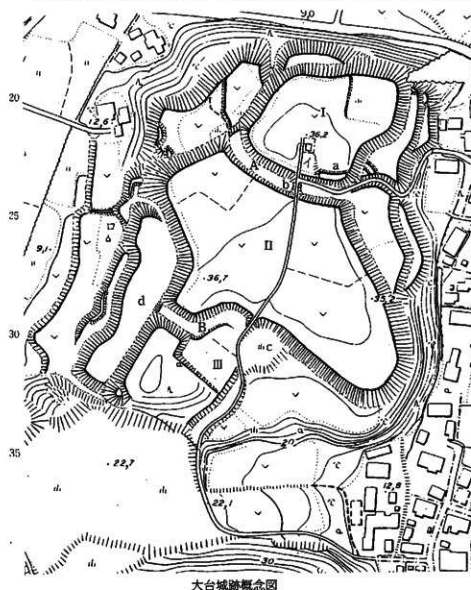
大台城跡 (山武郡芝山町大台字城之内地)

立地 芝山町をほぼ北から南へ流れて栗山川に注ぐ高谷川の左岸、支谷の形成した半島状台地に位置する。台地上の標高は約36m、周囲の水田面との比高差は約15mである。上総国と下総国との境に接する高谷川流域は、戦国期に重視され、大台城をはじめ、飯櫃城・田向城・山中城(いずれも芝山町)という井田氏の大規模な城郭が連続し、防衛線を形成するかのようである。その南端には、井田氏の本城である坂田城(横芝町)がある。

構造の概要 高谷川に沿った低地から西へ入り込む小支谷の北側を城域とする。半島状台地北端の郭Ⅰ、その南に広がる郭Ⅱ、さらに南にあつて小支谷に面した郭Ⅲに大別される。この他に各所に幅の広い腰曲輪が発達しており、大台城の大きな特徴となっている。

主郭である郭Ⅰは、空堀Aによって郭Ⅱと区画される。空堀の内側には土塁aが見られるが、近年まで虎口イの反対側にも土塁が存在した。なお空堀Aは東側・西側とも腰曲輪に達し、さらに集約の集落へと小道が通じている。郭Ⅱは土堀で郭Ⅰと連絡するが、広大な面積を有し、大兵力を駐屯させるにあふさい。その南には空堀Bが設けられている。郭Ⅲは大台城の入口をなすが、内部はいくつかに区画され、馬出状の地形にも見られるものの、耕地化のために大規模な改変が行われ、旧状は明らかではない。

西側の腰曲輪dは虎口Iに通じ、技巧的な形態を示すが、全体的に見ると大台城は土塁や空堀があまり発達して



大台城跡概念図

らず、曲輪が広い割には技巧的な縄張とは言えない。

以上のことから、坂田城、飯櫃城・田向城・山中城、山室城(松原町)という他の井田氏系の城郭と比較すると、古い様相を示す。

城の歴史 『総州山室藩伝記』によれば、井田氏は本拠を大台城から坂田城へ移したという。

永祿年間(1558～69)の横堀秀定書状写(『神保文書』『東史料贈家』)で、秀定は宛所の井田氏について「大台参勤費報」と記しており、大台城が井田氏の居城であったことが裏づけられる。しかし井田氏が坂田城に移ったため、大台城はその支城となり、さほど改修もうけなかったと考えられる。しかし天正18年(1590)の関東諸城覚書(『毛利文書』)には「わう大ノ城 板野刑部大夫 百五十キ」とあり、戦国最末期まで井田氏の城であった。(外山信司)

田向城跡（小池城跡）（山武郡芝山町小池字城山・城台）

立地 田向城は上総・下総の分水嶺を水源とする高谷川と大倉川に挟まれた台地の地峡部にあたる。高谷川中流西岸に突き出た標高約42mの舌状台地に占地する。周辺水田面との比高差約30m、3方は狭い谷津田となる。構造の概要 概ね南北に伸びる台地の先端部に位置し、城域は長軸350m、短軸200mである。

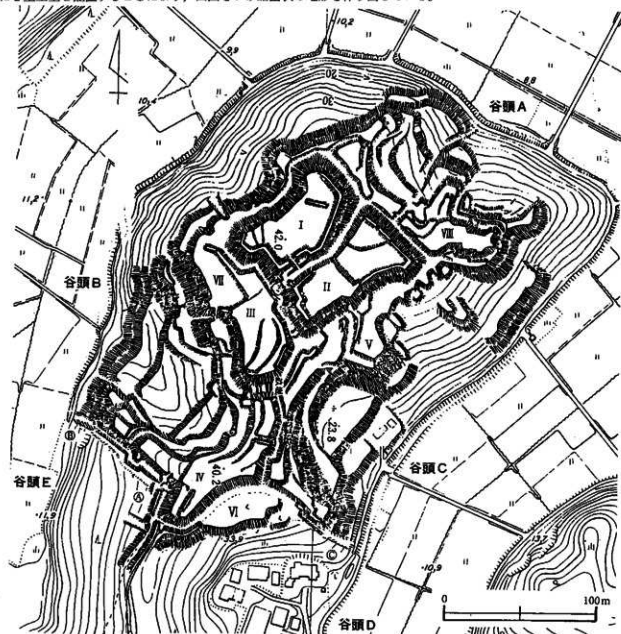
基本的な構造は独立状台地上段に主郭を置き副郭を並立させ、中段に小郭群、下段に腰郭を配置した「重層的な連郭の城」である。

主郭（Ⅰ郭）は直線的な「折れ」・「出折」と土塁を配置し、南西端に内折虎口を設ける。

Ⅱ郭は主郭の東に一段低く並列して設けられる。西北端は主郭西「出折」に対応し「出折」を設ける。

このⅡ郭の東・南・西の3面に階段状に小郭群が付属する。これらの郭は独立した防衛施設としての面懷を有するが各々干渉しあうことにより主郭への通路を複雑なものとしている。

腰郭群は小郭群を取り巻くとともに、城正面と勝手には複雑に配置されている。城正面の郭群は尾根状地形に腰郭・堅堀・土塁を組み合わせた複雑な通路を形成し、勝手は斜面地に対し階段状の腰郭の配置を基本形とするが斜面高端に2重土塁を配置することにより、凹凸をつけ巔曲状の地形を作り出している。



田向城跡概念図（山武郡市文化財センター「田向城」に一部加筆）

またすべての星線は自然地形に制約されず空堀端には溜土屋や高低差が設けられる。

平坦な作りをする千葉県北部の城の中で立体的な構成を順着に現した城といえよう。

周辺には城に関連した通称はなく、城山・城台という直接的な地名が残る。

城の歴史 芝山町小池地域は文祿年間（1592～96）の村高が824石と規模の大きな村で、現在でも芝山町の中心にあたる。また九十九里方面と下総を結ぶ交通の要衝にある。

小池の名称は永祿9年（1566）の金石文に「略 武射郡小池郷 略」と存在することにより確認されるが、城にかかわる資料は皆無である。江戸期に書かれた『総州山室譜伝記』には本地域を支配していた井田刑部大夫友胤が天文14年（1545）に築城したとしている。台地基部には字名として本地域の在地領主名である井田（字井田城）や急須賀氏（字急須賀氏）が残る、彼等の本貫地であった可能性は高いが、城との関係は不明である。

1994年に刊行された発掘調査報告書によれば城の存続時期を戦国末期の年代をあてている。最終的な城は戦国末期と考えられるが、出土遺物に康永元年（1345）銘の石板碑や15世紀中葉の瀬戸産陶器が含まれ、銭は永楽銭の出土が少ないことを考えると、14世紀中頃に在地領主の手により「館」等が築かれたと考えられ、15世紀も同様に機能していたのではないだろうか。16世紀後半に北条氏の勢力が直接的に本地域に浸透するに従い、在地武士団は北条氏に近い井田氏を中心に再編成されたために田向城の大改修を実施したと考えられよう。

また城は集落から離れており、その占地からも在地支配の城とは考えにくい。よって大改修の背景は交通の要衝を守ることと高谷川沿いの諸城の「後詰め」という北条氏の戦略上にあったのではないだろうか。（木内達彦）



田向城主郭遺構配置図（山武郡市文化財センター「田向城」に一部加筆）

山中北城跡 (山武郡芝山町山中)

立 地 山中南城の北約100mの隣接した舌状台地先端にある。湿地帯に突き出した要害の地である。

構造の概要 曲輪Ⅰは台地先端であるが、曲輪の中で最も低い。位置からいっても主郭にせざるをえないので、山中南城の堀Aと同様の堀を入れる。即ち堀Aと土塁a、bのセットで、曲輪面の低さをカバーし、あわせて中央に虎口Ⅰを開く。土塁aの西北に曲輪Ⅱがあるが、これは曲輪Ⅰと高低差はあるものの実質的に一体化した曲輪である。西方に対する防御を担っているが、曲輪面は広いので、主郭的にも使われたかもしれない。しかし、ここに入る明瞭な虎口はない。堀Aは大きくクランクするため、堀内を強力に抑えている。曲輪Ⅱは尾根伝いに守るため、西北にV字形に突出させるように作られている。突端は櫓状になり強力な防御となっている。その前面は堀Bがめぐり、その先にも堀Cを中途より入れる。堀Cが中途からなのは、谷の内側は大きくみれば城内だからであろう。破壊されているため、城内のルートははっきりしないが、谷から堀状遺構Cが通路であった可能性がある。そうだとすれば、この通路から、堀Aに入り、虎口Ⅰから曲輪Ⅰに入ると考えることができる。以上のように簡単ではあるが考えぬかれた構築である。一見南城とはかなり異なっているようにみられる。しかし、低い主郭を空堀と土塁でカバーすること、尾根伝いに対する重層的防御など類似点も目立つ。結局同時期に和田氏によって築城もしくは改修されたと考えた方がよいのではなかろうか。

城の歴史 南城と一体化した城と考えられる。従って和田氏の城と考えられる。両城に挟まれた谷筋は、「宿谷」の地名が残っているので、ここに城主と家臣団の屋敷があった可能性は強い。(八巻孝夫)

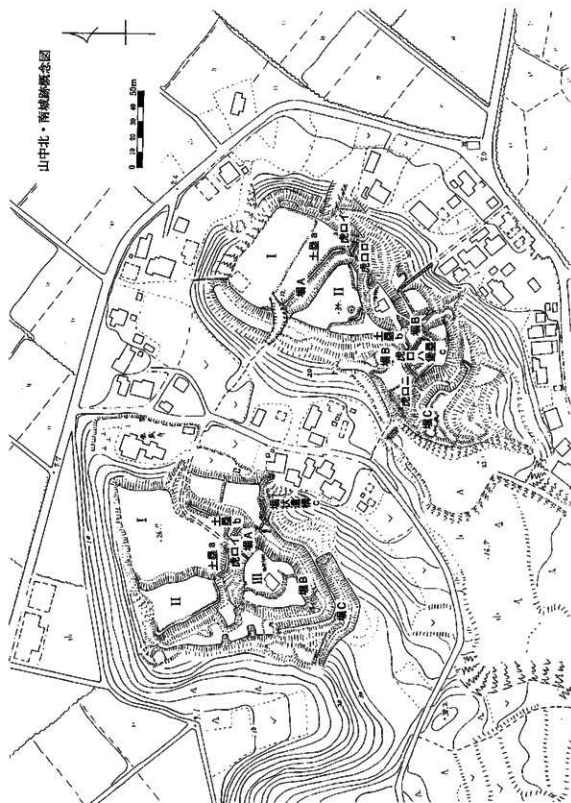
山中南城跡 (山武郡芝山町山中)

立 地 芝山町を南北に走る高谷川の右岸に、川に突き出る二つの近接した舌状台地先端に築城遺構がある。南の先端が山中南城である。往時は高谷川の湿地帯に突き出しているため、かなりの要害であったろう。また二つの丘陵に囲まれた谷筋は居住地として、極めて重要であったと考えられる。

構造の概要 台地先端の曲輪Ⅰは曲輪Ⅱに比べ2mほど低い、主郭となる曲輪である。その弱点を補うため土塁aとそれと伴う堀Aで独立させている。先端が削れていることと西面に破壊遺構がある以外は、良好な保存状態である。虎口ははっきりして、虎口ロから堀底に入り、すぐ右折して虎口Ⅰより入るようになっている。曲輪Ⅱは、Ⅰよりも高いため、従属する曲輪というよりも、Ⅰと実質一体化した曲輪になっている。虎口Ⅰ、ロも曲輪Ⅱから抑えられている。しかし、この曲輪Ⅱに入る明瞭な虎口はない。虎口Ⅰに対する東の角あたりの可能性もあるが、もしそうだとしたら、ⅠとⅡの上下関係を明確にするため、簡単な防御の弱い虎口しか作らなかったかも知れない。曲輪Ⅱの南下には八幡神社のある耐平地がある。神社のための耐平地であるが、本来ルートの通っていたところであろう。この八幡神社の西から入る道が本来の登り口であろう。つづく堀Bは、途中で土塁bがあるのとルートが堀内を通るため、堀に見えにくい、よく見るとほぼ南北に切る大堀切である。土塁bはこの大堀切がルートにも使われるため、虎口ハを形成することと見逃されるのを防ぐためにある。堀Cは城内で最も巨大な堀切である。堀は両側から横矢を掛けるため、大きく二度クランクする。この堀の中ほどに、虎口Ⅱがある。この虎口を守るため、壘塁Cを作る。ここは周囲に土塁を回し、強固な防御地となっている。堀Cの外は自然地形で落ちていく。以上のように複雑な縄張りを見せるが、メインルートは、虎口Ⅰ、ロ、ハ、ニをたどることにより明確にわかる。このメインルートにむけて、土塁、櫓台などで常に抑えるように作られているとみることができる。

城の歴史 山中南城の築城、城主に関しては確かな文書はない。わずかに軍記「肥前山室番記」には山室氏の将として、山中城主の和田五郎左衛門尉胤信が記載されている。この和田氏は天正15年(1587)の北条氏将劉氏に井田氏の被官の筆頭にあげられているので、この和田氏が伝承からみてこの山中城の城主であったことは間違いない。

(八巻孝夫)



立地 九十九里浜に注ぐ東川の右岸、支谷とさらにその支谷によって形成された、西から東へ突出する小規模な半島状台地の先端部と、その南東側の裾部を利用している。上総国と下総国との境にほど近く、近世には西方に柳沢牧・小間子牧が展開した。

構造の概要 台地先端部の郭Ⅰ(主郭)とその直下の郭Ⅱに大別されるが、両者が空堀によって囲まれて1つの城郭となっている。規模は南北約100m・東西約50mで、郭Ⅰと周囲と水田との比高差は約20mである。郭Ⅰは南北約30m・東西約40mの、ほぼ長方形を呈する小規模な主郭である。ここからは郭Ⅱをはじめ、城跡の周囲を取り巻くようにあった「被害」層の農民の屋敷地を見渡すことができる。この曲輪の北側と西側にはほぼ直角に曲がる空堀Aと、その内側に土塁を配置し、台地基部を切断することによって、防御上の弱点である台地続きを防御している。東側と南側は急斜面となっているが、東側直下にはさらに空堀Bを配して小支谷からの侵入に備えている。

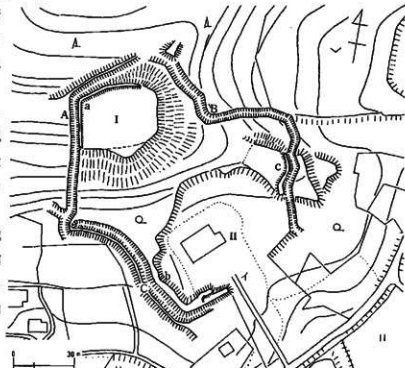
郭Ⅱは、郭Ⅰから派生する馬蹄形の支尾根によって囲まれ、南の虎口のみが人口となる。ここには門があったはずである。その内郭は平坦で、今も後述する穴倉家の広い屋敷地となっている。北側の支尾根は幅が広く、折りのある土塁Cを持つことから、1つの曲輪として機能したと考えられる。郭Ⅰの東側直下から支谷の頭を通り、技巧的に曲折しつつ続く空堀Bは、この北側の支尾根を真ん中から分断して虎口口に達する。一方、南側の支尾根は狭く崩れ落ち、土塁Bとなり、その先端は直角に曲がって虎口口に達する。土塁Bの外側には空堀Cが、郭Ⅰから下ってくる空堀と接続するように設けられ、西の小支谷側の防御を強化している。なお郭Ⅰと郭Ⅱの間は、空堀A・B・Cで囲まれているものの、自然の傾斜面をそのまま残している。

以上のように、木原城は台地上の「詰め曲輪」としての郭Ⅰと、その裾に位置する「居館」としての郭Ⅱとがセットとして残り、加えて周囲に「被害」の屋敷が展開する。中世の土家・土家の景観を今に伝えるという点で稀有な例と言えよう。また屈曲した空堀など、小規模ながらも機能的な城郭で、木原城は戦国末期まで機能したと考えられる。城の歴史 郭Ⅱにある穴倉家には、中世文書として著名な「穴倉文書」が伝来する。また「本土寺過去帳」には天正15年(1587)1月15日に「木原ニテ」没した穴倉大和守運行をはじめとする、木原の穴倉一族が少なからず見られる。これらから穴倉氏が中世末には木原郷に土着していたことが明らかである。同氏は白井原氏に属した「白井衆」であった(穴倉兵衛助等連署起請文書「穴倉文書」)。この穴倉氏が木原城主であったが、その実態は周囲の支谷を領する土家層と考えられる。

穴倉氏は近世には農民身分とされたものの、代々兵隊を称し、徳川将軍の狩猟に奉仕する見込役と名主とを兼ね、広大な耕地や山林を有し、数萬農民を抱えた豪族として知られた。

木原城は戦国最末期まで穴倉氏の居館として機能し、近世に入ると中世に居館が置かれた部分のみを屋敷として利用したのである。なお穴倉氏については「山武町史 通史編」に詳しい。

(外山信司)



木原城跡概図 (『山武町史通編』より)

立地 坂田城はJ R総武線の西北約1.5km、北から南に張り出した広大な舌状台地を利用して築かれている。構造の概要 坂田城の縄張は、舌状台地に占められた中世城郭の典型例で、主郭を先端に置き、順次台地続きに曲輪を連ねていく形式がとられている。ただし、坂田城は大規模な舌状台地を利用しているため、それぞれの曲輪の規模は相当に大きく、それらを画する空堀や土塁などの遮断線も壮大なものになっている。また、この城の縄張の顕著な特徴としては、堀に囲まれた土塁のすべて(外郭の土塁を除く)に、有効な横矢がかかる仕組みになっていることである。両記の城の同時代の城にはよく「横矢掛り」の遺構が見受けられるが、坂田城の横矢は必ず横矢口(左右両側からかかる横矢)となっている。そして横矢の張り出し部の上は、強固な櫓台となり、土塁を覆って曲輪内に入ろうとする者を、完全にその監視下に置くことができる。

この城の主郭は台地先端の西側にある約80×60mの矩形の曲輪で、西面を土塁が取り巻いている。東側に正面虎口がIIの曲輪に向かって開口するが、前述のように、この虎口の土塁には両側から相横矢がかかる仕組みになっている。曲輪の西側には、下段の腰曲輪における折形状の虎口が開口している。なお、主郭は地元で「ミジョウ」と呼ばれているが、これは当時の主郭の呼称である。「美城」が転訛したものと思われる。

主郭に東接する、IIの曲輪は三角形に近い形をした曲輪で、地元で「ミダイ」と呼ばれている。この曲輪は北側のIIIの曲輪に向けて虎口を開口するが、この虎口には曲輪の片側からしか横矢がかからない。しかし、主郭の東北角の櫓台上から、この虎口の土塁に対して横矢がかかるので、実質的にこの虎口は相横矢といえる。IIの曲輪は、IIIの曲輪から主郭へ行くために必ず通過しなければならない曲輪なので、この曲輪を一種の馬出曲輪とみることができる。

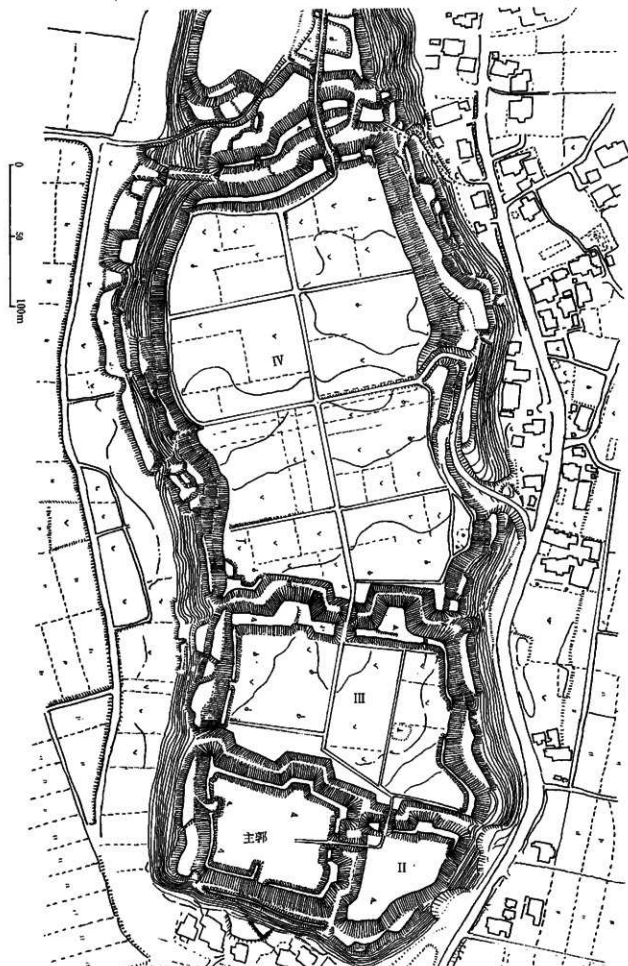
IIIの曲輪は、約150×100mの規模をもつ面狭の広い曲輪で、主郭とIIの曲輪に接する南面を除いた三面に土塁が築かれている。この曲輪を地元では「トジョウ=外城」と呼ぶが、この城の外城(外郭)は北側のIVの曲輪であり、なんらかの事情で呼称が入れ替わったものと思われる。虎口は北側のIVの曲輪に向けて、北面中央部に開口する。この虎口に対して両側の櫓台から相横矢がかかるが、この櫓台は左右とも近世城郭の天守台に匹敵する規模をもち、土塁を渡る者に強大な威圧を与えている。江戸時代中期に画かれたこの城の古図によると、この虎口の外側(IVの曲輪内)に運搬物様のものが描かれている。現在はその痕跡も見当たらないが、この古図を信ずるならば、当時は外折形状の土塁が設けられ、よりこの虎口の防御性が高められていたのだらう。

IVの曲輪は、約300×180mの規模をもつ城内最大の曲輪で、前述のようにこの城の外郭に相当する曲輪である。この曲輪は先の古図によれば、その中央部にもう一条の空堀が入り、曲輪が二分された形跡がある。この曲輪の東西の斜面には、無数の腰曲輪が設けられ、台地の下と城内とを結びつける機能を果たしている。曲輪Vの北縁には、二重の土塁と空堀が設けられ、城内と城外を厳重に遮断している。虎口は現在の農道が通る土塁の切目以外にみあたらないが、この農道が通る土塁には櫓台から横矢がかかるので、ここを虎口と断定するには一考を要す。

坂田城は、上総でも大規模な城郭の上位に並ぶ城の一つであるとともに、その縄張の巧緻さの点でも県内有数の中世城郭であるといえる。それは、大規模で均整のとれた舌状台地に占められたことによるが、やはり、構築主体の勢力の大きさとその専横した築城技術に負う所が大きいように思われる。井田氏は戦国末期の天正年間(1573~92)、後北条氏の直臣化していたといわれている。坂田城のバターン化した合理的な縄張は、おそらく天正年間、後北条氏の影響下に完成したのではなかろうか。

城の歴史 坂田城は、上総・下総の境目、栗山川流域一帯を所領とする井田氏の本城である。井田氏の出自は明らかでないが、『総州山陽信記』等によれば、はじめ栗山川支流の高谷川の奥、山辺荘小池郷に土着し、飯坂城の山室氏の客将となっていた。15世紀末から16世紀にかけて次第に頭角を現し、高谷川中流域に大台城を築いて勢力を拡大した。そして、戦国時代末期には、栗山川下流域まで所領を拡大して坂田城を築城したようである。井田氏は、千葉氏に仕えたが、戦国期に後北条氏の勢力が上総におよぶと、その被害となり活躍した。

(三島正之)



板田城跡概念図

山室城跡 (山武郡松尾町山室字城台他)

立 地 山室城は上総・下総の分水嶺を水源とする木戸川中流に位置する。本地点は木戸川に注ぐ谷津の合流点にあり、城の立地する台地の標高約36mで城は台地端に占地する。周辺水田面との比高差約15m、前面は広い氾濫原となり、上流、下流への視認の良い立地である。

構造の概要 南北に伸びる丘陵端を利用し城域は東西約300m、南北約150mの範囲にある。城域範囲の北側の台地基部に「字外郭」と「字物見台」の地名が残るが地表面観察による明確な遺構は存在していない。

遺構は台地端より空堀により区画された郭を順次繰り返し広げて城域とした高低差の乏しい連郭の城である。

全体は3郭からなり東端には位置するI郭は土塁と堀郭に囲まれ、西基線には「出折」と帯郭を配置する。

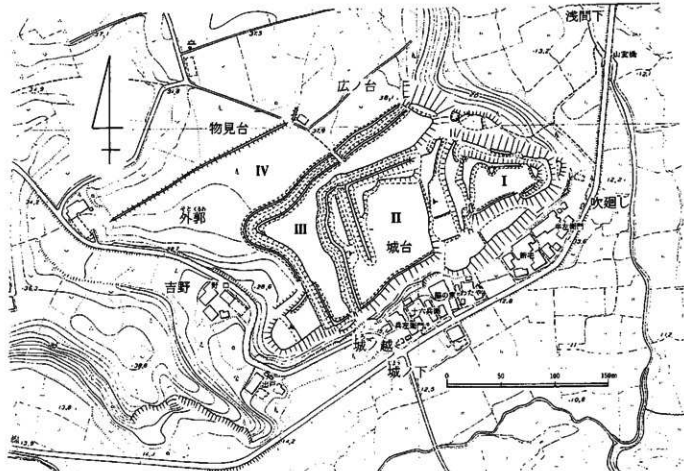
II郭はI郭側に土塁の存在しないほかは3方を土塁で囲んでいる。また西基線は2重に土塁が設けられている。

III郭はII郭を覆うようにL字を呈している。外郭とは2重土塁により区画され西端「出折」状の張り出しを持ち対応する南端の虎口郭に呼応している。基線の多くは「折り」が認められる。

城の歴史 山室城に関する史料は存在しない。しかし本地域を本質とした山室氏の動向については断片ながら知り得ることができる。山室法名妙室(文明2年(1470)「本土寺過去帳」)、山室孫四郎(永正2年(1504)「千学集抜粋」)、山室(天文19年(1550)「千学集抜粋」)、山室治部少輔(永祿4年(1561)「上杉文書」)、山室兵部丞(天正2年(1575)「上海八幡宮文書」)等を一族として概観すると上総北部の小規模な武士団としての様相が見れよう、隣接する武士団同様に千室氏の家臣団として把握できるのではないだろうか。

城は戦国時代後期の様相を見せるが、末期における特徴を備えているとは言いがたい。その構成は北の井田氏と異なり南の酒井氏とも異なる、敢えていえば成東城などに近く千室氏系の城構成を持つといえよう、これは木戸川、境川沿いの城の特徴である。

(木内達彦)



山室城跡概念図 (松尾町山室城跡。より)

津辺城跡 (山武郡成東町津辺村)

立地 津辺城はJR総武線成東駅北方約750mの位置にある台地の先端上に築地している。この台地は西から東へ突き出た台地で、台地縁きとの間に大きな鞍部が入っているため、一見独立丘のようにみえる。

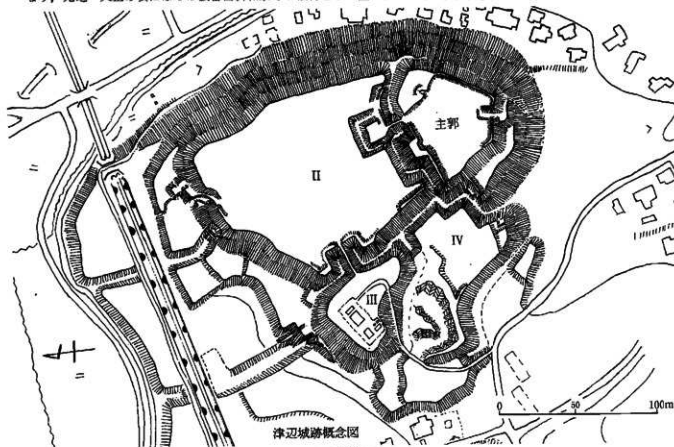
構造の概要 津辺城の縄張り、台地上の四つの曲輪と、台地北下の二つの曲輪によって構成されている。主郭は台地の東南端に位置する約90×20mの三角形の曲輪で、南側が一段高くなり、そこに妙見社が祀られている。曲輪の南側には台地下の根古置集落へ向う斜形状の虎口が開いている。IIの曲輪との間には深い空堀が設けられ、その間に土橋が渡されている。この土橋に対し、主郭の西側から櫓台が張り出して橋頭を兼ね、さらにその外郭(IIの曲輪内)に馬出を構築している。この馬出は約15m四方の小規模なものではあるが、県内では森山城(小見川町)、新村城(八日市場市)など数ヶ所では確認されており、この城の構築年代を物語る貴重な遺構であるといえる。

IIの曲輪は約100×140mの城内で最大の面積をもつ曲輪で、III・IVの曲輪との間に深い空堀を設けている。虎口はIIIの曲輪と台地北下の曲輪に向けて開口する。この内IIIの曲輪に向かう虎口にはその土橋に対し、両側から相模矢がかかるなど防御の厳重さをうかがわせる。

IIIの曲輪は現在浄水場が置かれているが、その規模や配置などから、一種の馬出曲輪とみることができる。IVの曲輪は、IIIの曲輪の南下にあり現在は段差で区画されているが、当時は空堀によって隔てられていたことが、その痕跡から察せられる。台地北下には2本の空堀によって区画された二つの大きな曲輪と、それに付随する原曲輪が存在する。位置的にみても、当時はここに城主の居館等が置かれていたものと思われる。

津辺城は坂田城の井田氏が、南方に対する境目の城として、現存する馬出等から天正年間(1573～92)に修築を加え、現況の姿に完成させた可能性が高い。

城の歴史 城の歴史については良質な史料がないので明確なことは不明だが、近くの真行寺集落の「山辺道氏所蔵文書」によれば、石井氏という領主がこの城の城主にあてられている。ただしこの石井氏は鎌倉初期の千葉氏の被官なので、現存する津辺城と岡氏の城を結びつけるには、問題がある。戦国時代になると津辺城は坂田城の井田氏の勢力範囲となり、元亀・天正の頃にはその被官白根和康守が城将として置かれたと「上総国誌」にみえる。(三島正之)



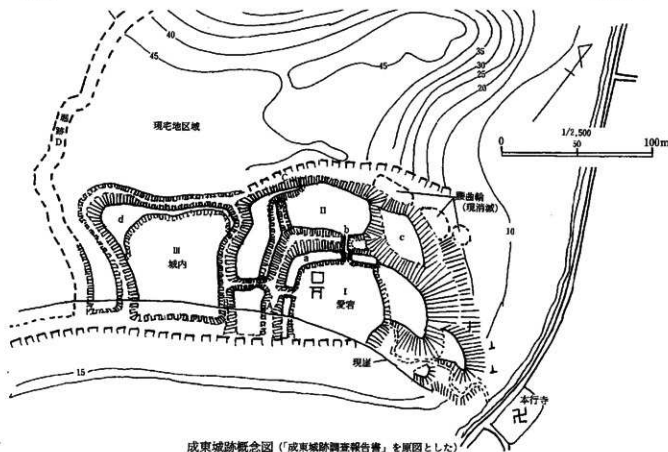
成東城跡 (成東町成東)

立地 作田川右岸に位置する東西700×南北500mほどの独立台地全体に、かつては遺構が展開していた。主要部はこの台地の東部にあり、西半分は外郭部にある。現在は主要部のみ公園化されて残るが、それ以外は宅地化されている。南方は九十九里平野に臨み、急斜面の断崖をなしている。現在は急傾斜地対策により法面整備が行われ、大きく削られていて旧状を止めない。なお作田川の対岸北東約1.2kmには、津辺城跡がある。

構造の概要 現状では、宅造と公園化、さらに地質による崩落などで大きく改変されており、1971年藤久頼彦氏が記録した図(『千葉県成東町成東城跡調査報告書』)を参考に、以下述べることにする。主要部は、台地の東端部を堀切で隔絶した三つの郭からなる。先端の郭が主郭と目されるI郭で、愛宕社が祀られており、字愛宕という。東半分は一段と低くなっている。またII郭側には土塁aがまわる。堀AによってI郭とII郭は分けられる。さらにII郭は堀Bと堀Cで、III郭および外郭(現在の宅地区画)と分けられる。なお北端にはI郭と堀Bの接合部があり、これより北側は急斜面となって、原曲輪Cに落ちている。II郭の南側部分を、堀AとBとを結んで堀状に切っているが、これは後世愛宕社への参道のために削平したものではないかと考えられる。III郭は字城内といい、長さ約75m、短辺50mの不整形の四角形をしている。堀Bと堀CおよびCの延長が堀曲して、III郭を取り巻く。さらに、現在は前述のごとく削平されていたが、南端に一段低く大走り状の部分があった。III郭の南側には、この大走り部に対して土塁が築かれていた模様である。また、同じく西端にも土塁dがある。

本城跡の特徴として、台地全体を取り込んで、外郭部として使用していることがあげられる。堀Dは台地を南北に切っているが、台地南端部にかけて、折りをもつ堀が回っており、広大な外郭部を形成していた。

城の歴史 戦国後期、この成東の地は東上をもくろむ安房里見氏・正木氏と、千葉氏一族との間で戦闘が繰り返された場所である。広大な外郭部をどのように解釈するかであるが、ひとつは坂田城跡と同様に、対安房路のための駐屯地として考えるか、もう一つは、徳川家康東入にともなう、石川康通の成東城取り立てに際してと考えるかである。(遠山成一)



立地 九十九平野のほぼ中央部、東金市街を見下ろす標高70m程の半独立丘状の丘陵全域に占地する。平野に面する南面は断崖となっており、急峻な地形をなしている。仮の名所として知られる八鶴湖に接する東側や谷の入り込む北側にかけて、複雑に開析され、支尾根が樹枝状に派生する。また、東金城の山城と思われるもの、台方と大豆谷との境に存在する。東金市街の出入口を扼する機能をもつものと考えられる。さらに、当城の北東約2kmには田間城跡がある。

構造の概要 半独立丘状の丘陵が西側の丘陵部と連続するネック部には堀切Aを入れ、この南側斜面には堅堀Bを築いており、ここまでは城域とすることができる。東尾根の先端部からここまで東西700mあまり、南北は500mあまりという、東金酒井氏の本城としてふさわしい広大な城域をほこる。しかし、丘陵地形のため居住性は決して高いとはいえず、主郭と郭IIの、合わせて140m×40mほどの範囲に収まってしまふ。居住空間はあと腰曲輪と支尾根にはさまれた平坦地くらいである。平野部からの比高差があるためか、曲輪を囲む土塁は見られず、堀切と腰曲輪で防壁している。また、支尾根を削って土塁状にし、段差をつけ、また堀切をいれるなど、支尾根を有効に利用し、防御に努めているのも特徴といえる。

主郭部にある郭Iは城内最高所にあり、郭IIと接する南西端に櫓台Aを築いている。郭IとIIの比高差は約6mであり、IとIIとの間に、発掘により空堀が回っていたことが判明した。郭Iから東南方向へ伸びるが、郭IIIは郭Iより東南へ5mほど下がった尾根上にある。空堀Bはさきで、小郭IVがその延長上に位置している。郭Iから北北西方向に伸びる尾根上に削平した郭Vは、比較的緩い斜面となる北側を支尾根や堅堀で防御するための、要の部分とすることができる。主郭部に付随する郭は以上の五つである。次のその他の郭であるが、郭I～IVの東から西方向に腰曲輪が取り巻いている。これらは支尾根を断ち切るように、東から西にかけて半周している。つまり、かりに尾根伝いに敵が侵入してきても、そのままI～Vの郭に取りつくことはできないというわけである。

居館推定地としては、現本漸寺の位置と、現東金高校（家康の東金御殿跡地）のそれと、二つ考え方がある。調査からは前者が有力であるが、田間城跡近辺から移転したという同寺の移転時期と、移転場所が問題となってくる。天正11年（1583）付の北条氏伝馬手形の伝わる同寺が、いつ現在へ移転したのか、疑となる。

城の歴史 当城跡が登場するのは『鎌倉大草紙』によると、15世紀半ばの享徳の大乱の最中、千葉宗家の内紛をうけて美濃より東常縁が下向したおりのことである。常縁は、部下の浜式部少輔春利を当城に入部させたという。川名登氏は、この浜氏は千葉の浜野を本拠とした土岐氏の一族で、春利を酒井氏の祖となる人物と見なしている。その後、東金城は山口主膳なるものが拠ったという近世の書もあるが、詳しくは不明である。文書の上からも確実に東金城と関連づけられるのは、天正後期の『関八州臨城覽書』（毛利文書）に登場する「一、とうがねの城 坂井右衛門 百五十十キ」である。戦国後期に東金酒井氏の本城として使用されたことは間違いない。なお、『千葉県中近世城跡研究調査報告書第9集』の発掘成果からは、出土遺物は16世紀中葉から後半の年代が与えられており、これを裏付けている。

（遠山成一）



東金城跡の位置（東金市東金）

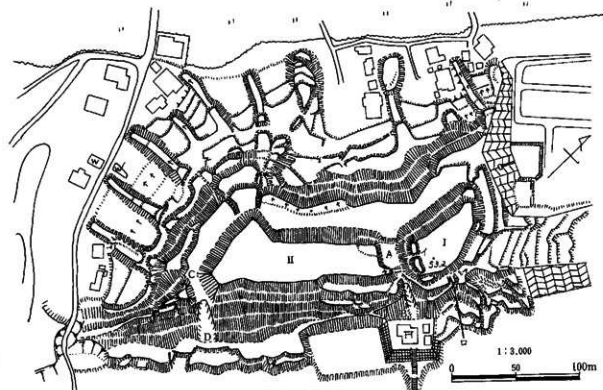
田間城跡（東金市田間）

立地 九十九里平野に向かい西南から東北に伸びる、細長い独立台地に占地する。とくに城跡東側が断層を形成しており、急崖となる。標高は50m余り、麓からの標高差は40mほどである。本城と目される東金城からは北東へ約2kmほどの距離にある。なお、当城跡北端部は現在削平され、城山団地（旧東立東金商業高校敷地）となるが、かつては館跡と想定される曲輪が二段ほどあったという。また、西南方向に続く尾根に現在切り通し道がつけられているが、元は西南台地と細尾根でつながっていた。

構造の概要 基本的には、主郭と第II郭からなる連郭の城である。主郭と第II郭の西側は、20m前後と幅のある腰曲輪が続く。主郭と第II郭との間は堀Aで切られ、主郭の南端堀側には土塁aが盛られている。土塁の中央に開口部があり、一応虎口といえる。現在、堀の東側は直下の田間神社に向かって堅堀Bに落ちている。また、第II郭北東部には二段の腰曲輪が設けられ、この登城路を上から牽制する役を果たしている。この登城路は主郭東部の腰曲輪に取り付き、虎口を形成している。また、II郭の西南端の尾根続きには堀切Cが切られ、ここにも東麓に向かって堅堀Dが落ちている。

主郭より北側は、現在削平され前述のように造成地となっているが、松戸光夫氏（東金市文化財審議員・本城跡の旧状についてはすべて氏のご教示による）が1947年に作成した縄張り図により復元すると、以下のようなものである。まず、主郭の先端の向かう北東方向に尾根が伸びており、それを上下二段に削って物見台状にしている。その下の段は、北方向に爪先を向けた様子の様な形状をしており、東側に田小字（現在消滅）を「山小屋」と呼んだ曲輪山Iがあった。城主の館に想定される。この曲輪の一段下、南西方向にもう一段曲輪IIがあった（旧東金実業学校敷地）。そして、これらの郭の先端は、自然の水堀として小川が巻いて流れていた。

城の歴史 伝承では、永正6年（1509）酒井定隆が本城を築造したが、城地が狭く不便なため、大永元年（1521）三男隆盛を連れて、東金城に移ったという。しかし、これを裏付ける史料は存在しない。確かなところとしては、東金城の北の防衛を担った支城といえる。（遠山成一）



田間城跡概念図

小西城跡（山武郡大網白里町小西字城山他）

立地 標高約80mの台地が九十九里平野に接する所にある。北から南に伸びる半島状台地上を主体とし、麓の谷津も利用している。台地上の主郭と下の水田面との標高差は約60mに及び、複雑に入り組む支谷と相俟って要害性を高めている。当地は土気酒井氏の本拠土気城と、東金酒井氏の本拠東金城の、ほぼ中間に位置する要地である。

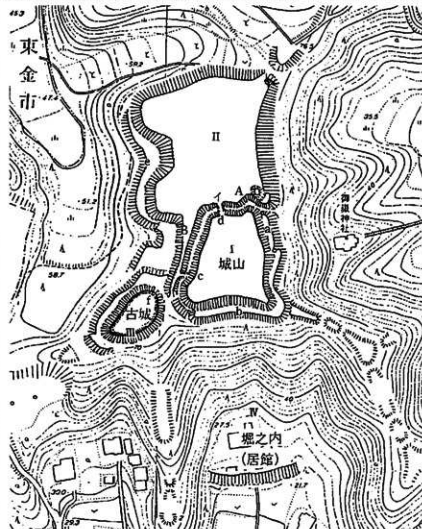
構造の概要 半島状台地先端の郭I、その北側に広がる郭II、南西に突出する尾根上にある郭III、郭Iの南側直下の谷津にある郭IVに大別される。その他に、支尾根上にも堀切や空堀が連続して見られ、これらに守られた支谷内に腰曲輪や平坦面があって、家臣団の屋敷や寺社として利用されていたと考えられる。

郭Iは主郭である。北・西側に深く幅の広い空堀A・Bを配し、東・南側は比高差の大きな削り落としの急斜面と腰曲輪a・bによって守られ、周囲に土塁cを設けている。入り口は土塁dで北に通じる虎口イのみである。技巧的で充実した大規模な遺構は、戦国盛期、16世紀後半の発達した形態を示す。郭IIはもっとも面積が広く、多くの兵力を駐屯させるのにふさわしい平坦な曲輪である。北側に入り組む小支谷によって城外と分けられ、北・東側を急崖で守るほか、西側には長大な腰曲輪eを設けて、支谷からの侵入に備えている。郭IIIは「占城」と呼ばれ、土塁fが周囲に配置されるもの、遺構の規模は曲輪Iより小さく、古い様相を呈する。郭IVは馬蹄形の支尾根に囲まれた「堀之内」にあって、その字名が示すように城主の居館が置かれていたと考えられる。この他に、郭Iの東側下にある御嶽神社付近も、家臣団の屋敷地であった。

小西城は後述するように原氏の城郭であったが、「惣構」であった本城の白井城（佐倉市）や、これに準ずる規模を有した生実城（千葉市）などの原氏の他の城郭と比較すると、その規模は小さい。原一族の中でも一度度であった当地の原氏の勢力を反映していると考えられる。

城の歴史 小西城は小西原氏の居城として知られる。長禄2年（1458）には当地の領主の原原藤が、本土寺（松戸市）九世の日意を招いて名刹正法寺を開いた。向寺には、原藤のために日意が染筆した同年の曼陀羅が残る（「大網白里町史」）。

こうして原氏が閉門派日蓮宗に帰依したため、「本土寺過去帳」には、永禄13年（1570）8月10日に「千葉寺下ニテ討死」した「日源 小西能登守殿」や、天文10年（1541）4月18日に没した「日陽尊位 原能登守法名光信」の他、女性を含む小西原氏が頻出する。受領名能登守・肥前守を称し、「小西殿」と尊称された原一族は近世初頭まで見られ、戦国期を通じて原氏が小西城主であったことが明らかである。志賀・高橋・行木などの家臣団も見ることが出来る。（外山信司）



小西城跡概念図（『大網白里町史』に加筆）

大綱城跡 (山武郡大綱白里町大綱字本郷)

立地 九十九里平野に向かって南方に突出した、通称「要害山」と呼ばれる標高40mほどの丘陵上に占地する。この丘陵からは、大綱市街の金城はもとより東金城（東金西井氏の本城）方面も視認することができる。土気城の根小屋集落である金谷や南玉に至る谷の開口部にあたり、土気城にとって重要な支城であったと推測される。J東金城により、東立山武農業高校のある北側の丘陵と断たれているが、往時は堀切を設けていたものと思われる。

構造の概要 本城跡南半分のうち、西斜面は崩落防止のための法面工事がなされ、旧状が大きく変えられてしまっている。I郭は堀切Aによって独立し、北端は櫓台がある。南側には、さらに厩平地があり、その東側には腰曲輪が二重設けられている。I郭の北は、堀切Aから細根板根に浅間神社まで伸び、堀切Bで日吉神社のある郭IIと分けられる。郭IIの東側は三連続の堀切CDEがあり、北東端の小曲輪につながり、さらに尾根が伸びて城域が終わる。郭Iから郭II、さらに小曲輪まで、すべて垂直に近く壁面を削っており、両脇に腰曲輪を形成している。断面をみるとちょうど凸字形に近い形状を示す。

居館とみられる周囲より数メートルほど小高い一面が、城跡東端にある(郭III)。南方の町並みは字本宿と呼ばれており、クランク状に屈曲する国道128号線が居館跡に軸を合わせて平行に走っており、現在の町並みの原形は中世に遡る可能性が高い。また城手の小地名も残り、大手と考えられる。

城の歴史 城主として、近世の史料には大綱の長事に居を構えていた板倉氏がある。板倉という地名は、千葉市緑区にあり、土気城に近いところから、そこを名字の地とする土家の可能性が指摘されている。永祿8年(1565)2月18日付の「河田長親宛西井胤治書状」によると、土気城を、白井原氏と東金西井氏を主力とした北条氏政軍が攻め、土気城の宿城で大綱半九郎が討ち取られている。大綱を名のことから、当城に関連する一族かと思われる。

(遠山成一)



清名幸谷城跡 (山武郡大綱白里町清名幸谷字城内前地)

立地 大綱市街地より北東約2km、汀線より約8kmの、九十九里平野の中に位置する低地城跡である。九十九里平野をほぼ南北に走る砂丘列上の微高地にあり、標高8m、周囲の水田面との比高差は1mである。

構造の概要 耕池整理の進捗と宅地化のために遺構の残存率は悪いが、字「城内前」の郭Iを中心に、南側の字「上手」の郭II、東側の字「八幡」の郭IIIに大別できよう。その周囲は以前は泥田で、往時はあたかも沼沢地に浮かぶ島のような景観を呈していたと考えられる。他にも「陳屋敷・竹ノ腰・大上手・北城手・城西」などの城郭に関連した小字が残り、城域がより広範囲に展開していた可能性がある。

郭Iは水路と水田に囲まれ、現状では神社と二軒分の宅地となっている。三軒とも豪壮な長屋門や四脚門を構えた典型的な名主屋の屋敷であるが、なかでも南端の大原家Aには嘉永2年(1849)の屋敷図(『大綱白里町史』)が残る。二重の水堀に囲まれた、複郭の屋敷は、中世の土豪の居館の姿を明瞭に伝えている。

郭IIの妙本寺、郭IIIの東光寺(ともに日蓮宗)には、戦国期の小型の五輪塔や宝篋印塔の残欠が残り、清名幸谷城の年代を示唆している。

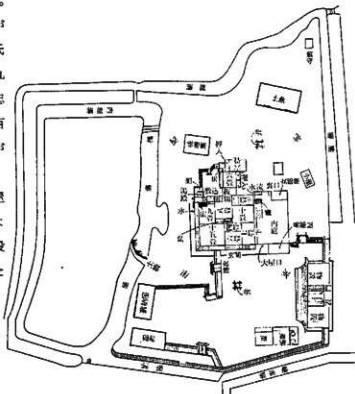
城の歴史 中世史料として有名な『本土寺過去帳』には、没年不明ながらも「法心 カツサノ國 大原名字 セイナカウヤ」や「藤次六郎夫婦 逆修 上総州 セイナカウヤ」(いずれも24日条・下段)が見えるが、当地の土家と考えられる。特に前者は近世に名主を勤めた豪農大原家(前述の屋敷図が残る)の先祖である。これらの土家層は土気・東金の西井氏に属して、その軍事力の底辺を構成するとともに、低湿地九十九里平野の開発の中心であった。また、松平家忠の『家忠日記』天正20年(1592)3月6日条に「せいなこうや 二百三十八石一升」と見え、中世以来開発が進んでいたことがうかがえる。

以上のことから清名幸谷城は、大原氏のような土家層の屋敷が砂丘列上の微高地に集合した戦国期の低地城跡と言えよう。九十九里平野に多く見られる低地城跡は、軍事的な施設であるとともに、土家層による低湿地の開発の中心であったと考えられる。

(外山信司)



清名幸谷城跡地図 (大綱白里町史より)



嘉永2年 屋敷図 (清名幸谷 大原 豊家文書) (『大綱白里町史』より)

立地 大成城跡は、大成寺湯武倉の台地先端部に築城されている。西方に茂原街道から続く台地平坦面が広がっており、南側の谷を挟んだ字「向山」にも土塁と空堀とによって明瞭に区画された城郭遺構が配されている(大成向山城跡)。一方、東側には40m程の比高差を有して谷地形が入り込んでおり、ここに「カミヤシキ」(あ)、「シモヤシキ」(い)、等の屋号を残す数軒の集落が形成されている。かつては、(う)とした屋敷地内にも土塁等の遺構が認められたりしており、この集落部分までの範囲が大成城跡の範囲と考えられてきている。また、城跡北東の谷地形に「橋戸」「岩ノ橋」「戸」「セキド」等の字を残すこと、集落の配置などから東側が城の正面と考えられている。主郭部分の標高は、80m前後を測る。茂原街道と大成谷へ降りる街道の結接点に立地している。

構造の概要 台地の東端部を方形に区画した主郭と、土堀によって南東側に連結している郭II、ならびに安立寺周辺に認められる小規模郭群等(集落地区)によって構成されている。主郭は、南西で大規模な土塁と空堀(A、B)とによって区画しており、東側に腰曲輪(I-b)が配されている。郭II-aへの連絡である土堀部分の構造については、既に伊藤正雄氏等によって合横矢の構造であることが指摘されており、酒井氏領内の土気城や大権城、その北側の井田氏の本城である坂田城等に類例が求められている。郭II-aは主郭の南西に設けられた副郭であり、西側に土塁と空堀を配している。南東にはII-b・II-c二段の腰曲輪が見られ、これを取り囲んで堀Dとした現道が台地と谷部の集落を結んでいる。安立寺周辺の小規模郭群は、採石等による削平もあって構造や機能が不明瞭であるが北側の東西に延びる谷には堅堀などの遺構が現存している。また、安立寺境内には中世の宝篋印塔残欠も認められている。主郭西側台地上において郭IIIとしたものは、地割り等から見た推測に過ぎないが、(1)大成城主郭よりも西側平坦部郭が2m程ではあるが標高が高いこと、(2)茂原街道側からの侵入が容易と考えられること、等を考慮すると、強く否定することはできない。

大成城跡の南西に配されている大成向山城跡は北西部が失われているが、台地を区画する土堀部分が、大成城跡と類似した合横矢であり、同時併存の可能性が示唆される。大成城跡と大成向山城跡とは、小谷を隔てて呼称の間にある。茂原街道側からの侵入に対して有機的に機能した付属施設と観ることができよう。

城の歴史 主郭南側の土堀周辺に認められる合横矢の存在や城の位置関係等から、土気城(酒井氏)の出城であったと考えられてきている。しかし、現状では史料伝承ともに地元には見出せていない。また、大成村については、元和4年(1618)に旗本上井政重の領地に施入されていることが知られるが中世〜戦国期には明らかではない。今後の検討課題である。

(田所 真)



大成城跡・大成向山城跡配置図

立地 惟津城は姉崎海岸に面して突き出した台地の突端にある。この台地を中心として、両脇に二つの台地が分枝して突き出ているが、この二つの台地先端もそれぞれ城として利用している。位置からみて、海を極めて意識しており、一種の海城ということもできる。

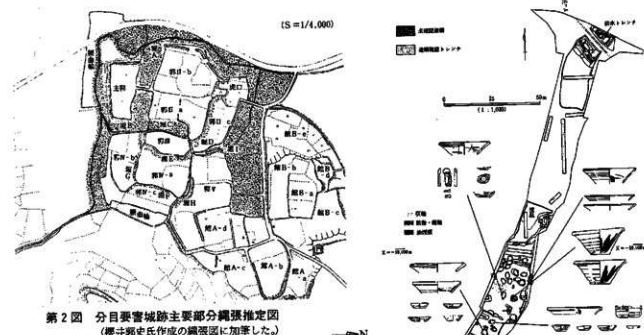
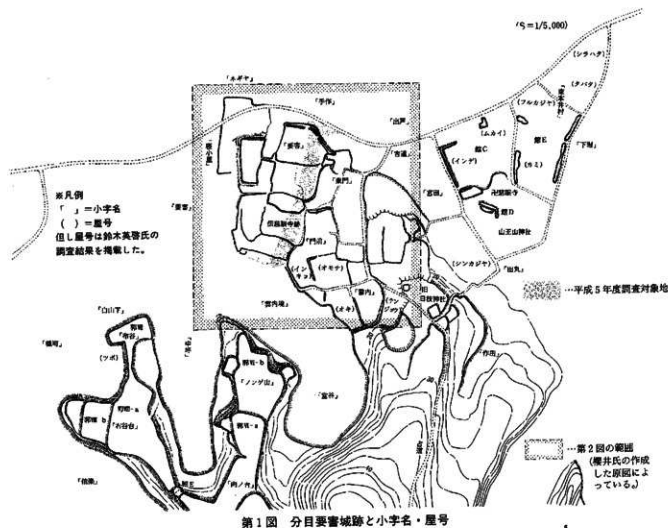
遺構の概要 三つの台地のうち中央の台地先端曲輪Iである。城域全体に市街化が進んでいるが、この曲輪Iは東辺の一部が削られている外は、奇跡的に残存している。遺構は神社の敷地となっていて土塁のみである。新しいものとの誤りもあるが、往時の宗教施設の可能性もある。土塁は西の面を守る土塁で、曲輪Iではここにしか残らない。虎口は北から曲輪Iへ入る虎口で良好に保存されている。曲輪Iの北西には腰曲輪Cがある。先端には海に向かって何段もの腰曲輪状の水田面が観察される。そのいくつかは城に伴うものであろう。曲輪Iの南面は大きな堀Aが入る。残念ながら西半部は住宅により壊れてしまった。曲輪IIは周囲に住宅地となっているものの半分ほど残っている。土塁などの遺構は見られない。南面には堀Bがあるが、ここにも堀底が住宅地になっていて、かろうじて堀とわかるぐらいである。尾根は広い広大な台地となっている。五重台と呼ばれているが、これも城として取りこまれていたであろう。推定の堀Cの位置はこの台地が最も狭くなるので、ここに堀切か棚利などの何らかの防御施設が存在した可能性が高い。五重台から直接分枝する西の尾根は、根ノ上と呼ばれている。従来惟津城とは考えられてはなかったが、この台地の先端及び南面の腰曲輪群がみつかり、惟津城の一部と考えられるようになった。台地上は畑作がすすみ、遺構はみられませんが、兵員や住民の取寄施設として使われていたと見られる。一方東の台地先端にも正坊山城がある。L字形の堀により台地の東北端が切り離されている。この堀沿いに土塁が築かれている。曲輪は土塁により曲輪Iと曲輪IIに分けられているが、堀沿いの土塁と平行させる意図はよくわからない。遺構は、古墳状の高まりで、古墳の可能性もある。城としては櫓台として使われていたであろう。東の台地辺は何段かの腰曲輪となっている。虎口はつらいつらいつものはない。全体に歴々の臨時に作られているのが特徴としてあげられる。さて、この正坊山城はどのような性格の城であろうか。とにかく惟津城に囲む城であるとは間違いない。問題は惟津城の支城なのか、逆に攻めて側の城かということであろう。ここからは惟津城がよく見える上、土塁も惟津城に向けてのみ作られている。しかし、台地の先端をとり、惟津城から眺望のきかない東方向をよく見通せて、いわば惟津城の弱点補強となっている。その上、惟津城に向けていると思われる土塁も、この城の最も危険な方向である尾根広いへの防御と考えれば承れるのである。以上により、この正坊山城は、惟津城の弱点補強のために臨時に築かれた城と考えたい。

城の歴史 惟津城の築城年代を明確にする史料はないが、康正2年(1456)の武田信長の土総侵入後のある時期に武田氏によって築城されたのは確実である。その後小弓御所により三年ほど奪われ、再び武田氏によって奪回される。天文21年(1552)には北条氏の被官となった武田氏は、里見氏との戦いに敗れ、惟津城は里見氏の手に移した。その後北条氏と里見氏の間で、この城をめぐる、めまぐるしい争奪戦が行われた。永祿3年(1560)には北条氏の持ち城となっていて、同年の「北条氏朱印状」によれば「惟津大普請」が行われた。この普請時に、現在の惟津城の縄張の完成があったと思われる。その後も里見氏、北条氏と度々勢力は交代するが、天正5年(1577)以降は北条氏の勢力下で安定した。天正18年(1590)には、豊臣氏の来攻により、大規模な普請が行なわれたと思われるが、現在の遺構のどの場所が特定するのは難しい。北条氏の滅亡とともに廃城になった。

(八巻孝夫)

分目要契城跡は、主郭とこびれを取巻く遺構群とによる主要部分（主郭＝郭Ⅴ・第2図参照）、主要部分の西南隅台地上の西方郭群（郭Ⅵ～Ⅸ＝Ⅲb）からなり、これに主要部分東側の古道から敷地地に至って展開している集落（楯Ⅰ～Ⅲ）が付随して城郭を構成している。主要部分は、主郭から郭Ⅴまでと楯Ⅰ～Ⅲまでである。主郭は城郭の北西端に配されているが、北辺に土塁が観察される。また主郭の南西北には東櫓、楯Ⅰ～Ⅲによって取り囲まれ、郭Ⅱ～Ⅲと土塹で連絡している。主郭北西にはさらに原曲輪が巡るが、楯がこれを囲んでいたかどうかは明らかではない。西側の字は「寝小屋」である。郭Ⅱは、南側aと北側のりらびでaの原曲輪として機能することによって構成されている。郭Ⅱ～Ⅲの南側に示した楯Cは、地割りからの推定に過ぎず、現地踏査では観察できない。郭Ⅱ～Ⅲはaの北下位にあたる郭であろうが、東側で虎口に隣接しており、北辺に土塁を巡らしている。本郭北側の楯の一部が発掘調査されておらず、障子堀であることが明らかとなっており、郭Ⅱ～Ⅲの東側には楯Dが回り、郭Ⅱ～Ⅲからの直接的な侵入に備えていたものと考えられる。調査によって楯Dの南側端部が検出されている。また、南辺には東西に伸びる土塁が観察されている。郭Ⅴからの直接的な侵入や攻撃を想定するためのものである。郭Ⅱ～Ⅲ北側には虎口が作られており、楯Ⅰを渡ることによって街道や東側集落に連絡していたものと考えられる。虎口周辺の字名は「楯Ⅰ」である。郭Ⅲは、楯D～C～なびにEによって取り囲まれた独立体である。郭Ⅲの南側裾郭を囲む楯Ⅱは箱葉形の空堀であり、東側の一部が調査によって検出されている。郭Ⅳは郭Ⅲの南側に配置するaと東側に配置するb、ならびにこれを取巻くことによって構成されている。aの西辺中央はbに向かって平や張り出ししており、裾郭に楯Gが地割りによって推定される。bからaへの連絡は、この張り出し部分における土塹などで行われていたものと想定できる。郭Ⅳ～Ⅴ～aの南辺裾郭に配された楯Fは葉形郭の空堀である。東端部が調査によって検出されている。尚、郭Ⅳ～Ⅴ～郭Ⅴ付近の字名は「門前」である。郭Ⅴから楯Ⅰを渡ることによって街道や東側集落に連絡していたものと考えられる点は、「東門」と同様であるが、郭Ⅴを大手と見ることによって、楯Ⅰ等との有機的な関係が想定できよう。楯Ⅰより西側遺構群のみで城としての機能が完結していることから、主要部分のみを城跡とす見方がある。しかし、主要部分のみでは、南端台地上やノグシガ・布谷台から見下ろされる関係にある、西方郭群を補完的に配したものとみられる。佐居城跡の諸久保地区や犬成城跡の山内城跡を参照したい。

(田所 真)



第3図 分目要書遺跡遺構配置図

『第9回原市文化財センター遺跡発表会要旨』より転載。

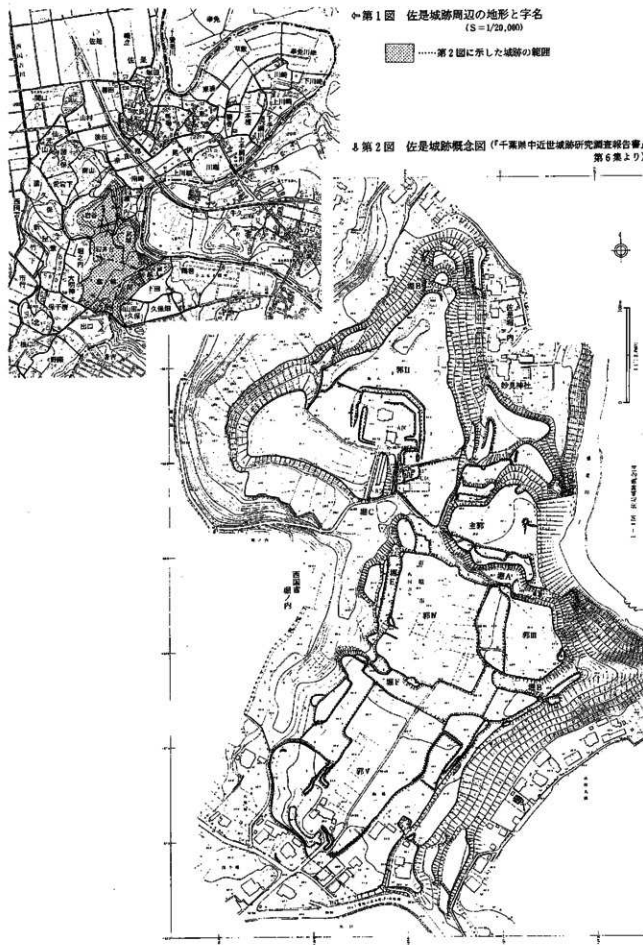
佐是城跡 (市原市佐是字武城1,030他)

立地 養老川の中流域左岸、小湊鉄道上総牛久駅の西方約1,200mに位置している。字名「佐是」を採って「佐是城跡」と呼称しているが、「城跡館址」「城跡」「岳城」などの異名と「佐是城跡」の異表記が見られる。「タケギ」については「タケ」が崖からくる地形由来の城名とする説がある。「佐是」の表記は江戸時代中期以降の史料に用例を認める。これに対し、古代～中世には「佐是」の用いられていたことが、文治2年(1186)「源朝野文」(頼田文書)・弘長2年(1186)「橘禪寺薬師如来体内墨書」・延文3年(1358)「鹿野寺所蔵聖教」大般若波羅密多經奥書・永正5年(1508)池和田正福寺「阿彌陀如来坐像像内背部墨書」等の用例によって確認される。当該地域の地形は、牛久市街地南側を東から西へ流れる養老川が、市街地西側においてほぼ直角に流れを変え、攻撃面の西側台地上に当っており、河川と台地との間に比高差の大きな急斜面を形成している。縄張りにあたって、この自然地形を防禦上の要害として利用した選地と考えられよう。主郭部分と現養老川との比高差は、約40mに及んでいる。また、主郭北側直下の堀ノ内地区との比高差でも約7mを測る。養老川流路からの侵入に配慮した選地と考えられよう。佐是城跡主郭からは、東方に幸免白山城跡背後の三角点(字名「箕輪」)設置箇所を介して、真ヶ谷城跡や長南城跡との連携が可能となったものと思われる。また、武田の上総入部以後に限定するならば、本城跡は真里谷城と長南城との中間的な位置に立地しており、真里谷城へは市内大蔵の集落から市野々の集落へ抜ける経路によって、至近に結ばれていたものと考えられる。

佐是城に関連する集落としては、城跡の北西側に養老川で距離首状に取り囲まれた地域を挙げることができよう。当該地域には現在も集落が展開している。落合忠一氏が「市原地方史研究第7号」所収の「佐是城跡をたずねて」の中で掲載した「佐是城跡付近図」を初見として以後引き継がれている見方であり、第1図に示すように、当該地域には字「馬場」「竊立」「上手綱川」等の地名が残されている。城跡や川等との地理的な関係からみて、城を築いた集団の母体となる集落をこの地域に想定することは自然であろう。東北端部に小字名「幸免川岸」や「川崎」が見られる。佐是集落の船着場とは、考えられないであろう。

中世における佐是は、「佐是郡」の中心と考えられ、上記に挙げた史料等から、郡の範囲は牛久・内田郷・池和田村・矢田郷・矢田村・小山田村・皆吉に及んでいたことが知られる。内田郷には真ヶ谷城跡、池和田村には池和田城跡が存在している。また、矢田には本更津市真里谷妙泉寺の「長禄三年」(1459)紀年銘梵鐘等を鋳造した鋳物師集団の存在が知られている。養老川中流域における交通の要衝地域にもあたっている。少なくとも古代末期以来、佐是郡の中心的村落が、佐是城の築城に先行して存在してきたものと考えられる。佐是堀ノ内の虎口に妙見社の小祠が現存する。構造の概要 縄張りの主要部分は、主郭から郭Vまでの5箇所の郭と、これに付随する腰郭や空堀等によって構成されている。郭IIは主郭北西側に張り出しているが、他は堀C～A、F～Bによって南北に連携している。所謂「連郭式」の縄張りである。築城の時期については、柴田龍司氏によって「I郭とIV郭に見られる張り出し(外郭形)や土塁の規模・空堀の幅から考えて、16世紀後半代の形態を示している」と指摘されている。また、主郭が所堅固であるのに対して、郭Vは背後の丘陵から見下ろせる位置にあてられていることから、南側からの脅威が想定されていないことが築城の経緯に依るものとも考えられている。字「武城」を主郭とすることについては、異論が見られないが第2図に図示した範囲の他に、北西の諸久保地区や佐是集落を郭の一部として認める鈴木英智氏の説もある。佐是堀ノ内とは別にV郭西にも小字「堀ノ内」が、また南には「出口」が見られる。また、堀Aならびに堀ノ内の集落への虎口によって取り囲まれた「主郭」部分をこの城の「発祥の地」と捉え、この部分のみでも十分に城として機能し得るとした伊藤正雄氏の見解もある。武田入部以前の築城も視野に入れるべきであろう。今後の検討課題である。城の歴史 佐是城跡の歴史については、「戸南武田氏系図」や「市原郡誌」に武田信長の孫佐信長三部武田国吉が天文年間(1551～1569)に築城したと記されているに過ぎない。昭和60年度ならびに平成2年度に実施された発掘調査でも、築城の時期を示す遺構や遺物が発見されておらず、実態は明らかではない。

(田所 真)



池和田城跡 (市原市池和田字城跡280-1他)

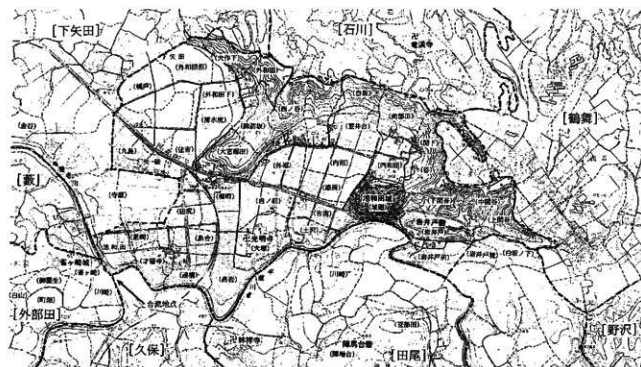
立 地 池和田城跡は、養老川とその支流平蔵川(別称田尾川)との合流地点より東に1.8kmほど平蔵川を遡った右岸の低位段丘面に立地しており、沖積面に向かって突出した丘陵地形に築城されている。主郭部分と沖積面との比高差は約30mである。城跡の小さな字名は、「城跡」であり、周囲には「白ノ前」「漆原」「古宿」「白坂」「白坂ノ下」「岩井戸」等の小さな字名が散見される。殊に、城跡西北に小字「内沼」「外沼」南側に「土沢」などが見られることは、池和田城が西北または南が深田で東は高山を控えるその峰続きを適切な要害の地であるとした『小原田北条記』の池和田合戦の記事などと一致して興味深い。東側の高山とは鶴舞桐木台のことであろう。

構造の概要 池和田城跡は、主郭・郭IIIとこれに付随する曲輪群ならびに堀A、B、溝、土塁等によって構成されている。主郭は標高70m前後で、城跡内でもっとも高い。現在は郭の北西隅に天神社が所在している。天神社を取巻く土塁については、城の縄張りには無関係と考えられている。主郭東側には二段の腰曲輪(I-a、I-c)が配されている。これらの腰曲輪のさらに東側に見られる堀は大規模なもので、北側で堀Aに連結しているが、現在は国道と鶴舞とを結ぶ道路がT字路となっていて判然としない。郭II・IIIへは主郭北東側の虎口にて連結していたものと考えられる。郭IIは、主郭を取巻くように北側(-a)と西側(-b、-c)に配されている。北側の郭II-aには、北西隅に櫓台(現八坂神社)が残り、郭IIIへの虎口を構成している。郭IIと郭IIIとを区画する堀Bは、この虎口を起点として南北に配されており、南半には二条の土塁が残されている。郭II-bは主郭の西側に段差をもって平蔵川に向けて不明な部分が多い。郭II-cは、「ユグ」(要害)と称されている地区である。郭IIIは堀Bを隔てて郭IIのさらに西側に観察される平場である。現在は農耕地として利用されているため旧状は不詳と言わざるを得ない。池和田城の外曲輪をなしていたものと考えられる。郭IIIの西側に小字「古宿」が見られる。既に耕地整理されており旧状を知りえる状況がないが、鳥羽の築高地であったことから「宿城」であった可能性が指摘されている。

池和田城跡周囲に観察される城郭関連遺跡として、字「岩井戸」の岩井戸跡と字「大宮部田」から「諏訪坂」にかけての段丘面に観察される大宮部田城跡ならびに字「大塚」の古刹光明寺を挙げることができる。岩井戸跡は池和田城跡主郭部分の南東に東西に延びる独立丘上に配置されており、最高所に方形の櫓台跡を、また南側斜面部に小規模の郭跡を残している。池和田城主郭とは、指呼の間にある。大宮部田城跡は、段丘上に明確な城郭遺構を残さないが、東側斜面部に郭群を配置する他、「諏訪坂」と「西ノ谷」との小字境に虎口を残している。「白ノ前」「古宿」「漆原」などへの侵入に対する戦略的な郭の配置を意図したのか、対峙関係にあって配置されたものかは今後の検討課題である。字「大塚」の光明寺は弘治3年(1557)の紀年銘を光背裏面墨書に有する薬師三尊像や附子内電墨書に永祿10年(1567)の紀年銘を有する慈恵大師坐像などで知られる天台宗山門派総本山延暦寺道末寺で、伽藍地の西辺に土塁と堀を残すほか本堂裏手に中世の石塔残欠が認められている。尚、弘治3年(1557)銘の薬師三尊像は、光明寺末寺東光寺「向部田」からの客仏であるが、銘文中に「当且那多賀蔵人助」と見えており、この時期の池和田城主が多賀氏であったことの傍証史料として注目される。

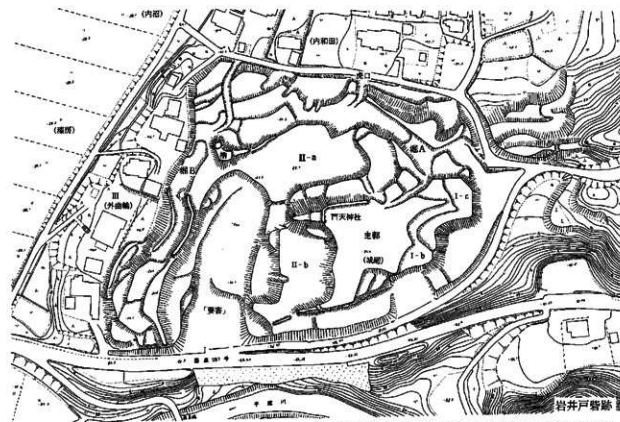
城の歴史 大永元年(1521)八月一日付けの能満寺寄進状に多賀蔵人高明の名があること(寄進状所在不明)天文7年(1538)多賀蔵人正明、里見方として国府台合戦に参加し、敗走。永祿7年(1564)第二次国府台合戦参戦敗走の後、池和田合戦(守将多賀蔵人・兵衛尉兄弟)にて落城等が、軍記物に見られること。鎌倉時代には和田左衛門義盛が池和田館に居たことなどが、これまでの研究では取り上げられてきている。この内、多賀氏の存在については前掲史料などによって確認できるが、不詳な部分が多い。また、池和田正福寺(廃寺、小字才福寺有り)「阿弥陀如来像内墨書」(永正7年)などに「長崎宮内少輔」の存在が認められる。併せて、今後の検討課題となる。

尚、池和田城跡については、小高春雄「市原市池和田城跡」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第14集』(財)千葉県文化財センター(1994)に詳しい。詳細は報告書に依られた。(田所 真)



池和田城の立地と周囲の地名

■ [] = 大字
 () = 小字
 トーンの範囲は大字 [池和田] を示す
 S=1/20,000



池和田城跡概念図

※ 小高尊雄「池和田城跡」『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第14集』所収の調査図並びに地形測量図による。
 S=1/2,300

雀ヶ崎城跡 (市原市蔵字外部田)

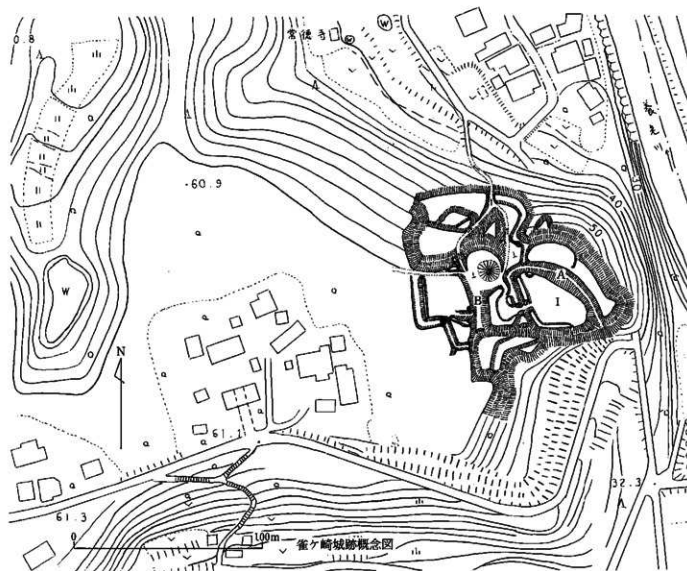
立地 南から北に流れる養老川に東から西に突き出した河岸段丘の台地の先端に雀ヶ崎城は位置する。台地が張り出した分養老川がコの字形に曲り、城は川の突き出た中央の突端上にあり、すぐ南には池和田城の南を流れていた平蔵川が合流している。池和田城は東方2kmにあり、よく眺望できる。

構造の概要 基本的には堀Aと堀Bとに挟まれた曲輪Iを主郭とする単郭の小さな城である。特徴としては堀Aと主郭の間にこの辺では珍しい馬出しがあり、戦国末期の城といえる。馬出しから出たところは現在墓地になっており、竊土屋のような土盛があり現在墓に利用されているが遺構かどうか判らない。

堀Aの西側の台地上に交錯した堀があるが、これも城の遺構かどうかははっきりしない。

城の歴史 城の西側に広がる台地には、平安時代に御園生館と言われている館址があり当時は大館氏が住んでいたらしい。城の歴史もあまりはっきりしたことは判らないが、池和田城が落城した永祿7年(1564)に高浅良右門が在城していたらしい。

(中井正代)



雀ヶ崎城跡概念図

立地 平蔵城跡は、養老川とその支流である平蔵川（別称田尾川）との合流地点より東南に10kmほど平蔵川を遡った左岸の丘陵上に立地しており、比高70m前後を計測する。東西60～70m、北北東～南南西170～180mの規模を有し、丘陵最高部分を占める主郭（通称シロヤマ）の標高は129mである。但し、ここに掲げた「平蔵城」の規模の中には、字「城部田」に属する城郭遺構（通称ジョウヤマ）が含まれていない。字「城部田」に属する城郭遺構を平蔵城一連の遺構群、或いは支城として捉えるならば、規模はさらに広範囲なものとなる。研究者によって、評価の異なる所である。いずれにしても「平蔵」の地は、養老川中流域から上総一宮や大多喜へ抜ける交通の要衝にあたり、数次に渉って築城や改築などが行われてきて不思議でない。遺構の外観的な観察によってのみの判断を行なっている現状では、字「城部田」の遺構群の性格を十分に評価できない。字「城山」とは分けて捉えておくべきであろう。「平蔵」は「畑田文書」にみえる「平之城」比定地でもある。

構造の概要 ここに「平蔵城跡」として掲載する城郭遺構は、『日本城郭大系』ならびに『市原市史（中巻）』において「平蔵城跡」として紹介された城郭遺構を念頭において取り上げている。しかし、既に先学諸氏の研究にも明らかにように、市原市平蔵には字「城山」に所在している城郭遺構群（通称「シロヤマ」・以下「平蔵城山域跡」と別称する）の他に、北側の字「城部田」にも城郭遺構（通称「ジョウヤマ」・以下「平蔵城部田域跡」と別称する）が配置されている。またこれとは別に、字「城山」の城郭遺構群南東300m程の地点に落合忠一氏が発見したとされる「平蔵根小堀城跡」も学史的には取り上げられている。従って、「平蔵城跡」乃至は「上総本一揆」の拠点としての「平之城」比定地を論ずるには、これら3つの「平蔵城跡」を、他の城郭遺構との比較の中などにおいて同様に扱う必要がある。但し、本稿では「平蔵根小堀城跡」の名称を挙げるを止める。

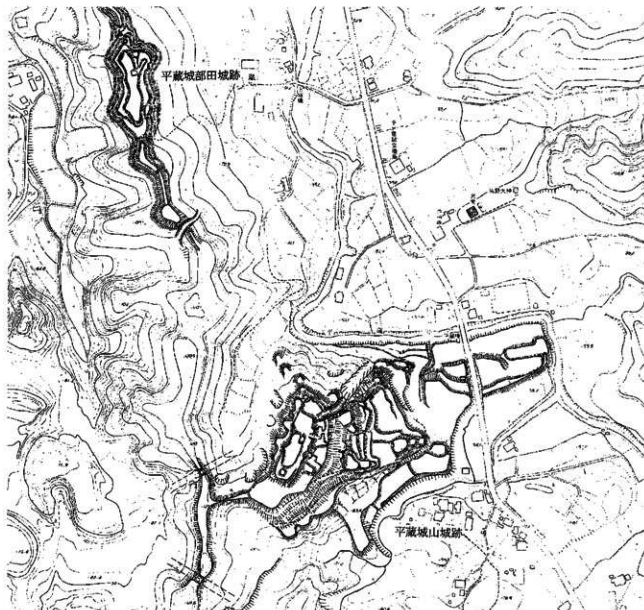
（小高春雄氏は平蔵城山域跡を平蔵城跡、平蔵城部田域跡を平蔵城山域跡と呼称することを提案されている。但し本稿では通例に従って小字名を用いた。便宜上の呼称であって、小高氏に殊更に異論を差し挟む考えではない。）

平蔵城山域跡は、最高所に属する古墳状高まりの北側に主郭部分があり、北東辺に一段低い腰郭が巡っている。主郭の周囲には縦堀や小規模の郭群が想定されているが、これらに有機的な関係が認められず、縄張りとしては未発達なものであることが指摘されている。丘陵の頂部とその北東側の一段の削平地以外の平地を遺構と認めない説（小高春雄「城郭史におけるひとつの画期」『千葉城郭研究』第2号）もあり、真里谷城跡等との比較から、15世紀後半（16世紀初め）とされている。

平蔵城部田域跡は標高約110mの尾根上に立地し、主郭となる細長い郭と、周囲に巡る一段低い腰郭ならびに南北に繋がる深い堀切りによって構成されている。また、主郭北東部には虎口が設けられている。遺存状況が良好であり、平蔵城山域跡よりも新しい様相を呈している。尚、東側裾部の集落に、土塁を巡らした屋敷が現存している。

城の歴史 「平蔵城跡」については、これまで『市原郡志』に掲載されている伝承から、築城が古代（承平年間）に遡ることや、城主が紀伊国の浪士土師平蔵政常とその子孫であることが述べられてきた。また、「上総本一揆」の基礎史料とされる『畑田文書』にみえる「平之城」が「平蔵城」を指すものであるとの推定から、「上総本一揆」の拠点城であったともされてきたところである。この通説については、ほぼ研究者の中に入れられているようであるが、これまでも述べてきたように3つの「平蔵城」の中で評価は、必ずしも定まっているとは言えない。

さて、上総本一揆の引き金となった「上杉禰秀の乱」収束の後、持氏によって処分を受けた在地領主の所領の中に皆吉伯耆守の所領であった天羽郡内生・作海郡が認められている（応永24年（1417）10月17日付け「関東管領上杉憲基行状」）。この皆吉伯耆守については、市原市皆吉を本貫地とした在地領主であったと考えられる。地元に伝承や資料を残していないが、「皆吉」地籍には字「堀ノ内」が認められるほか、隣接する丘陵上に「皆吉城跡」が、また、南南西丘陵上に「皆吉横澤寺城跡」が残されている（参考図掲載分）。丘陵上の小規模な城郭遺構であり、皆吉家との関連で捉えることが許されるならば、今後の平蔵城跡の評価にとって、多少の参考となる。（田所 真）

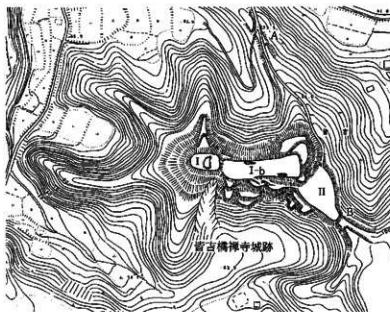


第1図 平蔵城跡配置図

※ 城山域跡は鈴木実智氏の縄張り図を、城部田域跡については小高春雄氏の縄張り図を参考とした。

【参考】皆吉横澤寺城跡縄張り図

所在地 市原市皆吉城山
立地 皆吉城ノ内南西、標高109～96mの丘陵上に立地する。戦跡内、堀跡・土塁跡等あり。
構造 ○主郭は最高所のIと東側のI-Bで、I-Bは中央部に堀切への虎口を持つ。
○堀切は主郭の南西に連なっている。
○堀切に小堀跡群が配されている。
○I・I-B・I-C所で尾根を切っている。
歴史 ○城主不明。
○弘長年頃の紀平氏を有する奥平和家・金満・水迫金剛力士傳や横澤寺に伝えられている。
○皆吉横澤寺の持氏による処分の中に、皆吉伯耆守の名がみられる。皆吉が本貫地。



立地 城のある付近は、南房総夷隅川流域平野とを結ぶ養老川溪谷と、また南房総夷隅地域へ抜ける内田川溪谷も交差する交通路で、当地が戦略的な交通要所として脚光を浴びてきた頃、当城の地理的戦略性が注目された。

構造の概要 当城の範囲は、初期段階はその山容から見て曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(南尾根外郭)と城下集落(東・西町木)の区域が読み取れる。その後ある勢力の進出による大改修で、現状の山城部分と城下集落(殿部田、堀之内、町木)を含む、遺構範囲に拡大したと考えられる。

新城域と見られる曲輪群は、Ⅲ(南尾根外郭)・Ⅳ(北尾根外郭)である。しかし後期の改修は、新曲輪群の構築のみではなく、初期の曲輪群も含めた大改修で、当城の使用者が誰かを考えるにも、重要な視点を残している。

曲輪Ⅱ群に注目すると、曲輪Ⅰ・Ⅱ群の間に見られる小空間を馬出と考える。曲輪Ⅱ・Ⅲ(南尾根外郭)群の間には、坂虎口と空堀の痕跡も見られ、その先Ⅲ(南尾根外郭)群間の小空間地も併形と考えられる。曲輪Ⅱ群に見られる広大な空間地と虎口の痕跡から、最高所地点ではないが実態的に見て主郭部であると言える。

仮説であるが、殿部田、堀之内地区は新進出勢力者の居住地区と考え、東・西町木を含む拡大町木地区を旧来の住民と新規参入者の混在地区と考えられる。

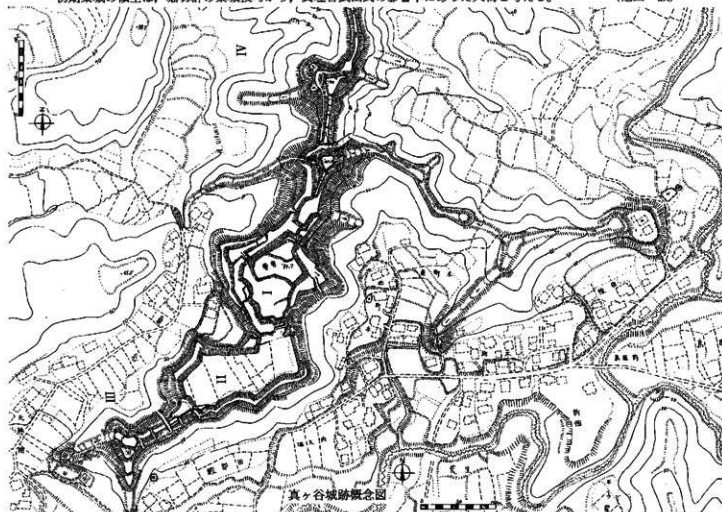
内田川は、外堀と水道路の機能を持ち、新田地区は河岸と考える。

城の歴史 遺構の読み取りから、当城が二期による築城・改修があったと判断した結果、初期築城者であるこの地域の開発領主が存在し、その後の大城域への拡大時点で勢力が想定されるが、問題は後者の特定である。

特に戦時地点の確保や大曲輪・大土塁・大堀切の構築と主郭部を移動した防禦構型より、それは第二次(永祿7年(1564))の国府台合戦の星見氏の存在が考えられる。

初期築城の領主は、堀切群の築城技巧から、真理寺武田氏の影響下にあった人物と考える。

(池田 誠)



立地 小櫃川が形成した沖積地に開口する支谷(途中に高谷堀之内城跡が所在)の最奥部に、東から西に張り出す比高50~60mの舌状地上に2か所の館跡が占拠する。

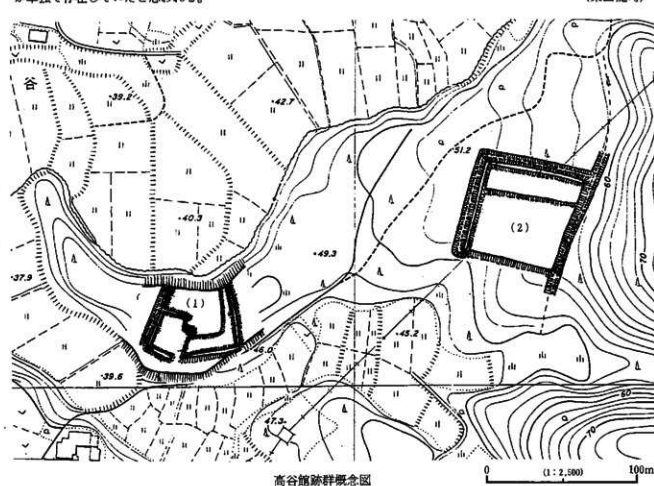
構造の概要 高谷館跡(1)は台地先端部よりやや中程に立地し、略方形の平面プランである。東西70m、南北50m程度の規模を有する。西、南、東の各辺は小規模な土塁によって画されているが、北辺は台地縁となり土塁は築かれていない。また、西辺のみ土塁の外側に小規模な空堀が伴う。郭内は鍵手状に小規模な土塁が配され、さらに低位な段差でもって三分される。南辺の土塁が一か所開口していることから、内部の鍵手状土塁と対応した虎口であったと思われる。高谷館跡(1)から高谷館跡(2)方向へ延びる道は堀切状を呈した古道である。

高谷館跡(2)は高谷館跡(1)の東北東150m程離れた丘陵裾部の平坦地に立地する。一辺75m程の正方形の平面プランを呈し、北・西・東の各辺の小規模な空堀と南辺の1.5m程の段差でもって区画される。また、西辺と北辺には土塁が伴っている。郭内は低位な段差で二分される。なお、東辺の空堀は近年まで道路として使用されていた。

城の歴史 地元では城館跡の伝承も残されておらず、また現在の集落からも離れていることもあり全く歴史的には不明の館跡群である。ただ、館跡の構造からみると、単純な方形館タイプで、しかも館の規模および土塁と空堀が小規模なことを考えると、16世紀代の構造とはいえず15世紀代の形態と捉えられる。おそらく、発掘調査で構造・規模・時期等が明らかになった南屋敷遺跡(千葉市)、池ノ尻館跡(四街道市)、堀谷周路遺跡(山武郡山武町)と立地や構造が類似していることから、それらの遺跡の性格と同じような小領主層の居館であったと思われる。

2か所の館跡は、互いに古道によって結ばれていることから、当時は有機的な関連を保ちながら併存していたであろう。また、高谷館跡(2)背後の丘陵は全く人為的な手が加えられていないことから、館跡と館のセット関係はなく館が単独で存在していたと思われる。

(柴田龍司)



立地 小瀬川が形成した沖積平野に開けた支谷とそれに開口する枝支谷に挟まれた標高32m程の舌状台地先端に立地する。現在城跡の西辺を県道千葉・鴨川線が通るが、この街道が近世の久留里街道を踏襲しているとするならば、中世後半段階においても当城は街道と一体の関係であったと考えられる。

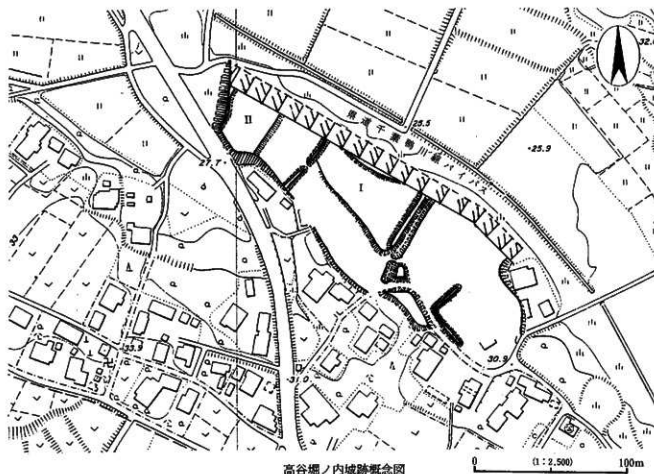
構造の概要 築義の城跡は長軸(北西-南東)160m、短軸(北東-南西)80mの規模である。内部は大きく2か所の郭から構成される。I郭は屋号「堀之内」の御側家の屋敷地全域で、南東辺は高さ3m程の大規模な土塁とその外側に上幅5m程の空堀によって区画される。空堀の南側が一部途切れているがここが虎口に当たるものと思われる。北東辺には低位ではあるが土塁の残欠が認められる。本来は南東辺の土塁と同規模であったと思われる。また、I郭内は屋敷地と背後の畑地との境に数10cmの段差が認められることから、郭内は二分されていた可能性もある。

II郭はI郭と土塁によって画されるが、空堀の痕跡は認められない。土塁はほぼ中央部が開口し、さらに北端が橋台状にやや規模が大きくなっている。また、北西端にも土塁の残欠が認められる。郭内はI郭と同様に低位の段差があることから二分されていたようである。

以上が主郭部に残された遺構の概要であるが、I郭の南東に続く集落内にも屋敷地を区画するように土塁が部分的に残されている。ただ、城郭に伴う遺構かどうかは今後の検討課題といえよう。

城の歴史 I郭を字「堀之内」と呼ぶ他は、地元でも城跡の伝承は残されていない。しかし、大規模な土塁が残されていることから最終的な構造は16世紀後半代と思われる。おそらく、当初は居館的な単純な構造であったものが16世紀後半に大規模な改築を受けたのではないだろうか。その契機は戦国期に久留里城と惟津城を結ぶ主要な街道が当城の脇を通っていたことが背景として考えられる。

(柴田龍司)



高谷堀之内城跡概念図

立地 北を矢部川、西を島田川が流れ、その支谷によって形成された独立丘陵と冒うべき、標高47mの高台に位置し、西約2kmの東京湾を間近に望むことができる。周囲の支谷と比高差は20m弱である。

構造の概要 南北に伸びる丘陵の南側を占め、規模は南北約375m、東西約260mに及ぶ。北半分の遺構が簡易によって破壊されたが、明治12年(1879)の「迅側図」には東西に走る2本の土塁が見られる。これと現存する遺構により、ほぼ中心に位置する郭I、その東側の郭II、これらの南側の郭III、郭Iの北に接する郭IV、北端にあって三角形を呈する郭Vに大別される。大手は東側の「表板」を上った付近で、現在陣屋の碑がある所には、「不浄門」があったと伝承される。郭IIIの南端には内折形を持つ虎口があり、充実した遺構から大手口のように見えるものの、「裏門」と伝えられている。

郭Iは本丸に相当しよう。東・南・西側には2m以上の高さを有する土塁a・b・c・dを築いてある。虎口から北進する道を東に直角に曲げた所に虎口ロを設けるが、大手方面へ通じる外折形虎口ハもある。西側には虎口ニがある。郭IIには、コの字型の土塁eなどが見られるが、「表板」に面することから、大手に伴う施設と考えられる。

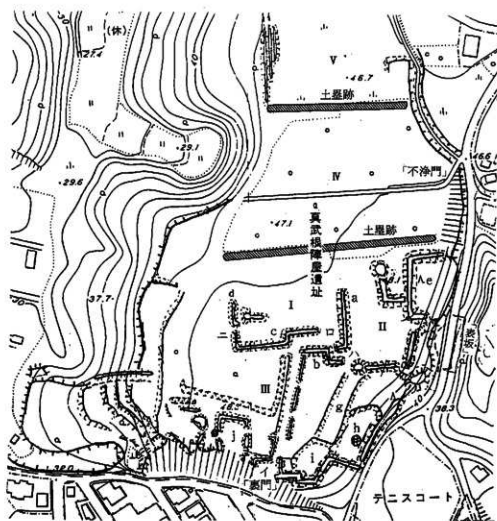
郭IIIは虎口Iから郭Iに通じる道の左右に広がる。道の両側には低い土塁が見られ、東側には腰曲線8〜iが連続する。西側にはコの字型の土塁jなどがあり、内部は複雑に分割されていたようである。藩の施設や家臣の屋敷が置かれていたであろう。郭IV・Vについては、絵図も失われたため判断が難しい。

以上のように、現存する遺構だけを見ても、真武根陣屋は技巧的で発達した陣屋を示している。中でも虎口Iから

郭Iへ至る遺構群の様子は飯野陣屋(富津市)・生実陣屋(千葉市)・高岡陣屋(下総町)などの1〜2万石クラスの大名の陣屋の大手口ときわめて類似しており、幕藩体制崩壊期に造営された陣屋でありながら、これほど充実した遺構を有するという点で、稀有な例と言えよう。

城の歴史 11代将軍徳川家齊の寵臣林忠英は、文政8年(1825)に1万石の大名となり、貝瀬村(木更津市)に入封した(貝瀬藩)。子の忠胤の嘉永3年(1850)に陣屋を東南約1.5kmの諸西村に移し、真武根陣屋を築き、諸西藩と称した。

幕末期の藩主忠胤は明治維新に際して、佐幕派として新政府に徹底的に抵抗したため、諸西藩は廃藩となり、陣屋も廃された。(外山信司)



真武根陣屋跡概念図 (松本勝・矢野淳一・稲垣昭智原図に加筆)

立地 小櫃川下流には南から北に張り出したいくつかの舌状台地があるが、中尾城はその中の一つに位置する。1.5km東には笹子城がある。城と小櫃川の間に昔の鎌倉街道が通っておりそれを押さえる位置にある。城の周囲は主に水田になっている。

構造の概要 城域は南北に張り出した舌状台地の先端に位置する。笹子城方向の東側斜面は城としての防御をきちと施してあるにもかかわらず、何故か西側斜面はほとんど防御がなされていない。人家もありないところを見ると、山裾から急に急な坂になり、防御の必要性はなかったのかもしれない。

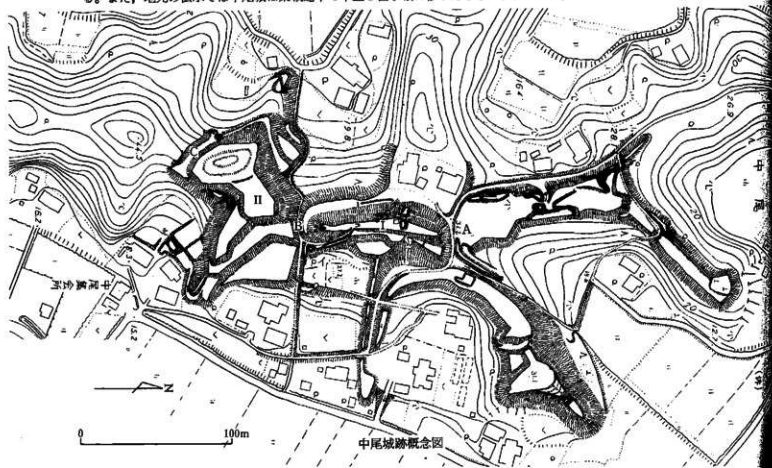
主郭は天王社という神社のある細長い曲輪Ⅰにある。北と南は堀切AとBで区切られている。主郭に入るルートとしては現在堀切Bから急な坂道を登り鳥居のところに上る道があるが、当時の入口は堀切Bではなく虎口イからと思われる。櫓台の周囲を回ることにより櫓台の役目がますます生きてくることになり防御性も高まる。

主郭から西側に降りる道があるが、当時のものかどうか不明である。ただ主郭の土塁の下に横矢とみられる腰曲輪があるので櫓手だったのかもしれない。

主郭から北東方向に伸びる曲輪は先端で2重の堀切になっている。その手前の堀切はふだん木橋が架かっていたと思われるが、木橋と土橋の珍しい遺構になっている。

主郭の南側に曲輪Ⅱがあるが曲輪の西は自然地形の小山のままだっており、その南の堀切Cはきちと作られているが、それより南に続く尾根に連絡用の道の堀切らしいものが1本あるだけで、他に防御らしいものは何もない。近くの笹子城は同じような地形に作られながら、堀切が多数はいり遺構も残っているのに比べると中尾城の完成度はかなり低いと言わざるを得ない。

城の歴史 信憑性のない近世に書かれた「中尾落草子」によれば天文13年(1544)かその数年後中尾城にいた武田の武将、後藤基助が安房の里見義隆に攻められ戦死し、その時は落城して廃城になったということになっている。また、地元の伝承では中尾城は築城途中で中止し笹子城に移ったともいわれている。(中井正代)



立地 小櫃川左岸に開析した谷津に挟まれた舌状の丘陵全体に占地する。城跡の先端部(北端)は東・西の丘陵より奥になることから、東西方向の眺望は隣接する丘陵に遮られ北方のみ視界が開かれている。この眺望に恵まれない地点に城郭が築かれたことは、笹子城跡の特色の一つといえる。

構造の概要 主丘陵と枝丘陵の全域を城域とし、南北850m、東西400mの規模を有し、県内でも有数の城郭である。城跡は大きく7区画(Ⅰ～Ⅶ)に分けられる。Ⅰ区は現状では腰曲輪の平場がいく段にも造られている他は、土塁や堀は各々1-2か所しか認められず、後述する他の区画とは構造的に大きな違いがある。Ⅱ区は現在切通し道となっている空堀Aと空堀Bによって区画されたところで、この区画も腰曲輪状の平場が多数取り付いている。Ⅲ・Ⅳ区は当城の主郭部に当たるところで、Ⅲ区の北側には丸馬出しが設置されている。馬出しは県内の城跡では数例しか知られていないが、当城跡のは最も景南に位置し、しかも丸馬出しは唯一の事例である。Ⅳ区はⅢ区とは空堀Eで囲まれ南は大規模な空堀Fによって囲まれる。またⅣ区の西側には横堀が認められる。空堀EがⅣ区側に屈曲していることから、Ⅳ区はⅢ区より主となる郭と思われる。Ⅳ区の南側にはさらに空堀G、空堀Hによって囲まれたⅤ区、Ⅵ区の区画がある。頂部は人為的に平坦化され、斜面部には腰曲輪状の平場も造り出されているものの、空堀G・Hは空堀Dと比べると規模的に小さいことから、Ⅴ・Ⅵ区は捨郭的な存在であったと考えられる。Ⅵ区はⅢ区から北西方向に延びる枝尾根部全域を占める区画である。頂部は人為的に平坦化されているものの、特に空堀で造断はしていない。しかし、Ⅵ区には平場を多数造り出してあり、城域として確実に取り込んでいることは明白である。

発掘成果 平成3年4月から平成5年2月まで、東関東自動車道千葉・富津線建設工事に先立って千葉県文化財センターによって発掘調査が実施された。調査対象地は城跡の北端部で約9,000㎡、城域の約1/30の面積であった。

調査に入る前の現状は、ほとんど埋没した空堀の痕跡が1条認められた他は人為的な平場が15か所認められたのみであった。しかし、最高位(標高44m)と最低位(標高17m・水田面との比高差2.5m)の平場を除く13か所の平場から、人為的に埋没された空堀が検出された。そして、空堀は1回あるいは2回の切り合いがすべての平場において認められた。また高位置の平場では最初に掘られた空堀を埋めて平場が造られるが、この平場上では無数の柱穴や土壇・土坑・竈穴遺構等が検出され、平場が居住空間、墓域として利用されていたことが判明した。

出土遺物も中世遺物だけで数千点、陶磁器だけでも2,000点以上出土し、県内の中世城跡跡の発掘調査例としては最も多い出土量であった。出土した陶磁器には、中国製の青磁・白磁・染付・鉄胎茶入、国産では瀬戸・美濃と常滑製品が主体であった。なかでも、瀬戸・美濃の灰釉小皿と鉄胎酒鉢が多数出土し、古瀬戸後期末から大室Ⅰ期の製品が主体をなす大室Ⅱ期の製品は極めて少量であった。他の遺物では、最終期の空堀に投げ捨てられた状態で出土した多量の五輪塔・宝印印塔、舍利容器として使われた水晶製ミニチュア五輪塔、鉄鍋、独鈷片が特色としてあげられる。

出土陶磁器からみた笹子城跡の時期は、15世紀中葉に築城され16世紀中葉に廃城になったと捉えられる。15世紀後半から16世紀前半が当城の最盛期に当たり、城内は日常的に居住空間として使用されていたことが遺構・遺物から明らかにされた。

発掘成果から考えると、Ⅰ区はおそらく全域に空堀が埋没している可能性が高いことから、現状のⅠ区の状況は人為的に破壊(破城)された変であると思われる。逆にⅡ～Ⅶ区では空堀や土塁が残されていることから、この地区は破却を受けなかったか、16世紀中葉以降に新たに改築あるいは築城されたとみることができる。Ⅲ区の馬出しの存在を考えると16世紀後半の構造と考えられる。

城の歴史 近世初頭に成立したと思われる軍記物「笹子中尾落草子」に、真里谷武田氏の内紛に伴う笹子城の攻防戦が記されているが、同時代史料はない。しかし、発掘成果から得られた当城の機能した時期(あくまでもⅠ区について)からみて、真里谷武田氏関係の城郭であったことは間違いない(柴田龍司)



稚子城跡測量図

天神台城跡 (木更津市真里谷字天神台他)

立地 小櫃川の支流・武田川は要害城南麓の宿付近で泉川と合流するが、この合流点を眼下に見下ろす高い丘陵上 (標高約110m) に本城跡は立地する。南側は丘陵が連続し、北側は武田川を隔てて要害城跡に面する。

城の構造 天神社のある曲輪が主郭である。河の付近を最高所として全体に緩く傾斜するが、北東角を少し出して櫓台状の土塁を設け、周囲は一段低い位置に空堀と土塁を廻らしている。その塁線は西側を除き折が連続する。土塁は尾根続きの各面空堀内一段低いかたちでそれぞれ1か所存在する。

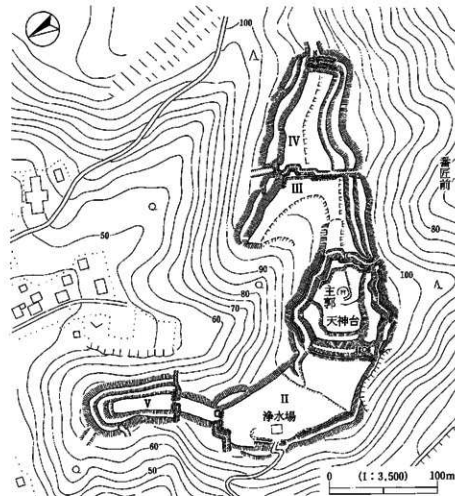
曲輪IIは主郭北側の一段低い地で、浄水場裏地は広い平坦地が展開する。西側は低い土塁が部分的に遺存し、北側は空堀と明瞭な土堀で区画する。

曲輪IIIは主郭の南側に位置し、東西に帯状の腰曲輪を廻らし、尾根続きの南側は主郭と同様の手法で面しているが、その規模は劣る。北側から谷が入っているためにその平坦面は限られており、ここは曲輪というより防壁上の理由により (主郭と同じ高さであるために) 一つのラインを設定したのであろう。

曲輪IVはIIIの南側に続く細尾根が隘路となり、また、若干下り傾斜となる手前に二重の空堀と土塁を設け、両脇の両部に一ないし二段の帯状腰曲輪を廻らす。また、曲輪Vは曲輪IIから続く尾根の先端に当たり、周囲は明瞭な帯状腰曲輪を廻らし、曲輪IIの側は土塁と空堀で区画する。なお、土塁はその中央に設けている。

以上、本城は大きく5郭構成でその規模大ながら、主郭を除けば自然地形を区画した感が強く、その区画の仕方も尾根筋以外は不完全でいかにも臨時的な築城の感が強い。この点は後に述べる城の歴史と密接に関連する。

城の歴史 本城は既に「千葉県誌」の真里谷城の項に真里谷に所在する城跡として要害城跡と共に紹介されている。それゆえにといってよいかもしれないが、「快元僧侶記」に登場する天文6年 (1537) の真里谷武田氏一族の内訌にみえる「新地」の一つの候補地として挙げられてきた。すなわち、真里谷信隆と同信の争いに際して新たに築かれた城である。この「新地」の城が信隆、信応どちらに属するかはともかく、真里谷に所在する3城を互いに比較した場合、本城が年代的には真里谷と要害の中間、構造的には最も臨時的な様相を残すことから、新地の城とはまさしく本城に相当すると思われる。(小高春雄)



天神台城跡概念図

立 地 城のあるところは、小櫃川流域と養老川流域に挟まれた房総丘陵の山塊群で、上総地域の盟主に相応しく、両流域の経済的権益を同時に確保する、象徴的な位置に占地している。

城の付近は、小櫃川の支流である武田川と素谷川が流れているが、山間部に開けた両河川流域の経済的権益の確保を主目的とした築城ではないことは、この城郭の規模そのものが語っている。

構造の概要 当城の構造を理解し易くする為、各曲輪群をⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ(北尾根曲輪群)・Ⅴ(南尾根曲輪群)とする。

当城の縄張り、地形説(城山の山容地形を重視する説)から全体構造を見ると、初期段階の城域は、その山容から見て曲輪Ⅰ・Ⅴ(南尾根曲輪群)群の区域が読み取れる。城郭として使用期間が長い当城は、情勢の変化にともなう大改修を繰り返し、最末期段階は曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群を含む範囲に拡大したと考える。

また縄張り説(縄張りを重視する説)から全体構造を見ると、曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ群を含めた区域を一体と見て、この城域をA群と考えると、曲輪Ⅳ(北尾根曲輪群)・Ⅴ(南尾根曲輪群)群が、このA群の西翼に附属した構造と読み取れるから、初期段階の城域をA群と考え、最末期段階は曲輪Ⅳ(北尾根曲輪群)・Ⅴ(南尾根曲輪群)群が新城域として築城・大改修され、現存遺構範囲に拡大したと考える。

この縄張り説は、横堀・堀切遺構を重視した読み込みで、曲輪Ⅳ(北尾根曲輪群)群の各尾根先端に見る堀切、曲輪Ⅲ群の南側面を走る大横堀と尾根先端のL字状堀切、曲輪Ⅰ群の南尾根を遮断する縦堀と堀切、Ⅴ(南尾根曲輪群)群の尾根筋最南端を遮断する大堀切と大土溝等の構築物が、当城の重要地点を区切る事から、これらの防禦遺構を重視して、城郭構造を把握する方法である。

曲輪Ⅰ群は、初期段階から末期段階まで、当城の主郭機能を持っていたと考えられ、中でも大方形館形式の曲輪(千疊敷)に注目すべきである。

山塊の険しい地形では、曲輪の形状を意図的に方形として、縄張りをする事じたい困難なところもあるが、以外にも全国各地の主要な城郭に見る縄張りである。

しかし、大方形館形式の曲輪は、平地の方形館形式と違って、水(空)廻の構築は見られないところが多く、むしろ山頂の方形館形式による曲輪には虎口の工夫が見られ、平地の方形館形式との違いがより鮮明である。

当城の虎口も独特の形式を持つ大城門遺構で、城門を入ると正面は城壁で、通路は左右に直角に折れ進行するが、右方向に進むとその距離は短かく、行き止まり通路の工夫を構築している。左方向に進むとその距離は長い、方形曲輪に出る通路としている。この通路部分を異常に長く構築して、頭上からの攻撃を重視する工夫が見られる。

この方形館形式の曲輪の構築は、全国各地の城郭中でも鎌倉期以来の領主の城郭に多く見られる事から、新興勢力の城郭ではない旧勢力と云うべきか、または伝統の権威に依拠した勢力の城郭に存在する遺構の一つである事から、方形館形式の曲輪そのものの自体が、権威の象徴を具現化したものと考えている。

城の歴史 遺構の読み取りから、曲輪群がその時代の状況変化に応じた大改修を受けても、曲輪Ⅰ群は不変な地位を保持している方形館形式の曲輪(千疊敷)の存在から、康正2年(1456)に上総に入った守護代武田信長以来の、真里谷武田氏某代の本営と言える格式を示す城郭である。

(池田 誠)



真里谷城跡概念図

立 地 小櫃川の支流、武田川は木更津市真里谷の谷間を曲流し、宿付近で泉川と合流する。この合流点北側の平地及び宿の町並みを南に見下ろす丘陵(標高約100m)が本城跡である。川を隔てた対岸丘陵上に天神台城が、また、上流約1kmに武田氏の菩提寺の真如寺がある。

構造の概要 本城は従来丘陵上の遺構のみで考えられていたが、新たな調査の結果、南側平地も広く取り込んだ一大城郭であると推測される。以下、山上と平地に分けて概説する。

天王社(a)のある標高約100mの山頂部が主郭に相当する。ここはまわりを雨り落として法面を急傾斜とし、曲輪の周囲は土塁が廻っていたようである(一部残存)。西側は空堀と土塁を並列させる一方、東側は一段低いために腰曲輪状の平地となって堀を廻っている。また、山頂からは南側と西側に支尾根が派生するが、その周囲は法面整形して急傾斜とし、前者は2段の腰曲輪の先に大堀切(b)、後者は2重の空堀を設けている。大堀切の端の土塁また空堀の屈曲(c)や堀切との併存(d)など、そのあり方も注目される。

主郭北側は地形に沿って南平地が連続するが、ここには間を分割するような堀切等は存在せず、上面は多く自然地形にまかされている。しかし、その一方、先端の一高丘(e、あえて言えば主郭に次ぐ曲輪)北側は2重の大規模な空堀と土塁が取り巻き、北側の丘陵と隔絶する。東側の支尾根には地形なりに上面を扁平した曲輪が連続するが、先端にゆくに従い南平地は弱い。ただし、中度をめぐる帯状の腰曲輪は明瞭で、段差を有しながら全周する。

さて、これまではここで本城の素描も終わることになるが、北側から南西側にかけての大規模かつ入念な防衛構造に比べると武田川沿いは明らかに劣っており、以前から疑問のもたれたところであった。しかし、今回の調査に伴い新たに調査した結果、一つの解決案を得たので紹介したい。

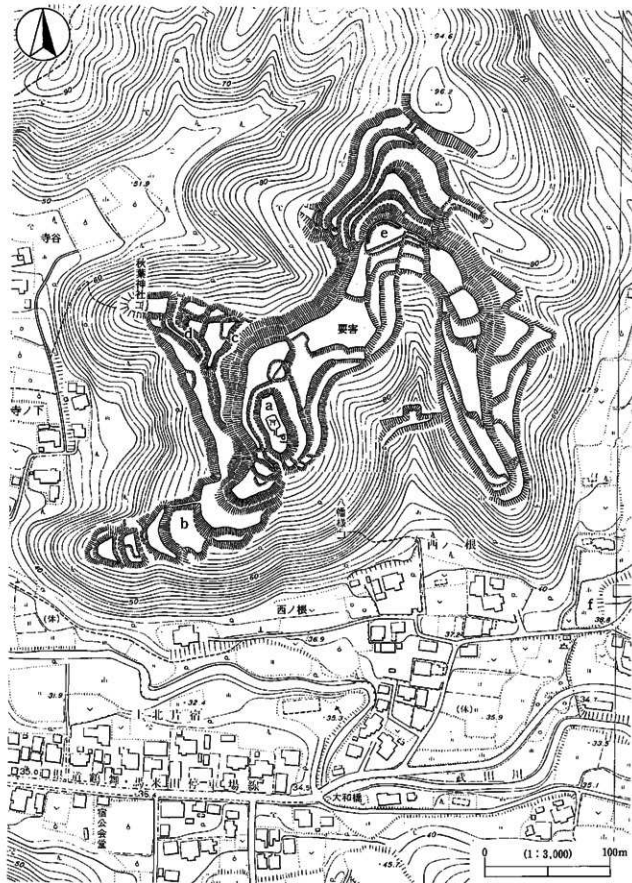
それは、一言でいえば、南側は武田川沿いの平地を広く取り込んで川を天然の要害とした、ということである。武田川は本城の東端付近で左に緩く屈曲し、また右折してその西端山麓を流れている。川幅はその上幅で10mに満たないが、まさに自然の堀をなしている。問題があるとすれば、(e)からのびる丘陵と川の間であるが、それも深い谷が締め切るように延び、しかもそこだけが沼地状をなしている(f)。つまり、丘陵南側の防衛の希薄性は、城の谷部から南側の平地を当初から見込んで丘陵全体の擁護を考えた可能性が高い。丘陵上のまとまった平地—しかも曲輪内の一の少なきはこのような観点からも理解できようか。

以上、構造からみた本城は、大規模かつ幾重もの空堀・堀切また法面整形をもって厳重な防衛ラインを設定し、さらに山下の平地を取り込んでいる可能性があるなど、小櫃川中〜下流域の城としては型子城と並ぶ内容を有しているものである。

城の歴史 本城は大正7年の『千葉県誌』に真里谷城の説明に伴い、紹介されていたものの、その内容はまったく不明で、このことが上述した内容にかかわらず、近年までその真偽について注意されることになかった理由であろう。この点は、大野太平氏の古典的名著である『房総見聞記の研究』においてもしりである。しかし、近年は文天6年(1537)の真里谷武田氏一族間の争いの一方の舞台となった「新地」についての考察も進み、その具体的な比定も城の構造に即して行われるようになった。結論からいえば、本城の対岸にある天神台城が「新地」の城にふさわしく、要害城はそれより後出する、ということである。

もちろんこれは発掘調査の手を延た訳でもないので確証はないが、もしそうだとすれば、天文の内乱以降降参した真里谷武田氏がこのような城を築城しかつ維持できたかということになる。そこで、仮に別の勢力によったとすれば最も可能性の高いのは北条氏であろう。天文2年(1574)以降、西方の状況が好転したのに伴い、北条氏は天文4年〜5年(1576〜77)にかけて、上総の東西から侵襲し、木更津一帯和田一宮の線まで里見氏の勢力を後退させ、その枯枝線付近には新規の築城を含めた城郭の整備を行っている。その結果、上総中央部における里見氏の勢力圏は久留電城まで後退したが、その順次に突きつた刃ならぬ城郭(築城)がこの要害城ではなかったか、と推測する。

(小高香雄)



要害城跡概念図

立地 小糸川中流から下流域にかけろ広大な平野を見下ろす北側舌状台地に位置する小型城郭である。

西側および東側は更に南に張り出した台地が存在するために、南先端部の曲輪から南側の平野部が遠望できるのみで視界はそう広いものではない。

構造の概要 本城は南房総では珍しい、典型的な直線連郭式の丘城であり、目を見張るべきものがある。城の北側は住宅地が迫り、城の範囲は定かではないが、「上総国周准郡三直村誌」、明治19年の三直城地籍図には、現在ゲートボール場利用されている面が曲輪様に表記されており、「日本城郭体系」には郭Vとして位置づけられている。なお、郭Vの北東端には堀状の落ち込みが見られ、ここに堀切が存在したと見られる。

郭IVは道路によって一部が欠失するものの遺存は良好で、北側には土塁および土塁から延長する櫓台状の高まりが見られる。郭IVと郭IIIの間には堀切によって隔絶されるも、落ち込みは明瞭ではない。

郭IIIと郭IIの間には深さはないものの、幅広の堀切によって隔絶されており、土塁を経て郭IIに至る。郭Vからは堀絶遺跡の通路を経て、前述の土塁に到達するが、当時のものか不明瞭である。

郭IIは土塁によって北と南を仕切る独立感のある大型の曲輪で、曲輪の東西には櫓臺が所在する。

郭IIと郭Iの間には堀切で隔絶されるが、中心に土塁が存在し、土塁に囲まれた虎口から郭Iに侵入する。

郭Iは独立感のある大型の曲輪で、城の最前線に位置し、遠く南側の平野を見下ろしている。

城は、小糸川沿いの街道に重点を置いていることは明白であるが、全面的に突出した台地に構築していない点など奇異な感もある。ただ、北側の八重原地区にかつて所在した街道、北東部に存在したであろう虎口のからみ方を考えると、この地を選定したこともうなづける。おそらくは、街道の番所として機能していたと考えられる。

更に、谷を挟んで東側に所在する、里見氏の兵糧庫があったと伝える蔵屋敷跡 (君津市三直字台) も三直城の一連の施設と考えられ、小糸川を挟んで南側1.5kmに対峙する常代城との関係も指摘できよう。

城の歴史 三直城は、忍足三直治部少輔の居城といわれる。忍足氏は安房国平郡高崎村 (富山町高崎) の土豪であり、里見氏の家臣であったとも伝える。

治部少輔については富浦町の当城に居城していたという説があり、「日本文書」(天正9年か) 8月17日付の里見義親の書状に見られる人物と同一で、後北条氏と戦ったといわれる。(松本 勝)

三直城跡概念図

0 S=1/2,500 100m

立地 小糸川中流域左岸の、鹿野山へ連なる丘陵の東へ突き出した端部に位置する小型山城である。城の西側は急峻な山塊が迫り、北・東・南は蛇行する沢が流れ、もともと天然の要害であった所に築かれている。

構造の概要 城は全体的にY字状を呈するもので、北と南から中心を囲むタイプである。城の最下位には現在水田に利用されている広大な平場が広がる。その北端部から山城への通路へ至る。

広大な曲輪Ⅳの東には土塁が連り、下方には帯曲輪が所在。

南側の要である曲輪Ⅲは東に土塁を置き、堀切で隔絶させて、その下方の曲輪・腰曲輪群Vを望む。この曲輪・腰曲輪群はそり立った尾根遺構を多用する特質があり、その間に堀を配して重厚な守りとしている。

曲輪Ⅳの西側は切岸で隔絶された曲輪に至り、後方の主郭・曲輪Ⅰに至る。曲輪Ⅰは、略方形の独立した高まりを呈し、土塁が巡る。後方には堀切が所在し、更に後方にも曲輪Ⅱが見られる。この曲輪の周辺は、岩盤を精巧に切り込んだ箱状の横堀を含む、重厚な堀に巡らされているもので、後方は曲輪の端を三角形に切り込んで、敵の侵入を防いでいる。更に後方にも小型曲輪なども見られるが、城の中心はここまでと考えられる。

城の構造は至って堅固でありながら大手前面は意外と狭く、通る谷筋を堀と見立てて敵兵の侵入を拒んではいるものの、一旦侵入されると比較的弱い縄張りであり、いわゆる「後堅固の城」の強い部分を露呈している印象も見られる。

城の歴史 比較的良好に地元に伝承されている城であり、その点でも興味のもたれる城といえる。

城主は里見氏の重臣、秋元氏であり、その初元は13世紀初頭における下野国宇都宮城主、宇都宮頼綱に憑る。その子、泰果はこの地に移り、北方の鎌倉村に館を構えたという。時は下って永正年間 (1504~1520) に秋元義正によって秋元城は築造され、こちらに移ったと伝える。

その孫にあたる義久の代 (永祿7年) には後北条氏によって秋元城は攻められ、落城する運命にある。後北条氏は第二次国府台合戦による勝利に乗じて、里見氏の本幹である久留里城攻略を謀り、市原市の池和田城を攻め取ったばかりであり、次の標的にこの城を選んだ。秋元城を奪取すれば、久留里城への南略を確保できるからである。この戦いで城は落ち、義久は戦死したと伝える。なお、次代の城主は後北条氏の家臣、斎藤正勝が治めたという。しかし、その後里見氏は勢力を盛り返し、里見氏系の城となっている。天正18年の「毛利文書」『関東八州城之図』には「この城里見氏正少弼居城」と記されている。

なお、秋元城の谷を挟んで南側に、城山と称する「栗倉岩」が所在し、土塁が巡る曲輪が見られるが、この城がどの集団に帰属するかは不明瞭である。

(松本 勝)

秋元城 (小糸城) 跡概念図

0 S=1/4,000 100m

久留里城跡 (君津市久留里字内山)

立 地 久留里城は房総半島のほぼ中心にあり。上総・安房の境に連なる清澄山系から北方の東京湾に流れ出る3大河川、東から資老川、小櫃川、小糸川の中の小櫃川の中流で、房総山間地帯から小櫃の平野部に出るところの接点に位置する。資老川沿いの上総丘陵の突出した山頂145mを本丸とした東西1,100mの規模の大城郭である。半島の中心にあるため南の安房や東の南総方面、西の上総方面の交通の要衝ともなっている。そのため位置といい、地形といい、交通の分岐点といった大城郭ができてもおかしくはない位置にある。

構造の概要 駐車場に行くためのトンネル北方部分。この部分は図示していないが、これは曲輪Ⅴを中心とした部分でこの城では最も古い遺構と思われる。最初に武田が築城した時は曲輪Ⅴとその周辺のほん少しの部分だけではなかっただろう。

次にトンネルの南側部分、近世の本丸にあたる曲輪Ⅰとその周辺部分。この城では最も高い所に位置し中心部にあたる。里見氏が在城するようになってから増築されたものと思われ、戦乱が続いたせいでも遺構の多い部分である。最後に遺構はほとんど残っていないので図には書かなかったが、中心部の西側、山裾にあたる所に近世に造られた三の丸と外郭があった。現在は水田と人家及び国道410号線が南北に走っている。最も後世に作られた部分であるが、平地であったため、明治の廃城時にいち早く取り壊された所である。

主郭に登るルートとしては、曲輪Ⅴの虎口から入り堀切のある尾根を上り、曲輪Ⅱを渡って現在の道であるところの主郭の下の方の井戸のあるところから虎口へ入るルートが考えられ、これは近世になって安定してからこのルートであろう。虎口にしても中世に後北条に度々下の小櫃川の方から攻められているため、軍事用の道はあったであろうが大手道は設けにくい。曲輪Ⅳと北側の曲輪は主郭・曲輪Ⅱに比べ大きく、たぶん近世になって下外郭ができた時に作られ、大手道もその時にできたものではなかろうか。

近世初頭の頃までの曲輪Ⅱから主郭に登るルートはおそらく曲輪Ⅱから覆せ尾根状の土橋を通り現在のトイレのある主郭の西下の曲輪より主郭の北側を通り、堅堀で挟まれたところを進み、土壁で挟まれた門の跡のようなところを通って主郭の虎口へ上るのが妥当であろう。そうすることにより主郭にある大土量aが比高差を増して防壁の役目を果たすことができ生き延びてくることになる。

里見氏の頃のルートは、今の駐車場から尾根筋が割平されルート状になっていることから、そこを通り3方を堀切で囲まれた曲輪Ⅲを渡って主郭に登ったものと思われる。

主郭の虎口は袖手にあたるところで、下に腰曲輪が2つと堀切が2本入っているが、それよりも南方方向は尾根のルートになっているが、小さな堀切やちょっとした遺構がある程度で北の方向に比べ防壁で囲めてはいない。このルートは防壁よりもむしろ非常時の補給路の役目を果たしたのではなかろうか。強力な後北条氏に何度も攻城されたにもかかわらず守りきれたのはこのルートからの補給の役割が大きかったと思われる。

城の歴史 古くは平将門創業したとする「久留里記」があるが、それはあくまでもよくある将門伝説にすぎないと思われる。史実としては「君津郡誌」に記されているように真理谷武田(以下、武田)が妥当であろう。武田は康正2年(1456年)に隠守殿代を命ぜられ、上総に疾風の勢いで進出し、その領国を制圧して先ず南、真里谷の2城を築きその後相次いで領国支配のため大多喜城、佐貫城、造海城、峰上城、佐是城、惟津城、萱子城、中尾城などの支城を次々と築きその一貫として久留里城ができたものと思われる。

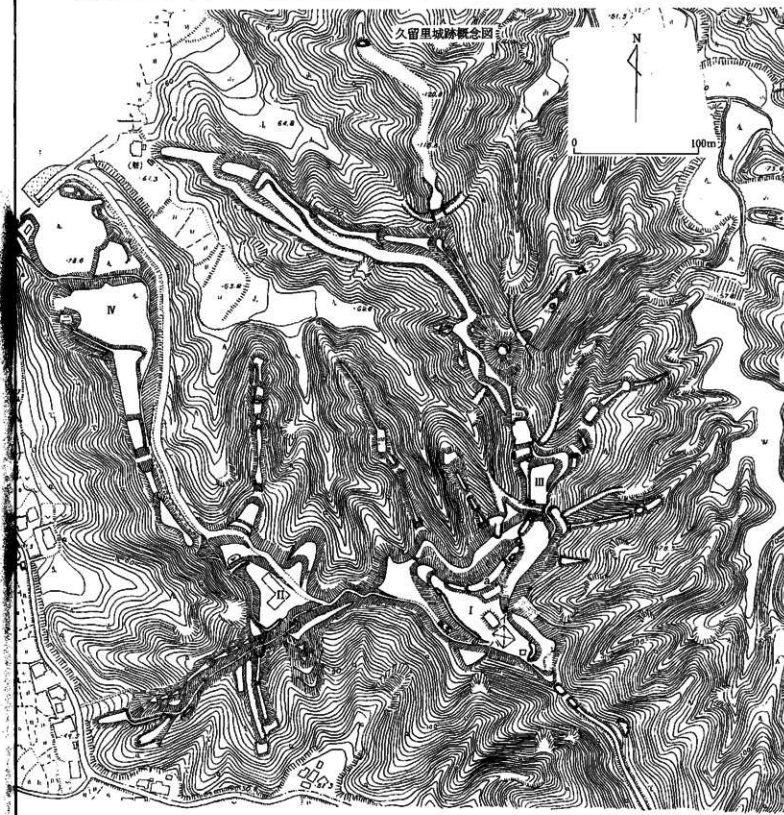
その後、久留里城は安房より勢力を拡大してきた里見氏に属するようになった。そして里見氏全盛期(義興・義弘時代)の40年間本城となった。しかし、前述したようにここは軍面においてすべて要衝の地であることから、北から進出してくる後北条との戦いでわたる激しい攻防の場となった。天正5年(1577)に後北条氏と和睦し、本城を佐貫に移すまで華々しかった中世の城としての時代を一応終えることになる。

天正18年(1590)に後北条が滅ぼされると豊臣秀吉は後北条の所領地のほとんどを徳川家康に分け与え、そして里

見の領地は安房一國に押し込められた。そのため、久留里城は家康の家臣、大須賀忠政が三万石で城主となる。10年後におこった関ヶ原の役の後には土屋氏が二万石で入城した。土屋氏は三代続いたが延宝七年(1679年)改易され、そのため城はいったん廃城となった。

それから63年後の寛保二年(1742年)黒田直純が上野国沼田から三万石をもって移封され、以後、黒田氏9代129年間在城したが明治4年(1871)の廃藩置県で完全に廃城となる。

(中井正代)



立地 城は、房総丘陵の山塊群中にあり、山岳地帯の様相を見せる。千木沢川の上流付近に位置する。小櫃川の谷間が、安房鴨川地域から内房総地域へ抜ける戦略的な交通路として陽光を浴びてきた頃、当城の地理的重要性が注目された、そのことが今日に見られる、拡大した城域のものに反映している。

構造の概要 初期の城郭範囲は、山容から見て曲輪Ⅰ・Ⅱ（南尾根外郭）の区域と読み取れる。その後の改修による新城域と見られる曲輪群は、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（北外郭）・Ⅵ（南尾根外郭）である。

しかし後期の改修は、単に新曲輪群を構築したのみではなく、初期の曲輪群も含めた大改修になっているが、当城の使用者が誰かを考えるにも、重要な視点を残している。

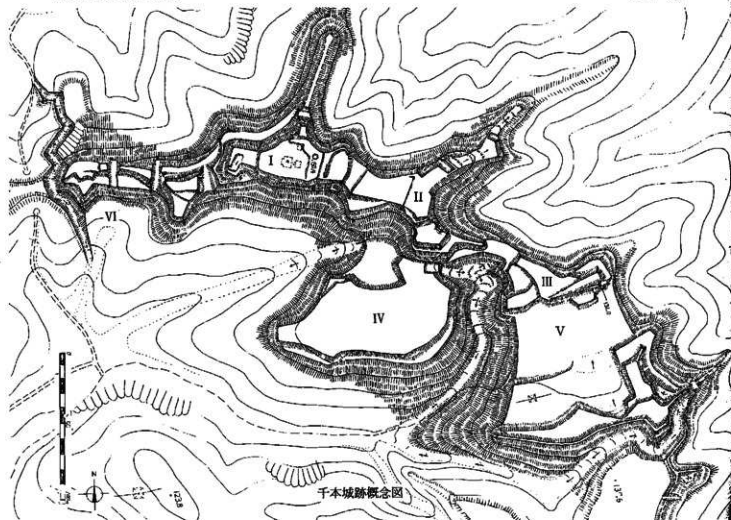
曲輪Ⅰの北側は、馬出と見る。南側は、現状が神社施設で遺構判断が難しいが、北側と同様に附属する馬出が、折形虎口であった可能性が濃厚である。

新曲輪Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（北外郭）・Ⅵ（南尾根外郭）群は、主郭部と違って遺構規模が大きい事が特徴と言える。曲輪Ⅲ・Ⅴ（北外郭）群は、その北側面に大土塁の構築が見られ、当城の印象を固定化する景観を見せている。また曲輪Ⅴ（北外郭）群の大土塁下には、一部自然の谷地形を利用した大横堀も見られる。Ⅵ（南尾根外郭）群に堀切群の構築で、南尾根部の遮断をしている。特に大堀切（旧道）は、堀筋が直線的ではなく、数度の屈曲を繰り返すジグザグ状に構築した改修に新技術が見られる。

城の歴史 遺構の読み取りで、当城が二期による改修があったと判断した結果、初期築城者であるこの地域の開拓領主の存在と、その後の大城域への拡大時点で人物が想定されるが、問題は後者の特定である。

堀切群の構築で防禦する築城技巧は、在地の築城技巧（真理谷武田氏の影響下）と見ると、当城を特徴づける大曲輪や大土塁とジグザグ状の大堀切の構築は、第二次（永祿7年（1564））国府台合戦敗戦後、対北条氏戦に備えた里見氏の存在が考えられる。

(池田 誠)



立地 小櫃川中流域、川が久留里市街周辺で東西に大きく蛇行しながら北流する東側の丘陵先端部に位置する。丘陵は城の西側で大きく括れ、見かけ上独立丘陵ともとれる痩せ尾根上に構築されている。主郭最高位の標高は80m、周辺水田面との比高差は40mの小型山城である。

構造の概要 城からの展望は北・東に大きく開け、川を挟んで久留里城と対峙している。城は全体的に無駄のない縄張りであり、実際よりも広く感じられる。

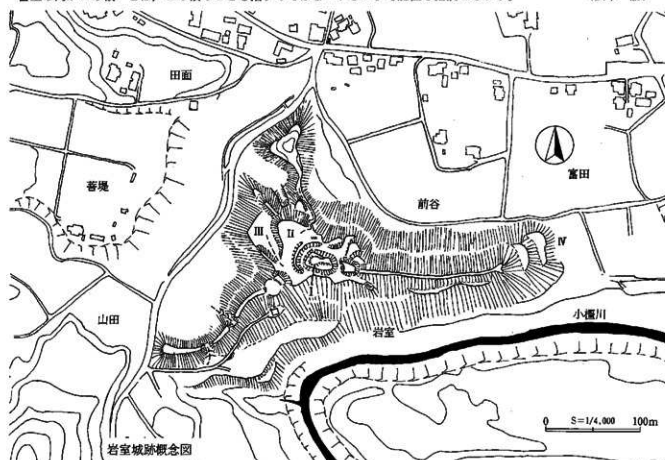
主郭最高位である曲輪Ⅰは、もともと小堀前方後円墳が所在していた部位で、後円部の高まりを利用して台台としている。この台地の周囲は一周する堀で隔絶されており、独立した施設であったことがわかる。堀の北西には小型の曲輪Ⅱが所在する。ここは若干の凹凸が見られる独立した平場である。更にその東には通路をへてやや広大な曲輪Ⅲに至る。Ⅲは自然の緩縁を巧みに削り出した土塁状の高まりに守られて北東麓を望んで立地する。曲輪Ⅱの北側には屈曲する通路をへて城の北端部に向かう。この通路沿いには、切岸遺構や北へ落ち込む堅堀が見て取れ、重厚な守りとなっている。なお、その周辺に虎口があったと思われる、城の最前線がこの辺であったと見られる。

主郭の東側は北へ降りる数段の平場を見ながら、痩せ尾根状になり、単調に下って東端の腰曲輪Ⅳに至る。

また、Ⅱの西側も、Ⅱの平坦面を堀底に見立てた堀切によって隔絶した上に、痩せ尾根状の通路として西進する。この尾根は途中2か所の堀切によって隔絶されるが堀底はそれぞれ北、あるいは南麓に到達するように造られている。城の歴史 これだけ明瞭な城郭遺構が残っているにもかかわらず、文献史料や伝承・通説等がほとんど残っていない。城の構造からは戦国後期のものであろうと考えられるが、いずれの集団によって構築された城であらうか不明である。

考えられることは、城が明らかに久留里城と対峙していることから、里見氏と対立する集団によって築造された城である可能性は高い。このことから示唆できることは、永祿3年（1560）北条氏康が白川崎洞に宛てた書簡にある「久留里の向かいの城」とは、この城のことを指すのではないかという可能性も指摘できよう。

(松本 勝)



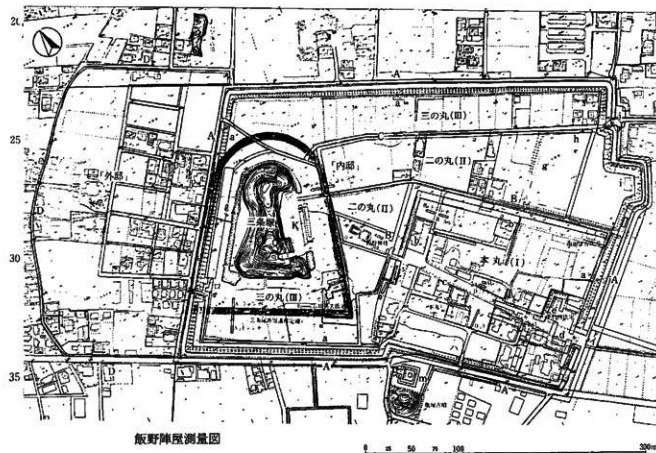
飯野陣屋（富津市下飯野字本丸他）

立 地 富津市の約7.5km東北、東京湾の旧汀線から約2km、標高7～8mの低地上に立地し、北を小糸川が流れる。周囲の水田との比高差は1m程度である。内部に三条塚古墳があるほか、周辺には内裏塚古墳などの大型前方後円墳を中心とする古墳群が展開する。

構造の概要 南北約280m・東西約350mを測るが、県指定史跡となっている外濠Aに囲まれた「内部」地区と、その西外側の「外部」地区に大別される。地区の総面積は128,000㎡、「外部」地区は48,000㎡に及ぶ。「内部」地区の四周を取り囲む外濠Aは豊かな水をたたえ、その内側には2m以上の高さを持つ土塁aが築かれ往時の面影を良く残す。虎口は大手であるイ、御手であるロ、本丸南西のハの三か所であり、土塁aが切られて土橋が設けられているが、その他の出入口は近代以降に改変されたものである。また飯野陣屋の特色として、長径100mを越す大型の前方後円墳の三条塚を取り込んでいることが指摘できるが、発掘調査により、外濠Aの西側部分は三条塚の外周溝を利用していることが判明した。古墳が陣屋の平面プランを規定しており、珍しい例と言える。

なお、現存する遺構と「下飯野陣屋之図」（国学院大学図書館蔵）や「飯野陣屋古図」（富津市教育委員会蔵）などの古地図によって、飯野陣屋の旧状はほぼ復元することができる。

「内部」地区は、本丸(1)、二の丸(II)、三の丸(III)の3つの曲輪からなる。本丸(1)は南東側にあり、小字も「本丸」である。二の丸とは内濠Bとその内側に築かれた土塁bによって区画され、南東・南西側は外濠Aと土塁aによって外部と分けられるが、長軸約120m・短軸約160mの長方形を呈する。内部には藩主の邸cや藩庁、藩士の住む長屋などがあつた。南東の虎口イには大手門dがあつたが、内枳形eが設けられ、藩主の邸に向かう道に沿って、守りを固



飯野陣屋測量図 (古地図に基づき土塁・空堀などを復元・加筆)
(『千葉県中近世城郭研究調査報告書第8集』より)

めるために複雑な形態の土塁が配置されていた。二の丸(II)は、三条塚の東側外周溝と本丸に挟まれた三角形の地区と、本丸北東側の帯状の地区からなる。幅の狭い内濠Cによって三の丸と区画されていたが、現状ではほとんど埋められている。飯野神社fや重臣屋の屋敷のほか、周溝に囲まれた円墳の稲荷塚古墳g（消滅、稲荷神社が祀られていた）や唐清蔵hがあつた。また、東側には出枳形iが突出し、外枳形jを形成している。この枳形を通過して北東に伸びる道は、藩主の参勤交代に際して使われたという。三の丸(III)は、二の丸と外濠Aに挟まれた北東側の帯状の部分と、二の丸の西側の三条塚によって構成される。三条塚の東側くびれ部には藩校明新館kが置かれ、西側には「角場」と呼ばれる馬場のような施設lや御手の虎口ロがあり、前方部の南側には上級藩士の屋敷があつた。

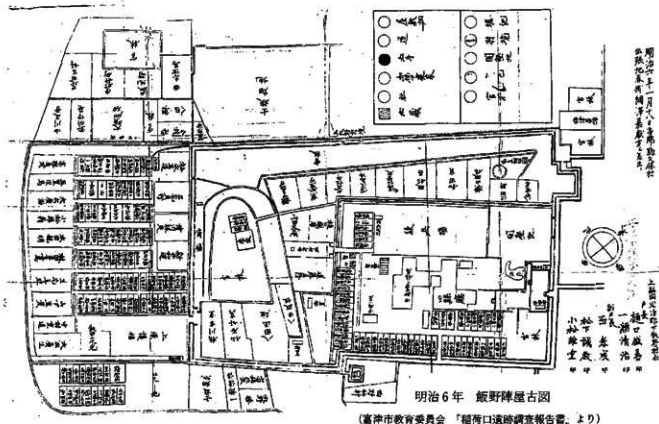
「外部」地区は幅の狭い水濠Dによって囲まれるが、中級藩士の屋敷があるほか、中心部には下級藩士の住む長屋が9棟存在した。陣屋の外になるが、本丸の南西には半屋mがあつた。

以上のような飯野陣屋の遺構は比較的良好に残り、近世の藩代小藩の陣屋の姿を今に伝えて貴重である。全国の際尾の中でもその規模は大きく、俗に「日本三陣屋の一つ」と言われているのも肯けよう。

城の歴史 飯野陣屋は保科家2万石の陣屋として知られている。築造時期については諸説があるが、初代藩主の正貞が大名に取り立てられた慶安元年（1648）と考えられる。

正貞の母は徳川家康の異妹多姫姫であり、飯野藩保科家は金津藩祖として有名な保科正之と同族である。正貞は大坂定番となり、1万7千石を領して大名に列し、居所を上総国匝振郡飯野村とした。子の正景の代には加増されて2万石となり、以後継封も無く、明治維新まで8代にわたって襲封した。最後の藩主の正益は、戊辰戦争に際して朝廷より謹慎を命じられ、明治2年（1869）には版籍奉還選で飯野藩知事に任ぜられた。しかし同4年の廃藩置県によって飯野藩は廃され、木更津県に合併されると、政治上の意味を失った旧藩以来の建物は取り壊され、二百年以上続いた陣屋も機能を失ったのである。なお、現在も陣屋の内には藩士の子孫の家が残る。

（外山信司）



明治6年 飯野陣屋古図
(富津市教育委員会「稲荷川道路調査報告書」より)

佐賀城跡 (富津市佐賀山城・城跡)

立地 瘦せ尾根の丘陵と小支谷が繰り返される地形の、ほぼ中央に立地する大型の平山城が佐賀城である。主郭最高位と平地との比高差は60mであるが、主な曲輪との比高差は20~30mと低い。

城の北側には北山川が、南側には染川がほぼ平行して西流する。二条の川は、城の西側、佐賀市街の西で合流する。

また、北上川の北側の丘陵には、北上砦を始めとして、佐賀城方面を見下ろす丘陵先端部を中心に数多くの出曲輪群が構築され、そのまま東の岩宮城に連なっている。

構造の概要 佐賀城は、染川河口から比較的奥まった場所に構築されている周辺の本城である。城域面積は広大であるものの、おおむね二条の河川に守られた平地が占め、低い丘陵部位に殆どの曲輪が築かれている。その背後の丘陵は殆ど瘦せ尾根であるので、その尾根を更に削り込んでそり立たせ、深い堀を掘り込み、堀底から帯曲輪を設けて主な曲輪を保護する構造が、東側を中心にほぼ全面に見受けられる特徴がある。

城の主郭である曲輪Iは広大な平坦面で、東西に土塁が走る。主郭の北側と西側には突出した高まりが見られ、物見に使われたと考えられる。西側を除く周囲を深さ10mに及ぶ深い堀によって隔絶する。堀はそのまゝ堀底道となっており、Iから勝手口をへて、北上砦、天守寺方面への道に直結する。その堀切の傍らには石積みで確認できる。

主郭Iから曲輪IIの間には東西に城を切る浅い堀が掘られ、両者は隔絶するが、中央に土橋が設けられ、通路とする。曲輪IIはIより一回り広大な曲輪で若干高くなっている。IIは前述の堀と西側の横堀、東側の斜面によって独立するが、大手口に至る南面する虎口から、腰曲輪状の通路を経て下ることができる。その際IIはその通路を監視する機能を持ち、下段に視みをきき意味も有するものである。

近世に家城として利用された、通称「三の丸」、IIIには切り通しを経て、横堀の堀底道を経て到達することができる。現在は水田耕作されており、四段ほどの平地が存在する。大手口は坂虎口であり、石積み遺構を見ることができる。虎口上面西側には櫓台が見られる。

主郭Iの北東は堀底の曲輪IVと連絡する。IVは北・東を守る曲輪と、東側の尾根遺構に至る唯一の入り口として機能しているものである。IVの東は、数多くの中規模曲輪群VIおよび、連絡と繋がる尾根遺構。そして、精巧に開られた切岸群、大走り遺構など城の中心部とかなり異質である。

さて、出城としてとらえられる南東部VIIも興味ある遺構が数多く残っている。北側から繋がる尾根遺構を部分的に切断して通路を通し、掘手としての工夫が見られ、黒部谷方面には物見の平地を構築しながらも、貴弱な比高差を堅堀によって遮断し補っている点が垣間見られる。

城の歴史 佐賀城は、応仁年間(1467~69)に武田義弘によって築かれ、主郭周辺に堀を巡らして隔絶する技法によって曲輪取りされたと考えられる。その際、城の北側防衛として北上砦や街道沿いの出曲輪群が築かれたと推察される。

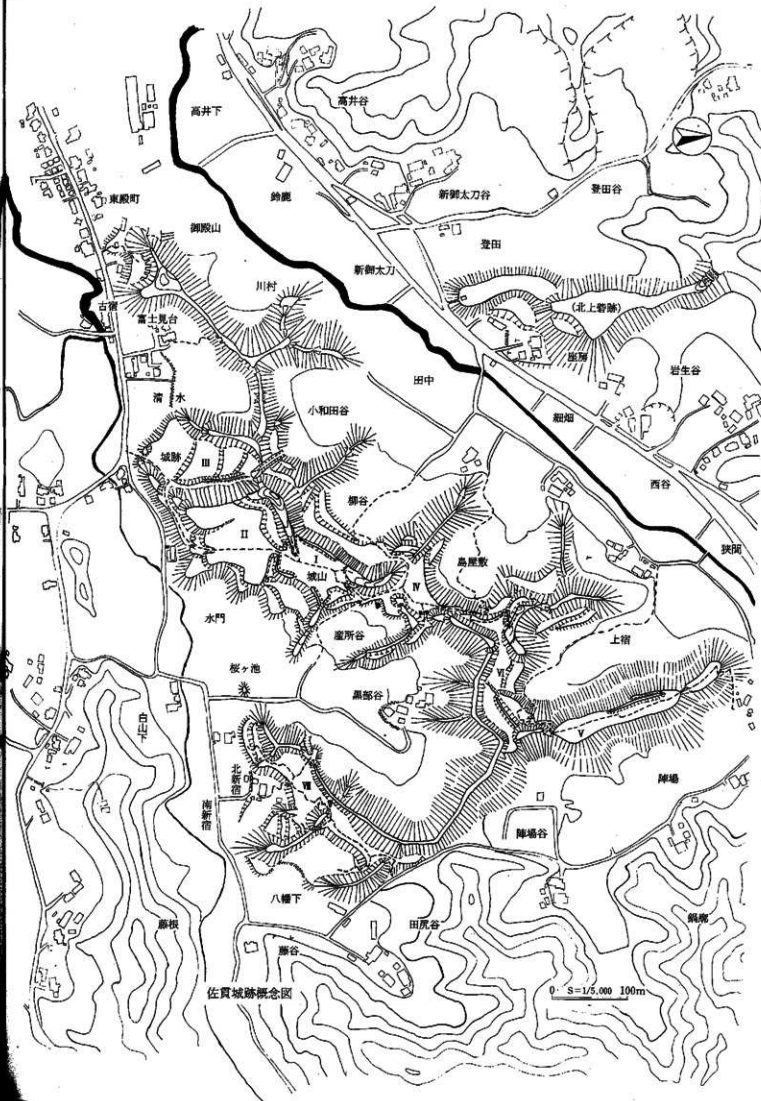
後を担った里見氏(義隆以降)によって、城そのものの規模拡張が図られていったと考えられる。佐賀城は一旦は西側の海沿いに勢力を持つ後北条氏の傘下になるが、義弘の代に越前の上杉輝虎の援護を得て盛り返し、奪取に成功する。そして、重臣の加藤氏に居城させている。その後、永祿10年(1567)には後北条氏は岩津市三船山に陣を構え、交戦が相次いだ。世にいう「三船山合戦」で、この戦いで里見氏は勝利する。

里見義弘の嫡子、梅王丸は義弘の死後、佐賀城に居たと思われる。叔父にあたる義頼(岡本城)と対抗している。しかし、義頼の軍勢に屈し、加藤景春は開城、梅王丸は出家させられる。

豊臣政権時代に入ると、佐賀城主には徳川氏の重臣、内藤家長が入部し、南の里見氏に視みをきかせている。

そして、徳川時代に入って、「三の丸」と呼ばれる曲輪が家城として利用され、「近世陣屋」として変貌する。なお、当時に書かれた「佐賀城絵図」には、中世主郭部分に天守状の建造物が描かれていることから、簡素な構築物が建てられていたとも考えられる。城主には重臣、松平氏が就き、後に別系松平氏、柳沢氏と変わって、一旦途絶えるが阿部氏が藩主となって暫く続き、幕末を迎え事実上の廃城となる。

(松本 勝)



峰上城跡（上後城・遺城）（富津市上後字要害）

立地 湊川中流城南岸、支流である志剛川と並走し、合流する地点の南に突出する丘陵上に築かれた山城である。主郭最高位の標高は130m、平地面との比高差はおおよそ80mを測る。

構造の概要 北側の度々尾根上に所在する数多くの堀切道を通して広大な平場に至る。北側の大部分は絵図に「大橋」と記された、大手筋の重要な施設である。この西側部分は「木出」と呼ばれ、多くの腰曲輪が形成されている。

「尾崎曲輪」と呼ばれるAの西側には数多くの腰曲輪、堀切、堅堀が築かれ、複雑な状況になっている。

主郭周辺は広大な平場であり、人工的に段を形成して区画しながら曲輪取りした様子が見られる。特に主郭Ⅰは土塁によって周囲と隔絶し、「南に新堀の斜面、東に「摩利支天社」が残る最高位の高まりが、北に「中城」と称される城で一番広大な曲輪Ⅱを見下ろして立地している。この周囲の構造は武田氏系の技法が数多く看取できる。

主郭の南東には「七堀切」と呼ばれる7か所の切り立った堀切が見られ、敵の背後からの登攀を防いでいる。

城の歴史 峰上城は15世紀後半に武田氏によって築かれたといわれている。初期の城主として、「上総武田家略系」には武田三河守信武の名前が見られる。信武は真里谷信興の弟であり、佐賀城主も兼ねていたと記されている。

後に「快元僧部記」によると、享祿5年（1532）5月、相模の北条氏綱が富戸をとって鎌倉鶴岡八幡宮の造営を始め、古木の採取について武田形鑑へ協力を求めてきた。しかし、形鑑はこの要請を断り、翌年、小弓義明によって攻められた後、天文3年（1534）形鑑が没すると、武田氏は翻って峰上の地から古木を搬出している。

その後、武田氏は家督相続の混乱が起こり、信隆・信元の二派にわかれて対立・内乱が起こっている。その際に信隆一派の持城であった峰上城も攻撃を受けている。結果的には、真里谷城に立て籠った信成が、「新地の城」に籠った信隆に勝利し、峰上城は、信成の叔父で後見人目される真里谷大学入道全方へ移譲された。しかし、武田氏の衰退は著しく、直後に北条氏は峰上城を略奪している。

そんな中で、「島海文書」に見られる、天文23年（1554）当時、峰上城尾崎曲輪根小屋上下に屯集する吉原玄蕃助に後北条氏から宛てられた朱印状は、当時の峰上城を考える上で重要な資料といえそうである。玄蕃助は「22人衆」と呼ばれる遊撃部隊の頭目であり、後北条氏派のゲリラ活動を行っていたと考えられる。その後、峰上城は西上総から安房西部の水軍を掌握する正木氏系の城として利用されるが、不安定な状況であった。（松本 勝）



天神山城跡（富津市海良字天神台・真光塚）

立地 湊川河口城南岸の、湊市街を見下ろす位置に展開する山岳城郭である。

城の北側には湊川が迫り、断崖絶壁の景観を形成している。城の西・東側斜面も急峻で、しかも、近代まで継続した石切りのために独立したイメージをもたらしている。

構造の概要 城は大きく二つのエリアに分割することができる。一つは天神社の所在する天神台と呼ばれる広大な平場、もう一つは主郭の所在する丘陵頂部である。

天神台は数段の段段は認められるものの、全体的には独立した景観を形成している。現在は土地改変が甚しく、原状を保つものが見られない。

天神社の背後は傾斜が増し、様相が異なってくる。途中に明確な切や垣遺構が見られないが、山頂部に城郭遺構が集中して見られる。主郭である曲輪Ⅰはやや広大な平場であり、最高位には周囲を見下ろす構台があったと考えられ、その西側と東側に虎口が確認できる。西側の虎口は、小型ながら土留めの石垣によって補強された堀切にかけられた石橋を渡って下っていく。ここは意図的に通路を狭めてあり、橋から敵兵を射る構造が顕著である。虎口の下部の曲輪Ⅱにも小型の堀が掘り込まれ、その下段からの登攀を防ぐ様相を呈する。構台の東側の虎口は東に構築された腰曲輪群に下りていくためのもので、この腰曲輪群からは直接Ⅱには迫り着けないように築かれている。腰曲輪群はその最下段に堀切で隔絶して、曲輪は迂回しながらⅡの下面に迫り着く構造になっている。

一方、主郭の西側に小型の出曲輪群が所在するが、その間に三条の堀切を確認することができる。この堀切から西側は、築城当時のものと考えられる、箱型に掘り込んだものを含む石切遺構が確認でき、堀切とともにこの石切による垂直な降り込みの補強によって、城の防壁の重厚さを導き出している。（但し、石切りは近世以降も実施されていたことから、絶てがこの時期のものとはいえない。）

城は全体的に、湊集港全面の街道の分岐点を中心に視みを利かせる城であり、戦国末期においては多少奥まっではいるものの、湊川河口周辺の港を果たしているものと考えられる。海城の役割も果たしているものとも考えることが可能である。

城の歴史 文明年間（1469～87）に武田氏によって、峰上城の支城として建設されたものといわれ、のちに里見氏の手にわたり、家臣の戸崎玄蕃頭勝久の居城となったといわれる。戸崎勝久は君津市戸崎の戸崎城主であったが、どの時期に天神山城に居城したか判然としにくい。（松本 勝）



造海城跡 (富津市竹岡字城山)

立地 当城跡は、上総南部から安房北部に広がる標高200m～400m程の房総丘陵の北西端に位置する。城跡の立地する丘陵は、東側は白狐川の河口平野部に、南西部は海岸に開口する谷津に、北西側は直接東京湾（浦賀水道）に面している。唯一南側のみ丘陵基部と馬の背状の細尾根で結ばれている。また、浦賀水道を挟んで三浦半島の横須賀市久里浜・浦賀地区とはわずか12kmの至近距離である。

構造の概要 造海城跡は別名を百首城跡ともいい、歴史的に戦国期の里見氏関連の城郭として、また近世後半には江戸府防備の砲台として、性格の異なる使われた方をして。このため、城跡内には時期の異なる遺構が混在しているが、工法の違いや風化の度合の差などによっておおよそ判別は可能である。

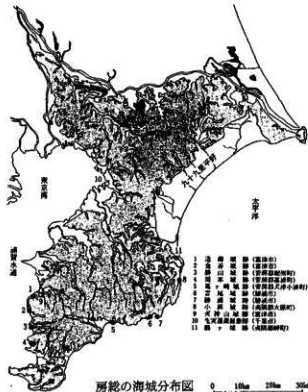
城跡はほぼ先端部の丘陵全域を城域とし、長軸（北東―南西）700m、短軸（北北西―東南東）500mの規模を有する。丘陵頂部は7か所の郭に区画される。I郭は北東端に位置するが、頂部は削平がしっかりと施されているものの、外側に対する防壁が弱いことから捨郭的存在と思われる。II郭は標高101mを測り城内では最高所である。I郭側に主尾根上では唯一堀切を入れていることから、ここから主郭群となるのであろう。III郭は城内で最も広い郭であるが、郭内には特に城郭遺構は認められない。しかし、郭の位置からみてここが主郭と考えられる。IV郭にはL字形の高さ1.5mの土塁が認められる。形状から近世の砲台段階の所産であろう。V郭は72×46mの整った長方形プランをなす。砲台段階に遠見番所が置かれた場所と思われる。この段階にかなり改変されているようである。VI郭もV郭と同様にかなり改変を受けている。VI郭の南西部には高さ2m程の塚状の高まりが5基並んでいる。高まりの間に大堀を掘ったものである。

次に斜面部に造り出された主な城郭遺構についてみると、IV郭の北西辺下に掘られた横堀が注目される。上堀8m、深さはIV郭側からだと9mを測る。III郭の北西端下には貯水施設がある。深さは不明であるが、長辺20m、短辺3～8mの規模を持つ。砲台段階の出入口か取りついていることからこの段階に使用されていたことは間違いないが、戦国期段階の虎口遺構も近接して認められるので戦国期に既に造られた施設であろう。また、貯水施設の上には戦国期と思われる石垣（高さ1m弱）がある。石垣遺構は城跡内に何か所が認められるが、何れも幅、高さとも小規模で本格的なものはない。

城の歴史 史料的には恵まれた城跡といえる。初源史料は天文2年（1533）に里見氏の天文の内乱時に一族が百首要害に籠城したことが知られる。次に天文6年には真里谷・武田氏の内乱時に反宗家側の一族が籠城しており、この段階の造海城跡は一方の勢力の防衛拠点として機能していた。

次はやや時代が降るが、天正8年（1580）、同17年、同18年の史料があり、里見氏重臣の正木淡路守の居城であると共に、城下の百首浜が海関として機能していたことがわかる。造海城跡は渚と一体となった城郭（海城）であり、さらに水上交通と陸上交通の結節点でもあったことから、これらの経済的要衝および権益を確保するために維持されたであろう。房総半島には11か所の海城が確認されるが、戦国期の内房では領主側にとって最も重要な海城であった。

天正18年に廃城となるが、文化7年（1810）に白河藩によって城跡に砲台が置かれ幕末まで続いた。（柴田龍司）



房総の海城分布図



造海城跡測量図（『千葉県中近世城跡研究調査報告書第15集』より）

0 100m (1:3,000)

金谷城跡 (明鏡城) (富津市金谷字本町)

立 地 上総・安房郡境尾根の西側突端に位置する額山山塊は急峻な斜面を有し、明鏡岬で断崖絶壁を形成して海に落ち込んでいる。額山山塊から北へ伸びる海に面した丘陵に、金谷城は立地する。

城からの浦賀水道の展望は良く、海城の機能を果たすには充分の立地であり、周囲は天然の要害をなしている。

構造の概要 城の全体的な構造は、北側にU字状に開く馬蹄形の形状を示し、周辺に類例が多い。

大手虎口は、かつて軍港の起点だったと思われる仲町集落の裏を登る通路を経て到達すると推定される。

城の鞍部に立地する平場は根古屋と呼ばれ、数段の腰曲輪が形成されていたと考えられる。

城の主作は専ら、主郭とその北西のII郭部分に集結される。主郭は、かつての土砂採取等で遺存が悪いが、最高位を中心に、堀切、切岸で岩盤を掘削して防備を固め、切岸下に犬走りを造りだしている。

II郭部分は3度の発掘調査によって、ほぼ全貌が解明されている。

II郭は岩盤掘削によって構築され、縁辺には地山切斷石壁を築いている。この工事によって得られた多量の土砂、石は斜面に盛ることによって、一つの曲輪を造り出したり、礎石建物を構築する基礎石に使われていた。もっぱらこまでは、武田氏の築城に伴うものであると思われる。

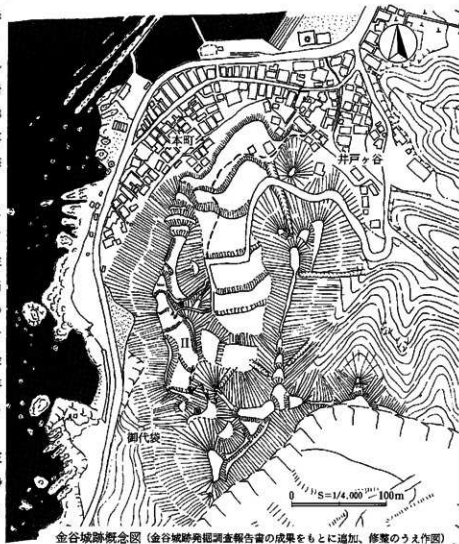
後を担った里見氏の技法によると思われる施設で、殊に重要な一つの成果にII郭虎口周囲の施設がある。虎口は岩盤を均整に廻り込んで四脚門の柱穴を穿ち切石積みを施すなど、かなり手の込んだ、当時としての先進技術であったと思われる。これは当時の里見氏が掌握したと考えられる石工集団の存在を裏付ける貴重な資料である。

城の歴史 文明年間(武田氏)は、峰上城を拠点として、天神山城・造海城・金谷城などを集めていったと考えられる。金谷城には家臣、佐久間藤内が居城していたとされる。しかし、文明18年(1486)までに、里見成義に攻め落とされたとされ、その後は里見氏の海城として機能していたと考えられる。

後に里見氏と後北条氏が対立関係にあり、在地土豪の動きも活発になっている。安房国吉浜村の妙本寺第14代住持の僧要賢房日我は「いろは字書」を当時編集しているが、そこには、里見側の僧であった日我は迫り来る危険を避けるために、寺伝来の重宝、典籍などを金谷城に運んで電城したが、天文22年(1553)7月、城に火がかかり、それらが焼失してしまったと書かれている。

その後、金谷城は水軍を掌握する正木派諸守の持城となるが、当時の情勢ではこの地方は後北条の勢力が優勢で、不安定な状況であった。

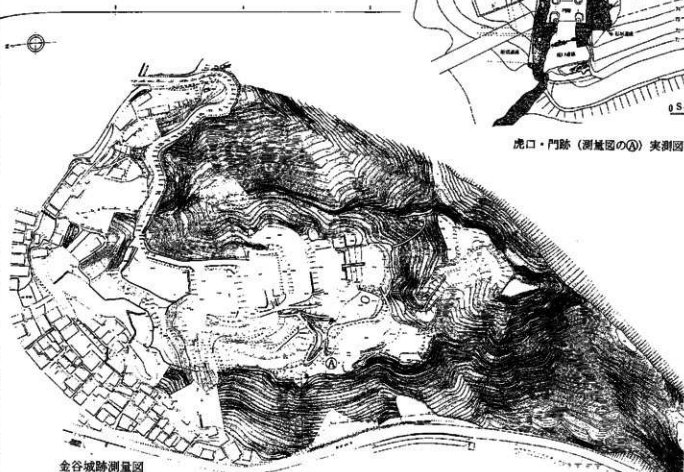
(松本 勝)



金谷城跡概念図 (金谷城跡発掘調査報告書の成果をもとに追加、修整のうえ作図)



切石構遺構 (右図の③) 実測図



金谷城跡測量図

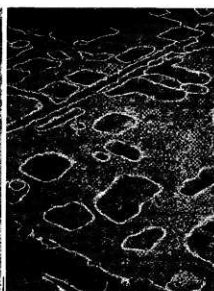
(財) 富津都市文化財センター発掘調査報告書
『金谷城跡』1988より転載



金谷城跡 遠景
1986年撮影



虎口・四脚門



郭II 礎石跡

立地 岩川遺跡は一宮川とその支流本台川に挟まれ、標高約15mの微高地上に占地する。2つの河川は本遺跡付近では併走しており、両河川間は約200mを測る。遺跡の状況は水田及び畑である。

構造の概要 本遺跡は「ほぼ整備に伴い実施された発掘調査」により検出された「館跡」であり現状では視認できないため、同報告書に基づき概要を記載する。

本遺跡 (以下、館という) は3つの区画から構成される。中央に第1区画と呼ぶ一辺約60mを測る方形の区画が存在し、北と東に第1区画を取り巻く第2区画、西に「長方形」を呈する第3区画からなる。

区画は「堀」によるもので、土塁は認められないとしている。

中央の第1区画には掘立柱建物址、礎石建物址、井戸跡が検出されており、中心区画とされている。また第2区画の東南にも掘立柱建物址が検出されている。

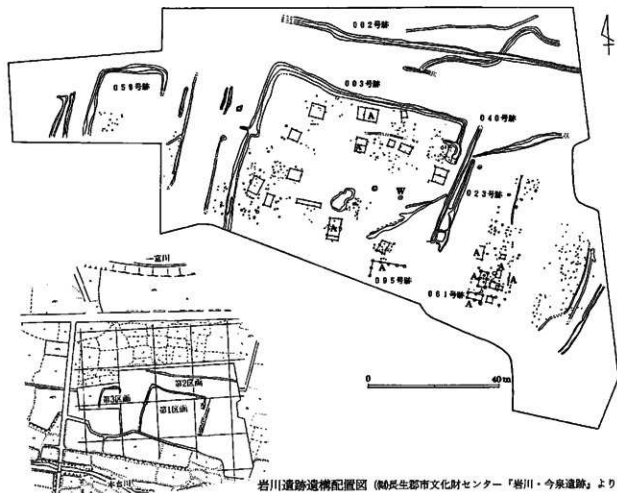
掘立柱建物址は2群に分けることが可能とされ、溝の切り合い関係と合はせ大きく2時期に分かれるという。

平地上の館の事例は県内では少なく、遺構のみでは「武士の館」との性格を付与できないが伴出する遺物群は貿易陶磁器や広域流通陶器を含み、当該期の階層性を考える上での根拠となりうることに「武士の館」としての。本館に関しての史料は皆無であり、考古学的にも県内で類例が少ないため今後、注目される遺跡である。

城の歴史 遺物資料では13世紀後半から15世紀後半に比定でき、その盛期は15世紀とされている。

本城は上総氏の系譜を引く長南氏の本拠地であり、鎌倉時代より室町時代後半まで在地領主として存在していた。しかし康正元年 (1456) に上総に入国した武田氏により長南氏は没落し、本城は武田氏の勢力下に入ることとなる。よって長南氏関連の館と理解することが可能と考えられよう。

(本内達彦)



岩川遺跡遺構配置図 (長生郡市文化財センター「岩川・今泉遺跡」より)

立地 房総半島の中部に位置する長南町は、標高100mに満たない緩き尾根状の丘陵が縦横に展開し、まとまった平地は僅かに一宮川の本支流沿いに認められる。城跡の所在する丘陵 (標高約40~80m) はその北~西側を三途川 (一宮川の支流) が曲流し、東~南側はほぼ同じ高さの丘陵が狭い谷を隔てて連続する。遺構はこの丘陵上約1kmに渡って認められ、とりわけ西側に明瞭である。

構造の概要 長南城は南北約0.8km、東西約1.2kmの範囲に遺構が認められ、本郡では本納城と並ぶ大規模な城である。しかし、その規模のわりには核となる曲輪が明瞭でなく、このことが本城を説明する場合に障害となってきたことは確かであろう。しかし、この点は本郡南部の城郭の多くに多少とも共通することであって、長南城の場合はその規模が大きいために一層際立ってしまうという事情がある。それを本郡城郭の地形に起因する弱点と指摘することはやすいが、斜面中段に設けられた大小無数の削平地や谷部を一つの城郭のなかでどのように捉え、位置づけるのか、これは将来の発掘調査の積み重ねによる他はないであろう。それはともかく、ここでは以下一つの仮説を提示する。

長南城跡は遺構の分布状況からほぼ四ないし五つのブロックに分けられる。

(1) 長久寺を取り巻く丘陵、(2) 通称太鼓森 (妙見社の森) の丘陵、(3) 中城から古沢に至る丘陵、(4) 六郷地区の丘陵であるが、(1)の丘陵及び三途川によって挟まれた現長南市街地も、南谷から流れる小川と北西に曲がる丘陵先端 (愛宕岡) を一つの障壁とみて (5) に加えることもできよう。以下、この順に概説する。

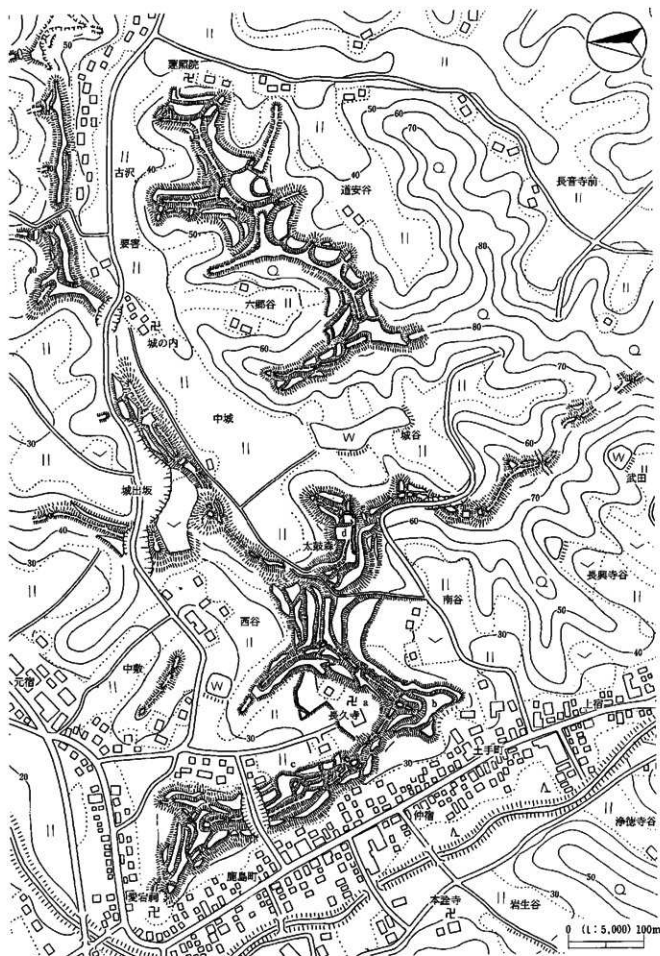
(1) は本城の中心をなす遺構群で、地形のなりに従って帯状の狭い削平地を可能な限り作り出している。この中では長久寺境内 (a) 及び長南町健康センター裏手 (b) に多少まとまった平坦面がみられる。また、そのあり方からして長久寺の谷部はこの (1) に含まれる曲輪が明瞭でなく、平成4~5年の確認調査ではこれといった遺構、遺物は確認されなかった。しかし、これは北西の丘陵裾部 (c) というところであろう。(2) は (1) の跡の「郭」ともいえる遺構群で、その中心が妙見神社境内周辺の平坦地 (d) にあることは疑いない。南側尾根続きは大堀切 (e) で面する。(3) は約1kmに渡って断続的に堀切が見られる丘陵であるが、北側の三途川に派生する支根は絶えず断ち切られている。平成2年の調査で検出された小規模な埋没遺構 (f) も一連のものともみてもいいかもしれない。本遺構群は一部城址南側に平坦面が見られるものの、字中城を中心とした谷部の曲輪を防御する「土塁」としての性格があったとみえ。(4) は六郷の丘陵南端を掘り切ったあたかも一つの城郭としたもので、その最大の特徴は尾根の片側を削って南側に比較的に広い曲輪群を連続させていることである。このような手法は長南武田氏抱えの3大城の一つである勝見城でも認められることを指摘しておきたい。この (4) は周辺の谷も含めて大竹氏 (本末真里谷武田氏に臣属していた土豪が、近世に至り旗本として仕官する) のような外様家臣の屋敷地としての性格を考えるべきであろう。もちろん、(3) に対する南側の防衛線でもあったろう。

この他に本城を考えるうえで見逃すことのできないのは、(2)、(3)、(4) に囲まれた中城から要害の谷部である。ここは唯一のまとまった平地であり、長南武田氏の版図拡大に応じてその背後を丘陵も含めて取り立てたものと思われる。耕地整理時に遺物 (陶磁器、かわかけ等) が出土している。なお、武田氏の菩提寺と伝えられる大林寺は城城南端の西側谷部にあるが、中世に通る明瞭な石塔は認められない。一方、該所の小型の石塔は対岸の本登寺地に若干存在する。

城の歴史 上総武田氏は15世紀後半に真里谷と長南に分かれ、それぞれ真電谷城と長南城を根拠とした。初期の長南城の位置及び規模は必ずしも明瞭でないが、現長南市街とその東部の丘陵を含めた一帯をその候補に推したい。

16世紀の中頃には長南と池和田。つまり、現長生郡から市原市の中部までを領国化しており、衰退した真里谷氏に代わって上総を代表する戦国大名に成長した。郡内東部の要の勝見城もこの後まもなく取り立てたものであろう。当主、兵部太夫豊信は南の里見氏と北の北条・千葉氏の間にあってよく処してはいたが、天正18年 (1590) には北条氏と連手を共にした。その子 (あるいは一族) 信胤は諸國を流浪した後、下野國那須に落ちた (『那須拾遺記』)。

(小高春雄)



長南城跡概念図

本納城跡 (茂原市本納字本納他)

立地 本納城は長生丘陵の北部東辺に位置し、南白亀川の支流赤目川に開析された標高約60mの尾根状台地に占地する。周辺の水田面との比高差約40mを測る。北は東金、南は長南に至り、東側には九十九里平野がある。

構造の概要 本城地の尾根状台地は東西に伸びるが谷津による深い解析のため断崖状を呈する。城は3列の尾根状台地からなり、全体は「山」字状を呈し、東西1000m、南北約650mの範囲を城域としている。

城の構成は本城地区を中心に谷を隔てた東と西の尾根を防禦として取り込んでいる。

中心に位置する本城地区の最高所に主郭を設け、主郭より4方に連なる尾根に平場と堀切を連続して施している。

また、本城地区の南斜面下には屋敷地と考えられる平場が設けられている。

東側の尾根状台地(字金谷前・右衛門郭)は本城地区の東辺を防禦していたと考えられるが、南平のため状況は明らかにできないもの、尾根状地形としてはやや幅の広い郭群で構成されていた可能性が高い。

西側の尾根状台地(字吉井下・後谷)は本城地区の西辺を防禦していたと考えられ、尾根に平場と堀切を連続して施している。とりわけ後谷地区は最高所で標高83mと本城地区より高く、防禦上重要な地点であったと思われる。

近世初頭に城下が再編されている可能性が高いが、本宿・中宿・御船町・内宿・大手下などの地名が残る。

城の歴史 伝承によれば黒熊大膳が居城していたが、土気酒井氏により永禄12年(1569)に落城したという。

本納には式内社が存在し、古くから在地領主が存在していたと考えられるが詳らかではない。

戦国時代、上総に君臨した武田氏は長南に居城し、隣接する茂原(高原)は武田氏の領地であったことが知られている。永禄10年(1567)以後に北条氏に組した土気酒井氏が在地領主を吸収し領国としたものと考えられ、この時期の城主は土気酒井氏の家臣と考えられよう。近世初頭に村高2,800石とあり戦国期にあっても土気酒井氏の重要な領地であったと考えられる。

(木内達彦)



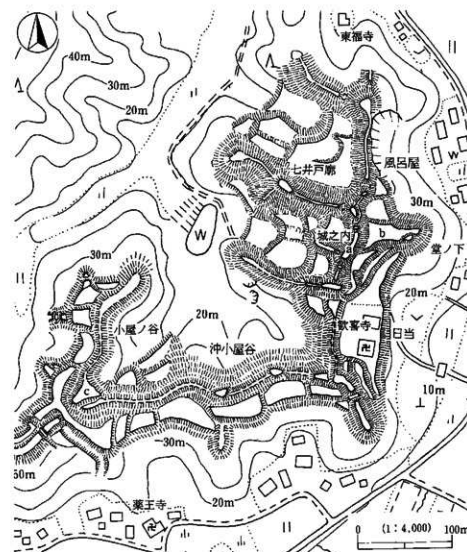
本納城跡概念図 (『千葉県中近世城跡研究報告書第2集』より)

立地 増生川の流域はまとまった平野がみられるが、とりわけ一宮川との合流点付近は低平な海岸平野が北東に広がっている。勝見城跡はこの平野を広く眼下に見下ろす高い丘陵上(標高50m)にあり、一宮正木氏の居城一宮城を南東対岸に遠く望むことができる。

構造の概要 本城は瘦根状をなすその地形条件のゆえか、丘陵上には広い平坦面が見られない。ただし、歡喜寺北西の尾根頂部(a)はこの丘陵で最も高く扼要の地であり、城之内の字名が遺り、しかも多少の削平面も認められる。恐らく一段低い観音堂(b)の地を主郭とし、山頂部は櫓台式な性格を有したものと解せられる。その下歡喜寺境内は丘陵部で最も広く、ここを主郭群というように捉えたい。南北を堀切で区画する。

丘陵続き西側は尾根南側を削り均して幅10数mの曲線を連続させている。分岐点は大堀切で遮断し、さらに北側に派生する尾根上も同様西側を削り均し、緩い支尾根は堀切で断ち切っている。分岐点の山頂(c)は多少の平坦面が認められ、南西尾根続きに対しては、

この他に、大堀切西側の谷部を大規模に削平した階段状の広い平場も注目される。ここは、七井戸窟という字名が現存するが、固有名詞の曲線名(七井戸曲線、一宮川対岸の長生村七井戸に由来するものか)がみられる珍しい例である。また、「小屋」の字名が遺る谷部はいわゆる根小屋に相当するとみえ、



勝見城跡概念図

城の歴史 『寛政重修諸家譜』によれば金田氏は15世紀後半の常信の代に岩井城に拠り、三代後の信吉の代に勝見城に住したとある。この岩井城とは高藤山城のことと思われる。そうすると、増生川流域が金田氏の勢力範囲で、しかもそれは戦国末期まで維持されたことになる。しかし、天文末以降、一宮地方は北上する正木氏によって拠点化されたことが確実であり、勝見城も天正年間(1573~92)には長南武田氏抱えの城となる(『毛利文書』)。岩井城はともかく、16世紀の中頃以降、金田氏と当地の関係はそのまま信じがたい。いずれにせよ、戦国末期の勝見城は長南武田氏にとって、東方また南方の正木や土岐氏に対する重要拠点であったことは確実で、その城主は三ヶ谷大泉寺の記録に見える大泉伊賀守なる人物であろうか。(小高春雄)

立地 一宮城は九十九里の南端を流れる一宮川の downstream、河口より約3kmの右岸に位置する。城は長生丘陵の南部分が北に張り出した先端の独立状台地に占地している。標高約40m、周辺との比高差約30mを測る。

北側は上総一宮玉前神社に接し、一宮川に至る。

構造の概要 方形を呈する独立状台地を利用し、城域は東西約150m、南北約100mを測る。

城の遺存状態は東面では良好だが、西面では悪い。基本的な構造は3つの郭からなるが個々の郭の独立性と郭間の優劣が現状では明確にならないため、面積の広い順に説明を加えることとする。

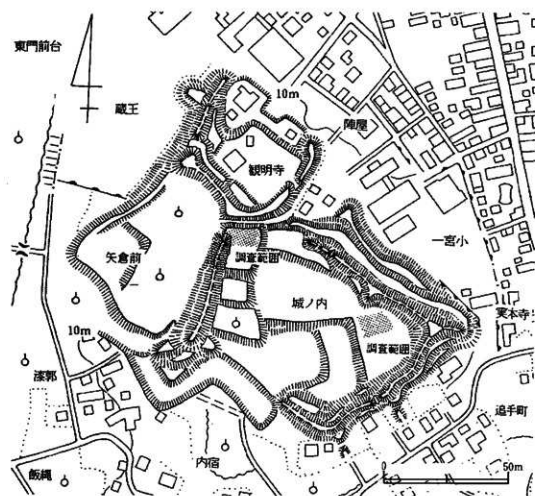
I郭は最大の郭で東・南方面に土塁と堀切に沿って腰郭を設け、東端には「櫓台」を築いている。東西面は城外に對し十分な遮蔽をしていない。本郭では2度ほど小規模な発掘調査が実施されている。

II郭は位置的に主郭と考えられ、土塁に囲まれていたと想定できるが西辺が改修されており断定できない。堀切が行われた結果であろうか。3つの郭の中では一番広い平坦面を持つ。

III郭は北端の郭で、現在は寺域となっているため北面が開いているが土塁で囲まれた方形の郭の可能性がある。

城の歴史 一宮城域は平安末期に玉前神社の神領として形成され、上総氏などの在地武士団の本拠地となっていた。中世を通じては鎌倉の権門の領地となり、戦国に至り武田氏・正木氏・里見氏らが交互に支配していた。

史料によれば永祿7年(1564)に里見氏が国府台合戦に敗れると、北条氏の影響が本地域までおよんでいたことが確認される。この中で城主とされる頼里見氏の正木大次郎が頼北条氏系の同族に攻められ追い出されている。この時期は北条氏に属していた。しかし天正9年(1581)以降に里見氏が頼北条氏系正木氏を追い出し、家臣の鶴見伊守を城主としている。(木内達彦)



一宮城跡概念図 (小高春雄「長生の城」より)

権現城跡 (奥陽郡奥陽町松丸字向台)

立地 権現城は奥陽川が南から北方に流れ、東方に流れが変わる角付近に位置する。万喜城は奥陽川をはさんで南東方3kmたらずの至近距離にある。地形は比高差10数mのテーブル状の台地になっており、城はその南東端に占拠している。台地の北は張り出した尾根の間が現在溜池になっており、城の周りは一帯が水田になった広大な盆地になっている。

地元では、この城は万喜城を攻めた時の降城であると言伝えられている。土木工事の都合及び軍勢の規模により限られた期間内に築城されたため、城域は台地の一部分になったと思われる。

構造の概要 降城だけあって周囲の主要な部分はそれなりにしっかりと防壁が施された構造となっている。

堀Aと堀Bは台地上を城内と城外に分ける役目を果たす掘で、堀幅約15mあり完全に台地を分けている。堀A・Bの間には馬出しaがあり、土橋状で城内から横矢掛りの構造になっており、戦国末期の特徴がみられる。城外との間の木橋が架かっていたと思われる。

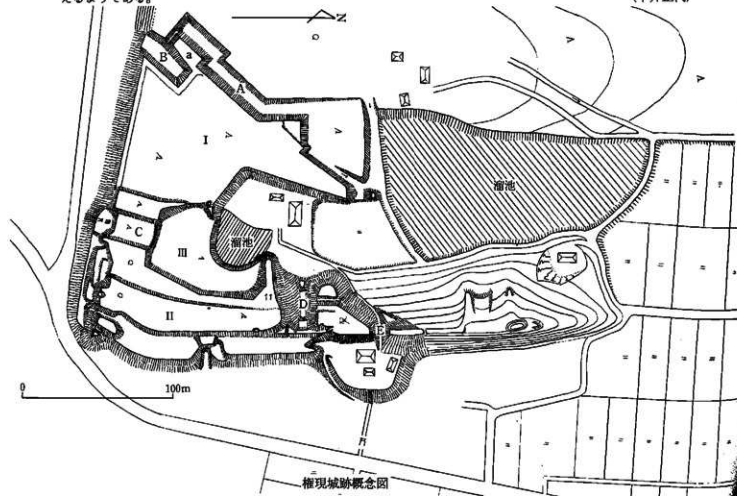
曲輪Iは軍勢を立て籠もらせるため城内では最も広く取ってある。曲輪IIは地形の関係から上下二段に分かれているが、東側と南側端は万喜城側のせいか腰郭を多数設け、南東の隅には二重堀切で防壁を固めている。

堀Cは一応曲輪Iと曲輪IIを分けているが、堀幅が広い割には浅いので、曲輪として使ったと思われる。曲輪IIも城内では最も低い曲輪であるが、今でも北側が溜池になっていて、曲輪I・IIと同様に使われたであろう。ともかく急峻な地形の周囲に根柢を築き立てたもので、城内の空間利用は最大有効に使ったと思われる。

堀切Dと北で東側の尾根と完全に遮断しており、特に堀切Dは堀底を3段にし東側の隅は腰留めの土橋を取っている。

城の歴史 万喜城攻撃の降城であったとすれば、天正17年(1589)に岸南城主、武田信榮が万喜城を攻めた記録があり、その時に築城された可能性が高いと思われる。その時の攻めは万喜城の土岐氏が支援より加勢を得て持ちこたえるようである。

(中井正代)



万喜城跡 (奥陽郡奥陽町大字万木字城山)

立地 万喜城は、奥陽川の蛇行によって広がった河谷平野に向かい、南から北に突き出した丘陵の先端付近を中心に築かれている。城の東・北・西の三面は奥陽川が取り巻く、南方は丘陵に支尾根を広げる履尾根が横切っており、天然の要害を形造っている。城内からの眺望は絶佳で、西に肥沃な奥陽平野、東の山ごしに太平洋の黒潮が望まれる。

構造の概要 城の占拠する地形は、無数に入った浸蝕谷により支尾根が発達し、非常に複雑になっている。その上に築かれた城の縄張は、井田氏の板田城のように統一したプラン化がなされておらず、むしろこの地形にあてはめる形で、長年にわたって改修を加えつつ完成した感がある。城の遺構は、山上の面積の広い曲輪群(主郭部)と、東麓奥陽川との間に展開する平地部、そして主郭部から南方約1kmにわたって連なる南方尾根部、以上の三つの部分に分けて考えることができる。この城の遺構の中で際立った特徴としては、城山の加工しやすい土質(凝灰質砂岩)も利用して、地山を垂直に削り落としてつくられた城壁のライン化をあげることができる。この城壁ラインは今日までもほとんど垂直に近く登攀不能であるため、当時は石垣と同じ効力を発揮し、敵を寄せつかなかったものと思われる。この遺構は主郭部では東側の斜面に、南方尾根部では西から南に向けた斜面にそれぞれ設けられている。

主郭部のうち「倉台」と呼ばれるIの曲輪は最高所にあり、下段のIIの曲輪との間に当時は空堀が存在したらしいので、この曲輪を主郭と考えられる。しかし、Iの曲輪は面積が狭く、南方尾根に近接しているため、城主の居所等の日常的な主郭ではなく、戦国指図所一箇方としての機能を果たした曲輪ではなかったであろう。そして日常的な主郭としては、50m四方の規模を持つIIの曲輪こそふさわしい。この曲輪の西北端には「マス台」と呼ばれる櫓台が築かれている。

主郭部の尾根の先端から東麓にのり登ると巨大な空堀になって奥陽川に達している。この南側にも、これと同じような空堀の残骸が城山に向かって切れ込んでいて、この二つの空堀と奥陽川に仕切られた200m四方の空間が平地部で、「内留」という小字が示すように、城下集落(ただし上級家臣の屋敷が中心)が置かれていた地区であったのであろう。

南方尾根続きは、前述のように履尾根で、しかも随所から無数の支尾根が派生出ている。この尾根と支尾根には、堀切を要所に設けたり落し落ちた城壁ラインが延々1kmにわたって続いている。履尾根のない広い曲輪は設けられないが、尾根のピークの要所には、独立堡塁状の小郭が設けられ、連繋して城壁ラインを守護する構造になっている。

万喜城は、南平地(曲輪)が大変多い城だが、それらの有機的関連が不明瞭で、明確な虎口もまた存在しない。そのため、防衛思想に新しさが認められず、相対的に古式な縄張の城という印象を受ける。しかし、前述の城壁ラインの通りなどから、万喜城は軍事的にみて相当に堅固な構造の城であったと思われる。

城の歴史 万喜城は、奥陽平野一帯を勢力範囲とする上総南部の有力国人土岐氏累代の居城である。七岐氏は、城の西にある海堤寺の古記録によると、応永19年(1412)に土岐頼元が摂津国富山城より、伊南・伊北・千町・三荘を所領にこの地へ移り、その後頼朝、頼朝と三代続いたとある。しかし、土岐氏の出自に関しては不明な点が多く、歴代当主も代々ではなくて少なくとも五代から九代におよんでいたとする諸説がある。

土岐氏の動きが明確になるのは、戦国末期の頃で、安房の里見氏と婚姻を重ねながら、国人領主としての地歩を固め、万喜城を拠点にしてその所領を拡大していった。里見氏と友好関係を保持していた土岐氏ではあるが、永祿7年の第2次国府台合戦で里見氏が敗退するにおよんで、しだいに両氏から離反し、当時上総に侵攻中の後北条氏と気取を通じるようになった。そのため土岐氏は里見氏と、それに属する大多喜城主正木氏や長南城主の武田氏等の攻めを受けることになった。最後の当主の頼朝は、後北条氏の支援を受けて頼朝し、天正年間(1573)に集中した合戦にことごとく勝利することができた。しかしこのように里見氏の攻撃をかわして所領を保持した土岐氏も、天正18年(1590)の小田原の役で後北条氏と連名をともにし、難攻不落を誇った万木城も遂に廃城となった。

(三島正之)



万喜城跡概念図

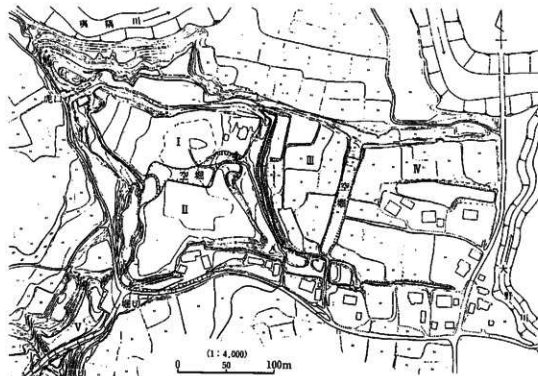
大野城跡 (夷隅郡夷隅町大野字要害)

立地 北東方向に延びた丘陵が先端部で平坦な台地（標高42m）となり、台地全城を主郭部に、東側裾部を外郭部とする。北側は夷隅川、東側は夷隅川の支流大野川、西側と南側は谷津に各々囲まれ、唯一西西端で丘陵基部へと続く。

構造の概要 城跡は東西400m、南北250mを有し、5か所の郭から構成される。IとIIが当城の主郭部に当たり、直角に三度屈曲する空堀によって区画される。I郭の方がII郭より若干高位であることと、丘陵基部との関係からI郭がより中心となる郭と捉えられる。I郭の北東（鬼門方向）端には現在も八幡社が鎮座する。また、北西端には切通し状の虎口がみられ、腰曲輪へと続く。I・II郭東辺下には細長い腰曲輪があり、縁辺には土塁が併走する。III郭は直線的な空堀でIV郭と区画される。III郭は現在水田に利用され田毎に段差が認められるが、後世の改変なのか、あるいは屋敷地の区画を現わしている可能性も考えられる。IV郭は北半部の高位面（畑に利用）と南半部の低位面（水田に利用）に二分される。高位面は通称地名で「ネコヤ」と呼ばれている。低位面は南側の谷津とほぼ同じレベルとなるため、土塁によって区画されている。V郭は丘陵上の地形にあり最も外側の郭である。丘陵基部側とII郭との間に堀切を入れている。

1977年に農道拡張に伴いII郭西辺を中心に発掘調査が実施された。その結果、当初腰曲輪と考えられていた平坦面下から、岩盤を幅5m、深さ5mの規模で掘り込んだほぼ垂直に近い空堀が検出された。空堀は人為的に埋め戻され、特に最上層は岩盤ブロックを敷きつめており、結果的に腰曲輪状の平坦面を造り出すこととなった。岩盤ブロック直上から17C前半の陶器が出土したことから、元和元年（1615）の一城令前後に行われた破城によるものと考えられる。発掘調査は城域の極く一部であったが、現状で認められる城郭構造は破城によってかなり改変されている可能性を考慮する必要がある。

城の歴史 15世紀を通じて現在の夷隅郡西半（当時の伊北荘）を領有した総持野氏の居城といわれる。発掘調査によっても該期の陶磁器が多く出土していることから傍証される。しかし、全体の構造および個々の城郭遺構を見ると16世紀後半まで機能していたことは間違いない。この場合は、土岐氏の居城である万喜城と正木氏の大多喜城のちょうど中間に位置することから、どちらかの勢力の境目城であったと考えられる。（柴田龍司）



大野城跡測量図（立教大学考古学研究会原図）

立地 清瀬山系を水源とし太平洋へ注ぐ奥隅川の下流、河口より3kmほどの左岸にある尾根状台地に占地する。標高は最高所で約44m、周辺の水田面との比高差約35mを測る。右岸には奥隅川の氾濫原が広がる。

構造の概要 南北に伸びる尾根状台地全域を城域としている。尾根状台地は開析され樹枝状をなしており、城域は南北約1,000m、東西約500mに広がる。

基本的な構造は「中央」、「北部」、「西部」、「南部」の5つの郭群から構成されている。

中央郭群は3つの郭からなる主郭群で大手方向には「馬出し」と長大な「板虎口」を設けている。

北部郭群は獨手にあたり、覆せ尾根を削り落として、堀、腰郭、堅堀を設け防禦群としている。

東部郭群は中央郭群の東に位置し、梯段状の郭群の独立した形状を持つ。城外面に突出陸壕遺構が見られる。

西部郭群は中央郭群の南東に位置し、上段に広い郭を持ち南東端に2重土塁が設けられている。

南部郭群は中央郭群の前面に位置し、上段に広い郭を持つ3つの郭群からなる。この内東郭は城の中で最大の平坦面をもつ郭となっている。南部郭群の前は堀地・氾濫原となる。

これら郭群の性格は中央郭群が主郭群、北部郭群は防禦群、南部・西部郭群は「駐屯地」といえる。

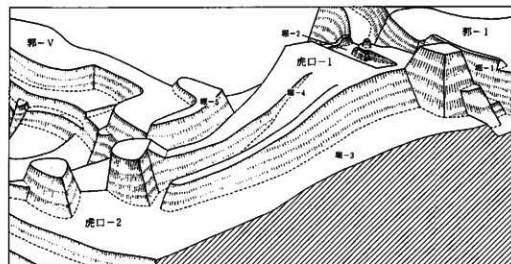
本跡は巨大な城であるが天險・要害の地であるため周辺に根古屋集落や「城下」を付属させる空間がない特徴を持つ。おそらく築城背景が軍事的な要請に基づくためと考えられる。

永祿7年(1564)以降に城主土岐氏は里見氏から北条氏に組するようになり、土岐氏は北条方の最前線となった。大多喜城が正木氏・里見氏に落とると海を除く3方を里見氏に囲まれた孤立的存在となった。しかし土岐氏は領地を確保している。これは本城の万喜城より海路交通が確保できたことが要因と考えられる。

すなわち「鶴ヶ城」=港を確保できるかが土岐氏にとって最重要課題であったはずである。このため城は要害の地を選び、幾重にも堅固に防禦が施されるとともに、東部郭群のような空間地が必要となった。その結果、直近に「城下」を置かない城となったといえる。近接する椎木、長者地区が「城下」であろう。

城の歴史 岬町は一宮に近接し、平安時代末期より武士団が活躍した地域であり戦国に至るまで様々な武士団が所領としている。その頃の中心地は椎木、長者であったと考えられる。城は戦国時代に武田氏の客将であった土岐氏が本地域に入封して以降に本城万喜城の有力支城として築城されたと考えられる。

土岐氏は時代により武田氏、里見氏、北条氏と、その勢力下に組したが、現在に残る城は高度な築城方法と軍事性の極めて高い配置を見せることにより、北条氏に組して以降の築城であろう。(木内達彦)



鶴ヶ城跡虎口断面図 (『千葉県中近世城跡研究調査報告書第13集より』)

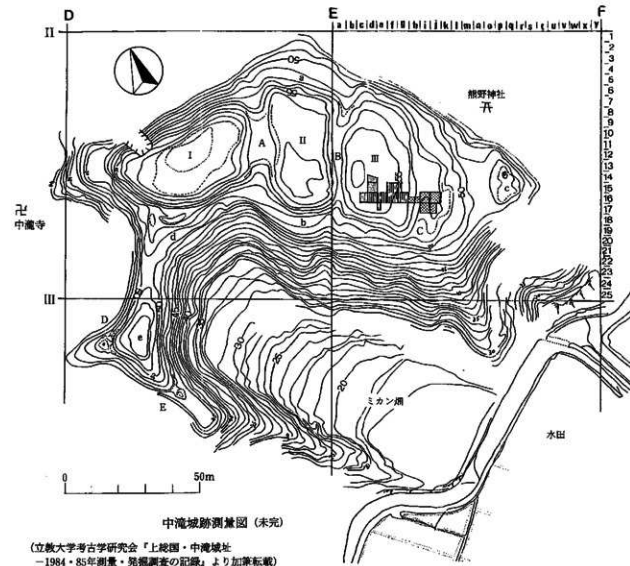


鶴ヶ城跡調査図 (『千葉県中近世城跡研究調査報告書第13集より』)

立地 標高55m程の丘陵先端部に占地し、夷隅川が開けた沖積地である水田ととの比高は約45mである。
構造の概要 当城跡は立教大学考古学研究会によって測量及び学術発掘調査が実施されている。主体部は比高差の少ない一辺40m前後の3つの郭が並ぶ直線連郭形態であるが、若干高い郭Ⅰが主郭と考えられる。各郭は空堀によって区画され、郭Ⅱの南北両側には腰曲輪a, bが造成されている。また、郭Ⅲの東側には複数の段が造られ、先端部には櫓台の機能が発見される高台cが存在する。郭Ⅰの南西直下には土塁dがあり、南西に伸びる尾根の先端部の高台eの西側と南東側に続く尾根は堀切D・Eによって切断される。なお、郭Ⅰの西、高台cの南東、高台eの南東から落ちる尾根上には小規模な平場が複数造成されている。登城路は高台cの南下から腰曲輪bへ続く小道と郭Ⅰの西側尾根が想定される。主体部南側の小谷内はミカン畑の段が造成されて旧状は復元できないが、西側谷内の中龍寺境内部分とともに居館の存在が推測される。全体的に縄張り構造はあまり技巧的ではないといえる。

発掘調査は郭Ⅲから東側の段にかけて実施された。その結果、幅4.6m、深さ1.4mの埋められた空堀C（破城によるもの）、斜面の段形、郭Ⅲ内では硬化面や柱穴群などが検出された。遺物は、15世紀代～16世紀前半の瀬戸美濃産陶器、16世紀代の明製染付皿などが出土した。

城の歴史 確実な文献資料は存在しないが、東方約3kmに万壽城、北方約1.5kmに矢野城、北東約4kmに熊ヶ城と、土岐氏の城郭に囲まれていることから、万壽城の支城として機能したものと考えられる。（井上哲朗）



中滝城跡測量図 (未定)

(立教大学考古学研究会「上総国・中滝城址
 —1984・85年調査・発掘調査の記録」より転載)

立地 近世大多喜城は、夷隅川沿いの極めて要害である台地先端部に本丸を置き、この台地の麓に順次二の丸、三の丸などの曲輪を配置している。そしてその外側に大きく夷隅川が蛇行して袋状になるのを利用し、総構えの堀として近世下町を形成している。中世大多喜城は、従来の通説と違い近世大多喜城の台地部分と北の台地先端部の栗山をも含んだのが城域と考えられる。

構造の概要 近世大多喜城は博物館や高校により、その遺構のほとんどを失っているが、いまいちに見ると、わずかながらもまだ遺構が残存しているのがわかる。曲輪Ⅰが本丸にあたる。博物館により曲輪内は改変されているが、南辺の台地中段には大規模な堀C（ところどころが腰曲輪となる。腰曲輪a, b, cがそれぞれ、大きく曲輪Ⅰ・Ⅱを囲っている）がある。虎口は各種の絵図によれば東辺中央部にあったはずであるが、これも既に壊されている。堀Bは大規模な堀切である。公園造成時に広げられていると思われるが、本来大規模なものであったろう。曲輪Ⅱは二の丸公園とされているが、江戸期の絵図には曲輪名は書いてない。堀Aは途中壊れたり腰曲輪になったりするものの、この曲輪Ⅱの南直下にも残っているのが、本来曲輪ⅠとⅡは一体化した曲輪であったと思われる。この曲輪Ⅱの西にも大規模な堀切Cがあったと思われるが、既に道路となっている。近世大多喜城の台地続きは、この失われた堀切までが城域であったろう。曲輪Ⅲは高校の敷地となっているが、絵図によれば御殿の地である。曲輪Ⅳもグラウンドとなっているが、本来二の丸の地である。曲輪Ⅴは大手の曲輪で役宅などがあつたが、現在は民家の地となっている。この曲輪の東部は自然の崖を削り城壁としたものであつたが、昭和5年の鉄道と駅舎の建設により大きく改変された。この曲輪の周囲は水堀で囲まれていたが、現在はわずかに堀Cの一部が、水田となって水堀跡のおもかげを残している。この外、曲輪Ⅵは現在小学校となっているが、空堀に囲まれた曲輪であった。城下町は、こうした台地の下にあり、袋状に夷隅川に囲まれた地である。南面と東西が夷隅川で、北面は田丁川に囲まれているため、全くの天然の総構えとなった。この川に囲まれた地に近世下町が建設された。

大手は東北北の大手門址dに設定されていた。水堀で南北を挟まれた地点に巨大な土塁があり、ここを経て乙字形に坂道を上るようになっていたが、新しい自動車道路により面影はない。なお、水堀の地点の土塁は、慶長14年(1609)に訪れたフィリピン人の長官ロドリゴの『日本見聞記』によれば、釣り橋で緊急時には釣り上げるようになっていたという。このことから、築城時の強力な防御が江戸期を通じて簡素化されたことがうかがわれる。

中世の大多喜城は従来この近世大多喜城の地ではなく、岡部台の地であったといわれていた。しかし、近世の大多喜城の最終の曲輪である曲輪Ⅱの外側の尾根低いに、中世的な堀切が三本発見された上に、北の尾根の栗山に大規模な中世城郭遺構が発見された。このことにより、中世大多喜城は岡部台の地と考えるよりも、むしろ近世大多喜城の地と栗山の地の二つの台地に築城されていた可能性が高い。そこで、次に中世大多喜城について述べていく。

近世大多喜城は、堀切や横堀がいくつも大規模で、中世というよりも近世的である。これは中世的な堀切や横堀を本多氏が入城した時点で大きく改修をした結果であろう。そのため、近世大多喜城の城域には、中世の築城遺構は失われたと考えるとよい。従って曲輪Ⅱの尾根低いの堀切から中世遺構が始まる。この尾根には既に遊歩道ができていて、いくつかの堀切は改変された可能性もある。堀Dは橋を架けるため壊されているものの、明確に残存している。平坦地は、現在では野鳥観察舎になっていて尾根上は削平されているが、旧状はわからない。この曲輪から東北へ張り出す小さな尾根には堀Gがある。直下が溜池になっているので、その開通のためかもしれない。堀Fは、栗山と近世大多喜城の尾根への分岐点にあり、尾根を切断すると同時に、栗山方面への堀底道となっている。この堀を抜けて栗山方向へ行くときすぐ平坦地fがある。削平が充分でないで曲輪にはしない。土塁は、堅堀（現在は通路として使われている）を伴うものである。曲輪Ⅶに入る門門となっている。曲輪Ⅶはほぼ真入中に堀目が入っていると思われる。ただし既に埋められていて全く表面ではわからない。しかし、南端には堅堀状に残っている。L字形の土塁も伴っている。堀Ⅰは極めて大規模な堀切で台地先端部を切り離している。この堀はそのまま腰曲輪となってい

る。曲輪Ⅷは巨大な曲輪で近世大多喜城の曲輪Ⅰの倍近い面積がありそうである。巨大なのでいくつかの堀で分割されていた可能性はある。曲輪上はあまり遺構は残っていないが、ところどころに土塁が残存している。特に土塁Ⅰは曲輪Ⅷに面しているため高い。土塁Ⅱは曲輪面から土塁を下ろしていき、谷筋まで続く。腰曲輪の所で一旦土塁は切れているが、これは虎口イを作るためで、これは尾根伝いからきた敵が腰曲輪に展開するのを遮断するためである。虎口ロは現在の登り道であるが、三度折れて曲輪内に入るので、本来の虎口ルートの可能性は高い。曲輪Ⅸは、江戸期の絵図によれば「太鼓櫓」と呼ばれている曲輪である。大きな深い堀で曲輪Ⅷから切り離されている独立した曲輪である。この曲輪は、堀Cが東方約30mほどの所にあり、この水堀と呼応して谷筋の防衛を担っていた。近世大多喜城の絵図（寛政期作製）では栗山地区の中で唯一「太鼓櫓」と明記しているので、かなり重視していたことがうかがえる。もしかしら、この曲輪Ⅸは、本多氏の改修による可能性もある。曲輪Ⅸの東には曲輪Ⅹ、Ⅺそして北にⅫと曲輪が続く。いずれも大型の曲輪で、中世の家臣団の屋敷地などに使われていたと考えられる。

以上、中世大多喜城は、近世大多喜城よりかなり壊されているとはいえ、栗山地区の城郭遺構はかなり良好に残っている。それから考えると、中世大多喜城は西の堀Fで分岐した尾根の二つに築城し、二つの尾根の間の水が豊富な谷筋を確保し、夷隅川に至る大きな台地上に城下集落を展開したと考えられる。近世大多喜城は、概ね同様の構想で作られてたが、二つの尾根のうち栗山地区を意識していたものの使用せず、城山地区で大規模に改修し、水堀をめぐらした。そして、夷隅川の蛇行を総構えの堀とし、その袋状の台地の全てを近世城下町として利用したのだろう。

城の歴史 中世大多喜城の歴史は、その位置も不明だったため明らかではないが、今回の成果に基づき述べてい。この大多喜城を初めて築城したのは、上総武田氏で、里見氏の侵入に備え、大永元年（1521）頃築城したといわれる。これが、中世の大多喜城の前身である。上総武田氏は里見氏の将正木氏と抗争を続けていたが、天文13年（1544）に苅谷ヶ原の戦いで敗れた。そのため、正木時茂が大多喜城に入城した。その後正木氏は改修を続けたと考えられるが、天正18年（1590）、徳川家康の臣本多忠勝によって攻略された。その戦功で本多忠勝はこの大多喜城に十万石を与えられた。中世大多喜城が二つの尾根に築城しているため、近世城郭としては不適であるので、城山地区を中心に近世城郭として全く新しい構想で築城した。また、その麓に大規模な城下町を经营した。初期の大多喜城は軍事的にもかなり厳しい防備が施されていたと思われる。先に述べた慶長14年（1609）にロドリゴの『日本見聞記』には、その防備の厳しさと壮麗な城門、豪華な殿舎などの見聞が記されている。この後、本多氏に続き阿部氏、徳川氏、松平（大河内）氏などが城主となった。概ね二、三万石の小大名が入ることが多かった。近世大多喜城は徐々に規模を縮小していったのである。明治維新により廃城となった。

（八巻幸夫）



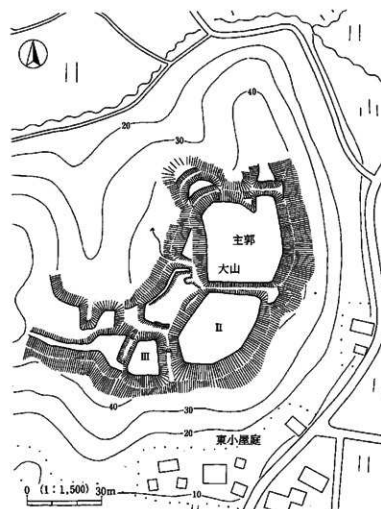
立地 大原町東部の海岸沿には比較的まとまった海岸平野が開けているが、この海岸平野を南東に広く望む高い(標高約60m)丘陵上に立地するのが本城跡である。周囲の傾斜はとりわけ南～東側に急で、その地質(泥岩、滑りやすい)からほとんど登攀不可能で、わずかに北西谷部を渡る緩傾斜の道が予想されるにすぎない。

城の構造 北側先端の最も広い略正方形の地が主郭に相当する。尾根続きの北側は堀切り、南側は直線的な空堀で区画する。土塁はまったくみられないが、近年まで堀として使われていたことも考慮する必要がある。まったくの平坦地である。

曲輪Ⅱは主郭の南側に位置し、曲輪Ⅲとはやはり直線的な空堀で面している。そのあり方は主郭と類似するが、こちらは地形に制約されて不整多角形を呈する。

曲輪Ⅲは曲輪Ⅱの西側にあり、城の西端に位置する曲輪である。前2者ととはるかに規模が劣り、尾根続きの西側を堀切で面するものの、その南端は掘り残している。

この他に一つの曲輪としてよいのが、曲輪Ⅱの西側中段にある土塁囲みの一郭である。その北側には虎口状の隘路が開いており、おそらくここを通過して主郭と曲輪Ⅱの間の空堀道に至ったものであろう。もちろん、その西側の隘路も一つの候補地ではあるが、現状では途中で崖状をなしている。



日在城跡概念図

字名は主郭付近が大山、南側麓を東小原庭という。この小屋とは根小屋の小屋の意味であろう。

本城は広い平野を眼下に望む要害の地に立地し、多郭かつ規模大であり、この地域における戦国期勢力の根拠と予想される。

城の歴史 本城は天正期に土岐氏の将、横山石見の居城と伝える(『奥隅郡誌』他)。確かに、戦国期の奥隅郡とりわけその北東部は土岐氏の領国であり、当地も明らかにその版図内に属する。しかし、上総土岐氏はその出自も含めて不明な点が多く、良質の資料も極めて少ない。大原町では他の主要な戦国期城郭として、祖山、金山、布施殿台、小浜城が挙げられるが、いずれもその城主が明らかでなく、金山城の渡部氏、小浜城の齋田氏が伝承または近世の俗信に登場するのみである。そのことからすれば、本城における事例もまったく驚くに値しないが、今後は構造等、遺された城そのものの研究から類推してゆく必要がある。

(小高春雄)

奥隅川の支流落合川は、南の御宿方面に向けて広い開析谷をつくっている。現在大原町になっているこの谷筋には、いくつかの中世城郭があるが、その中できわめて大規模ですぐれた縄張りをもつ城が二つ至近距離で隣接して存在する。北の城谷城と南の金山城がそれである。両城の距離はわずかに500mで、間に細長い小山を隔てて相対する。城谷城が細長い尾根の先端に主郭を置き南方尾根続きに向け幾重にも防御線を構築していくのに対し、金山城は富士山形のピークに求心性の強い主郭を置き北側の山麓を広くとり囲む縄張りとなる。また両城の縄張を観察すると、城谷城が尾根続きの数ヶ所のピークに独立集塊状の曲輪を配し、堀切や城壁下に落とし穴状の障壁を設けているのに対し、金山城は明確な折形虎口、強固な櫓台を備え横堀や堅堀を防御線としていることが特徴としてあげられる。

両城に関する史料は皆無であるので、両城をどのように歴史的に位置づけたいか分からない。しかし、右の縄張りの特徴から両城は別の構築主体によって築かれたようである。しかも、両城のきわめて軍事的な構造から同時期の軍事的緊張に際して築かれた可能性が高い。すなわち両城は敵対関係にある者同士がそれぞれの城を築き、対峙したということである。それは、どの時期に、誰々によって行われたかは明らかでないが、おそらく戦国末期に、里見・正木・北条・土岐氏等がかかわった軍事的緊張ではないだろうか。今後の研究が待たれる所である。

布施殿台城は、落合川の谷筋の最奥に位置する城で、段丘上に占拠された館城である。城内は上下二段に別かれ、上を奥殿台、下を前殿台と呼び、空堀によって区画されている。奥殿台の背後の尾根には深い堀切が設けられており、防御の厳重さがうかがえる。

城の歴史および構築主体は不明だが、在地領主の居館としては理想的な位置と規模をもった城であるといえる。

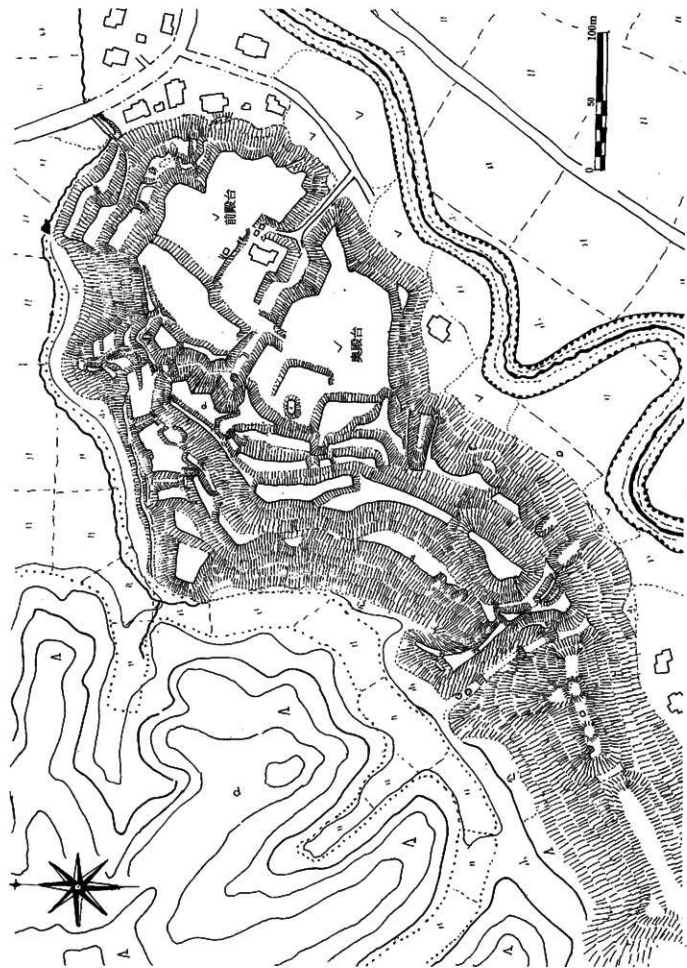
(三島正之)



城谷城跡概念図



金山城跡概念図



最明寺真城跡 (御宿町須賀)

立地 御宿河や町並を見下ろす標高45m程の丘陵上に北東の小谷を囲む様に占地する。比高は約30mである。構造の概要 丘陵上に多くの堀切・段差・削り残しの土橋・狭い平地を造成している。腰曲輪は、北東側は谷を囲む様に、南西側は中央部に帯状に配置される。主体部と推測されるのは郭II～VI部分の造成が密な地区であり、両側の帯状腰曲輪の他、小規模な平地も随所に配置されている。また、各方面の拠点となると推測されるのは、周囲を堀切で区画された南東端の郭I、北西端の郭VII～IXの高台、北端の郭X及び周囲の腰曲輪群である。なお、観音堂の平地・最明寺境内斜面・妙音寺側の平場に「やぐら」が存在し、古くから宗教的な場であったことが窺われる。

城の歴史 伝承では御宿屋太郎が居城とされる(『房総志料統編』)が、万喜城(夷隅町・鶴ヶ城)を有した土岐氏系、或いは勝浦城・吉宇城(勝浦市)を有した正木氏系の城と考えられる。(井上哲朗)



最明寺真城跡概念図

興津城跡 (勝浦市興津字要害)

立地 興津城跡は興津港北方の段丘上に立地し、尾根と谷が複雑に入り組んだ丘陵状に占地する。周辺の水田面との比高差は約120mを測る。

構造の概要 城跡は、南北約400m、東西約100mの規模で丘陵上の南端がI郭である。曲輪の東側に大土塁が設けられその北端は櫓台となり、虎口を固めている。I郭の北方にはかつて4本の堀切が設けられていたが、すでにそのすべてが失われている。なお、I郭から東と西方へ2本の尾根が延びているが、それぞれに見事な遺構が残る。東尾根の先端には空堀で区切られた櫓台が構えられ谷津への監視を強めている。西尾根は巨大な空堀で切断されている。

城の歴史 伝承では佐久間氏の城というのが、詳細は不明である。史料上では、天正8、9年(1580~81)の正木憲時の乱の際に正木憲時側の城として登場する。そして、正木氏の滅んだあとは、勝浦正木氏の城となったようである(毛利家文書)。

(椎名幸一)



興津城跡概念図

植村氏陣屋跡 (勝浦市串浜字内台他)

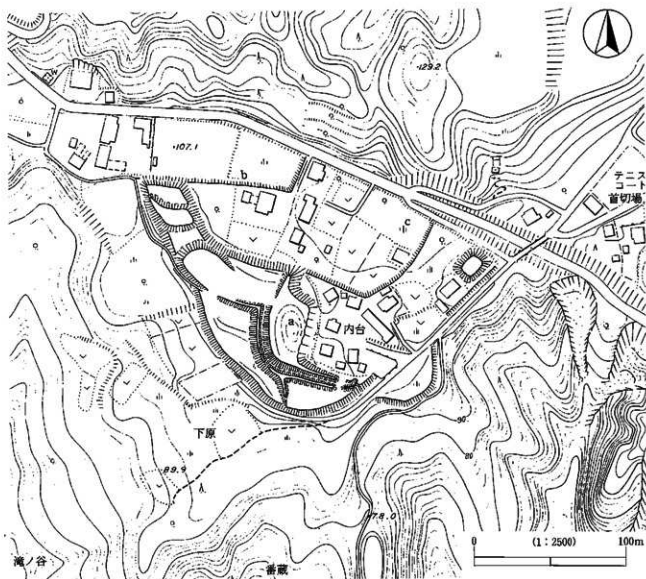
立地 朝市で知られている外房の漁港勝浦市街を眼下に見下ろす高い丘陵先端(標高約120m)に立地する。背後は一段高い丘陵を擁し、南側前面は勝浦湾から太平洋を一望できる景勝の地である。

陣屋の構造 陣屋跡は250×150m程の大きさの略三角形の土地で、南西に一小丘(a)を有する。丘の南東下から地形なりにその裾を堰と土塁が通っているが、果たしてこれが当時のものかどうかは判然としない。また、北西の一面にも人為的なカット面(b)がみられるが、これは後世の人為的なものという(現在その内部は埋められている)。また、北東隅には櫓台状の台が存在し、一段低いcの地は何らかの建物跡の存在が推定される(地元の聞き取り)。

南東谷部は字番蔵、南西谷部は城ノ谷、及び、東側テニスコート付近を通称首切場というが、それぞれ関連するのだろうか。

陣屋の歴史 天正18年(1590)、家康の関東入国に伴い上総勝浦には植村泰忠が三千石をもって封じられた。泰忠は当初正木氏の居た勝浦城に入ったようだが、二代泰勝に至りこの串浜に陣屋を構えたという(『私説 勝浦史』)。以後、宝暦元年(1751)に植村氏が断絶となるまで続いた。近世文書では陣屋は「坂ノ上」にありとするが、現在の字名は内台また下原である。

(小高春雄)



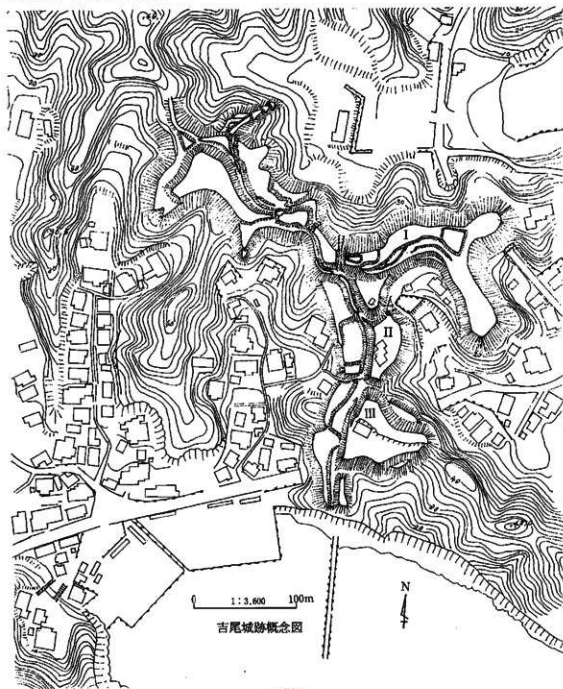
植村氏陣屋跡概念図

古尾城跡 (勝浦市古尾)

立地 古尾城は勝浦湾の左岸に位置し、西・北を支谷で囲まれた複雑な地形の丘上に占地する。台地は東・西・北の3つに分かれるが、東・北のみ遺構が存在する。

構造の概要 北側丘陵の中心部の主郭であろう。曲輪の西辺に櫓台が構えられ、その西側は堀切で区切られる。その櫓台の周囲と堀切の壁面には切石積みで石垣が残る。I郭の東側と南側は腰曲輪が連続する。I郭南側の空堀を挟んでII郭がある。西側に数段の腰曲輪が残る。II郭南側の堀切は通称「大手門」と地元では呼んでいる。その呼称は堀切道が虎口であったことを示したものだだろう。その南側がIII郭になる。II・III郭の東と西側にも石積みが残存している。I郭北方の入り江は舟入りのようである。その後、北方向の丘陵にも城跡が延長されたものと考えられる。

城の歴史 天正9年(1581)1月に正木憲時が古尾城を寄留しようとして敗退したことが知られる。これは恐らく、本来正木憲時側の城であったものが里見義頼に奪われたため、それを奪い取ったとしたい(『葛ヶ崎城調査報告書』)。天正末期には勝浦正木氏の城であったことがわかる(毛利家文書)。(椎名幸一)



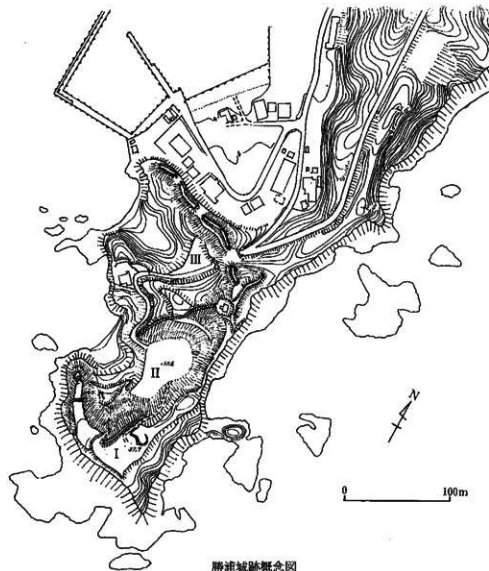
古尾城跡概念図

勝浦城跡 (勝浦市勝浦字郭内)

立地 勝浦城跡は、勝浦市街の南方に突出した八幡坪に位置し、東・西・南側の3面が急崖で海に臨む狭い半島状台地の先端に占地する。周辺の海面との比高差は約40mを測る。

構造の概要 台地先端部がI郭である。東側は断崖になり、崩れもみられるから曲輪が部分的に消滅した可能性もある。曲輪の西側には遺構かは解らないが土塁状の高まりが残る。その南端から数段の腰曲輪が北方向へ曲がりながら延びている。II郭はI郭の北に位置し、I郭より約20m低い。西側の入り江は舟入りであろう。I郭西端からの腰曲輪は、この港を守るような構造を示す。II郭西北の開口部は虎口と思われる。ここから道は北進しIII郭へ至る。III郭は改変が著しく旧状が失われているが、駐車場の付近だったようである。北側の尾根上には台地を切る土塁が残存している。

城の歴史 伝承では武田氏の城と伝えられてきたが、最近の研究で正木氏の一族、時忠を祖とする勝浦正木氏が天文年間(1532~1555)には勝浦城の城主だったことが判明した。永祿年間(1558~70)の史料には勝浦城の名前が見える(滝川恒昭『勝浦正木氏の基礎的考察』『勝浦市史研究』創刊号)。ひき続き天正末期の史料によれば、やはり勝浦正木氏の城であったことがわかる。(毛利家文書)。(椎名幸一)



勝浦城跡概念図

立地 山之城は鶴岡山系の中央部、標高335mの嶺間浅間山から突出する丘陵に築かれた山岳城郭である。主峰最高位の標高は295m、麓との比高差はおよそ200mというかなり高所に位置するにもかかわらず、丘陵の特性により、鶴岡山系の尾根道からは容易に侵入できるといふ意外性も孕んだ城といえる。

藤四郎台館跡は山之城の北西300mに位置するもので山之城との比高差は65mとやや低い。

構造の概要 まず、冒頭で触れておきたいことは、山之城城跡と藤四郎台館跡は全く同じ城の本体と出城であるという点であり、藤四郎台が館跡である可能性は極めて低いということである。

その理由は城の縄張りに見られる。それもふまえてこの城について述べていきたい。

藤四郎台の虎口Aは堀切状に整形された部分であり、山道を深く登って到達する。実はこれが山之城の虎口でもある。背後には左右から抱え込むような小型の曲輪が配され、登攀した敵兵を撃つような構造になっている。

藤四郎台の中心は西側の広大な方形曲輪群であり、西端部は断崖絶壁の様相を呈する。逆に南西の沢沿い部分の傾斜はあまく、環曲輪の段が形成される。これは、山之城を補佐する北西最前線としての防衛の証拠であり、それ故にこの曲輪群の規模は理に達していると思われる。

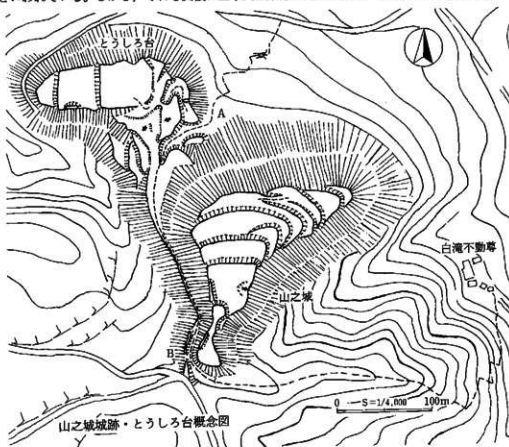
さて、山之城へ至る通路は、虎口から城の西側をまわって登っていく。道は主郭である曲輪の西側B付近で横断の崖底道に変化し、そのまま主郭後方の堀切に到達する。ここから山之城の曲輪群に到達する通路は確認できなかったが、周辺におそらく存在していたであろうと考えられる。

背後は1条の堀切によって隔絶されるのみで、城の構造自体も切岸のみで防衛する点など、古い様相が見られる。

なお、山之城の曲輪中心部を縦断する石積みは、近世牧に伴う遺構であり、城には関係はない。

城の歴史 城の初元は15世紀後半頃と推定できるが、後には正木氏の初期の拠点として利用されている。『安房誌』によれば天文2年（1533）に正木時綱が居城したとされている。そして「稲村の宴」の際に城主、正木大膳大夫が里見義豊の謀略で討たれたといわれている。しかし、それを契機に正木氏は東部へ進出し始め、勝浦城を拠点として勢力を増長している。

さて、藤四郎台についてであるが、『安房誌』には、正木氏の家臣と伝える西井藤四郎の西館としているが、この伝えには疑問を感じる。まず、位置的に館である可能性は低いこと、藤四郎台の名称にある。今回の調査でも西上総から安房にかけて、とうしろ・ところ、という地名を数多く見付けることができた。これは城郭地名と思われ、「城の台」という場所を指した言葉であると考えられる。（松本 勝）



立地 館山を北に望む保田川の沖積地。清賀水道を望む標高11mの段丘低地に所在する中世館跡である。

遺跡の西側は保田地区の本体である保田川が西流し、川を挟んで南東に対峙する丘陵頂上（標高85m）には、本遺跡と大きく関わりをもっていたと思われる鹿嶋山真福寺が存在する。（なお、真福寺には正和5年（1316）銘の阿弥陀三尊の像を刻んだ縁起片板製の大型の武蔵式板碑が残されている。）

構造の概要 国造工事にもなっており、1988年に財団法人千葉県文化財センターによって発掘調査されるまで、この地が中世における館跡であったことは全く知られておらず、広範囲に水田耕作されていたために土層等の施設は全く遺存していなかった。

発掘調査によって、堀1条、掘立柱建物5棟、塙7列、井戸3基、溝3条などの施設が明らかになった。堀は一部分の調査であったが、水田畔に遺存する堀痕跡から、一部は崖によってとぎれるが、推定方一町（109m）の堀を伴う方形館であることがわかった。図示した調査区は丁度館の南東端部にあたり、図における北西、つまり中央部に建物の跡が集中することがわかる。堀と建物は縄文主軸方位N-80°W付近に規制されており、計画的に設計されていたことがわかる。堀は断面の緩い「毛拔堀」の技法で構築されている。

建物は二面附付、一面附付、廂のないもの等バリエーションに富んでいる。

井戸については条堀り井戸、縦板組調子横板どめ井戸、縦板組横板どめ井戸の3種類が認められる。

出土遺物は、土師質土器、瀬美・常滑・瀬戸窯といった東海地方の陶器類、白磁皿・壺、青磁の碗・盤など、中国からの舶載陶磁器が見られる。また、「天聖元寶」「至道元寶」の北宋銭や、低地に所在するために漆器などの木器の出土も見られた。

館の歴史 前述したが、本遺跡は調査されるまでここの中世館跡があったことは全く知られていなかった。

そこで、出土した陶磁器の年代から館の使用期間が抽出されることが考えられる。常滑窯陶器や舶載陶磁器から得られる情報は、おおむね13世紀後半から14世紀にかけての年代が当てはめられる。

そこに居館していた領主が果たして誰かという問題であるが、調査担当者の高梨俊夫氏（千葉県文化財センター）は「吾妻鏡」に登場する平北の領主「安西氏」、あるいは「妙本寺文書」にある、保田郷の地頭「菅生氏」の存在を候補者としている。「安西氏」の本流は、南北朝時代には南の加知山村、佐久間村を本拠としており、下佐久間の安西氏館、東側の和見地区から大門にかけるやぐらなどの中世遺跡も安西氏に関わる可能性が考えられる。

また、当期の館南地区に隣接の深い二階堂氏も一つの候補に上げられるが、現在のところ定かではないといわざるを得ない。

（上記の概要は高梨俊夫氏「下ノ坊遺跡B地点」『千葉史学第18号』1995/5を参考にして記述した。）

（松本 勝）



立地 平久里川上流南岸の内厚の丘陵を築地して築造している。主郭最高位の標高195m、平地面との比高差は125mと小型のわりにはかなり高い城であるといえよう。城は平久里地区の東の要ともいえる場所、最良の進地である。周辺の諸街道の接点を、ほぼ南から監視する機能を持つ山城である。

構造の概要 大手口の場所については、目下不明である。但し、城の北西集落から登る車道が水田でとぎれる手前Bに、一か所の切通しが見られるが、立地に不自然が見られることから一考を要す遺構ととらえた。

Bから最高所の水田を経て、山道を迂回しながら堀城Vに到達する。堀城Vはやや広大な平場であるが、所々に堀状の落ち込みや不規則な段差、不明瞭な道路が存在する。Vから東へ向かうと道路は二条となり、左側の道路を進むとすぐに谷部を整形した段状の施設IVに到達する。これについては道路そのものが掘手に直接到達できるので、掘手から敵兵を追い立てる、出城としてとらえることも可能である。

Vの右側は主郭へ向かう大手道路である。道路は最初単調であるが、右手に腰曲輪およびI条の堀切が確認できる。道路はそのまま堀底道を抜けて帯曲輪群に到達する道と、そのまま主郭方面に向かう道に分かれる。IIは主郭下からおよそ4条の帯曲輪によって構成され、武者溜りも兼ねて主郭を保護している。

IIの最下段の北側には幅広の堅堀Aを確認することができる。IIの北西側には数段の小型の腰曲輪群が見られる。

主郭最高位Iの南側は堀によって隔絶する。堀底は掘手の道路となり、まもなくIVからの道路と合流して、瘦せ尾根を登形した曲輪IIIに到達する。その後方腰堀は狭く、自然の岩盤を切岸状に切り込んだ部位に到達する。その先は掘手道路となり、山道伝いに蛇喰城方面に逃げ込むことが可能である。

富山城は、北側の宿要害西、西側の蛇喰城に囲まれた三角形の要害地帯の中心に位置するもので、個別の城を概観するものではなく、周囲全体の状況から判断すべき城である。

城の歴史 城の遺存度とはうらはらに、伝承・文書などほとんど残っていない。

里見氏がこの城に関わったか不明であるが、『快元僧侶記』によると、天文6年(1537)6月には里見義豊が討った里見義隆は堀付城を捨て、部久里郡内に本拠を構えた、とする。これについて今では三方村の滝田城ないしは義豊が幼少期に居城した宮本城が通説であったが、城の構造、周辺の防備の状況、当時の時代背景を考えると、宮本城の影響下にある縄張りが見られる富山城に居城していたのではないかと考えられる。

(松本 勝)



立地 多田良海岸に注ぐ小河川岡本川の中流地、海岸線からは約3kmほど入った標高180m余りの城山と呼ばれる丘陵上に占拠する。主郭部から南方に鎌ヶ浦や館山城を遠望することができ、また岡本城の一部も西西南に約3km離れて望むことができる。このようにどちらかという内陸に位置しながら、海を望むことも可能で、海からの攻撃を受けた場合、たとえにも格好な場所といえる。また、東方に尾根続きに約2kmほどいくと、滝田城跡がある。岡本川を遡っていくと大掛を経て、保田と長狭、鴨川を結ぶ往還(長狭街道)に通ずる。

構造の概要 当城跡は大きく三つに区分することができる。ひとつは城内最高所の標高183mの丘陵部に展開する遺構群(主郭とそれに付随する郭群)と、二つ目は主郭の北西麓にあたる郭群(郭IIとその他の郭)で、そして残りは東方に伸びる尾根からさらに南北に派生する支尾根の遺構群である。三者あわせると、東西軸および南北軸がそれぞれ750mの広大な城域をはこぶ。しかし、これらは一度に整備されたものではなく、遺構面から判断して、異なる年代にズレがあるのではないと思われる。

最高地点のある方形の郭Iが主郭部である。東側縁辺部には土塁の残欠が見られる。また、東方に派生する尾根を大きく掘りきって、尾根伝いに攻められるのを防いでいる。郭Iの北東隅に丸石を積んだ遺構が見られるが、他の里見氏の城郭で見られる切り石積みの遺構とは異なっており、中世のものかどうかは不明である。虎口は南辺の南東隅寄りであり、腰曲輪aに下りる。また郭Iの四辺にはそれぞれ腰曲輪b~dが配されている。とくに北方へは小郭・fとやや広い郭をさらに三段配している。ここで、ひとつのブロックとすることができる。

つぎに、郭8から西へ下がっていった地点にある郭h~jと、広い空間の郭IIを一つのブロックと考へる。郭IIは大きく削られて果樹園となっており、旧状に大きく異なると思われる。居住空間として利用されていたのではあるまいか。この郭IIの北側には土塁が残るほか、当城の北側に大きく入り込む沢に向かって伸びる支尾根には、何らかの防衛遺構が見える。

さらに、この郭IIのブロックの尾根上遺構群であるが、これもまた北方を大きく意識した遺構が読み取れる。北方に伸びる支尾根は、二連の堅堀C・Dと大きな堅堀Eを左右に組み合わせて尾根を土橋状に細め、さらに土橋を渡った地点に土橋を削って防壁を作り、左に迂回させて登らせるといふ大案手の込んだ造作をしている。このほかイの西側斜面には堅堀F・G・Hが築かれていて、やはり沢方面からの敵の取りつきを防ぐ工夫がされている。

また主郭を直接望むことができる南方へ伸びる支尾根には、南端に二連の堀切H・Iが、中間にも堀切Jが、さらに尾根へ付け根を切る堀切Kが、それぞれ設けられている。支尾根口には明確な曲輪取りをした空間はなく、主郭を直接望める好位置を、敵に簡単に渡さないように、後に取り込まれたものではないか。支尾根口とは違い消極的防衛のための曲輪取り、といえよう。郭Iより北方方向に伸びる尾根は、堀切と櫓台の組み合わせで防衛性を高めている。支尾根口部には櫓台状の郭L置かれ、万が一に取りつかれ、Kに繋がって防ぐことを可能にしている。また、連続堀切M・Nは城域の東端を示すものといえよう。これより東方には遺構は存在しない。また尾根をたどると、滝田城へ連絡する。

以上のように、当城北方の沢に向かって伸びる支尾根のほとんどに、念入りの造作が見られ、こちらからの攻めを意図した縄張りとなっているのが特徴である。また、支尾根イロに見られる二連の堅堀・堀切、あるいは連続する堅堀など、総じては類例の少ない技巧的な縄張りといえる。その反面、主郭部周辺の縄張りや主郭虎口は単純である。このことは、当城跡が古くから里見の本拠であったという伝承を、ある程度裏付けることになる。しかし、天文の内乱による里見義隆の死により断絶されたという伝承は、再検討を要しよう。いづれにしても、ある時期の里見氏の本拠としてふさわしい、雄大な技巧的な縄張りをした城と評価することができる。

城の歴史 伝承では、安房里見氏二代の成義の築城になるとされる。その後、家督を継ぐ実弟、義隆の居城とされるが、現在の研究では、義隆の家督相続が大野太閤の通説よりも早い時期と考えられており、この辺は里見の余地

がある。いずれにしても、美堯・義豊の居城という伝承を信ずるならば、当城は16世紀初期より存在したものと考えられる。さらに、年不詳9月1日付里見義堯書状(安房妙本寺文書)の端裏に大津から発信されている事実が、最近の研究で改めて指摘された。大津とは宮本城跡の所在地をさし、宮本城による義堯から出された書状であることが明らかである。このことは天文の里見家内証以降(1530年代以降)も当城が使用されていたことを示している。

従来、義豊の敗死により当城は廃城になった、と伝承されていたことは、すくなくとも文書の再検討と、縄張りや検討により、間違っていたと結論づけられよう。さらに、岡本城を望める点と、房総に類例の少ない発達した縄張りから考えると、天正期まで里見氏にとって意味のある城であったと思われる。(遠山成一)



岡本城跡(安房郡富津町豊岡字聖山・要害地)

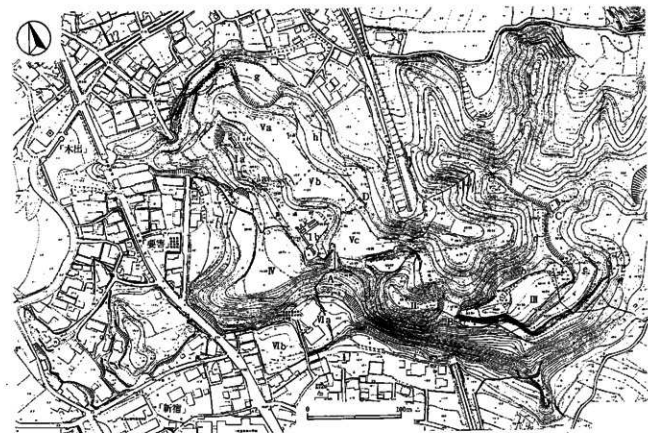
立地 大原町の北東約2km。浦賀水道に面した、東から西へ伸びる半島状の丘陵状を中心に立地する。北に汐入川、南に岡本川が流れ、南側にはやや広い低地がある。西側下には、城跡のある丘陵と窪地によって抱かれた入江があつて、現在も漁港となっているが、往時は重要な港として機能していたと考えられる。南東約1kmには城主里見義頼の菩提寺の光厳寺がある。

構造の概要 里見氏の本城として知られている岡本城は、丘陵部、その南側直下の居館部、西側下にあつて港を有する「要害」地区、城下町の四つの部分に大別される。規模は東西約600m、南北約300mである。港を擁した、いわゆる「海城」であったことが、岡本城の大きな特色となっている。なお、城跡は町指定史跡に指定されている。

丘陵部は、標高55~68mの尾根上に立地する郭Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを中心とする。北東側から南を経て北西側に延る馬蹄形の尾根上に曲輪が連続するが、曲輪と曲輪との間には岩盤を垂直に近い角度で切り落とした堀切A・Bが見られ、他の里見・正木氏系の城郭と共通した特徴となっている。

郭Ⅰは主郭で、この周辺が城の中核部である。その北西側Ⅰaは10mほどの幅しかないものの、眺望はすばらしく、浦賀水道を直下に見望ことができることから、物見として利用されていたと考えられる。土橋aで結ばれた南東側Ⅰbは、ほぼ三角形を呈する平坦な郭である。ここからは発掘調査により、岩盤を掘り込んだ底径が30cm以上で深さが1m近くある柱穴群が検出された。3ヶ所の柱穴を1単位として掘られていることから、大型で高層の掘立柱建物があったとも考えられており、注目される。16世紀後葉の染付などの中国産陶磁器が出土している。

堀切Aの東側に位置する郭Ⅱは城跡の中でもっとも高く、標高67mに達するが、狭小なうえに内部は平坦ではない。現状では真下を聖山トンネルでJ R内房線が通過する。郭Ⅲは幅25mに及ぶ堀切Bにより、西側の郭Ⅱと区画される。尾根を掘り下げてほぼ長方形の平坦面を造成しているが、北西側には石塁状の遺構が見られる。ピツ細に伴う施設の可能性も残るものの、同様の石塁は追海城(富津市)や山之城・金山城(ともに鴨川市)などにも見られることから、



岡本城跡概念図

岡本城跡遺構図（『千代田県中世城跡研究調査報告書第6集』より）



居館跡は丘陵部の南側に位置して低地に接し、方形を呈する。東京学芸大学附属大泉小学校南側にあるVI a と、5 m程低いVI b、の2つに分割される。主郭であるI bの南直下にあり、城主里見氏の居館跡に比定される。

「要害」地区は、丘陵部から派生する南北2つの支尾根に囲まれた低地に位置し、丘陵部と達島によって風や波濤から守られた良港を有する。岡本城を「海城」と称する所以である。「要害」という小字から、水軍の拠点となる軍事的な施設があったと考えられる。

城下町は、「要害」地区の北側の、尾根の外に位置する字「木出」付近に、「要害」地区の南から居館跡の南にわたる字「新宿・田窪」に展開していたのであろう。

以上のように岡本城は充実した構造を示すものの、里見氏の領内（半ば独立した勢力であった正木氏の領域内も含めて）にある他の支城もほぼ同程度の構造を有し、本城である岡本城が飛び抜けた存在ではなかったことがわかる。戦国末期になると、下総や上総では領地支配の拠点としての本城が急速に大規模化されるのに対し、里見氏の領内では本城に機能が集中する傾向が乏しかったと考えられる。里見氏の権力構造の反映であろう。「海城」という観点から見て、百首城（造海城）や金谷城（ともに富津市）などの、里見氏の他の「海城」と比較しても、岡本城が群を抜いた存在であったとは言えない。

城の歴史 岡本城は義頼・義康二代にわたって里見氏の本城であるとともに、「海城」としての機能も有した。

天正6年(1578)に久留里城(君津市)で里見義弘が没すると、安房を基盤とする義頼と上総を基盤とする海王丸との間に、家督をめぐる争いが勃発した。同8年に義頼が勝利して里見家の当主となると、岡本城は里見氏の本城となったのである。天正18年(1590)の小田原合戦に際して豊臣方が作成した関東八州諸城図書(『毛利文書』)には、「安房——岡本里見義安(左馬頭)城」と見える。現存する遺構はこの段階の様相を示している。

「海城」としての性格を示す史料としては、井出方時吉・幸田方昌風連署書状(『越前史料』所収山本文書)がある。これには、「一、内あわへ御動被成候儀、岡本・金谷・新地三所之敵舟集り、しうい申所者補見下へ度迄押こめ被成候事」と見え、後北条氏の水軍山本氏が海上より安房を攻めた時、岡本などから里見領の水軍が出動して迎撃したことがわかり、岡本城が里見水軍の有力な根拠地であったことが明白になる。近世に入り、義頼の子の義康が館山城(館山市)を大きく改修して新たに居城とするまで、岡本城は里見氏の本城であった。(外山信司)

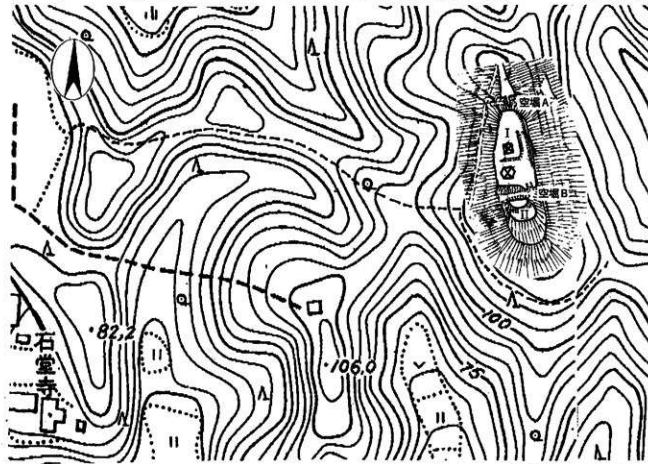
石堂城跡(安房郡丸山町石堂)

立地 太平洋に注ぐ丸山川沿いの沖積地奥部東側の丘陵上に立地する。丘陵は西側を丸山川に東側を珠那ヶ谷と呼ばれる温石川流域に挟まれた南北に細長い地形で、城跡は丘陵の最高所(標高129m)に占地する。なお、遺文および県指定の建造物が多くある石堂寺(天台宗)から丘陵低いに東北東250m程の地に城跡は位置する。

構造の概要 城跡は現在公園化された展望台やあづま屋が建てられ、その時の工事の削平によって一部破壊が見受けられる。しかし、城跡の全体構造はまだ把握することが可能な状況である。

城跡は大きく2か所の郭から構成され、南北75m、東西20m程の小規模城郭である。郭Iは展望台の施設が建っている所で、南北40m、東西20mの規模を測る。北端は空堀Aによって遮断される。空堀Aは上幅7m、深さ2m(郭Iから)、中央部は土橋が設けられている。また、空堀東端は腰曲輪に続く。郭Iの東辺には0.5m程の高さの土塁状の高まりが認められるが、内側が併走して溝状に窪んでいることから確實に土塁痕跡とはいえない。南辺は空堀Bによって郭IIと区画される。南東辺は郭II側に若干張り出しが認められる。堀Bは最大上幅は6m程あるが深さは郭I側から見て1.2mしかなく、また法面の角度も緩やかであり、かなり改変を受けている可能性がある。ただ、本来も堀としては小規模であったであろう。郭IIは南北24mの規模を測る。郭内は若干の平坦面が認められるものの、ほとんどは腰曲輪をなし多分に自然地形の状態を残している。

なお、城跡南端の標高115mの丘陵は、頂部は人工的に平坦面が造り出されてはいるものの、城郭遺構は認められなかったので、城域には取り込んでいないものと思われる。城の歴史 城跡の伝承は全くないが、ここを通称大塚山といい、石堂寺が大永2年(1522)に現在地に移る前に所在した場所と伝えられている。もしこの伝承が史実を反映しているとするれば、城跡の構造が古い様相を示すことを考慮すると、15〜16世紀初頭段階の石堂寺権力によって築かれた館城であった可能性がある。(柴田龍司)



石堂城跡概念図

稲村城跡 (館山市稲)

立 地 館山湾(鏡ヶ浦)に注ぐ平久里川やその支流の形成した沖積平野を一望できる。また北麓には平久里川支流の滝川との間に、JR内房線および県道館山・千倉線が通り、郷の内・町田という小地名が残る。当時は海岸線がもっと内陸部にあり、滝川の水運を利用できたものと推定されている。

構造の概要 開析の進んだ尾根状の丘陵を東西、南北それぞれ約500mにわたって造作を加えている。郭Iより西方700mほどの地点で、小独立丘に滝川がさざがれるように北へ屈曲しているが、この小丘にも人工が加えられている。この屈曲点は「鑑田ヶ瀬」と呼ばれ、軍記物に登場する「稲村合戦」の激戦地の一つである。当城跡の外郭西端としてとらえられている。([千葉県中世城跡研究調査報告書第4集])。また郭Iの東方加戸地区には、谷をはさんで樹枝状に伸びる丘陵が接している。この谷部の水田は「一ノ坪」から「十ノ坪」まで、条里制に関連した地名を残している。郭Iの発掘調査の結果、東側は、地山を削平し土塁や平坦面を作りだし、西側には版築技法を用いて平坦面を作りだしていることがわかった。曲輪面積の三分の一が、自然のやせ尾根形に対して人工的に盛土された空間であるということは、当城のもつ意味を体現するものだ、と報告書は指摘している。郭Iから北東方向へ尾根が伸びるが、郭Iとは堀切Aで切られている。また尾根の途中にも土橋をとまう堀切Bがある。郭Iから伸びるそれぞれの尾根の先端はすべて、取りつきを防ぐため切られている。また郭Iから南の尾根続きも堀切Cで切っている。なお、遺構は南側にさらに見られるが、尾根を削平した郭II~IVと多くの腰曲輪からなる。ただし、腰曲輪がすべて往時の遺構か否かは検討の余地がある。

城の歴史 当城は、房総里見氏第二代の成義から三代義通、四代実亮、五代義豊の居城と伝えられる。存在が確実視されるのは義通からであり、しかも居城が当城とは確定できない。最近の研究で、通説とは逆に当城にいた里見氏の当主義豊が伯父実亮を「誅」したこと、その後義豊が北条氏と結び、義豊を討ったことなどが唱えられている。いづれにしても、少なくとも16世紀前半の里見氏の居城として間違いない。また、軍記物にあるような、当城が焼け落ちたという証拠となる焦土は、まったく検出されなかった。(遠山成一)



館山城跡 (館山市館山字城山)

立 地 館山平野の南西端に位置する独立丘陵全を城域とする。最高標高72m (戦時中に削平を受け現在は65m)、南北450m、東西300m、平地部との比高差50mを測る。

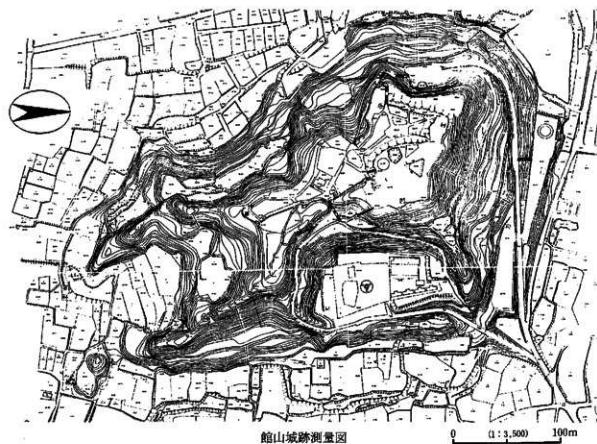
構造的概要 第二次大戦中に最高所に高射砲陣地が、さらに城跡内の至る所に軍関係の施設が築かれたことから、現状での表面観察による城跡の構造を把握するのは困難な状況である。事実、昭和52年から3か年にわたって実施された館山城跡総合調査の発掘調査でも、頂部の天守台および千畳敷とよばれる地区では後世の改変が著しいことが判明している。ただ、丘陵南端部の馬蹄形の谷津内で里見義康の御殿跡と伝えられる地区では、戦国末期から近世初期の陶磁器が出土し、当該期と思われる柱穴も検出されていることから、この地区は多少なりとも旧状を伝えている可能性がある。また、もう一つ考慮しなければならない点は、館山城が里見氏の伯耆転封に伴い徳川幕府によって接収され廃城になっていることである。この時徹底的な城跡の破壊 (破城) が実施されたはずで、城郭であれば必ずある堀も埋められたものと考えられる。現状では全く堀の痕跡が認められないことからそれは疑える。

城跡東側の裾部には、麓の居館や重臣屋敷を防備するための鹿島堀と呼ばれる惣構の水堀跡が近年まで残されていた。しかし、近年の開路によって急速に痕跡が失われつつある。

城の歴史 天正18年 (1590) に上総国を没収され安房一國となった段階の里見氏の居城。義康、忠義と二代続くが慶長19年 (1614) に安房から伯耆の倉吉に転封となり、それに伴い廃城となる。山麓東側に据えられた鹿島堀の呼称は関ヶ原合戦の恩賞として常陸島原を加増されたことに因むといわれている。

当城は近世初期の短期間だけ機能をしていたと思われるが、既に天正15年以前と考えられる史料に、館山城が在番衆の駐屯する城として登場していることから、戦国後期には岡本城の直轄の支城として館山津を抑える機能を果たしていたものと思われる。この段階の城下集落地区は、近世段階とは反対の丘陵南麓の字「根古屋」を中心とした地区に置かれていたのであろう。

(柴田龍司)



館山城跡測量図

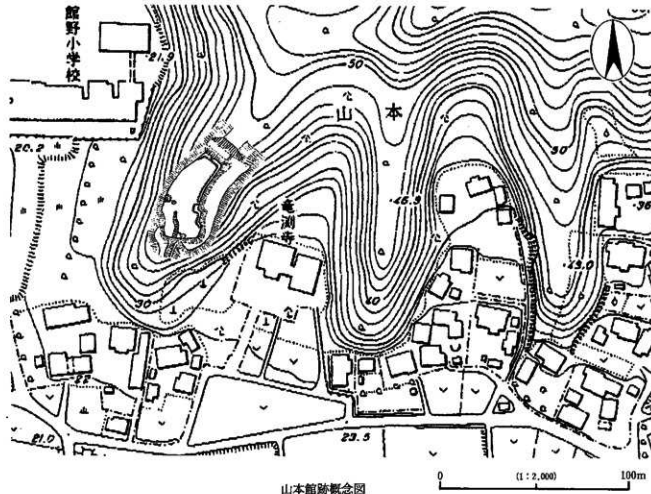
山本城跡 (館山市山本字堀ノ内)

立 地 館山平野の中央部に位置し、南北方向に走る標高45~66mの丘陵の南西端に派出する支丘陵先端部に城跡は立地する。城跡は支丘陵のピークから南側を城域とするが、先端部までは城跡に取り込んでいない。城跡の東側は南に開口する支谷に面し、支谷内には天正10年 (1582) 開基と伝えられる竜洞寺がある。また、西側は館山平野に面し、麓に館野小学校が存在する。支丘陵南麓には数戸の集落が存在するが、その内の小原氏宅の屋号を「堀之内」と呼び、このあたりが字「堀ノ内」である。

構造の概要 城跡の規模は南北約60m、東西約30mを測り、基本的には単郭構造である。郭内は南北45m、東西18m程の規模でしっかりと平坦化してある。郭の北端は、上幅12m、深さ4m程の大規模な堀切によって遮断される。堀切の西端は斜面にそのまま取りつくと、東端は郭東辺下の腰曲輪に続く。郭北辺は高さ1~1.5mの土塁が幅広に認められる。中央部が開口し道となっているが、これは後世の所産であろう。東辺は北辺から続く土塁が30m程残されている。中央やや南側で堀切が屈曲し横矢掛りの構造となっている。また、この箇所土塁が幅広となり、しかも一部開口していることから、これが館本来の虎口であろう。東辺下には奥行5~10mの腰曲輪がある。南側は中央部に南麓の集落に続く堀割状の道が開き、脇に土塁状の高まりが認められるが、遺存状況が悪いこともあり本来の虎口であったかどうかは不明である。また、南辺側は特に堀切は入れていないようである。西辺は土塁状の高まりが1か所認められるのみで、おそらく急斜面となることから元々土塁は巡らされていなかったと思われる。

城の歴史 戦時中の松根採取のためやや覆土が認められるが、小規模ではあるがほぼ城跡の全体構造を捉えることは可能である。大規模な堀切と横矢掛りの虎口構造からみて16世紀後半の構造と考えられる。城主は近世初期の山本村の領主で里見氏の家老を務めた山本清七 (里見分限横) に係わる一族の跡城であろう。城が小規模であった理由は、当地域が里見氏領域内では常に安定していたことに起因するのではないだろうか。

(柴田龍司)



山本城跡概念図

立 地 千倉町瀬戸地区の広大な台地は、館山市境の峠付近を要にしてほぼ南北に扇状に広がるもので、館山市方面からの現街道もその扇の縁に沿うようにのびている。おそらく中世の街道もほとんど変わらなかったと思われるが、その街道を根本で押さえるのには、本城の立地はまさしく理に適ったものであると言えよう。瀬戸台地の西の谷筋から東の台地全体を見渡せる好位置に立地するものである。

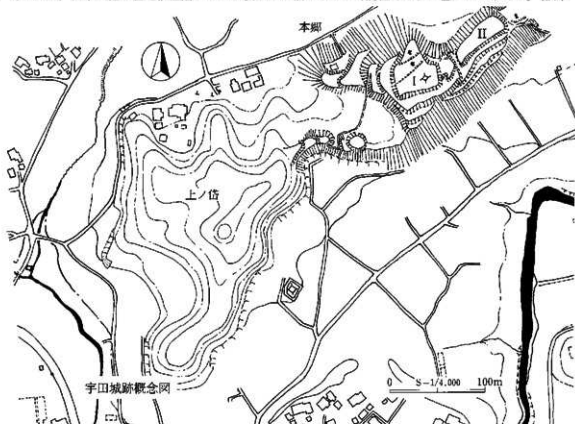
構造の概要 本城は明確な堀を有するものではないが、深い切岸によって数多くの曲輪を形成し、谷部にも直立した深い切り込みをいれることによって複雑な地形を形成する。安房地区に比較的多くの類例を持つ古いタイプ（15世紀代的）の城である。

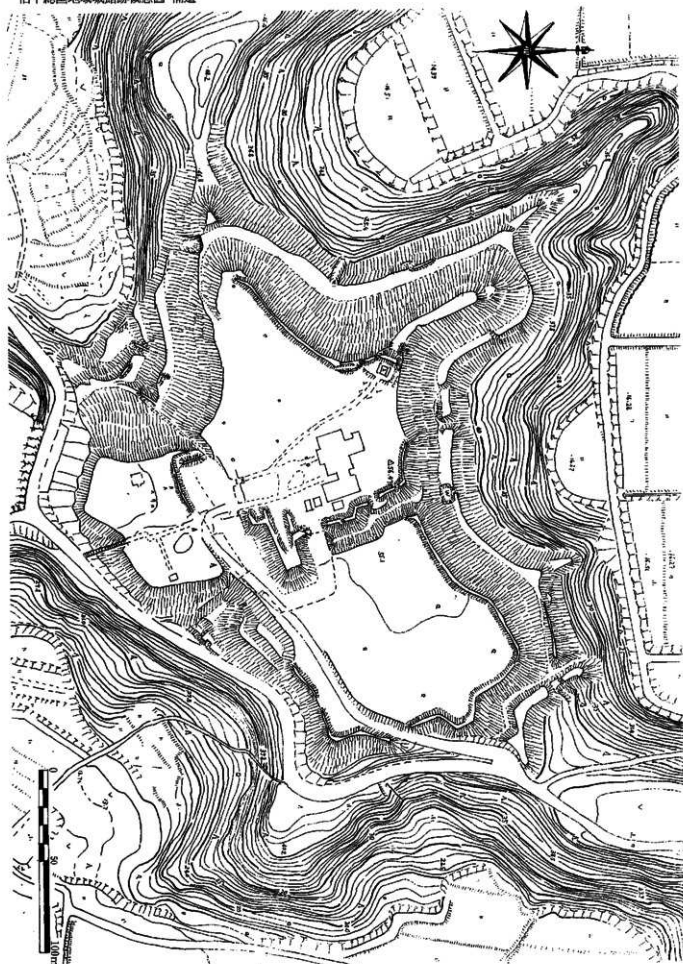
城は全体的に南東に向けて曲輪・腰曲輪・人工斜面を数多く造りだし、南東側への防備が堅いことがわかる。逆に北西は数多くの局地的な切岸遺構や腰曲輪群が見られるが、若干造りがあまいことは否めない。大手口は主郭Ⅰの西側にあったと見られるが不明確。

主郭Ⅰは現在送電線の鉄塔が立つ最高位であり、四方を深い切岸によって隔絶する不整形の平場である。規模は30×30mのやや浅い段を有する。Ⅰの東側は、一段やや大型の曲輪Ⅱを置いて、三段ほどの帯曲輪群が並走する。Ⅱの東側には土塁状の高まりと通路状の掘り込みが見られるが明確ではない。Ⅱの東端部は現在の山道に切られるが、若干急をなし、腰曲輪群もとぎれることから、おそらく城の範囲はここで終わると思われる。

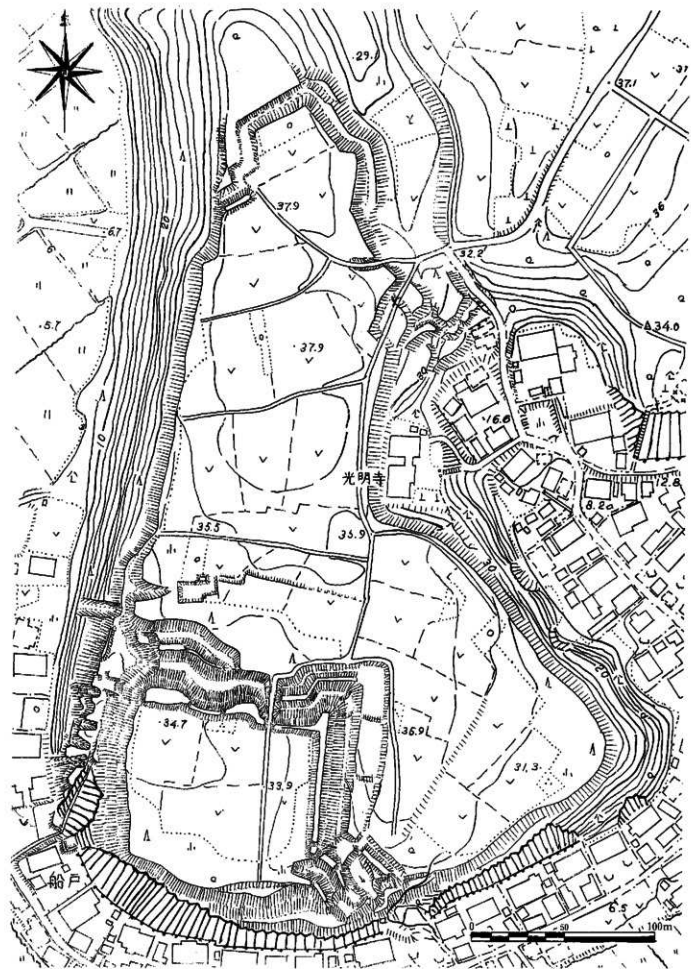
Ⅰの西側は若干人工的に手を加えられた谷をへて、本郷上ノ岱古墳群を有する丘陵が聳える。この丘陵について、土地の古老によれば、“要害の山”として伝承されているらしいが、東端部に腰曲輪が造られているのみで、自然地形の様相は濃い。しかし、地域の伝承はこちらの方が根強く、何らかの施設があった可能性があり、細部の踏査を要するとして留めておきたい。

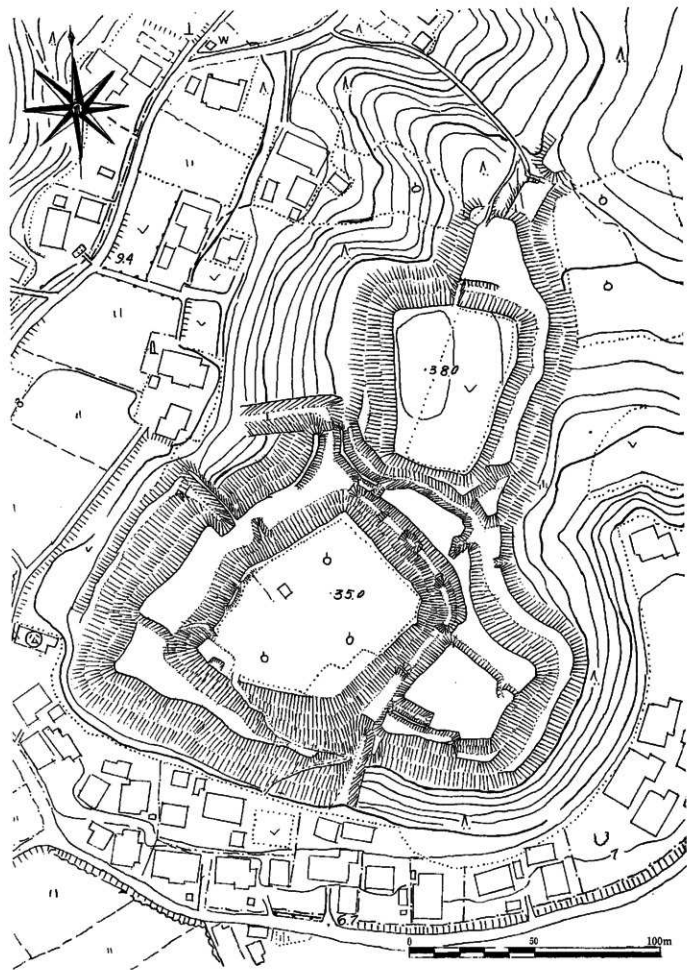
城の歴史 今回の調査によって新しく見つけられた城郭であり、歴史的なことはほとんどわかっていない。しかし、伝承がほとんど残っていないことや、縄張りを見出すことができること、位置的なものを考えると、15世紀代の一部に丸氏、安東氏他の在地領主層によって使われた城であった可能性を示すに留めておきたい。（松本 勝）





沼間城概念図





大倉城跡概念図



小野城跡概念図

千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書II

— 旧上総・安房国地域 —

平成8年3月25日発行

発行・編集 千葉県教育委員会

千葉市中央区中央4丁目13番28号

印刷 株式会社 弘文社

市川市市川南2-7-2
